

空を舞う仮想の世界の 剣士たち

バリスタ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

その背に十字架を背負い戦った黒の剣士

その心に大切な者を守ると誓った閃光

その技に託された希望の為に戦い続けた白狼の騎士

その手に願いを込めた双竜槍

その剣に未来を託され戦い続けた疾風の騎士

その瞳に希望を誓い戦った雷光槌

一応

I S X S A O

です

その他色んな所から引つ張り出すことがあるかもです（主にオリ主）

たまにシリアス入ったりおふぎけ入ったりと色々騒がしいと

思います…生暖かい目で見守っていて下さいw

そろそろ前半…直さないとなあ…

新企画

まどマギ混ぜてみた

開始！

第魔章 魔法と剣と

からスタート

目次

プロローグ

終演の始まり

1

第零章

仮想の世界の剣士達

物語の始まり

20

クラス代表戦

46

その決意、金剛より固し

65

心の傷

心の鎖

75

攻略組の七強

86

それぞれの背負うもの

101

篠ノ之、A L O 始めるってよ！

113

A L O にて

123

とある学園の最強さん。

142

極秘ファイル①

154

小さき背中、背負う闇

166

転校生、その名も凰鈴音！

189

お姉さん猫と妹うさぎ

211

第壹章 銀の福音

忍び寄る影

222

使用、用法容量には気をつけましょう

233

少女達は知る、始まりの物語を……そ

の1

244

少女達は知る、始まりの物語を……その

2

255

- 少女達は知る、始まりの物語を…その
 七色の風 ————— 417
- その後…お約束のヤーツ… ——— 434
- 第閑章 夏だ！海だ！なんだ？
- 海には大体いるよね…こういう奴ら
 (偏見) ————— 448
- 海にて…その1 ————— 459
- 海にて…その2…整備士との出会い
 471
- 海にて…その3…ビーチバレー
 491
- 海にて…その4……決着！ビーチバ
 レー大会！ ————— 515
- 彼の過去―届かぬ心 ————— 537
- 315 買ひ物に…面倒事は付き物だ！
- 叶いし願い…集い始める希望 ——— 304
- 彼は知る…失った記憶の物語 ——— 280
- 267
- 明かされる笑劇の事実 ————— 334
- 折れた疾風の翼 ————— 347
- 覚醒…白狼の騎士 ————— 358
- 留まることを知らぬ希望の風 ——— 368
- 英雄は再び立ち上がる ————— 380
- 疾風迅雷 ————— 402
- 決着！ 覚醒する黒き鎧、吹き荒れ

the changing 変わりゆ	What		
特別編その1		707	
零式の真価			689
レベルアップ			
ure			
第特章	surprise・feat		680
GGO 決着			632
ウサギクエスト			
587			
GGO ガンゲイルオンライン			575
デート? : : : 知らない子ですね			
叶え : : : 想いという名の花火			559
明かされる笑撃の事実			549

冥土喫茶			850
新学期			839
第新章	the 新学期		
君想う : : : 故に			822
守ること : : : 戦うこと : : :			810
インタビュ			800
メイスと刀と両手剣			786
ケットシー			775
第閑章	鍛冶屋と人生相談所		
758			
the fear 恐怖を打ち砕け			
特別編その2	Break		
くもの			719

という事で…文化祭	875
オン・ステージ!	890
妖精王	904
限られた時間 ……守るべき人々	924
ラスト・カウント	935
最終章 絶望と希望	
神装!白龍・桜蒼	945
神装!黒閃・双剣!	956
風の戦う理由	968
無限の可能性	982
第新章 マザーズ・ロザリオ	
絶剣	1022

スリーピング・ナイツ	1039
the・脳筋パーティー攻略会議	1048
ブラツキー・アンド・ウインデイ	1057
祝杯…そして明かされるヒミツ	1072
眠る騎士達	1083
マザーズ・ロザリオ	1095
真終章 約束の剣	
ライン・カーネーション	1102
集いし騎士	1121
限界の果てのソラ	1129

再び輝く希望の光

共闘

絶対の宝剣

罪と罰…背負う覚悟

D・C・

第魔章 魔法と剣と

交わした約束

目を閉じ確かめる

12171199

11881175116111521139

プロローグ

終演の始まり

「リンクスタート！」

今思えば、あの頃はこのゲームに夢を持っていた
友達のいなかったあの頃の俺はゲームだけが
唯一の居場所だった・・・

ヒースクリフ

「キリト君、君には私の正体を看破した
報奨^{リワード}をあたえなくてはな。

チャンスをあげよう。

今この場で私と一対一で戦うチャンスを。

無論不死属性は解除する。

私に勝てばゲームはクリアされ、
全プレイヤーがこの世界から
ログアウトできる……

「どうかかな？」

嘲笑うような表情でキリトを見つめる、ヒースクリフ

アスナ

「駄目だよキリト君！挑発に乗っちゃ！」

ヒースクリフの企みに気付き

彼を必死に止めようとする、アスナ

キリト

「……………ふざけるな……」

いくつもの出会い…いくつもの別れ

その記憶…その感情が

濁流のように押し寄せる

キリト

「いいだろう。決着をつけてやる！」

アスナ

「キリト君っ……！！」

今にも泣きそうな顔をし、キリトを見つめる…

キリト

「ごめん、アスナ…」

俺、ここで逃げるわけにはいかないんだ」

アスナ

「死ぬつもりじゃ……ないんだよね……？」

キリト

「ああ、必ず勝つ。」

勝つてこの世界を終わらせる」

アスナ

「解った…信じてる」

彼の諦めてない顔を見てしまったら…

もう…信じる他ない…

彼女は、彼に最後の希望を託す

エギル

「キリト！やめろ！」

クライン

「キリト！」

2人の男性が声を荒らげる

キリトは2人に一方的に答えていく

キリト

「エギル。

今まで、剣士クラスのサポート、

サンキューな。

俺、知ってるぜ：お前が儲けのほとんど全部、

中層ゾーンのプレイヤーの

育成につき込んだこと」

エギル

「!!」

キリト

「クライン………あの時、

お前を……置いてって、悪かった。

ずっと、後悔していた」

始まりの街での彼との別れをずっと悔いていた…

謝れず…気まずい間柄になつてしまひ

ずっと言えなかつた謝罪

クライン

「てっ…てめえ！キリト！

謝つてんじゃねえ！今謝るんじゃねえ！

許さねえぞ！ちゃんと向こうで、

メシのひとつも奢ってからじゃねえと、
絶対に許さねえからな!!」

キリト

「ああ、わかった」

ミヤ

「キリト!」

レイカ

「キリト君!」

ナツ

「キリトさん!」

ホンネ

「キリトさん!」

4人の若者が声を上げる

また、キリトは一方的に答えていく

キリト

「ミヤ……お前がいなかったら俺、

ここまで来れなかったと思うよ

ありがとな、色々励ましてくれたりして」

ミヤ

「ふざけるなキリト！アスナはどうするんだよ！

お前が守るって言ってたじゃねえか！

おい！ヒースクリフ！俺と戦え！」

ヒースクリフ

「それは出来ない相談だな、私を倒せるのは

キリト君……ただ一人だけだ」

ミヤ

「クソツタレが!!

こんな時ぐらい思い通りに動けよ!!!」

キリト

「レイカ、ミヤをよろしくな」

レイカ

「…ええ、絶対に勝ちなさいよ」

キリト

「ナツ、もしもの時はお前に託す。」

ナツ

「無理ですよ！」

あなたが勝てない敵に、勝てるわけが！」

キリト

「ホンネ、ナツを……よろしくな」

ホンネ

「うん、勝って！絶対に！」

キリト

「ヒースクリフ、ひとつ願いがあある。

簡単に死ぬつもりはないがもし、俺が負けたら

アスナが自殺できないようにしといてくれ」

アスナ

「そんな……キリト君!!」

ヒースクリフ

「承知した、さて、そろそろ始めようか

ルールは全損決着でいいかな」

キリト

「ああ……絶対に……殺す！」

そして決着がつく

ヒースクリフ

「残念だが、キリト君、これで終わりだ！」

ヒースクリフの剣がキリトを貫く……

その寸前、ひとつの影がキリトに重なる

アスナ

「ひとりぼっちにはさせないよ」

キリト

「……！アスナ！」

アスナ

「えへへ、死ぬときは一緒だよ……」

キリト

「……ああ、ごめんなみんな……」

そしてキリト達は静かに目を閉じる

9

ミヤ

「ヴアアアアアア」

!!!!!!

ナツ

「ウオオオオ！」

言葉にならない咆哮をあげる二人の騎士

8

ホンネ

「ナツ君！ミヤさん！」

レイカ

「無謀よ！やめなさい！」

あなた達までいかないで！」

7

ミヤ

「勝てば即ログアウトなら、

十秒だけ時間があるはず！」

6

ナツ

「どちらかの剣が弾かれてもどちらかは届く！」

これが最後の賭けだ!!」

5

ミヤ

「敵を穿て！奥義！夢幻武装！」

ナツ

「貫け！白雪狼！」

4

俺達二人の剣がヒースクリフを貫き、

HPバーを全損させる

ヒースクリフ

「驚いたよ、アスナ君に続き君たちまで

麻痺を解くとは・・・君たちの勝ちだ」

3

システム音

『ゲームはクリアされました』

2

システム音

『全プレイヤーのログアウトを開始します』

キリト

「かっこつけたものの、アスナを巻き込んで

ゲームオーバーか……」

アスナ

「あとどれくらいいられるんだろう」

ヒースクリフ

「…君たちは勝ったんだよ」

不意に背後からの声にする

キリト

「ヒースクリフ!? それはどういう・・・」

ヒースクリフ

「君達が完全に消える前に君達の仲間が

ゲームを終わらしたのだ」

アスナ

「じゃあ、帰れるんですか、現実世界に」

ヒースクリフ

「ああ、約束しよう」

ミヤ

「よかった、間に合ったんだ、本当によかった」

キリト

「ミヤ・・・」

レイカ

「全く、ヒヤヒヤしたわよ」

ナツ

「まあ、2人同時に最上位スキル発動したんだから
そりゃ1秒も持たないよなw」

キリト

「レイカ、ナツ……」

ホンネ

「ナツ君……心臓に悪いからもう、止めてね？」

アスナ

「ホンネちゃん……みんな……ありがとう」

ミヤ

「礼なんて要らねえよ、仲間なんだから」

アスナ

「ミヤ君……」

ヒースクリフ

「さて、そろそろ君達もログアウトの時間だが」

自己紹介でもしたらどうかね？」

キリト

「ああ、そうさせてもらう。」

俺は桐ヶ谷和人、16だ」

アスナ

「私は結城明日菜、17です」

ナツ

「お、俺は織斑一夏、15歳です」

ホンネ

「私は、布仏本音、ナツ君と同じ15歳です」

ミヤ

「俺は、篠木ミヤ、17だ。」

レイカ

「私は、相川麗華、17です」

ヒースクリフ

「やはり、若い者達の成長する力は

本当に…予測不能だな、さて、そろそろ時間だ

いつかまたどこかで会おう…若者達よ」

俺達は白い光に包まれる

キリト

「……は……」

直葉

「お兄ちゃん!!!」

キリト

「スグ……」

そうか、帰ってこれたんだな……

第二百零章 仮想の世界の剣士達

物語の始まり

ホンネ

「はつくぶつつかーん、はつくぶつつかーん」

凄くはしやいでいるホンネ

ナツ

「本音、少し落ち着こう」

アスナ

「本音ちゃん楽しそうね」

キリト

「ああ、それはそうとアスナ、体の方は大丈夫なのか？」

アスナ

「走ったりしなければ大丈夫だって」

キリト

「そうなのか」

アスナ

「ミヤ君とレイカちゃん今頃何してるのかしらね？」

キリト

「事件の後処理って言ってたけど、

大変なんだろうな……」

SAOから解放され数日、300人ほどのSAOダイバーが

帰ってこない事件が発生していた

原因は新しいVRMMORPG

アルブヘイムオンライン

通称ALO

簡単に言えば妖精の世界

300人のSAOダイバーはALOのゲームマスター
オベイロンこと須郷に実験のモルモットにされていた

アスナもそこにとらわれていた

向こうの世界でも現実の世界でも、

色々あったけど、アスナを取り戻した

案内人

『えー、こちらが！今話題のIS！』

なんと！この博物館には

IS、試作2号機のコアを搭載したISがごぞいます！』

ナツ

「あー、東さんが作った二台目って事か…」

キリト

「ちよつとトイレ」

案内人

『是非！女性の皆さんは乗ってください！』

動きはしませんが、ISに乗る感覚は味わえます！

それと…申し訳ない事に…男性は乗れません…

ので！沢山触って男心をくすぐられて下さい！

あ、ちなみに、あちらにあるVRで疑似体験は出来ますので！』

ミヤ

「よ、ナツ」

ナツ

「あ！ミヤさん！終わったんですね」

ミヤ

「ああ…何とかな…」

キリトは…トイレ行ってたのか…」

ミヤ

「どこにある？ずっと我慢してたから凄く行きたい…」

ナツ

「えつと…あ、あそこです！」

ミヤ

「さんきゅ」

2分後

キリト

「いやあ…解説中にトイレ行きたくなるとは…」

ミヤ

「本音がIS学園に行くんだから後々聞けばいいだろ」

キリト

「あ、そつか…そうだな」

ミヤ

「…にしても、かつこいいよな…ISって」

『ありがとう』

ミヤ・キリト・ナツ

「「・・・は？」」

目の前に鎮座するISが光る

ミヤ

「ちよ!？」

体が浮く

ホンネ

「わーお」

ミヤ

「・・・自分でわかっているがあえて聞く

今、どうなってる？」

視線が高い…目線が高い…

ナツ

「・・・IS着てます」

ミヤ

「・・・マジかよ」

キリト

「お！俺も着れないかな！」

キリトが試しに触れてみる…すると

ミヤ

「フガー！」

キリト

「おお、着れたぜ！」

ミヤと同じように光に包まれ搭乗者が入れ替わる

ミヤ

「…いやまて、おかしいだろ」イテテ

キリト

「ナツもやってみろよ」

ナツ

「はあ」

キリトとミヤが変わったようにナツと入れ替わる

キリト

「よっと、着れたろ？」 スタツ

ナツ

「俺たち男つすよね？」

キリト

「何言ってるんだよ、当たり前前だろ」

ナツ

「ISって女性しか着れないんですよ！」

キリト

「え？」

ナツ

「俺たち男なのに着れたのはおかしいですよ！」

ミヤ

「てか、キリト、知らなかったのか？」

キリト

「…忘れてた」

ミヤ

「・・・面倒なことになったなこりや・・・」

キリト

「は、ははは」

この後…日本政府…を名乗る人たちに連行され…

ミヤは数十分後前まで一緒に仕事していた人たちに

事情聴取をされるハメに…

それからしばらくして四月

世界で三人しかいない男性 I S 操縦者として

I S の専門学校：『I S 学園』に入学することに：

山田 T

「えっと、はじめまして！」

皆さんのクラスの副担任の山田麻耶です

さ、さて、じ、自己紹介しましょうか！えっと、

じゃあ、みんなが気になって仕方ない男の子達から

お願いします…」

ナツ

「誰から行きます？..」

キリト

「あいうえお順だったらナツからだな」

ミヤ

「俺トリかよ…」

「冗談だよな？」

ナツ

「えっと、お、織斑一夏です。趣味はゲームとかです」

キリト

「桐ヶ谷和人です、ゲーム好きです」

ミヤ

「ガチかよw」

篠木ミヤです、気軽にミヤって呼んでね

…はっ！殺気！」

千冬

「お前は真面目にやれ！」

スパアーンツ！

ミヤ

「アイヤア!!」

割れたアルヨ！絶対に今、頭が割れた！」

ナツ

「千冬姉！」

千冬

「織斑先生だ！」

ナツ

「フガ！」スパン

キリト

「ナツもミヤも・・・南無三」

ミヤ

「キリト、貴様！見捨てやがったな！」

千冬

「ンンツ！…初対面の印象がおかしくなったかもしれないが

私がこのクラスの担任…織斑千冬だ」

女子ズ

「キヤー！！千冬様ア！」

ミヤ

「グハ！耳が！…」

千冬

「そういえば、お前ら、自己紹介の時、年齢言ってなかったな

桐ヶ谷はお前たちより一つ年上だ

それと、篠木はこんなだがお前らより二つ上だ

それと、こいつらとはとあるゲームで生き延びた人間だ、

お前らより 少し戦闘に慣れている」

ミヤ

「織斑先生ー、プライバシーと言う言葉知ってます？」

千冬

「さて、早速だがこれからクラス代表を決めてもらう」

ミヤ

「あ、スルーだ」

ナツ

「なんでだろう、いやな予感が…」

ホンネ

「はい！織斑くんがいいと思います！」

アスナ

「桐ヶ谷くんがいいと思います」

レイカ

「篠木君を推薦します」

ミヤ

「おい、レイカ、じゃあ、俺はレイカを推薦する」

キリト

「アスナ？」

アスナ

「がんばってキリト君」

ホンネ

「ナツ君がんばれー」

ナツ

「いやな予感はこれだったのか？」

バン！

セシリア

「納得いきませんわ！」

1人の女子生徒が立ち上がる

ミヤ

「そーだそーだ」

キリト

「ミヤ、煽るなよw」

ナツ

「キリトさん…それでいいんですか…」

女子生徒は続けて言う

セシリア

「このクラスにはテストを首席で合格し、

試験監督も倒した私が居るのにも関わらず

この私を差し置いて男を代表にするなんて

納得いきませんわ！」

ミヤ

「んー…やりたいならやっていいぞ？」

キリト

「だな、俺たち、まだリハビリやら

なんやらで忙しいしな」

ナツ

「…いやな予感」

セシリア

「貴方方にはプライドというものは無いのですか？」

女に権力を握らせて悔しく無いのですか！」

ミヤ

「俺たち試験免除されてるし、ある意味裏口入学だから

あまり表に立つのもアレだしなあ……」

キリト

「ゲームする時間が無くなったら嫌だしw」

セシリア

「…そうですね！貴方方のようなゲームオタク

ましてやゲームに二年もの無駄な時間を費やした

愚かな方々にはクラス代表なんて花形……

似合いませんものね！」

ミヤ

「……」ブチッ

ナツ

「あ、ヤバイ……」

ミヤ

「……今、なんつった」

セシリア

「はい？」

ミヤ

「なんて言っただって聞いてるんだよ」

レイカ

「ミヤ君！落ち着いて！」

セシリア

「そんなに聞きたいのなら何度でも言ってもあげますわ！」

貴方はゲームに無駄な時間を費やした愚か者共ですわ！」

ミヤ

「…そうか、そうか…」

千冬

「篠木！」

ナツ

「千冬姉が怒鳴った!？」

ミヤ

「すいません、織斑先生…初っ端から迷惑かけます

後処理の方…お願いしますね」

敬語と丁寧なお辞儀

千冬

「おい！今ならまだ間に合う！篠木に謝れ！」

セシリア

「なんで謝らないといけないのですか？」

先生が言った事実じゃないのですの」

ミヤ

「一ついい事を教えてやるよ…候補生

世の中にはな…言っている事と

言っちゃいけないことがあるんだ…

今度から喋る時は気を付けろよな？

まあ、今後、喋ることが出来るならな」

ミヤが気迫で女子生徒を圧迫する

女子生徒は後ろに下がろうとする…すると

女子生徒の首のまわりに

何本もの剣が浮いている…

まるで誰かの指示を待つように…

セシリア

「!!」

ミヤ

「今、謝れば許してやるよ」

セシリア

「あ、貴方に人が

ましてや代表候補生を殺せますか！」

ミヤ

「…あんたはあくまで、候補生…だろ？」

セシリア

「!?？」

ミヤ

「俺の二年を侮辱するのは別にいいさ、

俺が我慢すればいいからな…

でもな、俺の仲間の…

生き延びた人達の二年を侮辱するな！

何も知らないくせに、死の恐怖すら知らないで

ただのんびりほのぼの生きている程度の人間が！

偉そうな事を言うな！

謝る気がないなら死ね…

…このクズが！」

レイカ

「ミヤ君！それ以上はダメ！」

後から掴みかかる

ミヤ

「…ッ！………わかったよ、レイカ…」

セシリア

「………」

ミヤ

「命拾いしたな、代表候補生」

セシリア

「…あつ…がっ…」

ミヤ

「いつでも決闘でもなんでも受けてやるよ」

セシリア

「…くっ…」

直面した死の恐怖に

声すら出なくなってしまった女子生徒…

千冬

「…篠木、剣をしまえ」

ミヤ

「了解です…」

ミヤが気迫を鎮めていくと…
それに合わせて剣が消えていく

千冬

「…一週間後、オルコットと篠木の

クラス代表決定戦を行なう

篠木が勝った場合、男3人の中から決めろ」

キリト

「負けてくれてもいいぞ？ミヤ？」

ミヤ

「ISは貰ってるし…あとは調整のみだから勝てるさ

あの程度、打鉄でも勝てる」

セシリア

「…ッ！負けませんわ！」

ミヤ

「いよいよ……」

殺してあげる」

クラス代表戦

放課後

千冬

「…篠木」

ミヤ

「何でしょうか？織斑先生」

千冬

「…いや…何でもない…」

語尾が消え入り目をそらす千冬

ミヤ

「ナツの…一夏の事ですね？」

千冬

「…お前にはかなわないな…」

…篠木、これからも一夏を頼む…」

ミヤ

「わかってます」

千冬

「それと、今日から入ってもらおう寮の鍵だ」

回転し空を舞う

ミヤ

「オワツトツト！…えっと、1124…」

千冬

「一夏は1125、桐ヶ谷は1126だ」

ミヤ

「わざわざ近くに…」

千冬

「仕方ないだろう、日本政府から、

「なるべく近くの部屋にしてあげてね♪」

と言われてしまったんだからな」

ミヤ

「絶対に菊岡さんだ……織斑先生も大変ですね」

千冬

「……ああ………ミヤ……」

千冬さんが篠木の名前を下で呼ぶ

そういう時はプライベートな話（ミヤ談）

ミヤ

「なんですか？織……千冬さん？」

千冬

「三年前の約束……忘れてないだろうな」

ミヤ

「……ええ、しっかり覚えてますよ

困った事があつたら千冬さんを頼る……ですよね？」

千冬

「…そうか覚えてたか…では、篠木」

レイカ

「ミヤ、遅くなつてごめんねー、

つて織斑先生！探しましたよ！」

すぐく息を切らしてレイカが走ってきた

千冬

「寮の鍵なら渡しておいたぞ」

レイカ

「オオウ、あちこち探した結果がこれか…」

ミヤ

「まあ、どんまいだ、レイカ」

千冬

「さて、年寄りはこのへんで消えるとするか」

ミヤ

「いや、織斑先生そんな年じゃないでしょ」

千冬

「寄り道せずに帰れよ

荷物は運んでできてもらってあるからな」

ミヤ

「…あ、了解です」

いろいろあつて翌週
ビットにて

キリト

「イーノック、そんな装備で大丈夫か？」

イーノ……ミヤ

「大丈夫だ、問題ない…いやこれ負けるヤツw」

キリトの質問にミヤが答える

ナツ

「……」

ミヤ

「ん？どうしたナツ？」

ナツ

「いや、何でもないです」

キリト

「ネタがわかってない感じか？」

ナツ

「キリトさん、流石に俺でもわかります…」

ミヤ

「そうか、じゃあ、行ってくる」

打鉄を纏ったミヤがレーンの上に乗る

ミヤ

「篠木…打鉄、出る！」

そして、大空へととんでいく

アリーナ上空

セシリア

「あら、逃げずに来ましたのね」

上空で優雅に舞っていたのはあの代表セシリア

ミヤ

「それはこっちのセリフだ…今度は手加減なしだ

本当の死の恐怖を味あわせてやるからな」

セシリア

「ツ！の、望むところですよ！」

千冬

『それでは…始め！』

セシリア

「踊りなさい！」

私とブルーティアーズの奏でるワルツで！」

セシリアがビームライフルをミヤに向ける

ミヤ

「ご生憎様、やれてジャズまでだ」

ミヤは冗談で切り返す

セシリア

「落ちなさい！」

ミヤ

「…遅い」

セシリア

「なっ！この距離でレーザーを避けましたの!?!」

ミヤ

「今度はこつちの番だ…攻略組の七強の実力見せてやる」

攻略組の七強が一人…

疾風の如く速き剣で敵を穿つ剣

…それが

セシリア

「遠距離を得意とするブルーティアーズに

近距離武器で攻めてくるとは

愚かにも程がありますわ！」

ミヤ

「…疾風の騎士…ミヤ…参る！」

疾風の騎士…ミヤだ

セシリア

「消えた!!？」

ミヤ

「疾風…風と共に敵を穿つ剣…」

セシリア

「!？」

セシリアは背後からの声に驚く

ミヤ

「無人機か…菊岡さんの言う通り、俺狙いで来たか…」

セシリア

「な、何が起こっていますの!？」

ミヤ

「…無人機の偵察機4機…おい、代表候補生」

セシリア

「は、はい！なんですの!？」

ミヤ

「ビットに戻れ、巻き添え食らうぞ」

セシリア

「な！なんでですの！なんで男の言う事を！」

ミヤ

「死にたくねえなら早くしろ!!」

セシリア

「ッ!?…わ、わかりましたわ…」

ミヤ

「…はあ、なんで初っ端から

奥の手披露しなきゃなんねえんだよ…」

セシリア

「いったい…何が起こってますの?」

千冬

『篠木!』

ミヤ

「何ででしょうか?織斑先生?」

千冬

『教師陣が向かう、お前らは避難しろ!』

ミヤ

「いやあ、タゲ貰ったら倒すのが俺の主義なんで」

千冬

『…そうか、では、篠木、

そこにいる4機の偵察型無人機を倒せ!』

ミヤ

「あいさ、了解! 正攻法で行くか!」

セシリア

「…私の後ろに1機いたのですわね?」

ミヤ

「そう、君を落とそうとした」

セシリア

「!!」

ミヤ

「だから、助けたのさ」

セシリア

「なんで…なんで、私を助けてくれましたの？」

先週、あんなことを言っただけなのに…」

ミヤ

「確かにそうだが…」

似てたからさ…俺が救えなかった…あいつに…」

セシリア

「……ツ！」

ミヤ

「まあ、詳しい事は機会があったら話すよ、

今は目の前の敵を倒す！

だから力貸せ、代表候補生」

セシリア

「…セシリア…」

ミヤ

「ん?」

セシリア

「私の名はセシリア・オルコットですわ!」

ミヤ

「そうか、じゃあ、セシリア、力貸せ」

セシリア

「わかりましたわ!」

キリト

「嘘だろ…あのふたりなんであんないい動きすんだよ…」

アスナ

「なんか、心做しか、ミヤ君…生き生きしてない?」

キリト

「あ、確かに」

ホンネ

「セツシーがミスチイに似てるからじゃないかな？」

レイカ

「……!!……ミヤ……」

ナツ

「レイカさん…何かを知っている？」

レイカの口から零れた一言に疑問を抱くナツ

ミヤ

「これで、最後だあ!!」

ガクン!

ミヤ

「うおっと!?!」

ミヤの纏う打鉄が急に動かなくなる

システム音

『エネルギーエンプティー』

ミヤ

「え!?!マジで!?!」

無人機

『目標、戦闘不可、排除します』

ミヤ

「ワオ…間に合わない」

セシリア

「無人機に言っても無駄でしょうけど、

私もいることを忘れないでもらいたいですわね！」

無人機の脳天を撃ち抜く

ミヤ

「見事なヘッドショット」

セシリア

「それほどでも……ありますわ！」

ピピピピピピピピピピピピ！

セシリア・ミヤ

「!?」

無人機

『最……終装……備ミサ……イルに……より排……除し……ま……』

空一面を覆い尽くすほどのミサイルが

ミヤとセシリア目掛けて放たれる

ミヤ

「(;) ∇ () イヤイヤイヤイヤ… 多いだろ！」

セシリア

「流石にこの数… 撃ち落とせませんわ！」

ミヤ

「だあ、もう！奥の手だ！セシリア

俺から離れるなよ！」

セシリア

「は、はい！」

ミヤ

「打鉄解除！」

セシリア

「え!？」

ミヤ

「来い！疾風！」

ハヤテ

『行くよミヤ！』

ミヤ・ハヤテ

『唯一仕様の特殊能力！』

』

その決意、金剛より固し

セシリア view

ハヤテ

『唯一仕様の特殊能力!』

ミヤ

「無限武装、発動!」

これが、篠木ミヤの専用機…

そして、これが…

ミヤ

「防御!七相大盾!」
セラス・アテナ

そのかけ声を待っていたと言わんばかりに

目の前に大きな盾が…いや、大量のシールドユニットが
壁になっている…

ミヤ

「少なくとも、俺の目の届くところでは…」

もう…仲間の命は消させない…

俺はもう二度と堕ちねえ！そう誓ったんだ！

あんたの思い通りになると思うなよ…束！」

そういう彼の顔は悲しみに染まっていた…

セシリア

「私はそう簡単には落ちませんわよ！」

この言葉が正しいのかはわからない…

でも、言わなくてはならない気がした…

ミヤ

「あ…ああ、セシリア…ありがとな、力貸してくれて」

セシリア

「と、当然の事をしたままですわ！」

ミヤ

「んで、代表は…どうする？」

セシリア

「あ…えつと…私が降りますわ！」

ミヤ

「え!?!いいの!?!」

セシリア

「ええ、元はと言えば私のせいですし」

ミヤ

「そうか…よし、ナツに押し付けよう！」

結局そうなるのですね…（セシリア談）

山田T

「ということで、クラス代表は織斑くんです」

ナツ

「はい!?!」

ミヤ

「おお、いい返事」

ナツ

「ちよつと待ってくださいよ山田先生!」

千冬

「決定事項だ、織斑、なにか文句でもあるのか?」ゴゴゴゴ

ジョジョ立ち冬先生

後ろに何か見える…

ナツ

「何でもないです織斑先生…」

反論したらヤられる…間違いなく…

キリト

「よし、代表回避…」

千冬

「桐ヶ谷には副代表を務めてもらう」

キリト

「(^ p ^)」

キリト、顔面崩壊…

アスナ

「それと結城、お前は桐ヶ谷の補佐だ」

アスナ

「え…」

千冬

「拒否権はない」

ナツ

「あれ？ホンネはどうしたんだ？

織斑先生、ホンネは？」

千冬

「あいつは生徒会だ」

ナツ

「は？」

アスナ

「え？」

キリト

「エエ!？」

ホンネ

「えへへえ…」

ミヤ

「何を驚いてんだよ…お前ら…」

ナツ

「イヤイヤ、なんでミヤは落ち着いてんだよ？」

ミヤ

「仕事の関係で…レイカも知ってるぜ」

レイカ

「フフフ、それよりナツくん

今は目の前を見た方がいいかもよ」

ナツ

「え？」

スツパーン！

ナツ

「痛つてえ！」

ミヤが初日に食らったレベルの

出席簿スマツシュ…

ミヤ

「お前が悪いw」

レイカ

「先生が話しているのに…ねえ…」

千冬

「…織斑と桐ヶ谷、それから結城、

お前らは放課後に第三アリーナに来い」

ミヤ

「織斑先生、俺らは？」

千冬

「篠木と相川は…暇なら残れ」

レイカ

「了解です」

千冬

「では、以上だ！山田先生、あとは頼みます」

山田T

「はい！任せてください！」

山田先生張り切ってるけど、今日、もう終わりだぞ？

山田T

「うう…」

キリト

「そういえば、今日って半ドンだったな」

ミヤ

「半ドンって…少し古くないか？…キリト…」

ナツ

「また、説教か…？」

レイカ

「ナツくん何したのよ」

ミヤ

「いや、お前らの専用機だろ…どう考えても…」

ナツ

「え？レイカさんのは？」

ミヤ

「専用機先に貰ったのが俺だけな訳無いだろ…」

キリト

「俺達の専用機か…アスナ、どんなんだろうな」

アスナ

「意外とSAOみたいな感じだったりして…」

ミヤ

「実際俺のもそうだしな…黒の剣士と白雪の騎士の復活か」

キリト

「やめろよその呼び方…単に装備の色だろ？」

ミヤ

「確かにそうだな、ブラツキー先生w」

さて、そろそろ行きますか」

ナツ

「ホンネはどうするんだ？」

ホンネ

「先に受け取ってるよお」

ナツ

「マジかよ…俺らだけおいてけぼりみたいだなw」

ミヤ

「ナツ…この中じゃお前が1番下だろ？」

ナツ

「(○。▽。)ガハッ…」

心の傷

心の鎖

?

「これが、最後の約束…」

絶対にこのゲームをクリアしてね…

…ミヤ…」

そう言つて彼女は彼の唇へと自分の唇を重ねる…

?

「あなたに会えて、本当に良かった！」

ありがとう…さようなら」

そして彼女は振り返り

目の前に立ちはだかる巨大すぎる
モンスターの群れへと消えていった…

ミヤ

「ミステリア!!……クツ……」

レイカ

「酷くうなされてたわね……また、あの夢？」

ミヤ

「……ああ……」

レイカ

「はい、ホットココア」

ミヤ

「悪い……ありがと……」

付き合いが長く……特に動じずに飲み物を渡すレイカ

レイカ

「やっぱり…昨日の一戦で？」

ミヤ

「…多分な」

レイカ

「確かにあの時のあなた、懐かしい感じがしたものね」

ミヤ

「…ミステイア」

レイカ

「死んでいないのは確かなんだけどね…」

会って話でもしてみないと…

…ミヤの心は癒されない…か…」

コンコン

部屋の扉をノックする音が聞こえる

レイカ

「はーい？」

セシリア

「セシリアです」

レイカ

「開いてるから入っていいよー」

セシリア

「失礼しますわ…」

ミヤ

「いらっしやい、セシリア…」

「こんな朝早くから…何か用？」

セシリア

「ええ、用があつてきましたの…篠木さん…」

ミスティア・オルコットという名前に
聞き覚えはありますか？」

ミヤ

「…ミス…ティア…!?」

セシリア

「…すいません、言い直しますわ…」

ユニークスキル

夜雀

夜雀のミスティア…ご存知ですか？」

ミヤ
「…知ってる…イヤってほどに…」

セシリア

「…やはり…」

篠木さん、相川さん…今度の休みイギリスに

一緒に来てもらえませんか？」

レイカ

「…わかったわ、織斑先生に届け出してくるから」

セシリア

「既に申請は通してありますわ」

ミヤ

「随分と早いこと…既に検討はついていた

…とどういうことか？」

セシリア

「ええ…疾風の騎士の名前を聞いて…」

レイカ

「…!?…ね、ねえ、セシリアさん、どういうこと!？」

セシリア

「ええ、私の知り合い…いえ…姉が

疾風の騎士に…ミヤさんに謝りたいと」

ミヤ

「謝りた…い？」

セシリア

「あなたに…いえ、

あなた達に辛い思いをさせてしまったと」

ミヤ

「ミス…ティアが…？」

セシリア

「ええ」

ミヤ

「う…ウソだ…ウソだ！」

レイカ

「ミヤ！落ち着いて！」

ミヤ

「ミステイアが俺に謝りたいなんてありえない！

俺が俺の意思であいつを……

……ミステイアを見殺しにしたんだぞ！」

セシリア

「ええ、知ってますわ……きつとそう思っているだろうと

言われましたもの……」

ミヤ

「!!」

レイカ

「ミヤ……お願い、落ち着いて……」

セシリア

「篠木さん……姉は貴方に会いたいと言っています」

ミヤ

「…今は無理だ…夏…休み…必ず…行くって伝えてくれ」

セシリア

「わかりましたわ…」

ミヤ

「…今日、休んでいいかな…」

千冬

「休めると思うか？」

レイカ

「織斑先生！」

千冬

「何を驚いてる…あんなに大きな声を出してたんだぞ」

心配して見に来るぐらいの心は私にもあるぞ…

…まあ、織斑と桐ヶ谷に呼ばれて来たんだがな」

ミヤ

「すいません…」

千冬

「あんだだけ大きな声を出せるなら休む必要はない…」

と言いたいが…：今のお前を見る限り…：仕方ない…

今日だけだぞ…」

ミヤ

「本当にすいません…」

千冬

「出れるなら午後からでも構わない…」

午後の授業はなんだかわかってるよな？」

ミヤ

「専用機持ちの模擬戦でしたっけ？」

千冬

「ああ、出れるなら出てくれ」

ミヤ

「わかりました…調子整えときます…」

攻略組の七強

時間は午後へ

千冬

「さて、これから専用機持ちの模擬戦をやってもらおう」

ナツ

「マジでこれから専用機貰って初始動で模擬戦かよ…」

千冬

「安心しろ織斑、お前らには布仏と相川がいる」

キリト

「つて事は集団戦ですか？織斑先生」

千冬

「まあ、そんなところだ。」

アスナ

「ちなみに相手は？」

千冬

「結城、そんなに気になるか？」

アスナ

「ええ、一応」

千冬

「だつたらとつとと用意してピットから出てみろ」

アスナ

「は、はあ…」

レイカ

「はあ、行きたくない…」

アスナ

「どうしたの？レイカちゃん」

レイカ

「私は相手を知っているから…」

アスナ

「…まさか…」

キリト

「まあ、なんとなくわかつてはいたが…」

アスナ

「キリトくんすごく嬉しそうね…」

千冬

「お前ら…」

相手が誰か予想してる暇があるならとつとと行け！」

全

「は、はい！」

キリト

「桐ヶ谷、黒風、出ます！」

アスナ

「結城、閃光、行きます！」

レイカ

「相川…：やらなきやダメ？ホンネちゃん」

ホンネ

「やろう！」

レイカ

「うう…相川、雷光、行きます…」

ホンネ

「ワイ、布仏、双竜、出発しんこー！」

バナージ

「バナージ…織斑、白式行きます！」

ミヤ

「お前らなんで出てくるだけでコントみたいになつてんだよ…」

レイカ

「私はやりたくなかった…」

キリト

「やっぱり相手は、ミヤか…」

ミヤ

「…さて…お前らの予想通り相手は俺だ…」

手加減はしないぜ？どっからでもかかってきな!!」

レイカ

「よし、行くよホンネ！」

ホンネ

「いつものね、りよーかーい」

レイカ

「ソードスキル…ボルトナックル！」

ほとぼしる電撃…唸る雷槌

だが、相手にはかなりの距離がある

ホンネ

「距離を埋めるなら飛べばいい！」

レイカ

「行っけー！」

ホンネ

「わー！速ーい！」

レイカ

「いや、楽しんでる場合か！」

ホンネ

「わかつてるよ！ソードスキル！」

スカーレット・オブ・スピア・ザ・グングニル！」

赤く染まる神槍、ほとぼしる電撃をその身に宿し

悪しき敵を貫く…

ミヤ

「おいおい…ここはゲーム内じゃないんだぜ？」

飽く迄、ゲーム内の話である…

この場合上に飛ばせば避けることが出来る…

ホンネ

「あーれー！止まらないよー！」

かなり遠くまで飛んでいくホンネ

ミヤ

「リアルじゃ一度も勝ててないじゃないか、お前ら」

レイカ

「不意を突けば行けるかなって思ってたけど無理だったか…」

ミヤ

「ああ、本音とお前さえ注意しとけば勝てるからな」

キリト

「それは！」

ナツ

「どうかな！」

背後からの奇襲を仕掛けるキリトとナツ

ミヤ

「シールド、ツイン」

背後に2枚の盾を呼び出す

アスナ

「ハア！」

背後を気にし一瞬だけ死角となった正面から

アスナが仕掛ける

ミヤ

「つー華の型、彼岸花！」

剣が彼岸花の形に開き回る…

攻防一体の技である

キリト

「ぐッ！」

ナツ

「ぐは！」

アスナ

「きゃー！」

ミヤ

「こんなにあっさり動かせるこいつら何もんだよ…

今日が初めてなんだよな？」

ホンネ

「そのはずだよ！」

ミヤ

「！」

遠くにいたはずのホンネが

彼岸花の下にいる

ホンネ

「この技の弱点はココだよね！」

華の型の弱点は足元…

茎を貫く花びらなどない故の弱点

ホンネ

「今度こそ、当たれ！スピア・ザ・グングニル！」

ミヤ

「…想定してないとても？防御！陽炎」

決して当たることのない、まやかしの盾

あるものを消し、無いものを写す

正しく陽炎

だがしかし弱点もある

ホンネ

「いや、私の方は想定してると思うけど…」

レイカ

「こつちまで気が回らないだろうね！」

ミヤ

「マジか！」

あくまで陽炎は対遠距離スキル

接近されると意味をあまり持たなくなる

レイカ

「ソードスキル、ツールハンマー！」

ミヤ

「くッ！防御！多重壁！」

幾重にも重なる盾、貫くのは困難である…が

ナツ

「…雪狼剣！」

横がガラ空きになる…

ミヤ

「ゲツ！防御！陽ろ…」

キリト

「スターバースト・ストリーム！」

ミヤ

「どこから!？」

頭上から

キリト

「あなたの陽炎は自分にも効くんذار」

ミヤ

「…フフ、気付いてたか、さすがキリト」

キリト

「俺達の勝ちだ！」

ミヤ

「おいおい…忘れてるのかキリト…」

俺のユニークスキルは面制圧特化なんだぜ？」

キリト

「だが、近距離複数方向からの同時攻撃には

いくらお前でも対応出来ないだろ！」

ミヤ

「ハハッ…バレてたかw」

キリト

「はっ..」

ボーン

山田T

『試合終了！桐ヶ谷チームの勝ち』

ミヤ

「ハツハツハー、負けた負けた！」

レイカ

「ミヤの面制圧つてあくまで遠距離に対してだからね」

アスナ

「キリトくんがあそこまで攻め込んだから諦めたのね…」

あ、織斑先生」

千冬

「篠木、ちよつとこい」

ミヤ

「はい？」

千冬

「…いや、ここにいる全員来い」

ナツ

「説教か…？」

キリト

「何なんだナツは織斑先生の説教に

トラウマでもあるのか？」

千冬

「いや、説教では無い

…お前らに聞きたいことがある」

それぞれの背負うもの

千冬

「桐ヶ谷…篠木…相川…特にお前らに聞きたい」

普段以上に真剣な顔をする千冬

ミヤ

「…何ですか？」

千冬

「お前らはなぜ強い？」

キリト

「と言いますと？」

千冬

「…なぜそんなに強い信念がある…」

あの二年の間に一夏まで強くなった…

一体あの世界で何があったんだ？」

ミヤ

「…今は話せません…でも、

いつか必ず話さなきゃいけない時が来ると思います
その時に必ず話します。」

千冬

「わかった…」

ミヤ

「でもひとつ言えるとしたら…」

背負うものがあるからかな？」

千冬

「背負うもの？」

ミヤ

「キリトや俺、レイカは十字架を

ナツやアスナ、ホンネは大切な人の命

それぞれ背負ってるから強いんだと思う」

千冬

「それが、お前らの強さか…」

?

「…それが私と布仏さんとの違い…なのか…」

ミヤ

「…ん？」

レイカ

「どうしたの？ミヤ？」

ミヤ

「いや？たぶん気のせいだから大丈夫」

レイカ

「そう？」

時間は進み放課後

学校棟と宿舎棟の連絡通路にて

?

「あのー！」

ミヤ

「んお？」

不意に背後から呼び止められる

?

「し、篠木さんー！」

ミヤ

「あ、ええつと同じクラスの…」

…あ、篠ノ之さんだっけ？」

箒

「はい…」

ミヤ

「どうしたの？」

箒

「あ、あの！弟子にしてください！」

ミヤ

「…（。ロ。）」

箒

「…ダメ…ですか？」

ミヤ

「…いや、別にいいけど…なんで俺？」

箒

「えっと…その…私も…」

「一夏と同じラインに立ちたいから…です…」

ミヤ

「あ！幼馴染みだっけ？」

箒

「なぜそれを!？」

ミヤ

「あ…ナツから聞いた…」

箒

「…そうなんですか…」

ミヤ

「で、弟子になりたいんだっけ？」

箒

「あ、はい！」

ミヤ

「いいけど…生身で？ I Sで？」

箒

「どちらもで…」

ミヤ

「…イヤイヤイヤ！」

剣道全国レベルの人に教えることないだろ！」

箒

「いえ…私は弱いです…私の剣は…刀には

何かが足りないんです」

ミヤ

「んで、俺らの模擬戦見て、それを感じたと？」

箒

「そんな感じですよ…」

ミヤ

「そう…じゃあ、これから時間ある？」

箒

「はい、あります」

ミヤ

「剣道場の隅っこ借りれるかな？」

箒

「はい？」

ミヤ

「1回打ち合いしてみよう」

場所は変わり剣道場

剣道部部长

「あれ？あれあれあれ？篠木く〜ん

剣道部に入る気になってくれたの〜？」

ミヤ

「いや、全然」

部長

「あら、残念、じゃあ何しに来たのかしら？」

ミヤ

「篠ノ之さんの特訓の場所探しです」

部長

「篠ノ之!?!あの篠ノ之!?!」

箒

「…」

部長

「全国レベルの剣道経験者が

うちの部活に入ってくれるの!?!」

箒

「……」

ミヤ

「君は君のお姉さんじゃない

君は君なんだ……だから

見ていてくれる人がいるんだぜ？」

箒

「……あの！」

部長

「何ですか？篠ノ之さん？」

箒

「……剣道部に入りたいです！」

部長

「はい！ぜひとも……んで篠木くんはどうする？」

入ってくれたらいつでも貸してあげるけど？」

ミヤ

「等価交換ですか……じゃあ、入りますけど……」

他言無用でお願いしますよ？」

部長

「わかってるわよ！生徒会長以外には言わないわ」

ミヤ

「じゃあ、よろしく部長さん」

部長

「よろしくね、篠木くん…いや、疾風の騎士さん♪」

ミヤ

「…は!？」

部長

「ALOでお世話になってます♪」

ミヤ

「…あ！シルフの！」

部長

「ライムです、本名は村瀬麗希です」

箒

「あ、あの、知り合いだったんですか？」

ミヤ

「知り合いつていうか…」

ライム

「何度も夜を一緒に過ごしたわ！」

ミヤ

「夜通しダンジョン攻略な！その言い方語弊があるから！

リアルでレイカに聞かれてもしたら！」

レイカ

「いつもいつも懲りないわね？」

ミヤ

「(^ ω ^) おっおっ……」

レイカ

「雷光槌！」

ミヤ

「やめろ！死ぬから！今生身だから！」

レイカ

「いつぺん死んでこい！」

ミヤ

「俺は悪くねえ！」

箒

「いつもあんな感じなんですか？」

レイカ

「少なくともALOでは日常茶飯事ね…」

まあ、これが面白いから

毎回原因作ってるんだけどね！」

箒

「ALO…始めてみようかな…」

篠ノ之、ALO始めるってよ!

東

「ハロハロー!みんな大好き篠ノ之東さんだ」ガチャン

箒

「…はあ」

プルプルプル

東

「ごめんごめん箒ちゃん」

箒

「姉さん…お久しぶりです…」

東

「東お姉さんに何か用かな?」

箒

「VRMMORPG…ALOって知ってますか?」

東

「知ってるよーと言うかやってるよー

あれ?…やりたいの?」

箒

「はい…」

束

「じゃあ、アミユスファイアとカセット送るから

外に出といてね、ちーちゃんには伝えとくからね」

箒

「あ、あの!」

束

「安心して買ったやつだから、

きつと欲しがると思って買ったのだ!」

箒

「…ありがとうございます」

束

「少し変わったね箒ちゃん」

箒

「篠木さんに色々教わりましたから」

東

「…ミヤくん…良かった生きてたんだ…」

箒

「…?…どうかしました?」

東

「いやどうもしないよー、

とりあえず今から送るから一時間後ぐらいに

外に出といてね」

箒

「わかりました…」

一時間後

千冬

「来たか篠ノ之」

箒

「織斑先生」

千冬

「東がお前にゲームを送ると言っていた」

箒

「私が頼みました」

千冬

「だろ？、それとなぜ篠木がいる」

ミヤ

「篠ノ之さんに呼ばれました、事情は把握してます」

「というか、既にあつたことあるので大丈夫です」

ヒューーン

ミヤ

「あ、来た…」

東

「ちーちゃん！箒ちゃん！」

千冬

「本人が届けに来たか」

東

「チエスト！」

ミヤ

「防御、ツイン」

東

「あらら、奇襲失敗」

千冬

「とつとと用事を済ませて帰れ」

東

「そんなつれないこと言わないでよ、ちーちゃん

はい！これナーヴギア…違う違う…えつと…

アミュスフィアとカセットね！」

ミヤ

「どう間違えるってんだよ…」

箒

「ありがとうございます…ごさいます…姉さん…」

東

「それと久し振りだねミーくん」

ミヤ

「お久しぶりです、東さん」

東

「ツ…この間はごめんね？」

ミヤ

「許しません」

東

「えー、許してよー」

ミヤ

「許しません」

東

「ケチー」

ミヤ

「斬りますよ？」

東

「ミーくんのISSだと本当に出来るから

冗談でも言わないで!」

ミヤ

「反省してますか?」

東

「海より深く反省してます!」

ミヤ

「…今回だけですよ」

東

「フツ、チヨロイな…」

ミヤ

「やっぱり斬ります」

千冬

「よし、やれ」

東

「ええ!?!止めてくれないの!ちーちゃん!」

箒

「篠木さん…やるなら躊躇なく行ってください」

東

「ええ!?! 箒ちゃんも!?!」

ミヤ

「疾風…無限武装…」

ソードスキル…ラストアックス」

ハヤテ

『ヒツサツ! マツテローヨ!』

東

「お願いやめて! やめてよ!」

ハヤテ

『イツテイーヨ!』

ミヤ

「行っていいよ…だつて」

東

「に、逃げるが勝ちだ!」ポフィン!

ミヤ

「煙幕で逃げたか…」

千冬

「しかし、相変わらず束に対しては

躊躇しないな…篠木…」

ミヤ

「なんかイラツ☆つと来ましたからね」

箒

「…今なんか星が出た気が…」

ミヤ

「気のせいだよ篠ノ之さん」

箒

「あ、ALOのやり方教えていただけませんか？」

ミヤ

「そのために呼んだんでしょ？」

箒

「はい…」

ミヤ

「いーよー、んじや篠ノ之さんの部屋に行こうか」

箒

「はい」

千冬

「さて、私は通常業務に戻るとする

あの世界の魅力に囚われて

はしやぎすぎるなよ？篠ノ之」

箒

「はい」

ミヤ

「ん？あの世界？」

ALOにて

ミヤ

「じゃあ、篠ノ之さんALOで各種族の知り合いに

新しく知り合いが始めるからって伝えてあるから

いきなり話しかけられて切りかからないでね？」

箒

「わかりました」

ミヤ

「じゃあ、ALOでねー」

箒

「はい……えっと、リンクスタート！」

AI

『はじめまして』

箒

「!!」

A I

『まずはALLOを始めるにあたって

種族を選んでいただきます』

箒

「種族？」

A I

『シルフ、ウンディーネ、スプリガン

サラマンダー、インプ、ケットシー

ノーム、レプレコーン、プーカ

この九種の中から選んでください』

箒

「…えつと…じゃあ、サラマンダーで…」

A I

『続いてプレイヤー名を決めてください』

ほう…ツバキ

「…ツバキで…」

A I

『それでは、妖精の世界へ…』

ツバキ

「うわ！眩しい！」

ツバキ

「…ここはどこだ？」

？

「あーもしかして君がキリト達の友達か？」

ツバキ

「はい？」

？

「いや…ウーム…あ、ミヤの知り合いつて君か？」

ツバキ

「あ、はい」

クライン

「俺はクライン、よろしくな！」

ツバキ

「はあ…」

クライン

「おーい！ミヤー来たぞー！」

ミヤ

「あー、はいはい、そんな呼ばなくても

見えてましたから…てか、大声で呼ばないでください…

さっきぶりだね、ほう…えっと、ツバキさん」

ツバキ

「えっと…どちら様ですか？」

ミヤ

「ミヤです…」

ツバキ

「ええ!？」

ガヤ

「おい！聞いたか！ミヤだって！」

レプレコーンの中でも最高クラスの鍛冶スキル持ちの

リズベツト武具店の店長とタメをはる

夢幻鍛冶のミヤがいるらしいぞ！」

ミヤ

「言わんこつちや無い…」

クラインさん先に行つててください」

クライン

「すまん！すっかり忘れてたわ！

んじゃ、あとで！」

ミヤ

「つたく…とりあえず、この場から逃げようか…」

ツバキ

「はい…」

ミヤ

「しっかり掴まってるね！」

ツバキ

「凄い…空を飛んでる…」

ミヤ

「そ、ALOは妖精の世界、妖精の羽は空を飛べるのさ」

ツバキ

「ISで飛ぶより気持ちいい…」

ミヤ

「お姉さんが聞いたら悲しむかもよ」

ツバキ

「そんな満面の笑みで言われても…」

ミヤ

「ハハッ、さて、そろそろ着くよー」

アスナ

「うわ！しのの…」

ツバキちゃんほとんどそのまんまじゃない！」

ツバキ

「珍しいんですか？」

？

「珍しいですよ！」

ツバキ

「!?!?君は？」

ユイ

「ユイです、リアルではパパとママの

クラスメイトなんですよね」

ツバキ

「パパ？ママ？」

キリト

「ああ、俺がユイのパパで」

アスナ

「私がママ……」

ツバキ

「は？」

アスナ

「これにはね…深いわけが…」

ツバキ

「は、はあ」

アスナ

「いつか話すから、深入りしないでくれるかな？」

ツバキ

「そこまで言うなら…わかりました」

リーファ

「ねえ！キリトくん！」

あの篠ノ之さんがALLO始めたって本当？」

ツバキ

「あ、私です…」

リーファ

「わあ！ほとんどそのまんまじゃないですか

篠ノ之さん！」

キリト

「スグ、今はALOだぞ…」

リーファ

「あー…めんなさい！えつと…ツバキさん？」

ツバキ

「えつと？」

リーファ

「あ、いつも兄がお世話になってます！

ずっと憧れでした！お会い出来て光栄です！」

ミヤ

「リーファ落ち着け、ツバキが混乱してるから…」

ツバキ

「ミヤさん…この人は？」

ミヤ

「キリトの妹…リアルなの」

ツバキ

「はあ…」

リーファ

「あの！ツバキさん！一度手合わせしてもらえませんか！」

ツバキ

「え？」

リーファ

「私、篠ノ之さん…ツバキさんの綺麗な太刀筋に

憧れてまして…」

ツバキ

「綺麗な…太刀筋？」

リーファ

「はい！」

ナツ

「リーファさん、ツバキ始めたばかりで初期装備だから…」

リーファ

「じゃあ、ミヤさんが作って上げてくださいよ！」

ミヤ

「持ってきてる…ツバキ、刀でいいか？」

ツバキ

「構いませんが…」

ミヤ

「ほらよ！」

ツバキ

「うわつとと！これは？」

ミヤ

「全領の希少鉱石を使った刀…」

えつと…名前は…明鏡止水」

クライン

「ミヤは滅多に刀…てか、武器を打たねえからな、

相当気に入ってるんだな」

ミヤ

「普段ならハズレって言うんですけど、今回は当たりです

クラインさんにしては珍しいです」

ツバキ

「ええ！そんなものもらっていいんですか!？」

ミヤ

「うーん…あとは刀が君を選ぶかだね」

ツバキ

「!？」

ミヤ

「今までの自分の剣に足りなかったものが分かれば

剣が答えてくれる…

俺の打つ武器はそういうものばかりなんだよね…

ワガママと言うか…なんというか…」

ツバキ

「私に…足りないもの…」

ミヤ

「本当は分かかってるんだろ？」

ツバキ

「私に足りなかった物は…誰かの為に振るう剣の心…」

ずっと忘れてた…篠ノ之流は神楽舞を元にした流派…
人をあやめる為ではなく、守る為の流派」

ミヤ

「よし、抜いてみな！」

ツバキ

「はい！」

抜かれた刀は透き通る白い刀身を持つ

長物であり良業物

ツバキ

「…キレイ」

?

「ツバキさんらしい武器ですわね」

ツバキ

「えつと…セシ…ティアさん」

ティア

「フフ、お互いぎこちないですわね

呼び捨てで構いませんわよ」

ツバキ

「そうさせてもらおう」

ミヤ

「さて、明鏡止水を抜けたなら試しに

1回やってみようか」

ツバキ

「はい！」

ミヤ

「おーい、ライムー」

ライム

「呼ばれて飛び出てジャジャジャジャーン！」

リーファ

「わわ！一体いつから私の後ろに!？」

ライム

「やっぱりリーファちゃん胸がでかいから

下が見えないのか」

リーファ

「胸の下にずっと居たんですか!？」

ライム

「いやー、程よい日陰だった」

リーファ

「変な事言わないでください!」

ライム

「ミヤに見つかっちゃったから背中に隠れたのよさ」

ミヤ

「さて、コントは終わったか？」

ライム

「はっはっは、コントってあしらわれたーw」

ツバキ

「ライムって…部長!？」

ライム

「おー、モツピー始めたんだ」

ツバキ

「箒です！」

ミヤ

「ライム呼んだのが間違いだったか…」

ライム

「ごめんごめん、ツバキちゃんの

武器の試し斬りでしょ？」

ミヤ

「そう、蘇生呪文使えるの今んとこお前だけだし」

ツバキ

「まさかとは思いますが…」

ミヤさんで試し斬りですか？」

ミヤ

「Exactly」

ツバキ

「ええ!?!」

ティア

「私の時もそうでしたわ、大丈夫ですわよ」

ツバキ

「は、はあ…」

ミヤ

「よし、来い！」

ツバキ

「…行きます！」

キイイン

ツバキの刀に

見たことのない色のライトエフェクトがかかる

ミヤ

「まさか！」

ポン

『ユニークスキル

剣舞』

ツバキ

「はあ！」

ミヤ

「うはっ!？」

ライム

「嘘…蘇生する暇なく消えた!？」

アスナ

「うそ…早すぎて太刀筋が見えなかった…」

リーファ

「ツバキさんの太刀筋やっぱり綺麗だ…」

ミヤ

「いやー、すごーい飛んだわー」パタパタパタ

レイカ

「え!？」

ツバキ

「峰打ちですから」

ミヤ

「ハハッ、リアルなら致命傷だけどね…」

とある学園の最強さん。

6月上旬

ミヤ

「なんで、こんな事になってるんだっけ…」

楯無

「ちよこまか動かないでよ、当たらないじゃない！」

ミヤ

「当たりたくないわ！」

数分前…

千冬

「篠木、相川 姉」

レイカ

「そろそろ呼び方…どうにかありませんか？」

ミヤ

「なんででしょうか、織斑先生」

千冬

「…お前らに客だ」

ミヤ

「この学園で客って言ったら…」

レイカ

「ライムさんか、あの人よね…」

楯無

「はーい、あの人の方デース！」

ミヤ

「…はああああああああ…」

仕事絡みの用ですか？

楯無

「すごく嫌そうなため息ね、お姉さんが傷付いちやう♪」

ミヤ

「…レイカ…こいつ切っている？」

楯無

「あら？やれるかしら？」

レイカ

「ミヤならやれると思いますけど？」

楯無

「流石は2年以上パートナーやってるだけあって

信頼してるのね…でも残念

ミヤくんは私には勝てないわ」

ミヤ

「じゃあ、やってやらあ！

負けたらわかってんだろうな！楯無！」

楯無

「なんでも一つ言うこと聞く…だっけ？」

いいわ！どんな事だって聞いてあげるわよ！」

ミヤ

「聞くだけとかそういうのなしだかな！」

回想終了

楯無

「今度は外さない！ミストルテインの槍！」

ミヤ

「ああ！もう！防御！アイギス！」

楯無

「残念そつちは残像よ！ハア！」

ミヤ

「はっはー…陽炎」

楯無

「お互い騙し合いね」

ミヤ

「長引くと不利だしこれで終わらせる！」

無限武装、華の型！三刃…アイリス！」

三方向から噛み付くように無数の剣が楯無を狙う

楯無

「真ん中がガラ空きじゃない！」

「この距離なら絶対に外さない！」

ミヤ

「アイリスの花言葉知らないの？」

楯無

「確か、よい便り、メッセージ…希望!？」

ミヤ

「真ん中から来たのが間違いだったな！」

既に次の技の準備が終わっている…

そう…楯無の周りには無数の剣が浮遊している

楯無

「くっ！防御が間に合わない！」

ミヤ

「無限武装…華の型…千刃…染井吉野！」

楯無

「くっ！クリア・バツション清き熱情！」

壁に穴を開けて脱出を試みる

ミヤ

「想定済みだ！」

終の型！ローゼンメイデン！」

楯無

「きゃあー！」

千冬

『勝者 篠木！』

楯無

「負けちやった…」

ミヤ

「だから言っただろ…」

楯無

「ねえ、篠木くん、

負けたのにこんなこと言うのは…

ずるいと思うんだけど…」

ミヤ

「生徒会か？」

楯無

「そう、入ってくれない？」

ミヤ

「……ナツの方が適任だと思っぜ？」

楯無

「……あなたがいいの……」

ミヤ

「……ワリイ、今はお前の希望には添えないわ」

楯無

「そう……あーあ、負けちゃったなー」

何をお願いされるのかしらねー」

ミヤ

「……」

楯無

「早くしなさいよ…グスツ」

ミヤ

「じゃあ…泣くな」

楯無

「無理よ…そんなの…」

ミヤ

「…泣き止むまでそばに居てやるよ」

楯無

「また、あなたは…なんでそんなに」

ミヤ

「大切な仲間だからだよ…」

それ以上でもそれ以下でも無エよ」

楯無

「やっぱり貴方って…ズルいのね」

ミヤ

「ハハッ、お前に言われたかねえよ」

レイカ

「みゃー、すんごい砂煙上がってるけど大丈夫ー？」

ミヤ

「あー、大丈夫だー」

楯無

「グスツ…さてと…麗華ちゃん！」

レイカ

「はい？」

楯無

「いつか彼の心を奪ってみせるから、見てなさいよ！」

レイカ

「は!?!いや、え!?!」

ミヤ

「はあ…また面倒臭い事に…」

レイカ

「ちよつとミヤ！今さつき何があったのよ！」

ミヤ

「何もねえよ…」

千冬

「相変わらず女を惚れさせるのは得意だな、篠木」

楯無・レイカ

「うわ、ビックリした!」

ミヤ

「そうっすか? 織斑先生?」

千冬

「今の現状を見れば一目瞭然だろ…」

レイカ

「ミヤは渡しません!」

楯無

「あなたの許可はいらないもの」

ミヤの腕を引っ張り合う

ミヤ

「両方同時に引つ張らないで!?

痛い痛い! 裂ける裂ける!」

千冬

「はあ…」

ミヤ

「助けて…織斑先生…」

千冬

「私にはもうどうにも出来ない」

ミヤ

「投げたく」

千冬

「はあ…」

小娘共! 篠木が困ってるだろう、ほどほどにしろ!」

レイカ・楯無

「はい」 シュン

「程々ならいいのかよ…」
ミヤ

極秘ファイル①

桐ヶ谷和人

年齢 16

SAO事件の被害者の一人

ALO事件の主犯、須郷の逮捕に一役かった

メインスキル

ユニークスキル 二刀流

ミヤ

「少な…」

レイカ

「書き足しましょう」

ミヤ

「だな」

元血盟騎士団副団長、閃光のアスナとは
恋仲である。

また、見た目ゆえ黒の剣士などと呼ばれていた

IS適正はB+

専用機は黒風

ソードスキルシステム搭載型試作5号機

ソードスキルシステムを使いこなしている

ミヤ

「こんなんでいいかな？」

レイカ

「またいつか書きたすかもだしね」

ミヤ

「じゃあ次は」

レイカ

「アスナちゃん行ってみよー!」

ミヤ

「はいはい」

結城明日奈

年齢 17

S A O 事件の被害者の一人

A L O 事件では一番の被害者かもしれない

メインスキルは 細剣

攻略組の七強、唯一のノーマルスキル使いである

ミヤ

「少ね…」

レイカ

「書き足しましょう！」

ミヤ

「レイカ…お前、楽しんでんだろ」

前述の通り、黒の剣士とは恋仲である

また、早い剣速ゆえ閃光のアスナと呼ばれていた

IS 適正はA |

専用機は閃光

ソードスキルシステム搭載型試作2号機

ソードスキルシステムはそれなりに使いこなしている

ミヤ

「こんなもんでいいか」

レイカ

「お次はナッツン行こー」

ミヤ

「誰!？」

織斑一夏

年齢 15

S A O事件の被害者の一人

初代ブリュンヒルデ、織斑千冬の弟である

メインスキル

ユニークスキル 白雪狼

ミヤ

「少ないな……」

レイカ

「そうね」

ミヤ

「テンション上げすぎて疲れたのか……」

元血盟騎士団参謀の双竜槍の護衛隊長

ちなみに双竜槍：ホンネとは恋仲である

IS適正はB

専用機は白式

ソードスキルシステム搭載型試作1号機

ソードスキルシステムを少し持て余している

レイカ

「そういえば聞いた？」

ミヤ

「何を？」

レイカ

「来週隣のクラスに代表候補生が転校してくるって」

ミヤ

「あー、知ってる」

レイカ

「そうよね…じゃあこれは知ってる？」

ミヤ

「なんだ？」

レイカ

「今、食堂の一角工事してるじゃない？」

ミヤ

「ああ、あまりにも静かだから気にならないけどな」

レイカ

「あそこ、カフェが出来るらしいのよ」

ミヤ

「へー、なんて名前の？」

レイカ

「…ダイシーカフェ I S 学園支店」

ミヤ

「…ん!?!」

レイカ

「やっぱりそういうリアクションになるわよね」

ミヤ

「エギルさんが来るのか？」

レイカ

「奥さんかもしれないけどね」

ミヤ

「いつ出来るんだ？」

レイカ

「来週だって」

ミヤ

「開店祝いに飲みに行くか？」

レイカ

「既に貸切予約済み：私たちでね」

ミヤ

「早いな」

レイカ

「店主に楯無さんが頼んだらしい」

ミヤ

「流石やわ…きて、忘れそうになってたけど

そろそろ続きいきますか…」

布仏本音

年齢 15

S A O事件の被害者の一人

A L O事件の主犯須郷の逮捕に一役かったらしい

メインスキル

ユニークスキル 双竜槍

レイカ

「少ないわね」

ミヤ

「書き足し確定でーす」

レイカ

「飽きてきてるのかしら?」

先述の通り白狼の騎士とは恋仲である

IS適正はA+

代表候補生と渡り合えるレベルである

専用機は双竜

ソードスキルシステム搭載型試作4号機

ソードスキルシステムを使いこなしているが、たまに失敗する

ミヤ

「こうして見ると年長組は

ソードスキルシステムを使いこなしているな」

レイカ

「IS適正も関係するのかしら?」

ミヤ

「なるほど…じゃあ、箒は持て余すのかな？」

レイカ

「かもね」

ミヤ

「菊岡さんにはとりあえず

これだけ報告しとけばいいか」

レイカ

「そうね、箒ちゃんやセシリアちゃんのは

頼まれたらやればいいしね」

ミヤ

「だな、んじゃ、添付して送信っと」

小さき背中、背負う闇

I S 学園

夜

?

「……何処……」

ミヤ

「あく疲れた……ん？」

?

「広すぎんによこの学園……ん？」

ミヤ

「何かお困りで？」

?

「あんたは？」

ミヤ

「あー、ナツの……」

織斑と愉快な仲間達…の仲間達の方」

？

「一夏以外の男性操縦者よね

噂は聞いてるわ」

ミヤ

「また、ナツのハーレム要員か…」

？

「一夏をあだ名呼びびつて事は

SAOやってたつて事？」

ミヤ

「！」ピクッ

？

「あー、安心して、馬鹿にするつもりはないから」

ミヤ

「…そうか」

？

「ねえ、ひとつ聞いていいかしら？」

「ナツなら彼女がいるぞ」

ミヤ

?

「知ってるわ、一夏から聞いた」

「ごめんって言われたわ」

ミヤ

「およ!?!予想が外れた!?!」

?

「千冬さんが一夏を任せたのは

アンタね?」

ミヤ

「…ああ、千冬に頼まれたよ」

?

「そう……守りきつてくれてありがとうね」

ミヤ

「ハハッ、まさか感謝されるとわね」

?

「感謝するわよ、仮にも昔の片思いの相手だもの」

ミヤ

「…そっか」

鈴

「…私は 凰 鈴音…鈴って呼んでもいいわよ」

ミヤ

「篠木ミヤだ…ミヤでいいよ」

鈴

「ミヤ、IS学園の職員室って…どこ？」

ミヤ

「ご案内いたします」

鈴

「ありがとう」

ミヤ

「どういたしまして」

I S 学園職員室前

ミヤ

「到着ー」

鈴

「ありがと、助かったわ危うく野宿するところだったわよ」

ミヤ

「ハハッ、出来なくはないな」

鈴

「明日からよろしくね」

ミヤ

「ウイ」

I S 学園昇降口

?

「あのー!」

ミヤ

「なんだろうこの既視感…」

？

「あの!!」

ミヤ

「はーい？」

？

「篠木…ミヤさんですよね？」

ミヤ

「そうですが？君は？」

簪

「あ…えつと…更識簪です」

ミヤ

「あー、楯無の妹さんか」

簪

「…」

ミヤ

「（あ、ヤベ、地雷踏んだかな？）」

簪

「あの、一つ頼みたいことがあるんですが…」

ミヤ

「ん？何かな？」

簪

「あの、ISの作成を手伝って欲しいんです」

ミヤ

「へー、いいけど、どうして俺？」

簪

「お姉ちゃんがもしもの時は頼りなさいって」

ミヤ

「ほー、楯無がねえ…」

簪

「はい」

ミヤ

「仲悪いのか？」

簪

「!!」

ミヤ

「まあ、言いたくないなら言わなくてもいいよ」

簪

「…」

ミヤ

「明日からでいいかな？」

簪

「……」コクツ

ミヤ

「じゃあ、明日ねー」

ミヤ

「そこにいるんだろ？楯無」

楯無

「ははは…バレてた？」

ミヤ

「動揺しすぎだ…全然、気配消せてない」

楯無

「…あの」

ミヤ

「簪の事だろ？」

楯無

「うん…ごめん」

ミヤ

「謝んな、むしろ信頼してくれて嬉しかったぜ」

楯無

「…ズルい」

ミヤ

「ん？」

楯無

「なんでもない！」

ミヤ

「そうか」

楯無

「…簪ちゃんをお願い…」

ミヤ

「…ひとつ聞いていいか？」

楯無

「簪ちゃんとのことでしょ？」

ミヤ

「そう…お前が何か言ったのか？」

楯無

「うん、『あなたは何もしなくていいの』

と…言ってしまったの」

ミヤ

「…」

楯無

「私って、馬鹿よね…」

ミヤ

「ああ、馬鹿だ！大馬鹿野郎だ！」

楯無

「!!」

ミヤ

「俺には姉や兄が居ないからわからんが

上が何でもできる姉で、そんな事言われたら

どうなるかわかるはずだろ」

楯無

「…」

ミヤ

「謝れるか？」

楯無

「…うん」

ミヤ

「んじゃ今から行くぞ！」

楯無

「ええ!？」

簪の部屋

コンコン

簪

「はい?！」

ミヤ

「あー、簪さん?どこに行けばいいか聞くの忘れてたから

聞きに来たー」

簪

「…あ…すいません…言ってますでしたね」

ミヤ

「いやいや聞かなかった俺が悪いから」

簪

「お茶でも飲みますか？」

ミヤ

「いいのか？」

簪

「一人部屋ですし、いいですよ、今開けます」

ミヤ

「じゃあ、お言葉に甘えて…」

簪

「麦茶しかないんですけど」

ミヤ

「全然いいよ」

簪

「…本当に聞き忘れたから聞きに来ただけですか？」

ミヤ

「……」ピクツ

簪

「姉さんとの事ですか？」

ミヤ

「じゃあ、なんで来たかわかるよな」

簪

「…仲直りでもしろと？」

ミヤ

「そう、仲直りさせに来た」

簪

「…なんで！貴方には関係無いでしょ！」

ミヤ

「ああ、関係ないよ…だからさ」

簪

「何が言いたいのか！」

ミヤ

「関係ないから…わかることがある

あいつが本当に言いたかった言葉の意味も

君の心についた傷もわかる」

簪

「！」

ミヤ

「俺は確かに君にとっては赤の他人だよ

でも君は俺にとっては守らなきゃいけない

大切な仲間だからさ」

簪

「…」

ミヤ

「だからさ、お節介させてくれ」

簪

「…私が仲間…？」

ミヤ

「俺を頼ってくれたんだ、だったらもう仲間だろ？」

簪

「…」グスッ

ミヤ

「君の心に重りが乗っかってんなら背負ってやる、

君の心に傷があるなら治してやるよ、

それが仲間つてもんだからな」

簪

「…お姉ちゃんが言ってた意味がやっとわかった…」

ミヤ

「困ったら頼れってやつか？」

簪

「うん、誰かに頼っていいよ

って意味だったんだね」

ミヤ

「今なら楯無と話せるか？」

簪

「はい」

ミヤ

「んじゃ、来いよ、楯無」

楯無

—ω・・・) チラッ

「大丈夫？」

ミヤ

「とつとと来い」

楯無

「あわわ、腕引つ張らないで！」

ミヤ

「さて…まずは楯無から」

楯無

「えつと、その…ごめんなさい！」

あなたに何もしなくていいなんて言ってしまったて…」

簪

「大丈夫だよ、お姉ちゃん…」

今ならその言葉の意味…わかるから…

私を守りたくて言ったんだよね」

楯無

「うん…ごめん

もつと他の言葉があつたはずなのに…」

簪

「謝らないで、大丈夫だから、お姉ちゃんの思い

…ちゃんと届いたから」

楯無

「簪ちゃん…」

簪

「…これからも姉妹としてよろしくね

お姉ちゃん！」

楯無

「簪ちゃん！」

簪

「キヤツ、いきなり抱きつかないでよ、お姉ちゃん／／／／／」

ミヤ

「これにて一件落着つと」

楯無

「あ、それ無くしてた私の扇子！」

ミヤ

「落ちてたから拾つといた」

楯無

「うーん…それスピアだしあげるわ」

ミヤ

「用途ほとんど無エ…」

楯無

「ハハツ、それもそうね」

簪

「お姉ちゃん楽しそうだね」

楯無

「そ、そ、そんなことないわよ」

簪

「あ、ミヤさん、明日からお願いしますね」

放課後、整備室で

ミヤ

「おう…ホンネとかも連れてっていいか？」

簪

「あれ？本音と知り合い合いなんですか!?!と言うことは…

SAO帰還者!?!」

ミヤ

「…うん、まあ」

簪

「本音が言ってた最強のプレイヤー…疾風のミヤって

ミヤさん？」

ミヤ

「うん…」

簪

「…ALOやってます？」

ミヤ

「ああ、やってるよ」

簪

「もしかしてなんですけど…夢幻鍛冶のミヤって」

ミヤ

「わっち」

簪

「うへえ!!」

楯無

「簪ちゃんそんな声出るんだ…」

簪

「だ、だってお姉ちゃん」

「目の前に最強の攻略組が居るんだよ!」

楯無

「へ、へえ…」

簪

「あ、お姉ちゃんも始める?」

楯無

「楽しそうだし、やってみようかな」

簪

「…実は…お姉ちゃんの方も買ってあるんだ！」

楯無

「うへえ!!」

ミヤ

「姉妹揃ってそんな声出るんだな…」

楯無

「いいの？」

簪

「もちろん！」

楯無

「ミヤ、色々教えてくれる？」

ミヤ

「今度な」

楯無

「…そう」

ミヤ

「今は姉妹で楽しめ、

俺たちとやるとガチの攻略になるからな、ハハッ」

楯無

「うげえ…」

簪

「最強の攻略組のプレイが見れる…一生の思い出になる…」

ミヤ

「生粋のゲーマーなんだな…簪って…」

転校生、その名も凰鈴音!

アスナ

「ねえキリト君聞いた?」

キリト

「何をだ?アスナ?」

アスナ

「隣のクラスに転校生が転校してくるって」

キリト

「へー、ミヤ知ってたか?」

ミヤ

「あー、昨日案内した、道に迷ってたから」

キリト

「へー、あ、カフェについては?」

ミヤ

「確か本当は明日からだけど、今日貸切だろ?」

キリト

「なんだ知ってたか…」

ミヤ

「あ、ナツ、転校生って、

お前の知り「二夏ってこのクラス？」…被った」

ナツ

「ん!?今の声って、もしかして鈴!」

鈴

「実際に顔合わすのはざっと3年ぶりね、

一夏…それと昨日はありがとねミヤ」

ミヤ

「ウイ」

ホンネ

「はじめまして…凰…鈴音さん」

鈴

「はじめまして…あんたがホンネって子?」

ホンネ

「はい」

鈴

「…」 ジー

ホンネ

「…?!」

鈴

「はあ…負けた負けた!」

キリト

「胸か?」

鈴

「言うなー!」

キリト

「ハツハツハ」

ミヤ

「キリト大爆笑じゃん」

アスナ

「確かにホンネちゃんの胸には勝てないわね…」

レイカ

「アスナそれ鈴からしたら…」

鈴

「何よそれイヤミ?」

レイカ

「確かにアスナちゃんにもそれなりにあるわよね」

鈴

「そういうあんたわ……」

レイカ

「フツ、同士よ」

鈴

「…フフフ…一夏つてこない人達と過ごしてたのね

あの2年間…一夏は…

一夏…こんな人達に会えたことを感謝しなさいよ?」

ナツ

「感謝してるよ、それに…箒やお前にも感謝してる」

鈴

「そう、それはいい事ね…ホンネちゃん…いや、ホンネ

一夏を頼んだわよ? さもないと私達が奪っちゃからね」

ホンネ

「た、頼まれまひた!」

鈴

「フフツ、じゃあ、これから仲良くしてね!」

ホンネ

「はい!」

ミヤ

「(心配はしてたが…:しなくていい心配だったな)」

鈴

「ちよつとミヤ、何ジロジロ見てんのよ」

ミヤ

「いや、喧嘩しねえか不安だったからよかったと思つてな」

キリト

「本当はまな板だなど思つてたとか?」

鈴

「…」ブチツ

ミヤ

「キリト…逃げる準備をするか防御する準備をしとけ？」

鈴

「クロス！」

キリト

「うわあ!？」

鈴

「クロス！クロス！」

ミヤ

「落ち着け鈴！」

鈴

「フシューフシュー！」

ミヤ

「獣か！」

鈴

「コーホー」

ミヤ

「ベイダー卿か！」

んーと……よし、そのままこっち来い」

鈴

「つて、私は猫か！」

ミヤ

「じゃあ試しに」

鈴猫が現れた！

↓頭を撫でる

↓首をくすぐる

ピツ

………

↓頭を撫でる

ミヤ

「よし」

鈴

「今あんた頭のなかで何してた」

ミヤ

「選択肢を選んだ」

鈴

「そう…で、その手はなに？」

ミヤ

「いや、猫みたいに頭撫でてみようかと」ナデナデ

鈴

「／／／／／」

ミヤ

「おおこれは…」

鈴・ミヤ

「（悪くない…かも…）」

千冬

「お前ら…何してるんだ…」

鈴

「げ、千冬さん!？」

ミヤ

「あ、織斑先生、いやー鈴が猫みたいだなーって思ったんで

頭撫でていました」

鈴

「そのまんま!？」

千冬

「そうか、凰、そろそろ教室に戻れ」

鈴

「イエス・マム!」

お昼

ミヤ

「なあ、なんか用だったんじゃないのか？楯無」

楯無

「いやあ、一緒にお弁当でも食べたいなって思ってたね」

簪

「…」

ミヤ

「簪はしずかだな」

楯無

「基本シヤイなのよ」

ミヤ

「あんな簪を見てると…嘘みてえだな…」

楯無

「そうよね…あ、そうそう、カフェについてなんだけど」

ミヤ

「まず、店主誰だよ」

楯無

「あー、大柄な外人の男性…えーと確か名前は…」

ミヤ

「…エギル」

楯無

「そうそう」

ミヤ

「マジか…あ、一人追加で誘ってもいいか？」

楯無

「構わないわよ」

ミヤ

「アザっす」

楯無

「ちなみに私服限定ね」

ミヤ

「なんで!？」

楯無

「ミヤたちの私服の方が見慣れてるって」

ミヤ

「…わかった」

ミヤ

「えーと、凰鈴音さん居る？」

ガヤ1

「キヤー！1組のミヤさんよ！本物よ！」

ガヤ2

「キヤー！」

ミヤ

「…（ー、ω、ー）ン…：…／（∩・△・∩）／ンバツ」

ガヤズ

「キヤーキヤーキヤー！」

ミヤ

「あ、面白いかも…」

鈴

「ほらほら、どいて」

ミヤ

「オツス、オラ、ミ…間違えた…」

用があつてきたぜ」

鈴

「何?」

ミヤ

「今日の放課後、食堂に

新しく出来るカフェを貸切するんだよ」

鈴

「へー」

ミヤ

「一緒に行かねえ?」

鈴

「…は?」

ミヤ

「いや、別にふたりきりとかじゃねえよ？」

鈴

「いや、そうじゃなくて…何で私を誘ったの？」

ミヤ

「友達だと思ったから」

鈴

「…フツ、そう…じゃあ行かせてもらおうわ」

ミヤ

「あ、ちなみに私服限定らしい」

鈴

「…私まだ私服届いてない…」

ミヤ

「…じゃあ、放課後1回俺らの部屋に来てくれ

レイカなら服貸してくれるだろうし」

鈴

「何？二人部屋なの？」

ミヤ

「いや、まあ、そうだが」

鈴

「そういう関係？」

ミヤ

「??」

鈴

「……なんでもないわ」

ミヤ

「そう？」

鈴

「じゃあ行かせてもらおうわね」

ミヤ

「ウイ」

ミヤ

「レイカー、もう少ししたら鈴が来るんだが」

レイカ

「へー、鈴ちゃんを誘ったのね」

ミヤ

「いやー、親睦を深めようと」

レイカ

「で、なんで来るのかしら？」

ミヤ

「服ねえんだって」

レイカ

「あー、私服限定だったわね、わかったわ」

鈴

「ミヤー、レイカー、居るー？」

ミヤ

「はいはい」

レイカ

「空いてるわよー」

鈴

「入るわよー」

ミヤ

「いらっしやい」

鈴

「さて、時間はあるの?」

レイカ

「あるわよ、30分くらい」

鈴

「早めにした方がいいのかしら?」

ミヤ

「ゆっくり選べ、俺は出とくから」

鈴

「別にいてもいいわよ…別にあんたなら

見られても恥ずかしくないだろうし／／／／／／…」

ミヤ

「!？」

レイカ

「鈴ちゃんがこう言ってるんだし

そこにいなさい」

ミヤ

「う、後ろ向いてます！」

鈴

「／／／／／…」プシュー

レイカ

「これなんてどうかしら！」

鈴

「…」

黒フリルのワンピース……

ミヤ

「何かおしい…かな？」

レイカ

「そう…」

レイカ

「じゃあこれ！」

鈴

「…」

赤いフリルのワンピース

ミヤ

「んー」

レイカ

「じゃあこれでどうだア！」

鈴

「／／／／／」

上は赤フリル

下は黒フリルのワンピース

ミヤ

「……」

レイカ

「ラストオ！」

鈴

「／／／／／……」

赤フリルのドレスに黒のカーディガン

鈴

「ど、どう？」

ミヤ

「いいんじゃないかな？」

鈴

「あ、ありがと……」

プシユー

レイカ

「ミヤー、鈴ちゃん」

鈴

「な、何？」

レイカ

「いや、二人ともぼーつとしてたから」

鈴

「そ、そうかしら？」

レイカ

「フフツ、さて、そろそろ行きましょ」

ミヤ

「あ、ああ、そうだな」

レイカ

「じゃあ、レディ、二人のエスコート」

鈴

「よろしくね！」

「ヤ」

「あーあー」

お姉さん猫と妹うさぎ

鈴転入翌日の午後

千冬

「さて、もう今日も終わりだが、転校生を紹介する！」

ミヤ

「は？」

キリト

「情報通のミヤでも知らない…だと!？」

千冬

「入れ」

金髪女子と銀髪の少女

千冬

「自己紹介しろ」

シャル

「はい！シャルロット・デュノアです！

よろしくお願いします」

ラウラ

「ラウラ・ボーヴィツヒだ」

ミヤ

「おお！シャルにラウラじゃんか！」

シャル

「お久しぶりです、篠木さん」

ラウラ

「久しぶりだな、篠木」

千冬

「なんだ、篠木、知り合いか？」

ミヤ

「仕事の関連と

ISの共同開発相手の娘さん」

千冬

「そうか、では」

ミヤ

「案内ですよね？わかりました」

千冬

「話が早くて助かる、それでは山田先生お願いします」

山田T

「はい！」

シャル

「どうですか？疾風の調子は？」

ミヤ

「バツチリ」

ラウラ

「にしても広いな…この学園…」

シャル

「ラウラ、もうキャラ作らなくてもいいんだよ」
ラウラ

「…だがシャル…」

シャル

「ほーら」

ラウラ

「…」

シャル

「…じゃあ、このままミヤさんと

ご飯食べに行こうかなー、ふたりきりで」

ラウラ

「…おにいちゃん…私も行っていい？」

ミヤ

「いいぜ？」

ラウラ

「やったー！」

ミヤ

「シャル…あいつ…悪化した？」

シャル

「しばらく会えなかったんで、おにいちちゃんロストとか

言ってましたよ…フフツ」

ミヤ

「…はあ、あいつらになんて説明したら…」

千冬

「両手に花だな、篠木」

ミヤ

「げ…織斑先生…」

千冬

「なんだ、やましいことでもあるのか？」

ミヤ

「そのような事がある筈がございません」

千冬

「そうか、間違っても変なことするなよ？」

ラウラ

「教官、お言葉ですが、おにいちゃんはそんなことしません！」

ミヤ

「(・▽・) ファー」

千冬

「ほう、おにいちゃん…か…フフツ」

ラウラ

「はい！」

千冬

「かなり信頼されているんだな篠木…期待を裏切るなよ？」

ミヤ

「肝に銘じておきます」

シャル

「そう言えば、ALO買いましたよ！」

ラウラ

「私もだ、おにいちゃん！褒めてくれ！」

ミヤ

「おお、よしよし」

ラウラ

「／／／／／／」

シャル

「初めてなんで色々教えてくださいますね？」

ミヤ

「あたぼーよ」

キリト

「おーいミヤー」

ミヤ

「げ、今度はキリト…」

キリト

「げ、つてなんだよ、やましいことでもあるのか？」

ミヤ

「何故みんなその結論に達するのだ…」

キリト

「そうだ、ミヤ、みんなカフェで待ってるぞ」

ミヤ

「あー、今日だったな」

キリト

「なんで、情報通なのに記憶力は低いんだよ…」

ミヤ

「相手が忘れてほしい情報を簡単に忘れられるからさ！」

キリト

「ドヤ顔すんなw」

シャル

「ミヤさん、私達も行っていないかな？」

ラウラ

「おにいちゃん…」

ミヤ

「なあキリト、どう思う?」

キリト

「お前、妹いたのか!」

ミヤ

「…ああー、やっぱりそうなるよな…」

キリト

「二つ下の妹か…」

ミヤ

「いや、違うから」

キリト

「?!」

ミヤ

「単にこいつがおにいちちゃんって呼んでるだけだ」

キリト

「そう…なのか?」

ミヤ

「納得してねえな？」

まあ、細かい話をするで一時間ぐらいかかるし

いつか話すわ…

そんなことよりこいつら連れてっていいと思うか？」

キリト

「いいんじゃない？人が多く方が喜ぶだろうし」

ミヤ

「いいってさ」

シャル

「あの一、何をするんですか？」

ミヤ

「レイカの誕生日祝い」

ラウラ

「おねえちゃんの誕生日か」

キリト

「えーと…」

ミヤ

「流してくれ、キリト…」

キリト

「あ、ああ…」

第壹章 銀の福音

忍び寄る影

アリーナにて

千冬

「さて、今日は、専用機持ち組による

IS操作の授業だ」

山田T

「という事なので、皆さん、分かれてくださいいねー」

ミヤ

「つと言ったもの…」

キリト

「まあ、こうなるよな…」

ナツ

「ミヤさん、キリトさん、助けて…」

ミヤ

「おーおー、ナツが飲み込まれていつてる」

レイカ

「ナツくん、しばらく耐えててねー」

鈴

「いや、あんた達なんで見てるだけなの!？」

箒

「日常茶飯事だからだな、鈴、そのうち慣れる」

セシリア

「箒さんはもう慣れてしまったんですの!？」

ミヤ

「そりゃ、ほぼ毎日こんな感じだからな」

シャル

「あはははは…」

ラウラ

「顔が引きつってて、シャル」

レイカ

「やつぱり同じ年の男の子に集まるわね…」

アスナ

「レイカちゃん、そろそろ織斑先生怒るんじゃない?」

レイカ

「それもそうね、ほらみんな、織斑先生が怒る前に

バラバラに分かれて!」

清香

「えー」

レイカ

「随分と嫌そうね?」ゴゴゴゴゴ

清香

「ごめんなさーい!!」

レイカ

「あら? どうしてみんな逃げていったのかしら?」

ミヤ

「いや、怖いからね!」

ラウラ

「おにいちゃん…終わったのだが」

ミヤ

「早くない!？」

清香

「いやー、実に充実してましたよ!」

ミヤ

「…ラウラが…クラスに馴染んでいる…だと!？」

ミヤ

「いやー、意外と早く終わったな」

キーン

ナツ

「ですね…ん？」

レイカ

「何あれ!？」

ミヤ

「くっ！防御！七相大盾！」
セラス・アテナ

ドーン!!

ミヤ

「押された!?!…これ…ISの攻撃力じゃねえ…!」

ビービービー

ミヤ

「!？」

千冬

「篠木！アリーナのシールドがジャミングを受けた！」

ミヤ

「わかってる、見えてるから！」

ラウラ

「あれか…」

ミヤ

「ナツ、ホンネ、アスナ、みんなの避難を」

ナツ

「はい！」

ミヤ

「キリト、レイカ、鈴は前衛

シャル、ラウラ、セシリアは後衛！」

シャル

「はい！」

ミヤ

「行くぞ！」

ミヤ

「ん？待てよ……こいつ……東の無人機じゃないよな……
じゃあ一体……」

レイカ

「ミヤー！」

ミヤ

「おっと！華の型！百刃！花鳥風月！」

レイカ

「どうしたの？」

ミヤ

「こいつら、ISじゃないと思う！」

キリト

「マジか！」

ミヤ

「ISコアの反応が感知できない」

シャル

「でも、じゃあ誰が！」

ミヤ

「この戦闘スタイル…どこかであったことがあるんだが、
思い出せないんだ…」

キリト

「とりあえず、全部倒してから考えようぜ！」

ミヤ

「…それもそうだな…無限武装！」

希望の型！夢幻武装 発動！

華の型！ 大千刃！大樓華吹雪！」

？

「フハハ…これだけデータが取れば十分だ！」

レイカ

「!?」

キリト

「なぜだ、何故、お前がここに！」

ミヤ

「須郷!!」

須郷

「お前らに仕返しをするためさ！」

「だがまあ、今はまだしないがな」

ミヤ

「夢幻武装！終の型！」

「大千刃！黄泉！」

レイカ

「2度目!?しかも大千刃!?!…ミヤが危ない！」

ミヤ

「うーぐああ！」

発動と同時に頭を押さえ倒れ込むミヤ

須郷

「やはり使用限界があるのか」

「これもいい収穫だ！」

さて、そろそろ帰るとしよう」

ミヤ

「まで…逃げん…のか…」

須郷

「ああ、今はそうだな！」

今は貴様らには勝てない

だから逃げるのさ！だが…もう少しで

お前らに勝つ力を持つことが出来るからな！」

その言葉と同時に姿を消す須郷

キリト・レイカ

「!？」

ミヤ

「うっ…」

レイカ

「ミヤ！」

千冬

「篠木！」

ミヤ

「すみません、織斑先生、逃してしまいました…」

千冬

「そんなこと今はいい！それより担架を！」

？

「…ミヤ…待ってて…必ずあなたを…」

使用、用法容量には気をつけましょう

以下回想

レイカ

「ミヤ！あなただけでも逃げて！」

ミヤ

「嫌だ！俺は…もう失いたくないんだ！」

無限武装！華の型…千刃！染井吉野！」

レイカ

「!!」

ミヤ

「うっ！がアッ！」

レイカ

「ミヤ！後ろ！」

敵

「グガアア！」

ミヤ

「ツ！零の型！千刃！千年氷樹！」

パリン

レイカ

「…助かったの？」

バタツ

レイカ

「ミヤ？ミヤ！」

回想終了

レイカ

「ミヤは前にも千刃を2回使って倒れてるの

今回はその上の大千刃だけ…」

アスナ

「それって…」

レイカ

「キリト君の二刀流、ホンネちゃんの双竜槍

そしてミヤの無限武装…

この3つのソードスキルシステムには欠陥があるの」

東

「この私ですら治すことの出来ない程の欠陥なの」

箒

「姉さんですら!?!というかいつから!?!」

東

「1ヶ月ぐらい前にこの学園にIS作成の手伝いで」

箒

「へえ…」

レイカ

「…えつと…キリト君やホンネちゃんは

「2本だからあまり感じてないだろうけど…」

アスナ

「あ、あの時…キリト君が倒れた理由って！」

キリト

「ああ、そうだ、ソードスキルは

イメージに付随する事が多い

それはユニークスキルになればなおさらだ」

レイカ

「だから多くの武器を同時に操る無限武装は

かなりリスクが高いのよ…倒れるくらいね…

普段のミヤなら連続して使わないはずなんだけど…

相手があの須郷だったのが原因ね…」

アスナ

「須郷…」ゾワッ

キリト

「大丈夫だアスナ、俺が守ってやるから」

レイカ

「キリト君のソードスキルも早くしすぎては危険だし

ホンネちゃんのは強力な技を

最大火力で放ったら危険なのよ」

ムクツ

ミヤ

「まさしく、使用容量には気をつけましょう…だな」

レイカ

「ミヤ！起きてたの？」

ミヤ

「今さつき起きた、また千刃連発したのか俺は…」

レイカ

「そう、また記憶が欠落したのね」

ミヤ

「いやー、気をつけてたはずなんだけどなー」

キリト

「まさかとは思うけどさ、ミヤの記憶力って」

ミヤ

「ああ、千刃の影響で悪くなってる」

キリト

「…やっぱりか」

ミヤ

「使い過ぎたらいつか皆の事も忘れる…」

箒

「なあ、失礼だとは思うんだが…」

ミヤさん達の体験してきたあの2年を…

私たちに教えてくれないか？」

ミヤ

「須郷についてじゃなくてか？」

箒

「あの男についてもですが…」

ミヤさん達の事をもっと知りたいから」

ミヤ

「…フウ…そろそろ頃合か」

箒

「!!」

ミヤ

「かなり残酷で悲しい話になるが…」

「それでもいいかい？」

箒

「覚悟はあります」

？

「その話、私達も聞いていい権利あるわよね？」

ミヤ

「簪に楯無か…」

簪

「私達も仲間…でしょ？」

ミヤ

「…だな」

キリト

「ミヤ…本当に話すのか？」

ミヤ

「ああ」

レイカ

「だけど、あの2年の話をするなら

言わなきゃいけないことがあるわ…」

ミヤ

「ああ、俺とレイカの仕事についてだ」

ナツ

「え？ミヤさんとレイカさんの仕事って…」

ミヤ

「お前らにはISのテスターをしているって言ってるよな？」

レイカ

「でも、本当は違うの…私達の仕事はね…」

ミヤ

「…キリト…いや…」

桐ヶ谷和人、織斑一夏、布仏本音、結城明日奈

君達の監視と君達に関する情報収集だ」

ナツ

「え…」

ミヤ

「国からの命令でな…」

箒

「あ、だから私のことを」

ミヤ

「そう、ナツの情報収集してた時に見つけた…」

レイカ

「気持ち悪いわよね…」

キリト

「何がだ？」

ミヤ

「え…?」

キリト

「別に何も気持ち悪くなんかないぞ？」

ミヤ

「キリト…」

キリト

「仕事なんだろう？なら仕方ねえじゃんか」

レイカ

「…フツ…キリト君らしい考えね…」

ミヤ

「……………負けたよ…キリト……………」

レイカ

「さて、東さん、織斑先生達を呼んできてくれますか？」

東

「いーよー」

少女達は知る、始まりの物語を……その1

ミヤ

「さて、じゃあ、簡潔的に俺たちの経験してきた話を」

箒

「詳しくは話せないですね」

ミヤ

「かなり時間かかるし…俺、もう薄れ始めてるから…」

箒

「!!」

ミヤ

「あ、気にしないでいいよ？」

箒

「すいません…」

ミヤ

「別にいいって…あ、東、あれはできた？」

東

「はいはいー、よいしょつと！」

キリト

「これは？」

東

「6人のISSのコアの一部はナーヴギアでしょ？」

そのナーヴギアのデータを可視化して映像として見る機械

その名も……考えてなかったや」

ミヤ

「はあ……じゃあ、まずはキリトとナツ、俺の出会いか」

第1層始まりの街

ミヤ

「……すげえ……」

俺は2度目のVRMMORPGに少し興奮してた

ミヤ

「よし、ここからはRPGのセオリー通り、

外に出てレベリングするか！」

RPGのセオリー通りレベリングに行こうとした時だ

ナツ

「あ、あの！」

ミヤ

「はい？」

ナツ

「ついてつてもいいですか？レベリング……」

ナツに声をかけられた

ミヤ

「いいよー、1人より多い方が早いし」

うん、この時はナツだけだと思ってたからね……

ホンネ

「あの…私もついて行っていいですか？」

今度はホンネに声をかけられた

ミヤ

「どうぞでー…」

「じゃあ、パーティー編成とフレ申請送るねー」

キリトよりナツとホンネの方が早かったんよ

第1層始まりの街、フィールドにて

ミヤ

「うーん、やっぱり自分で動くのはやりづらいな…」

キリト

「ソードスキルを使ってみたらどうだ？」

ミヤ

「誰!？」

キリト

「あ、ごめん、俺はキリト…んで、こっちは」

クライン

「クラインだ、よろしくな！」

ミヤ

「ああ、どうも…で、ソードスキルですか」

ナツ

「ミヤさん、こんなところにいた」

ミヤ

「ああ、ナツ、ホンネ」

ナツ

「そちらの方は？」

ミヤ

「えつと…」

キリト

「キリトだ、よろしく」

クライン

「クラインだ、よろしくな！」

ナツ

「どうも…ナツです」

ホンネ

「ホンネです」

ナツ

「ところで、ミヤさんは何をしてたんですか？」

ミヤ

「ソードスキルって知ってるか？」

ナツ

「あー、えっと、このゲームの技でしたっけ？」

キリト

「そう」

ミヤ

「あ、これ？」

確かこの時、ミヤは平然とやってのけたんだよな

しかも上位スキルを…

思えば、この頃から七強の片鱗はあつたんだよな…

それに…

キリト

「…そ、そう、それ」

ミヤ

「へー、これソードスキルって言うんだ

でもこれ、なかなか当たらないんだよねー」

キリト

「え!?!」

ミヤ

「掠りはするんだけど…倒しきれないし」

キリト

「…ちよつと試してみないか?」

ミヤ

「試す?」

キリト

「もしかしたら使い続けられれば、

噂に聞くユニークスキルが発現するかもしれない！」

ミヤ

「…ユニークスキルとは？」

キリト

「えーと、まずは、普通のソードスキルがある

これはみんな使える」

ミヤ

「はいはい」

キリト

「んでその上が、エクストラスキル、

刀や両手剣のスキルはエクストラスキルになるんだ」

ミヤ

「ほうほう…でその上がユニークスキル？」

キリト

「らしい…まだ誰も発現してないからな」

ミヤ

「…何故俺がユニークスキルを発現出来るかもしれないと？」

キリト

「本来なら」

ソードスキルは必ず当たるように軌道修正がかかるんだ」

ミヤ

「あー、最初のうちはかかってたな…」

キリト

「だろ？でも今は？」

ミヤ

「かかってない…つまり」

キリト

「スキルに変化が起き始めている！」

ミヤ

「なるほど…えつとエクストラスキルは」

発現条件がわかっているんだよね？」

キリト

「ああ、でもユニークスキルは」

特定の条件を全て兼ね備えた人しか発現しないらしい」

クライン

「つまり、試すって言うよりかは続けてみるって事だな！」

ミヤ

「なるほど、クラインさん、

噛み砕いた説明ありがとうございます」

キリト

「ああ、もし、発現したら教えてくれよ！」

ミヤ

「あ、じゃあ、フレ申請送るとききます」

これが俺たちの出会いですかね？

レイカ

「なるほど、初めた頃から七強の片鱗と

無限武装の片鱗があつたのね

知らなかった…」

鈴

「てか、これ一夏と本音の出会いでもあるのね」

ナツ

「うん、俺も再会しても思い出せなかったけど…」

ホンネ

「……」

ミヤ

「あ、その頃はまだ千刃を覚えてなかったからね？」

少女達は知る、始まりの物語を…その2

ミヤ

「つと次は…って、俺のISだから

次はレイカか……ミステイアについては…

またいつかな…」

セシリア

「はい…わかってます」

以下回想

57層にて

?

「いやー!」

ミヤ

「悲鳴!? あつちか! 行くぞナツ! ミステイア!」

ナツ

「ミヤさん…早いつす…」

ミスティア

「相変わらずね…」

ミヤ

「間に合った！無限武装！華の型！三刃

アイリス！」

mob

「グギヤアア」

パリン

ミヤ

「よかったあ…間に合ったみたいで」

レイカ

「うう」ガタガタ

ミヤ

「大丈夫？立てる？」

レイカ

「うう」ブンブン

全力で首を横に振る

ミヤ

「じゃあ、ほら！」

レイカ

「？」

ミヤ

「手、掴んで」

レイカ

「うう？」ガシツ

ミヤ

「いや、随分としつかり掴むね…」

…引つ張るよー！　よいしょつと

レイカ

「あ、ありがとうございます…」

ナツ

「やつと追いついた…」

レイカ

「あ、あのミヤさん…ですよね？」

七強の…」

ミヤ

「ああ…七強…そう呼ばれてるんだ…」

レイカ

「ず、ずっとファンでした！」

ミヤ

「へ？」

レイカ

「あ、あの！お友達になってくれませんか！」

いやー、この時は衝撃的だったな…

今と全然違うもんな…

うるさい！

当時の私は純粹にあなたのファンだったのよ！

ミヤ

「えつと…フレンド…かな？」

レイカ

「ああ！すいません！つい、口が滑って！」

ミヤ

「いいよ別に？」

ミステイア

「ミヤったらモテモテねえ…」

ミヤ

「そうなのか？」

ミステイア

「モテモテでニブニブだったわね…」

レイカ

「つてえええええ!? 攻略組の七強が3人も!？」

ナツ

「ああ、よかつたちゃんど気づいてもらえてた…」

ミヤ

「なんだナツはこの呼び名知ってたのか」

ナツ

「街歩いただけですごいことになりますからね…」

ミスティア

「ま、基本深夜作業の私達は気付かれないのよ」

レイカ

「うわ…本物だあ…」

ミヤ

「んじゃ、フレ申請したよ」

レイカ

「あ、ありがとうございます！」

ミヤ

「じゃあね、今度レベリングするなら

俺かミスティアを呼んでね…えっと」

レイカ

「レイカです！」

ミヤ

「んじゃ、よろしくねレイカちゃん」

回想終了

ミヤ

「一体いつからちゃん付けじゃなくなった？」

レイカ

「あの事件よ…私達の許されない罪…」

ミヤ

「…ミステリア…」

セシリア

「姉さん…」

ミスティア

「呼んだかい？」

ミヤ

「!!!」?

ミスティア

「ミスティア・オルコット登場！」

ミヤ

「えーいや!?おえ!？」

千冬

「篠木…落ち着け」

ミヤ

「だって!6%〇々「%&/!!!!」」

千冬

「だめだこりや…」

ミスティア

「レイカー…ここはミヤのパートナーの先輩として

お手本見せてあげよーじゃないのー」

ギョッ

ミスティア

「ごめんね、色々…心配させたり

後悔させるようなことして…」

ミヤ

「!!」

ミスティア

「もう、自分を責めなくていいのよ…

あなたも救われていいの…」

ミヤ

「うう…」

ミスティア

「泣いていいのよ?」

ミヤ

「うう…泣かねえよ…男なんだからよ…」グスッ

ミステイア

「へへっ、カツコよくなったじゃないの

泣き虫ミヤくんが」

ミヤ

「う、うるせえ！」

レイカ

「そこんとこ詳しく教えてください、ミステイア先輩！」

ミヤ

「そこで結託するな！レイカ！ミステイア！」

レイカ

「あ、そうだ！明日から私もこの学園の生徒だから

よろしくねー」

ミヤ

「はあ!?!ちよっ…織斑先生!?!」

千冬

「まあ…そういう事だ」

ミヤ

「まじかよ…」

ミスティア

「ちなみにクラスは一緒だよー」

ミヤ

「マジかー…フフツ…また騒がしくなるな！こりや」

ミスティア

「言葉の割には嬉しそうじゃない、ミヤ」

ミヤ

「お陰様で色々吹っ飛んだんでな！」

彼は満面の笑みを浮かべる

許されなかった罪を許してもらい…

その心を縛っていた枷が外れたから

アスナ

「ミヤ君に本当の笑顔が戻ったみたいね」

キリト

「だな…じやあ次は俺とアスナの出会いか」

少女達は知る、始まりの物語を…その3

アスナ

「じゃあ次は私とキリト君の出会いね」

束

「んじゃ、ここにI Sを置いてねー」

キリト

「んじゃ、俺が置くよ」

キリト

「第1層攻略会議…か…」

ティアベルハン

「じゃあ、ペアもしくはチームを組んでください！」

キリト

「…余った」

アスナ

「……………」

キリト

「あ……一人ですか？」

アスナ

「……………」コクン

キリト

「ペア組みませんか？」

アスナ

「……………」コクン

キリト

「じゃあ、よろしくお願いしますね」

アスナ

「……」コクン

ナツ

「あ、キリトさんじゃないですかー！」

キリト

「お！ナツか！」

ナツ

「お久しぶりです」

キリト

「つてことは…ミヤもいるのか？」

ミヤ

「アナタノウシロニ」

キリト

「うわッ！」

アスナ

「!!」

ミヤ

「ああ、ごめんごめん

君をおどかすつもりはなかったよ」

アスナ

「…」

ミスティア

「あら、怒らしちゃったの？ミヤ」

ミヤ

「かなー？」

キリト

「っていつから居たんですか!?!ミスティアさん！」

ミスティア

「フフツ、ずっと居たわよ」

「ってこの子笑ってるわよ」

アスナ

「フフフ…久しぶりに笑いました…」

「よろしくお願いしますね、キリト…さん？」

キリト

「おうーよろしくな！」

ナツ

「あー俺たちでパーティー組みませんか？」

キリト

「いいか？えつと…」

アスナ

「アスナです」

キリト

「アスナ、パーティー組んでいいか？」

アスナ

「多い方が心強いです」

ミヤ

「だだよ」

ミステイア

「ほいほい、じゃあ、パーティー申請するねー」

キリト

「…なあ、噂で聞いたんだが…」

夜な夜な無数の剣や槍とかが空を飛ぶ光景と

夥しい数のナイフが敵を貫く光景が

目撃されているんだが…なんか知らないか？」

ミヤ・ミステイア

「!!」

ミヤ

「し、シラナイナー、ナ、ミステイア？」

ミステイア

「ソ、ソウヨネー」

キリト

「お前ら…知らないのか！」

ナツ

「マジすか」ズルツ

キリト

「どうした？ナツ？」

ナツ

「どうもしません…」

キリト

「そうか」

ホンネ

「ナツー終わっちゃったー？」

ナツ

「お、ホンネーまだやってるよー」

ホンネ

「よかったー、間に合ってー、あー、キリトさーん！

キリト

「おお、久しぶり」

ホンネ

「お久しぶりです」

ティアベルハン

「さて、皆さん組めましたかー？」

ミヤ

「と、まあ、1層攻略の時にレイカ以外のメンバーは
全員出会ってるんだ」

アスナ

「ALLOの話はあまりしたくないかな…」

千冬

「…なら、須郷についてだけで構わない…」

大雑把でいい」

アスナ

「須郷…元レクト社の社員」

箒

「元…何をしたんだ？」

ミヤ

「SAOのプレイヤーの何人かを

ALLOに意識だけ誘拐したんだ」

アスナ

「その中に私も居たの」

ミヤ

「んで、キリトがALLOの中で須郷を倒して

アスナとその他プレイヤーを解放した」

セシリア

「えつと？ 終わりですよ？」

キリト

「いや、須郷はその後

アスナの病院に待ち伏せしていたんだ」

ミヤ

「キリトと俺がそこに行く事を予測して」

レイカ

「え、私の知らない所でそんな事が起きてたの!？」

ミヤ

「キリトに頼まれて、バイクを出した」

キリト

「それで、先に降りて、病院に行こうとしたら

須郷に腕を切られた」

箒

「!?」

キリト

「まあ、浅かったから、後遺症は残ってないけど」

ミヤ

「その後、須郷の高笑いが聞こえたから、そのまま

バイクで……」

ラウラ

「バイクで?」

ミヤ

「必殺! ひき逃げアタック!

って言いながらバイクから足出して蹴り食らわした」

ミスティア

「アグレッシブねミヤ……」

キリト

「んで須郷は気絶したから、俺はアスナの病室へ」

ミヤ

「俺は須郷を警察に引き渡した」

キリト

「須郷の罪は殺人未遂それと…」

なんかすんごく難しい罪状だったから

10年ぐらいは牢屋ぐらしのはずだったんだが…」

ミヤ

「誰かが脱走の手引きをした

そして、今も手を貸している…」

キリト

「それと厄介なのはあいつも頭がいいことなんだよ」

シヤル

「え？」

キリト

「あいつは俺たちのデータを取ったんだ…」

何度もシュミレーションして

パターンを掴んでくるはずだ」

鈴

「だとすると、勝つには

私達の力が欠かせないってことね！」

ミヤ

「Exactly」

ミスティア

「私はISがないから

みんなをサポートするわ」

東

「ところがギツチョン！みーちゃん！」

ミスティア

「み、みーちゃん!?!」

東

「君のIS、夜雀は既に完成しているのだア！」

ミスティア

「え、ええ!？」

束

「それと箒ちゃん！」

箒

「は、はい？」

束

「箒ちゃんのI Sも完成したよー」

箒

「えー！」

束

「須郷くんを相手にするなら…」

こつちも全力で行かなきゃ勝てないから！

だからメンテナンスと調整はこの束さんに任せなさい！」

彼は知る…失った記憶の物語

ミヤ

「特訓…何すんだ？」

キリト

「さあ？」

東

「さて、みんな揃ったかな？」

ミヤ

「んーと、ああ、全員いるぜ」

東

「じゃあ、今日1日で終わらすよ！」

ミヤ

「は？」

東

「という訳で特訓の内容は！クーちゃんドラムロール！」

クロエ

「だらららら」

ミヤ

「……（やる気ねえ……）」

クロエ

「「（「・ω・」）ダアーンツ」

ミヤ

「!？」

東

「仮想空間で自分の精神とあってももらいます！」

ミヤ

「へ？」

また突拍子もないことを…

東

「さて、くーちゃん！」

クロエ

「はい、東様」

東

「ワールドページ」

クロエ

「了解しました」

東

「じゃあ、みんなここに寝てね」

クロエ

「ワールドページ、開始」

ミヤonly

ミヤ

「真っ白だな…何も無い」

ミヤ

「ふう、にしても

東の考えることはさっぱりわからねえ」

『それは同感だ』

ミヤ

「!？」

『そんなに驚くなよ』

ミヤ

「お、俺!？」

『ああ、俺はお前だ』

ミヤ

「…本当に何考えてんだあいつ…」

『セカンドシフトさ』

ミヤ

「セカンド…シフト…って

ISの進化だよな？」

『ISだけ進化して搭乗者が成長してなきや

元も子もないだろ』

ミヤ

「あー…だから東は自分の精神にあつてこいつて」

『そういう事だ…さて、お前の覚悟を聞きに来た』

ミヤ

「覚悟…ね…」

『守りたいものや信念でも構わない…』

まあ、お前が自分の本心をしつかりわかっていたら

どう答えるかはわかつてるがな…』

ミヤ

「……………俺は…命を落としても大切な物を守りたい…

って昔の俺は言っただろうな…」

『…………』

ミヤ

「だけど、今は違う…」

『ほう』

ミヤ

「俺が居なくなったら悲しんでくれる奴がいる

俺はそれを知ったんだ…いや、きつと思いついたんだ…」

『フツ、失った記憶の断片を思い出したのか…』

…ふう、それだけで充分だ…

お前の覚悟、ちゃんと確認した』

ミヤ

「こんなんでいいのか？」

『ああ、お前が失った記憶を思い出そうとしているのと

今あるものを失いたくないって思いが届いたからな』

ミヤ

「失った記憶…俺…親に関する記憶が全くないんだが…」

『思い出したいか？』

ミヤ

「…ああ、さっしはついてるが…」

『じゃあ、見せてやるよ…』

お前の親に関する記憶だ』

ミヤ

「ウツッ！」

以下回想

ミヤ

「千冬お姉ちゃん！東お姉ちゃん！みてみて！」

千冬

「おお？これはなんだ？」

東

「ちーちゃん、これはパソコンの基盤だよ」

千冬

「ほう…は?!こいつまだ小二だよな!？」

母

「千冬ちゃんに東ちゃん、ご飯食べてく？」

千冬

「…弟連れてきていいですか？」

母

「いいわよ」

東

「ちよつと親に連絡してきまーす」

母

「はーい」

ミヤ

「おとーさん」

父

「ん？なんだ？」

ミヤ

「ごはんだってー」

父

「おお、そうか、じゃあ行こうか」

ミヤ

「うん！」

全

「いったただつきまーす！」

ミヤ

「おかーさん、これおいしい！」

母

「うふふ、そう、よかったわ」

回想終了

以下精神世界内

ミヤ

「東…千冬!?!」

『ああ、お前の両親は

織斑千冬と篠ノ之東の恩師にあたる存在と…

この世界にあるISの設計図の始まりを書いた張本人だ』

ミヤ

「!?!」

『そしてもう一つ、お前が親に関する記憶で失ってるモノがある』

ミヤ

「…両親の死…か…」

『ああ、その通りだ』

ミヤ

「思い出させてくれ！」

『覚悟はいいんだな』

ミヤ

「ああ」

以下回想

父

「くっ！」

?

「とつととI Sの設計図を渡しとけば

こんな事にはならなかったのによ！」

父

「渡すものか！これは東君の希望だ！」

？

「クソが！」

ミヤ

「おとーさん！」

母

「だめ！ミヤ！」

父

「クッ！」

母

「よかった間に合って…」

父

「…やはり考えることは同じだな…」

ミヤ

「おとーさん？おかーさん？」

母

「…強く…生きなさいね…ツ…」

父

「これをやる…絶対に無くすなよ…」

愛しき我が子よ…」

母

「フフツ…そのスタンス最後まで貫くのね…」

父

「ああ、これが僕のアイデンティティだからね

…零式、コード…DELETE」

ミヤ

「う…」

回想終了

以下零式に記録されたデータ

千冬

「っ!?!…」

?

「ちっ、ガキが何の用だ

ヒーロー気取りか？」

千冬

「…許さない…」

?

「は？」

千冬

「おまえだけは…ユルサナイ」

東

「ちーちゃん！」

千冬

「ああ、東か……」

東

「!?」

千冬の足元に……血だらけの女

千冬

「殺しちゃいけない……」

東

「それより！先生！」

母

「……がふつ、あら……東ちゃんに千冬ちゃん……」

千冬

「先生！無理しないでください！応急処置しますから！」

東！救急車！」

母

「フフツ……しなくていいわ、もう、間に合わないから」

千冬

「!!…くっ!」

母

「ねえ、先生から…」

「一つお願いして…いいかな?」

千冬

「…なんでしょう」

母

「息子を…ミヤをお願いね…」

「きつと全て忘れてるけど…」

千冬

「それは一体!」

母

「あの人があの子にISを…与えたの…」

「その機体名は零式…」

東

「え…」

母

「そしてあの人は零式にミヤの記憶を消させた…」

千冬

「!!」

母

「でもいつか思い出すわ…」

今は氣を失ってるけどISが記憶しているから」

千冬

「今の光景もですか？」

母

「多分ね…」

千冬

「……絶対にミヤを守ります…」

約束します！」グスツ

東

「私は命懸けで守ってもらったISの設計図を

完成させます…そして、ミヤのために…尽くします」

母

「…お願い…い…ね……………」

東

「うわあああ！」

千冬

「……………」グスツ

回想終了

『これが俺達の親に関する記憶だ』

ミヤ

「…俺は…守られていた…」

『…墓参りに行ってやれよ？』

ミヤ

「…ああ」

『千冬さんに聞けばわかる』

ミヤ

「ああ、そうする…」

『さて、そろそろ帰ってやれ…』

俺たちが最後だからな』

ミヤ

「マジかー…ありがとうな…」

『何に礼を言っただよ、俺はお前なんだから』

なにも感謝される理由がねえよ』

ミヤ

「…フツ、そうか、ありがとよ…零式」

『バレてたか…』

ミヤ

「うっ…眩し…」

ミステイア

「ミヤー！」

ミヤ

「お、ミステイア？」

ミヤ

「泣いてたけどどうしたの？」

ミヤ

「ああ、色々あつてな」

千冬

「…篠木」

ミヤ

「…千冬さん…墓参りに行きたいんですけど…」

東

「!!」

ミヤ

「…明日休みですよね？」

千冬

「思い…出したのか…」

ミヤ

「ええ…」

千冬

「明日、連れていく、ミステイア・オルコット

相川麗華…いや、全員ついてこい」

ミヤ

「…はい！」

千冬

「束、お前もな？」

束

「ええ、久しぶりにいくつもりだったからね」

叶いし願い…集い始める希望

お墓にて

ミヤonly

「お久しぶりです」

俺は元気にやっています

記憶は零式が戻してくれました…

あ、あと、IS動かせる男性操縦者になっちゃいました！

俺の他にもあと2人、最高の仲間…

って何のことだかわからないよね

キリトとナツって言う、俺が…

俺達が2年も囚われたゲームで出会った

最高の仲間だよ

まあ、キリト達だけじゃないんだけどな

他にもいろんな仲間が出来たよ、紹介してたらキリがないから

ざっとだけど、こっちにいる…6人がゲームで出会った仲間達

んでこっちの4人がクラスメイト

んで手前にいるふたりは別のクラスだけど

仲良くしてるよ

…あ、あと2年が混ざってたね…

まあ、みんな仲良く楽しくやってるよ

まだまだ、強くなれてはいないけど

こっだけ守りたいものがあつたら強くなれる

だから安心して…

これからも頑張るから！

それと…

「愛してくれて…ありがとう…

父さん、母さん」

そこにあつたのはもう絶望に染まった顔ではない
前へと進む覚悟を決めた者の顔であつた

ミヤside

ミスティア

「…ねえ、ミヤの両親には何があつたの？」

ミヤ

「ミスティア、そんなに知りたいか？」

ミスティア

「うん…」

ミヤ

「織斑先生…いいですか？」

千冬

「話せば長くなるからざっくりな」

ミヤ

「…うーん、ざっくり言うと、殺された…」

ミステイア

「!!」

ミヤ

「…いや、俺を庇って死んでしまった…」

と言った方がいいのかな？」

レイカ

「え…なんで…」

ミヤ

「まあ、レイカでも驚くよな…」

東…話していいか？」

東

「うん…いいよ」

ミヤ

「俺の親父がI Sの設計図を初めて作った人間なんだ」

レイカ

「!?」

ミヤ

「だから命を狙われた…」

ミスティア

「そ、それっていつの話ですか？織斑先生」

千冬

「ミヤが小2の頃の話だ」

ミヤ

「当時の記憶はついこの間まで

零式って言うI Sが封印してくれていた」

束

「それが昨日の特訓で…」

ミヤ

「まあ、最後は俺から望んだんだけどな」

セシリア

「ちよつとお待ちくださいいな！

ミヤさんのお父様のなくなった理由はわかりましたが
何故お母様が亡くなったのですか！」

ミヤ

「最初に言つたらろ？ 庇つて死んでしまつたつて」

セシリア

「ま、まさか……」

ミヤ

「親父が殺されそうになつた時

とつさに動いちまつた自分が居たんだよ……

そのせいで……そのせいで……」

レイカ

「ミヤ……自分を責めないで……」

ミヤ

「……ああそうだな、強くなるつて宣言したのに

早速ぼろが出ちまつたな」

セシリア

「ミヤさんは前に進む事が出来たのですね…」

両親の死から…私はまだ進めない…お姉様みたいに」

ミスティア

「!?」

セシリア・オルコットは知っていた

彼の横顔が悲しみに染まっていなかったのを

ミスティア

「セシリア…私だつて乗り越えた訳では無いわ

ただ、今を生きなきゃお父様達に顔向けできないと

思いながら暮らしているだけよ…」

セシリア

「…今を…生きる…」

少女：…セシリア・オルコットは

もがき苦しんでいた…過去に囚われ

過去に沈んでいるせいで

ミヤ

「そうだな…セシリア…人が死ぬのっていつだと思う？」

セシリア

「なぞなぞですか？」

ミヤ

「うーん、トンチかな？」

セシリア

「…人が死ぬ時…ですか…それは…」

ミヤ

「あ、銃で撃たれたとか物騒なのはやめてね？」

セシリア

「…毒でももられた時でしょうか？」

ミヤ

「確かに人は死ぬね…いや、人という形としてかな？」

セシリア

「何が言いたいのですか？」

ミヤ

「確かにセシリアの言った通り毒盛られたら死ぬな

だけどさ…その人が死んだらその人との思い出も

無くなるのか？…

誰の記憶からも消えて、

その人がいた事すら覚えていない…

そんなこと…ないだろ？

人が死ぬ時つてのは…人に忘れられちまった時さ」

セシリア

「!!」

ミヤ

「そんなに辛いつて事は

そんだけ思い出がたくさんあるつて事だ

だけど君は今を生きている…

思い出は大事に取つとかないと

溺れちまうぜ？ 思い出つてのはどんどん増えるからな」

セシリア

「…ミヤさんらしい言葉ですわね…」

ミヤ

「へへ」

少女は知っている、今の自分の顔が
前へ向いてる事を

買い物に…面倒事は付き物だ!

犯人

「動くな!動いたら殺すぞ!」

ミヤ

「はあ…なんでこうなった…」

ミスティア

「織斑先生が別行動になったのは

よかったかもしれないわね」

ミヤ

「まあ、好き勝手出来るしな」

なぜこんなことになったかというと…

以下回想

千冬

「お前ら水着は買ったか？」

ミヤ

「あ、俺、学校用の水着しか持ってねえ…」

キリト

「お、予想外な奴が持ってなかったな」

ミヤ

「買いに行く暇ありますかね？」

千冬

「ふむ…このまま買いに行くか」

ミヤ

「アザっす」

千冬

「さて、お前らもついでに買い物してこい」

アスナ

「え、いいんですか？」

千冬

「ああ、自腹でなら構わん」

山田先生

「じゃあ皆さん、2時にここに集合してくださいねー」

ミヤ

「山田先生!?! 一体いつから!?!」

山田先生

「みなさんが着く前に待っていましたー」

ミヤ

「やまやの行動力パネエ」

山田先生

「篠木君、先生をあだ名呼びしないでください／＼／＼／＼／」

ミヤ

「なぜ照れる!?!」

ミスティア

「あらあ? (怒)」「ピキッ

レイカ

「フフツ（怒）」ピキピキツ

ミヤ

「まあ、落ち着けミステリア、レイカ…」

ミステリア・レイカ

「買い物に付き合ってくれたら許してあげる」

ミヤ

「…は、はあ…俺の水着は買わしてくれよ？」

レイカ

「それは許す」

ミヤ

「…どうも」

千冬

「それでは、解散！」

全

「はい！」

ミスティア

「レイカちゃんはお昼食べれるお店探してくるって

言って走っていったわ」

ミヤ

「そうか」

ミスティア

「あら、上の空ね」

ミヤ

「海パンって沢山あるなって思ってたな…」

ミスティア

「どれも同じに見えるって?」

ミヤ

「正直な」

ミスティア

「結構見た目は変わるものよ?」

ミヤ

「水着もファッションだもんな」

ミステイア

「レイカは黄色い水着だったかしら」

ミヤ

「ISカラーですかw」

ミステイア

「ならミヤも」

ミヤ

「緑に白の線の入った海パン発見」

ミステイア

「ISカラーね」

ミヤ

「つていうミステイアは？」

ミステイア

「マイクロビキニ」

ミヤ

「(O。A。)ガハツ…:」

ミステイア

「なんて冗談よ」

ミヤ

「びっくりしたわ!」

ミステイア

「でも、ミヤになら見せてあげてもいいわよ／／／／／」

ミヤ

「うっ…」

レイカ

「なーんかいい雰囲気ねー」

ミヤ

「うわ!レイカ!」

レイカ

「いいお店見つけたわよ」

ミヤ

「あ、ありがと」

ちなみにミスティアとミヤのやり取りを見ていた
他の男性客がその場で砂糖を吐いたり
血の涙を流していたとかなんとか…

ミヤ

「うわあ、高そう…」

レイカ

「ところがランチセットで1500円」

ミヤ

「…外見とのギャップが凄すぎる…」

ミスティア

「ミヤみたいなものね」

ミヤ

「ミスティア、それは、どういう意味？」

回想終了

ミヤ

「んで、今に至る…と」

ミスティア

「お腹空いたわね」

ミヤ

「レイカはトイレだっけ？」

ミスティア

「うん、ISに通信しといたから出てきたりはしないわ」

ミヤ

「よし、お腹減ったし飯食いたいから倒すか」

犯人

「おい！お前！勝手に動くな！」

ミヤ

「だが断る」

犯人

「死にたいのか！」

ミヤ

「フツ…殺せるものならやってみな？」

犯人

「し、死にたいようだな、お望み通りにしてやるよ！」

ミスティア

「キヤーミヤーヤメテー」

犯人

「死ねえ！」

銃弾が額をつらぬ…つらぬ…？

いや、あたりもしていない

犯人

「な！なんで生きてんだよ！」

ミヤ

「あれー?外したのー?」

ゆっくり近づいていく

犯人

「ヒッ!?!」

ミヤ

「ほらー、ここだよ、ここー」

銃身を握って心臓に照準を合わせさせる

ミヤ

「今度は外さないですよ?」

犯人

「し、死ねえ!!」

銃身爆発

犯人

「グハッ!」

犯人2

「大丈夫か！」

ミヤ

「あれ？2人組だったのか」

犯人2

「くっ！フフツ…お前に弾が当たらないなら

お前の女に撃ってやるよ！」

ミステイア

「きゃーいやー！」

ミステイア

「つて言うとも思った？」

後頭部すれすれに、電撃をまとった大槌と

心臓に向けてを無数のナイフが向けられている

ミヤ

「悪いが、バンピーじゃねえんだわ」

犯人2

「な、何者だ!」

ミヤ

「アインクラッド攻略組、ギルト疾風迅雷

ギルトマスター、疾風の騎士ミヤ…改め

IS学園1年、篠木ミヤです」

レイカ

「同じく相川麗華」

ミステリア

「どうもミステリア・オルコットです」

犯人

「あ、IS学園!?!」

ミヤ

「本当は騒ぎになるからしたく無かったんだけど」

ミステイア

「ミヤがお腹すいたって駄々こねるからね」

ミヤ

「俺いつ駄々こねた!？」

そのやりとりは強者ゆえのものであった

犯人2

「くっ！こうなったら！」

ミヤ

「あ、爆弾とか無駄だからね？」

全部防ぎきれちゃうから」

警察

「ご協力ありがとうございます」

ミヤ

「いえいえー、お昼ご飯が食べたかっただけなんで…」

レイカ

「お店何ヶ所か壊されちゃったから今日は閉店だものね…」

ミヤ

「うう…」

店長

「あの一!」

ミヤ

「あれ?店長さん?」

店長

「今日はありがとうございます」

ミヤ

「いえいえ…」

店長

「あの…失礼でなければですが…」

サインお願いできますか?」

ミヤ

「へ?」

店長

「なんせ、あの最強の攻略組ギルト疾風迅雷ですから…」

ミヤ

「ああ…そういう事…」

店長

「はい…うちの店、

元S A Oプレイヤーが多く集まるお店として

有名なんですよ…」

ミヤ

「だからレイカが探しに行ったのか」

レイカ

「リズとシリカに勧められてね…」

なんでもあの黒パンがあるって聞いたからさ」

ミヤ

「まんま、あの黒パンなの!？」

店長

「はい、私も元S A Oプレイヤーでしたので」

ミヤ

「へー…ってサインでしたっけ？」

店長

「あ、はい！」

ミヤ

「お安い御用です」

ミヤ

「はいどうぞ！」

店長

「ありがとうございます！」

あの、これお礼みたいなものです」

ミヤ

「うーん、お店の割引券？」

店長

「普通は出回らない、1枚で一団体半額割引券です」

ミヤ

「いいんですか？そんな物、3枚も頂いてしまつて！」

店長

「はい、お店を守つてもらつたんですから！」

ミヤ

「じゃあ…しつかり貰いますね」

店長

「はい、今後ともご贖員に！」

ミスティア

「あの人のこと…私達もしかして知ってる？」

ミヤ

「あの最後の一言…聞いたことあんだよな…」

レイカ

「さて、集合時間まであと2時間…」

ミヤ

「そのファーストフード店でいいやもう…」

ミスティア

「そうね…もう強盗は懲り懲りね…」

マクド○ナルドにて

犯人3

「動くな！」

ミヤオウ…

「なんでや！」

レイカ

「このお店はないと思ったのにね…ミステイアさん…」

ミステイア

「ミヤの面倒事を引き付ける体質は

治ってなかったようね…レイカちゃん…」

このあと無事解決したとか…

ご飯は食べれたらしい…

明かされる笑劇の事実

臨海学校にて

ミヤ

「海だー！」

キリト

「はしゃいでるな、ミヤ」

と言いながら嬉しそうに口角を上げて

喋っているキリト

ミヤ

「泳げないんだけどな！」

キリト

「へー、泳げないのか…」

え!? 待って、ミヤ泳げないの!?

明かされる衝撃の事実

ミヤ

「だから海行かないから

学校指定の水着しか持ってなかったんよ」

キリト

「あー、だから臨海学校の話された時

この世の終わりみたいな顔してたのか」

ミヤ

「そうなのだー…って言うか…」

「なんでこいつがいるんだよ…」

後ろから抱きつく更識楯無

露骨に胸を押し付ける形で…

楯無

「そんな言い方しなくても良いじゃない

お姉さん悲しいわー」

ミヤ

「雷とナイフの雨が降る前に

はなしてください」

楯無

「…それもそうね…流石の私も命は惜しいもの」

ここでミヤは胸の感触を惜しんだとかなんとか

ナツ

「キリトさーん、ミヤさーん遅れてすいませーん」

ミヤ

「お、来たか」

キリト

「遅いぞーナツー」

ナツ

「ハアハア…すみません」

ホンネが着替え終わるのを待ってたもんで」

ミヤ

「ちなみにキリトはアスナ待たなくていいのか？」

キリト

「先いつてていいって言われた」

ミヤ

「そうか…」

鈴

「とお！」

ナツ

「うわっ！つて鈴か！」

鈴

「おお！高い高い！」

ナツ

「うーん、ホンネに比べたら軽いな…」

鈴

「ま、私の方が少し痩せ型だしね」

キリト

「胸がないからだろ？」

ミヤ

「キリト、それアカンやつ」

鈴が…グリームアイズのような殺気を放っている

キリト

「逃げるが勝ちだ！」

鈴

「殺す！」

ミヤ

「ナンマンダム」

ナツ

「いや、キリトさんまだ死んでないですからね！」

ミスティア

「ミヤーお待たせー」

ミヤ

「お、来たかミスティアヘアツ!？」

そこに立っていたのは白い天使：

いや、白い水着を身にまとったミスティアだった

ミスティア

「へ、変かな？」

ミヤ

「いや、全然！むしろ見とれたくらいだよ！」

ミスティア

「／／／／／」

レイカ

「置いてかないでよミスティアさん…」

アスナ

「遅れてごめんねってキリトくんは？」

ミヤ

「あー、鈴をデイスって追っかけられてる」

レイカ

「ってなんでそっぽ向いてるのよ?」

ミヤ

「理性と戦ってる…」

レイカ

「はっはー…私たちに見とれないように

って事かしら?」

ミヤ

「…否定はしない」

レイカ

「!?…// //」

ミヤ

「ヨシ、オヨグカ!」

ミスティア

「すごく片言よ?ミヤ?」

ミヤ

「ソウカ？ミステイア？」

レイカ

「ていうか、ミヤ、あんたカナヅチじゃない」

ミヤ

「アアソウダツタネ」

レイカ

「…フフツ、ミステイアさん、アスナ、

面白い事思いついたわ」

楯無

「私も参加していいかしら？」

レイカ

「たっちゃん…丁度いいわ！」

楯無

「で？何やるのかしら？」

レイカ

「それは…」ゴニヨゴニヨ

ミステイア

「フフツ面白そうね」

楯無

「確かに」

レイカ

「ミステイアさんとたっちちゃんなら

そう言ってくれると思うってたわ」

アスナ

「うーん、私は…」

レイカ

「キリト君海に向けて蹴っ飛ばされてるし

見えてない見えてない」

アスナ

「…一瞬だけよ?」

レイカ

「おっしや!」

アスナ

「やりすぎないようにね？レイカちゃん？」

レイカ

「わかってますって」

アスナ

「（あ、これ分かってないやつだ…）」

そこにあつたのは魔性の笑みを浮かべた3人の魔女と
すごい苦笑いのアスナが居た

ミステイア

「みーや」

ミヤ

「ふー…なんだ？ミステイ「ギューー！」」

ミヤ

「!？」

…注、ミステイアはセシリアと同等…いや、それ以上

…何がと言いません

アスナ

「…／／／／／」ギュー

ミヤ

「アスナはん!？」

楯無

「お姉さんもー!ギュー!」

ミヤ

「たてなすい!？」

レイカ

「…フフフツ」

ミヤ

「こ、これは!これは!その、えっと!」

後ろにミステイア、右手にアスナ

左手に楯無…傍から見れば天国

ミヤにしてみれば目の前に閻魔様が立っている状況

ミヤ

「あー、まだ色々やり残したな……」

レイカ

「ギューー！」

ミヤ

「はあ!?!」

アスナ・ミステイア・タテナシ・レイカ

「「「ギューー！」」」

ミヤ

「キューー」

後ろに倒れそうになるミヤ

レイカ

「ミヤ!？」

アスナ

「だからやりすぎって言ったのよ…」

ミヤくん、昔からあがり症なんだし…」

レイカ

「初耳ですけどアスナさん!？」

アスナ

「いや、攻略ギルド代表集会の時に

あがり症って自分で言ってたのよ

まあ、最初の頃だけ…」

ミヤ

「いや、あがり症関係無くないですよ

それとみんな…すごく惜しいけどはなして

レイカ

「ミヤ、本音出てるわよ」

ミヤ

「おっと」

折れた疾風の翼

臨海学校2日目

千冬

「さて、今日からはISの訓練をする予定だったが…」

ミヤ

「何かあったんスか？俺らしいかないですし」

周りには専用機持ち+箒しかないない

というか旅館の1室

東

「…須郷が動き出したの…」

千冬

「しかも、とある国で極秘で開発された機体を
ハッキングして盗んだらしい」

ミヤ

「つてことは須郷の討伐とその極秘機体を

止めればいいんですね？」

「ああ、そういう事だ…」

(…何でこう…手慣れている…)

ミヤ

「編成はこつちで組んでいいですか？」

千冬

「あ、ああ、構わん、お前らの方が互いに互いの
力を知っているだろうからな」

ミヤ

「ういっす、

じゃあ、簪は全体の戦況がわかるここで指揮

極秘機の方は俺とミスティア

セシリアに鈴、楯無で…箒はこっちな…

須郷の方は

キリト、ナツ、ホンネ、シャルとラウラ、レイカ…あと

…本当は組ませたくないけど…アスナ

アスナ

「うん、いつもの編成だものね…」

大丈夫よ！レイカちゃんが守ってくれるもの」

レイカ

「任せんしゃい！」

箒

「私も…頑張る！」

ミヤ

「ああ、頼む、箒」

キリト

「おそらく、須郷は極秘機に向かっている

ミヤの方には目もくれず

アスナの方に直接行くだろう…」

ミヤ

「ああ、だから、

実力の信用出来るメンバーの大半をそっちに回した」

キリト

「とりあえず、極秘機をどうにかしたら

全員で須郷を叩くぞ！」

全

「おう！」

千冬

「それでは…各員戦闘準備を！」

全

『はい！』

東

「ミヤ…」

ミヤ

「ん？なんだ？東？箒の方の調整は終わったのか？」

東

「うん、あとは時間が経てば馴染んでいくわ」

ミヤ

「んで、俺になんか用か？」

東

「うん、これを」

差し出されたのはISのデータの詰まった

コアに似たもの

ミヤ

「これは？」

東

「これはね…」

山田先生

「ミヤ君！福音が予測より早く目標地点に到着しそうです！」

ミヤ

「マジかよ……東！それ今すぐインストールして！」

「なんだかわからないけど……俺のために持ってきたんだろ？」

東

「うん！五秒でインストールするよ！」

ミヤ

「ミスティア、セシリア、鈴、箒！」

鈴

「もう向かってるわ！」

箒

「師匠の方に誘導してそのまま、

須郷の方に行けばいいんですよね？」

ミヤ

「ああ、頼むぞ、皆！」

ミヤ

「来た！」

福音

「L A …」

ミヤ

「無限武装、捕縛！ シールドボール！」

福音

「!?!:La…」

ミヤ

「よし！ 捉えた！」

福音

「La！」

ミヤ

「な！嘘だろ…エネルギーの羽…」

そこにはあまりにも大きすぎる
蒼白いエネルギーの翼があつた

ミヤ

「間にあわな「La！」」

羽はミヤと疾風を包み
エネルギー弾を集中的に当てまくる

ミヤ

「うわあ!!」

その悲鳴は……

瞬間爆煙が起こる

そして爆煙から出てきたのはボロボロになり

翼を失った疾風とミヤの落ちていく姿だった

ミスティア

『ミヤ!』

一番最初に異変に気付いたのはミスティアだった

ミヤ

「うっ…ミスティア…ごめんな…」

ミスティア

『ミヤ!』

ミヤ

「うっ…無駄死にはゴメンだぜ!

無限武装! 死の型! ローゼンメイデン!

福音

「La!?!」

福音は音もなくひしゃげていく

ミヤ

「一人ぼつちは寂しいんだよ…」

だから道連れだ…」

ミスティア

『つ！皆ゴメン！私、ミヤを助けに行く！』

ミヤ

「ミスティア！今すぐにアスナ達の方に行ってくれ」

ミスティア

『でも！』

ミヤ

「大丈夫…少し休んだら行くから」

ミスティア

『つ！…分かった、信じる』

少女達は飛び立つ

少年が海へ沈んでいくのに気付かずに…

ミヤ

「へへっ、ここらまでか…ごめんな…皆…」

少年は暗い底へと沈んで行った

少年の意識と体は底へと…

覚醒：白狼の騎士

ミヤが落ちる少し前

須郷とキリト達

ラウラ

「な！弾が当たらないだと!？」

須郷

「はっはっは！そんな物効きもしないわ！

お返しだ！」

ラウラ

「ぐっ！うわあ!!」

シャル

「ラウラー！」

キリト

「シャル！ラウラを助けにいけ！」

「ここは俺たちでどうにかする！」

須郷

「隙を見せたな！黒の剣士！」

キリト

「な！」

その瞬間須郷のISにブラックホールのような

穴があき、キリトを吸い込んだ

アスナ

「うそ……キリトくん！」

その時遠くで大きな爆発音になる

須郷

「はっはっは！無限武装のISの反応が消えた

ようやく死んだか！」

レイカ

「嘘!？」

ホンネ

「そんな!？」

須郷

「フハハ、敵が目の前にいるのに隙を見せるとは

愚かだな！雷槌！双竜槍！」

レイカ

「きゃあ！」

ホンネ

「ナツくん！アスナさんだけは守って！」

レイカとホンネすら飲み込んでいく…

須郷

「さあ、どうする、白狼の騎士イ」

ナツ

「ぐっ…キリトさんもミヤさんもいない今…

俺がどうにかしなきゃ！」

須郷

「さあ！アスナを僕の物にする時が来た！」

ナツ

「うまくいってくれ…」

白狼剣！牙剣！」

本来なら強力な一撃、敵を穿つ牙の剣である

須郷

「うおっと！」

危ないじゃないかあ」

ナツ

「くっ！」

だが、今の一夏は焦りから

攻撃を当てることすらむずかしい

須郷

「クハハハハ、どうしたどうした！白狼の騎士！」

ナツ

「ぐ…」

須郷

「仲間がいなきや何も出来ないのか？あ？」

ナツ

「せめて、アスナさんは守る！白玉狼！」

『error』

ナツ

「な、こんな時に！」

須郷

「さすがはポンコツと言われ捨てられた白式だ！」

以下回想

ナツ

「ミヤさん、なんで俺だけソードスキルがエラーを
起こすんですかね？」

ミヤ

「んー…イメージネ…んと…覚悟の差とか？」

ナツ

「覚悟…ですか…」

ミヤ

「まあ、落ち着け……」

回想終了

ナツ

「そんな…俺には無理ですよ！

ミヤさん！キリトさん！」

ミヤ

『まあ、落ち着けナツ、焦ってたらミスるだけだぜ?』

「!!」

キリト

『ソードスキルはイメージが大切だからな!』

ナツ

「…そうだ、そうだった…一番最初に2人から

教えてもらった　大切なことを忘れていた…」

須郷

「さあ!アスナを渡せ!」

ナツ

「フフツ…フハハ…」

「やっとなった…」

須郷

「ついにおかしくなったか！」

ナツ

「ああ、おかしくてたまらないよ…」

「自分がこんな簡単な事を見落としてたことが！」

「何！」

「…ソードスキル…狼冠剣」

「壺の型…雪狼！」

須郷

「ガは！な、何イ!？」

ナツ

「…千冬姉と同じ型の武器が載ってんだ…」

「使わせてもらおう…来い！雪片式型！」

須郷

「な、なんだその武器は！」

ナツ

「千冬姉がモンド・グロツソで優勝した時の

武器の2代目だ」

須郷

「…フハハ、私のはISでは無いのだぞ！

そんなのは無意味！」

ナツ

「…この武器は自分のエネルギーを消費して

相手のエネルギー体を切り裂く！」

須郷

「な！エネルギーホールが！」

須郷がブラックホールのような物を作っていた
球体を切る

ナツ

「あとは、ホンネ達を引っ張り出すだけだ！」

『エネルギー…エンプテイ』

留まることを知らぬ希望の風

何も無く、ただ青い空が広がる世界

ミヤ

「ハハッ、俺は死んだのか？ 呆気ないな…」

独白

答えなんて返ってくるはずない…

はずだった

『いいえ、まだ貴方を死なせるわけにはいけません』

『だな』

『…』

不意に後ろから答えが返ってくる

ミヤ

「!？」

『貴方はまだ死んでない』

そこに居たのは

S A O時代の自分の姿に似た女性と

見覚えのある俺自身の分身、零式

そして見知らぬ銀髪の少女だった

ミヤ

「疾風なのか!？」

『私の問に答えてください』

ミヤ
「…わ…わかった」

こちらの質問には答えてはくれないらしい
疾風らしき女性は俺に質問してくる

『貴方は何の為に戦うのですか？』

ミヤ

「何の為…か…」

『何故戦い続けるのですか？』

ミヤ

「…強いて言うなら…俺は俺のために戦う…」

『!?!』

ミヤ

「誰かの為とか何かを守りたいとか、

そんなの綺麗事だ…

俺は1度、すべてを諦め…

人から恐れられる様な存在になった

そんな時でもあいつらは俺を

そんな俺を前へ向けさせてくれた…

皆が居たからこそ 今の俺がいる…

諦めて、また迷惑かける訳にはいかねえし

それに…カッコわりいからな

だから俺は戦う

もう、絶望しないために！」

『貴方らしい答えですね…いいでしょう

これを受け取って下さい！』

『セカンド・シフト
第二形態移行』

ミヤ

「！」

『さあ！行ってください！アナタの為に！』

ミヤ
「ああ！」

意識は現実へ

まるで風が篠木を護るように吹き水面に浮上している
海の底に沈んだはずなのに

ミヤ

「ハハッ、やってやろうぜ！疾風！」

ハヤテ

『ワン唯一仕様の特殊能力オフ・アビリティ』

靈戦騎心

発動！』

ミヤ

「待ってる皆！」

その顔は凜々しくそれでいて優しい顔であった

ミヤ

「まずはミスティア達と合流するか」

ミヤは気づいていなかった

一緒に落ちたはずの福音がいなくなっていることに

ミヤが沈み須郷がミヤの死亡宣告をした頃

ミスティア達

箒

「今、須郷が……」

ミスティア

「嘘よ！ミヤは！死なない！死ぬはずが無い！」

楯無

「ミステイアさん落ち着いて！」

ミステイアは暴れようとしていた

それはまるで飼い主を亡くした猛獣のように

その状況に誰も近づけなかった

ただ1人、実の妹を除いて

セシリア

「姉さん！」

パشین！

ミステイア

「!?」

強烈な張り手

セシリアの手のひらがミスティアの頬をうつ

セシリア

「姉さん…今回、ミヤさんが姉さんと

チームを組んだ理由わかりますか？」

ミスティア

「わからないわよ！」

だって、ミヤ、何も言わないんだもの！」

セシリア

「何も言わないのは…」

信頼している証拠だったんじゃないんですか？」

ミスティア

「!!」

セシリア

「何も言わなかったって、大丈夫だって

信じてるんじゃないやなかったんですか！」

箒

「セシリア……」

箒はあ然としていた

普段温厚な彼女が自分の姉に

一言……いや、説教に似たものをしている
この状況に

ミスティア

「……わかった……私はミヤの意思を継ぐ！」

セシリア

「姉さん……」

ミヤ

「おいおい、勝手に死んだことにしないでくれよ?」

ミスティア

「!!」

ミヤ

「確かに沈んだけど、少し休むって言ったろ?」

ミスティア

「ミヤア…」

ミヤ

「はっは! ひつでえ顔してんぞ!」

ミスティア

「バカあ!」

ミヤ

「フフツ、さて、俺はそろそろキリト達の戦闘区域に

入る…なるべく早めに来い、嫌な予感がする」

ミスティア

「グ
スツ……うん！わかつた！」

英雄は再び立ち上がる

須郷 VS ナツ

須郷

「貴様はもう何も出来ない！アスナは僕の物さ！」

アスナ

「やめて！離して！」

吸収する事は出来ないが

連れ去ることは出来るこの現状

ナツ

「やめろ！須郷！」

頼む！動いてくれ！白式！」

須郷

「無駄だ小僧！お前のISは

既にエネルギーが底を付いているんだからな！」

ナツ

「クソ！クソ！俺はまた、見てるだけなのかよ！」

バキッ！

??

「…そうでもないぜ？」

須郷

「ガハッ！」

アスナさんを連れ去ろうとしていた須郷の顔面に
ナツの背後から伸びてきたISの拳骨がめり込む

??

「見てるだけ？寝言は寝て言えよ？」

あの時だつて奇跡を起こせただろ？
もう一回ぐらい起こしてみろよ、ナツ

ナツ

「ミヤ……さん!？」

そこに立っていたのは風に包まれ

装備も重武装……いや、ごつくなつたミヤだつた

須郷

「ぐッ……なぜだ！なぜお前が生きている！」

ミヤ

「生きてちやおかしいか？」

須郷

「お前は福音に落とされ海に落ちたはずだ！」

ミヤ

「つたく、確認もしてないのに殺すなよ……」

須郷

「だが！黒の剣士や双竜槍、

雷光のデータを取り込んだ私には

貴様でも勝てはしない！」

ミヤ

「それはあくまで

お前があいつらのISへの接続が上位の場合だろ？」

須郷

「まさか！」

ミヤ

「さて、そろそろ起きろ」

ハヤテ

『書き換え完了です！皆さんいけます！』

レイカ

「ありがと！激昂雷光槌！」

ほとばしる怒槌…もとい雷

須郷

「ガハッ！」

ホンネ

「きつと戻って来ると思ってたよー！」

双竜陣！」

二つの槍で円を描きながら

敵を貫く陣

須郷

「グハッ！」

キリト

「…スターバースト……ストリーム！」

須郷

「グハ！」

ミヤ

「キリトは寝てたな……」

須郷

「なぜだ！一方通行で出れないはずなのに！」

何故、抗い出てくる事が出来る！」

レイカ、ホンネ、キリト

「「お前に対してイラツと来たから！」」

ミヤ

「見事にハモったな…」

須郷

「ありえない、ありえないありえないありえない！」

私は完璧なのだ、こんなことありえるはずもない！」

ミヤ

「簡単な話しさ須郷

お前のＩＳのシステムを書き換えただけ…

お前がやった事と同じだ！」

須郷

「バカな!？」

ミヤ

「それに、人間完璧と思ったらそこで終わりだ！」

須郷

「クッ！」

ミステイア

「間に合った！」

ミステイア達増援部隊の到着

ラウラ

「もう大丈夫だ、私も行ける！」

シャルとラウラが戦線へ復帰

須郷

「くうッ！」

自分の不利な状況を察し須郷は

奥の手を待機させている上空へと逃げていく

キリト

「ナツ…ありがとな今まで耐え続けてくれてな」

ナツ

「いえ…俺は何も…」

ミヤ

「いや、お前は充分守れたさ」

ナツ

「キリトさん…ミヤさん…」

ミヤ

「さあて、やられっぱなしじゃかっこ悪いし

年長者がカツコいいところ見せなきやな！」

キリト

「行くぞ、レイカ！アスナ！ミヤ！」

レイカ

「ええ！」

アスナ

「うん！」

ミヤ

「キリトオ、それ俺のセリフだろ…」

英雄達は再び空へ

ナツ

「…俺だって…戦いたい…」

守りたい…失いたくない！」

ホンネ

「ナツくん…一夏！」

ナツ

「俺だつてあの世界を生き抜いた1人だ！」

「こんなところで…負けてられつかよ！」

白式！もう一度だけ、力を貸してくれ！」

白式

『何の為に？』

ナツ

「もう二度と仲間を失わない為に！」

白式

『それがあなたの答えなのですね…』

白式

『第二形態移行

雪羅・白桜』

ホンネ

「ナツくん！」

ナツ

「ホンネ…みんな…行こう！」

ホンネ

「グスツ…うん！」

鈴

「当たり前じゃない！」

あいつらだけにカツコつけさせて

終わらせるわけにはいかないでしょ！」

セシリア

「私だって…いえ…」

私達も強くなつたんですもの！

ミヤさん達に負けていられませんわ！」

シャル

「僕は、ミヤに救われたんだ…だから今度は

ミヤのために戦いたい！」

ラウラ

「私は、一軍人だぞ、しかも、教官は織斑先生だ

負けて諦めるような教育は受けてない！」

箒

「私は…私は！一夏の笑顔を

…いや、皆の笑顔を…あの日常を守りたい！」

ホンネ

「私はこの槍に誓った…ナツ君を…皆を守るって！

だからもう、考えるのはやめた！

私は私の信念を貫く！」

ミスティア

「私は自分の勝手な判断でミヤを

1度絶望の淵に立たせてしまった…

それなのにミヤは今も私を信じてくれる…

彼の優しさに救われてばかり…

だから、彼の信用に答えたい！」

『第三形態移行』

管制室…もとい旅館の1室

簪

「みんな一斉に!？」

千冬

「東！一体どういう事だ！」

東

「ISが認めただよ、ちーちゃん…

あの子達の信念…覚悟を」

セシリア

「ディープ・ブルー・ティアーズ！」

鈴

「甲龍・改二！」

シャル

「ラファール・リバイブ custom IV！」

ラウラ

「シュヴァルツェア・レーゲン・full custom！」

箒

「紅椿・焰羅！」

ホンネ

「双竜・蒼！」

ミスティア

「夜雀・宵闇！」

須郷

「な！ひとつ飛ばしのシフトアップだとお！」

ミヤ

「簡単な話さ、須郷……」

「ここにいる誰一人として、もう……」

「絶望して無いだけだ！」

鈴

「背中がガラ空きよ！さっきのお返しよ！青竜刀・双刃！」

「ミスティア！スイツチ！」

鈴のメインウエポン、青竜刀を

ISの機動力で体を高速回転させ

回転したまま二つの青竜刀で

一気に叩き切る、鈴ならではのパワー技

「ソードスキル！霸王樹！」

霸王樹：その名の通りサボテンのように
無数のナイフを差し込む技

「グハッ！」

「くらえ！ 神蒼しんそう！ 果てしなき蒼ブルー！」

どこまでも続く空のように蒼い光を放ち
敵へと飛ぶ大いなる槍技

須郷

「く！行け！無人機ども！」

無人機が盾となり

須郷に最後の大技は当たらなかった

ミスティア

「おお……ざっと千機……ISではないようね」

ナツ

「く、これじゃ須郷に近寄れない！」

キリト

「あいつ、もつと上に行く気だ！」

レイカ

「でも、これじゃあ！」

ミヤ

「全員、技の発動準備しとけよ！」

ハヤテ

『皆さんの道は私たちが作ります！』

無限武装！希望の型！』

ミヤ、ハヤテ

『『夢幻武装！発動！』』

ミヤ

「恨みは無エが邪魔すんなら消えてもらおうぜ！」

ザザッ

鈴

「嘘、無人機がうしろに引いた!？」

ミヤ

「終の型！千刃！黄泉！」

シャル

「道が開いた！」

ミヤ

「さあ！行け！」

ナツ

「ここなら外さない！桜剣・桜吹雪！」

須郷

「ハハッ残念だな！お前らがこっちに來たという事は

無人機を無限武装に任せてきたということだな！」

ナツ

「それがどうした！」

須郷

「あそこにいるのは、1, 500機の無人機だ

だがあいつの1度に処理できるのは千刃でせいぜい500機だ」

ナツ

「何が言いたい」

須郷

「500機壊されたとしても他の無人機が完璧に直し

何度でも戦い続けるように設計した！」

ナツ

「まさか！」

須郷

「そうさ、いずれ無限武装の頭は焼き切れる！」

ハヤテ

『と、犯人は供述しております』

ミヤ

「俺の頭を焼き切らせるつもりか」

ハヤテ

『新しいシステムを試してみます？』

ミヤ

「やってみるか」

ミヤ、ハヤテ

『トランス・ソフト
「憑依融合！」』

ハヤテ

「おお！できましたね！」

ミヤ

『なるほど、この状態は俺の意識の上に

疾風の意識が乗るのか』

ハヤテ

「とりあえず、全部落とします！」

ミヤ

『だとすると…あれだな…』

無限武装！夢幻の型！千刃！

ハヤテ、ミヤ

『千年氷樹！』

疾風迅雷

ドォーン！

無限武装…篠木ミヤと無人機の

戦闘区域から爆煙があがる

須郷

「は…はは…ハハハ！」

これで無限武装は戦闘不可能だ！」

その顔は勝利を確信した顔であった

ミスティア

「!!…うっ！」

今にも泣きそうな顔をしたミスティア

ミスティアだけじゃない、

キリトやアスナ、ホンネや箒たちの顔は

絶望に飲み込まれていた

ナツ

「くっ！」

自分だって信じたくはない……

だが、たった数週間前に同じ出来事が起きている
頭が否定しても、過去が肯定してしまう

レイカ

「ミヤなら……なんの心配もいらナイわよ！」

ただ一人レイカは絶望に飲み込まれてはいなかつた
むしろ、希望に満ちた顔をしていた

須郷

「なにを言っている！そんなのただの幻想だ！」

レイカ

「あら？なんで？決め付けで喋るのかしら？」

須郷

「な！なぜお前はそう言える！」

レイカ

「フフツ、ただの乙女の感よ」

須郷

「な！そ、そんなもので可能性を語るなア！」

レイカ

「え、別に良いじゃん

だって」

ビュン！

ミヤ

「乙女の感はよく当たるって言うからな！」

須郷

「!?」

思い切り不意をつかれた須郷は
ミヤの射程内へと入っていく!

ミヤ

「久しぶりの奥義だ…加減はできねえぜ!!」

須郷

「くっ! 無人機! 盾となれ!」

十数機の無人機が須郷を守る

?

『セカンドシフト』

須郷

「!?」

?

『雷槌・迅雷』

ミヤ

「久方振りのツーマンセルだ…」

ミスるなよ？レイカ

レイカ

「わかつてるわよ…」

アインクラッド最強のツーマンセル

疾風迅雷の実力…見せてあげる！」

ミヤ

「疾風とは迷いなき心！」

レイカ

「迅雷とは迸る情念！」

今、大いなる二つの力が敵に牙を剥く！

ミヤ・レイカ

「合技！疾風迅雷！」

流星群のような美しき斬撃と

火山のような力強い打撃：

ただそれは光速に近い速度で放たれる

須郷

「な！無人機がたった数秒で!？」

レイカ

「ミステイアさん、スイッチ！」

ミステイア

「うん！任せて！」

ミヤ

「無限武装！発動！」

ミステイア

「ミヤ！私が合わせる！」

ミヤ

「おうよ！」

ミヤ・ミステイア

「合技！千戦流星！」

ミヤの無限武装と霊戦騎心の効果による

武装の永久召喚に

ミステイアの夜雀としての能力をあわした合技

本来なら千本あたりで終わるが…

相手が相手だったからだろうか…

それは億千に等しいほど続いた

恐ろしい勢いでエネルギーを消費しながら

須郷

「ぐっ！ぬっ！」

ミヤ

「押し切れ！」

須郷

「ぐっ！」

あと数秒で須郷の機体は

停止するほどの損傷を受けていた

だが…

ガクン

ハヤテ

『エネルギーエンプティ―！』

ミヤ

「な！」

須郷

「ははは！運はこつちに味方したようだな！」

ミヤ

「くっ！ミスティア！逃げろ！」

ミスティア

「で、でも！」

ミヤ

「心配すんな！」

彼の顔はまだ…諦めてはいなかった

ミスティア

「！…わかった、信じてる！」

須郷

「ハハッ！女は逃がしたか…」

最後まで男らしいじゃないか！」

ミヤ

「はて？何故最後とな？」

須郷

「はっ！お前の最後だよ！」

各国の無数のミサイルが

ミヤに目掛けて発射されていた

それはさながら白騎士事件の時のように

須郷

「死ね死ね死ね死ね！」

旅館の1室にて

千冬

「な！まずい！」

東

「うん…でも…大丈夫…ミヤくんは疾風たちなら」
千冬

「たち…だど？」

上空

ミヤ

「耐えてくれよ！疾風！」

トゴーン！

再び旅館の1室にて

簪

「ミサイル1陣被弾を確認！」

ミヤ君と疾風の信号を感知できません！」

千冬

「東！」

東

「大丈夫だよ、ちーちゃん…だつて…」

篠木家の血を引く…ミヤ君なんだよ？」

再び上空

キリトは見ていた…

ミヤが心配になり、ISでミヤを

見ていたからこそ…

ミヤが落ちていく様を見ていた

その顔が絶望に染まっていたことを

キリト

「ミヤ！」

だが、次の瞬間、心配は不要だと気づいた

それは、ミヤの顔が：

徐々に希望を取り戻していくのを見たから：

そしてミヤの黒目に銀色の光が灯ったのを見たから

ミヤ

「(やばい…耐えられると思ってたけど

予想の斜め上のダメージ量だわ…

動けねえ…)」

?

『また…諦めるのか?』

ミヤ

「(…)(…」

?

『また…逃げるのか?』

ミヤ

「(いや…逃げないよ…俺は

もう…逃げない!)」

?

『戦えるか?』

ミヤ

「(ああ、いつでも行けるぜ!零式!)」

零式

『フツ…力を貸す…絶対に勝てよ!』

ミヤ

「…当たり前だ…」

決着! 覚醒する黒き鎧、 吹き荒れる七色の風

ミヤと須郷の戦闘区域から離れた地点

ミステイア

「嘘でしょ!ミヤ!」

アスナ

「さすがのミヤ君でも…これじゃあ!」

ナツ

「くっ!」

ホンネ

「…ううん、大丈夫だよ」

レイカ

「負けないよ、ミヤは」

キリト

「ああ、むしろ負けるのは須郷の方だ

俺たちは向こうでミヤの帰りを待とう」

戦闘区域

須郷

「ハッ！ハハッ！ハハハッ！」

大人に歯向かうから痛い目を見るんだ！」

ミヤ

「大人に歯向かうのが子供ってもんだろ…」

須郷

「!？」

そこに立っていたのは疾風を手とふくらはぎと足先とヘッドギアしか装備していない状態のミヤの姿だった

須郷

「…はっ！既にボロボロじゃないか！

そこからどうするってんだア！」

ミヤ

「なあ、須郷…切り札ってのは

最後に切るから切り札って言うんだよ…」

須郷

「は？」

ミヤ

「やるよ…零式！」

その声と共にミヤの周りにかかっていた靄がはれる

そこには今ミヤがつけていないパーツが浮いていた
零式

『了解』

次の瞬間、ミヤが装備をつけていない部位に

黒いISの装甲が現れる

そして、外れていたパーツが二つの砲身に変わり

ミヤの新たな装甲の肩につく

ミヤ

「はあ…新規の太もものパーツ

やけにでかいと思ってたら…

こういう事だったんか」

須郷

「な！なんだその姿は！」

ミヤ

「うーん…そうだな…

疾風・零式！」

零式

『いい名前だな』

須郷

「だ、だが、さつきより重装備になった分

機動力では私が有利!」

ミヤ

「まあ、さて、早まるな…誰が完成って言ったよ…」

須郷

「は!?!」

ミヤ

「いけるか?」

?

『La♪』

その声に応えるようにミヤの羽が
変化していく

旅館の1室にて

帰投組1陣

箒

「嘘…あれって」

セシリア

「箒さんの展開装甲ですわよね…でも」

箒

「…あの光は…」

シャル

「…福音の翼!?!」

ミヤ

「完成!・疾風・零式!」

蒼く光る天使のような

大きな翼をたずさえたミヤが

そこに立っていた

須郷

「な!?!それは福音の!?!」

ミヤ

「ああ、俺が一番驚いている」

須郷

「一体どういうことだ!」

ミヤ

「俺は福音と一緒に落ちた

互いにボロボロでな…それでセカンドシフトの時に

福音のコアに触れていたんだろうな」

福音

『La♪』

須郷

「そ、そんなの！」

ミヤ

「まっ、機動力はずば抜けてこつちが

高いんでね！これで終わらす！」

須郷

「なぜだ！なぜお前はそんなにも強い！」

ミヤ

「…強くなんかねえよ…俺もお前も同じだ」

須郷

「!？」

ミヤ

「俺もお前も、目の前に超えられない壁があつた

お前にとっては茅場晶彦、

俺にとっては親父や束…」

須郷

「何が言いたい」

ミヤ

「俺もお前も、ほとんど同じ条件って事だよ
ただ…ひとつ違うとしたら」

ミヤ

「奪ったか、貰ったかの差だな」

須郷

「!!」

ミヤ

「お前は奪い

俺はいろんな人から色んなものを貰った
俺とお前の違いはそれぐらいだ」

須郷

「ぐっ…そんなハツタリで俺を怯ませたつもりか！」

ミヤ

「いんや全然？」

須郷

「な!？」

ミヤ

「奪う事しか能の無いお前に負けるほど」

「いろんな人から貰ったもんは弱かねえんだよお！」

零式

『お前の親父から預かった

オリジナルソードスキル…出来るか?』

ミヤ

「…モチのロン」

須郷

「ヒイツ!ま、待ってくれ!

もう、アスナには手を出さないから

許してくれ！」

ミヤ

「……問答無用だア！」

須郷

「ヒイツ！」

零式

『OSS発動!』

ミヤ

「柔剣! 右太刀! 白狼!」

ミヤの剣から

白い狼の形の剣撃が放たれる

須郷

「がはっ！」

ミヤ

「まだまだ！」

ミヤ

「柔劍！左太刀！閃光！」

無数の白き光の線が須郷をとらえる

須郷

「ぐはっ！」

ミヤ

「柔劍！両太刀！蒼龍！」

蒼き二匹の龍が須郷に噛み付く

須郷

「くっ……だが……耐えられないほどではない

そんな生易しい攻撃で

倒せるとでも思っているのか！」

ミヤ

「……誰が終わりって言った？」

須郷

「!?」

ミヤ

「剛剣…左太刀…雷槌!」

迸る電撃、そして振り下ろされる剣撃

須郷

「ぐっ!重い!」

ミヤ

「右太刀!夜雀!」

無数の黒き剣撃が須郷を襲う

須郷

「はやっ!ぐはっ!」

ミヤ

「両太刀!黒剣!」

二本の剣が須郷に振り下ろされる

須郷

「ぐはっ!まずい、にげ」「トドメだアア!」「ヒイツ!」

ミヤ

「剛柔剣！奥義！七式疾風！」

六つの剣撃を二つの剣に溜め込み
一気に放つ剣技

それがミヤの親父が残した
希望の七つの剣技

須郷

「ぐはっ！」

ミヤ

「よし…あとは捕まえれば終わりっ」と

？

「悪いけど…それ…まだ使えるのよね…」

ミヤ

「!？」

そこに居たのは金色のISだった

?

「はじめまして…かしら？」

ミヤ

「何者だ…」

?

「まあまあ、そんなに

殺気立たなくても良いじゃない」

ミヤ

「得体の知れない敵だ、殺気立つに決まってるだろ」

?

「あら、自己紹介してなかったわね…」

ファントムタスク、実働部隊代表、スコールよ

以後お見知りおきを…篠木ミヤ君」

ミヤ

「ファントム…タスク!!」ゾワツ!!

ミヤの全身の毛が逆立つ

スコール

「あら？ 私達のこと知ってるのかしら？」

ミヤ

「…とぼけんじゃねえ！」

俺の両親を殺した犯人のいる一味だろうが！

スコール

「…あら、知ってたのね…」

なら話が早いわ、零式を渡しなさい

ミヤ

「嫌だと言ったら？」

スコール

「…今は何もしないわ…面白くないもの…」

ヘトヘトの相手を倒しても

ミヤ

「くっ…」

スコール

「少しでも長く生き残りなさい…」

そう言つて須郷を連れてどこかへ消えて言つた

ミヤ

「…くそっ!」

その後…お約束のヤーツ…

須郷に勝利した日の夕方

ミヤ

「痛い痛い痛い！」

ミスティア

「じつとして！」

のたうち回っているミヤ…

千冬

「傷の方はどうだ、篠木？」

ミヤ

「見ての通りでイタイイタイ！」

ミスティア

「全身、アザと擦過傷だらけなんだから

処置が終わるまで我慢しなさい！」

ミヤ

「アザあんのに湿布貼った後叩くなよ…」

千冬

「(I Sの装甲があるとは言え、あれだけのミサイルを受けて

その程度の傷で済むはずない…はず…

それにミステイア・オルコットは

何故あれほどの確な処置が出来るのだ?)」

実際…素人の処置ではなかった

ミヤ

「ん?…どうかしました? 織斑先生?」

千冬

「ん、いや、福音をどうするべきかと思ってな」

ミヤ

「ほんとすいません…」

千冬

「翼だけ外せないとはな…」

ミヤ

「すいません…」

千冬

「持ち主が受け取りに来るがどうする？」

ミヤ

「正直に言います」

千冬

「そうか」

1時間後

山田

「ナターシャさん来ました！」

ナターシャ

「はじめまして、あなたがあの子を助けてくれたの？」

ミヤ

「はい…ただ…」

ナターシャ

「会わせてもらえるかしら？」

ミヤ

「はい…東さん」

東

「はいはい！イデオ！福音！」

ナターシャ

「…翼がないわね…この子飛ぶのが好きだったのに」

ミヤ

「それは…」

ナターシャ

「ねえ、乗っても平気かしら？」

東

「大丈夫だよー」

あのゲスのハッキングは全部解除したから」

ナターシヤ

「ありがとう……へえ……そう……」

彼に翼をあげたの……そうなのね……

やっぱり優しい子ね、福音……」

ミヤ

「およ!？」

ナターシヤ

「見してくれるの？この子が君に託した希望を」

ミヤ

「は、はい!……ふう……来い!疾風・零式!」

ナターシヤ

「!!」

ミヤ

「すみません……開口一番に言うつもりだったんですが……」

ナターシヤ

「……いいわ、君にあげる」

ミヤ

「はへえ!？」

ナターシヤ

「だって空を飛ぶのが好きなこの子が

君に自分の翼を託すぐらい君がスゴイって事よね」

ミヤ

「はあ…なるほど…」

千冬

「よかった篠木…殺されなくて」

ミヤ

「え…」

ナターシヤ

「フッフ」

ミヤ

「ヒイツ」

ナターシヤ

「千冬…私そんなことしないわよ」

千冬

「そうだな…さて…子供達は外で遊んでこい」

ミヤ

「いや、傷だらけなんすけど…てかもう夜」

千冬

「桐ヶ谷と結城が外にいる…それを追って」

相川姉と織斑、布仏が出て行った」

ミヤ

「連れ戻して来いと…」

千冬

「察しがいいな」

ミヤ

「付き合ひ長いですからね」

ミスティア

「じゃあ、行つてきますね」

千冬

「泳ぎはしてないだろうからすぐ見つかるだろう」

ミヤ

「はいよー」

歩くだけでも傷に響くのは内緒…

夕日の綺麗な海岸線…というか波打ち際

アスナ

「キリトくん…私達だけセカンドシフト

しなかつたよね…」

キリト

「ああ、俺達だけ置いてかれたな」

アスナ

「キリトくんは悔しくないの？」

キリト

「ん？何がだ？」

アスナ

「みんなと同じ位置に立ってないって

悔しくない?」

キリト

「うーん…いつか追いつけるって思ってるから

悔しくはないかな?」

アスナ

「…フフツ、キリトくんらしい」

崖の上

ナツ

「心配になってきたけど…大丈夫そうだな」

レイカ

「おっ!」

ホンネ

「キ、キスする流れだよねあれ!」

ミヤ

「お前ら…何をやってるんだよ」

レイカ

「あら、ミヤ」

ミヤ

「なんでお前まで楽しんでんだよ…」

レイカ

「だって…キリトとアスナちゃんのキスシーンだよ

見ものだよ！」

ミヤ

「だったらあれを歌って止めてやろうか？」

レイカ

「面白いけどやめたげて…」

ミヤ

「…ふう…織斑先生半ギレだぞ？」

ナツ

「ゲ…」

ミヤ

「…早く戻れ…あいつらにも言つとくから」

ナツ

「ミヤさんは怒られないんですか？」

ミヤ

「なんでキレてるのを把握して

出てこなくちやならないんだよ

連れ戻して来いって言われたんだよ」

ナツ

「あー…なるほど」

ミヤ

「ほれ、明日にでもたつぷり遊べ」

レイカ

「あ、1日伸びたんだっけ？」

ミヤ

「織斑先生が言つてたんだよ…多分午前中遊んで

夜帰る感じだろうな」

レイカ

「なるほど…じゃあ、明日たっぷり遊びましょ」

ナツ

「お、押さないで下さいよレイカさん！」

ミヤ

「ミステイア…」

どのタイミングであいつらに連絡したらいいんだろう…」

ミステイア

「……………いつそ今？」

再び海岸

アスナ

「織斑先生怒ってるかしらね？」

キリト

「だろうな…アスナ…」

アスナ

「…ん／＼／＼／＼／」

ミヤ

「織斑先生に連れ戻して来いって言われたから来た

邪魔したな…帰るわ…」

ミスティア

「いや、邪魔する気満々だったでしょ…」

アスナ

「／／／／／…見られたってことよね…キリトくん…」

キリト

「ハッハッハ！ぼいな！」

第閑章

夏だ！海だ！なんだ？

海には大体いるよね…こういう奴ら（偏見）

臨海学校3日目

ミヤ

「いやあ…沈んだおかげで泳げるようになるとは…」

キリト

「いや、スゲエ事言ってるからな？」

ナツ

「…にしても…昨日までは人がいなかったのに

今日は人が多いですね…」

千冬

「昨日までは貸切だったからな」

ミヤ

「IS学園の財力スゲエ…」

ホンネ

「ナツくーん！」

ナツ

「によわ！」

後ろからいきなり抱きつくホンネ

ホンネ

「ううっ」

ミヤ

「お熱いですな」

ナツ

「え、えつと…どうした？」

ホンネ

「変な男の人に声かけられて逃げてきたの…」

モブ男1

「あ、いたいた、お嬢ちゃん、そんなヒヨロヒヨロの男より俺達とあそぼーよ」

ミヤ

「うわー…今でもいるんだあんな奴…」

モブ男2

「ああ!?!喧嘩売つとんのかワレエ!」

いかにも古そうなヤクザっぽい人が

喧嘩口調で…仕掛けてきた…

キリト

「うわー…変な因縁ふっかけてきたよ…」

モブ男3・4・5

「人数で勝てると思ってるのか!?!ああ!?!」

ミヤ

「てか…集団に纏まりがねえ…」

ナツ

「…ホンネ…此処で待つてて…千冬姉…頼む」

ミヤ

「海で泳ぐ前の準備体操代わりになるかな？」

首を鳴らし指を伸ばすミヤ

キリト

「物騒な事言うな!」

と言いつつ屈伸をしているキリト

千冬

「…つたく…殺すなよ？」

キリト・ナツ・ミヤ

「了解」

2分後…

モブナンバース

「お、覚えてろよお！」

ミヤ

「弱いやつを覚えてる暇ないデース！」

追い討ちをかけるミヤ

キリト

「追い討ちかけるな」

笑ってるキリト

ナツ

「…あれぐらいだったら

ホンネでも勝てたんじゃないか？」

ホンネ

「怖かったんだもん…誰も居なかったし」

ミヤ

「つてそう言えば、ミステイアたちは？」

千冬

「ムツ？あれではないか？」

千冬さんが指さす先には

モブ男A

「ねえねえお姉さん達、今暇？」

ミヤ

「…今日の俺達に何か憑いてるのか？」

キリト

「俺達海の家で何か食いもん買ってくるわ」

ナツ

「かき氷とかあつたら買つときますね」

ミヤ

「俺が行くのかよ…」

モブ男A

「お姉さん達あそこの海の家で

一緒にかき氷食べない？」

ミスティア

「人を待っているので」

モブ男B

「そんな硬いこと言わないでさあ」

アスナ

「弱い人には興味無いです」

モブ男C

「おお、強気だね…でも、嫌いじゃないね」

レイカ

「…あ、そんな汚らわしい手で触らないでください」

レイカに伸びるモブ男Cの腕

モブ男C

「良いじゃん別に」

レイカ

「触るな」

モブ男Cの手を払うレイカ

モブ男C

「チツ、こつちが下手に出れば調子に乗りやがって！」

ミヤ

「あー、あのーうちの知り合いに何か用？」

モブ男A

「あア!?!」

ミヤ

「おお、コワイコワイ」

思いつきり笑いをこらえた顔

そして棒読み…

モブ男B

「こんなのが君達のツレかよ…

弱過ぎて笑えるわ」

アスナ

「あら？彼の实力知ってるのかしら？」

モブ男C

「はっ！こんなほっそい奴相手に

3人は卑怯だろ！俺がやってやるよ」

ミヤ

「おお…モブサツプと命名してあげよう」

モブ男C↓モブサツプ

「ああ!?!喧嘩売ってんのか!?!」

ミヤ

「ええ、そうですけど？」

モブサツプ

「し、死にやがれえ!!」

巨体から繰り出される剛腕ラリアット

ミヤ

「てか、キリト達、かき氷何買ってくるつもりだろ？」

カスリもせず避け腕の上に乗ってみせるミヤ

アスナ

「キリトくん…ミヤくんに任せて

食べ物買いに行ってるのね…」

ミヤ

「あー、キリトを怒らないでやって？」

さつきも似たようなうっすい男

倒したばっかりだから…

それより…

こんな弱い奴面白くないんだだけ、ど！」

顎に蹴りをいれモブサップをダウンさせる

モブ男B

「ふつ、奴は我々の中で最強…」

モブ男A

「降参しよう、どうか逃げよう」

砂浜を逃げてくモブ男A・B

ミスティア

「ステンバーイ、ステンバーイ」

ミヤ

「忘れ物です、よつと！」

モブサツプをぶん投げてモブ男達に当てるミヤ

レイカ

「ビューティフォー…」

海にて…その1

ミヤ

「ゴボゴボ」

レイカ

「ミヤが溺れてる！」

ミスティア

「人工呼吸しなくては！」

レイカ

「いやいやいやいや！」

ミヤ

「ぶはあ！死ぬかと思った！」

ミスティア

「惜しかったなあ」

レイカ

「ツツコミ疲れたわ…もう…」

キリト

「おいバレーしないかー？」

ミヤ

「踊れませんかー！」

ナツ

「そっちじゃない方でーす！」

ミヤ

「おい、そつかー！」

ホンネ

「3対3の試合でやりましょう」

ミヤ

「チーム分けどうする？」

アスナ

「面白そうだから男子対女子にしましよ！」

キリト

「いいのか？俺達勝っちゃうんじゃないか？」

レイカ

「あら、舐めないでよキリト」

ナツ

「…4対3？」

ホンネ

「いやいやー、3対3だよー」

ミヤ

「よし…じゃあ、俺審判するわ」

ミスティア

「何聞いてたのよ！」

ミヤ

「ハツハツハ！」

ミヤ、ナツ、キリトチーム

アスナ、ホンネ、ミステイアチーム

対

レイカ

「…なんだろうこの虚しさ…」

キリト

「え？胸無しさ？」

ミヤ

「キリト…レイカを怒らすな…」

レイカ

「…グスッ」

ナツ

「あ、レイカさん泣いちゃいましたよ…」

キリト

「ヤベエ…」 チラツ

ミヤ

「……………」 ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

後ろを向くとジヨジヨ立ちをしているミヤ

キリト

「オワタ…」

ミヤ

「夜道と背後に気をつけろよ？」 ニコツ

ナツ

「アハハ…」

ミステイア

「じゃあ、そつちからねー」

ミヤ

「ういーつす」

キリト

「…((((☒☒☒)))」

ミヤ

「じつとしてろキリトオ…」

「狙いが定まらないだろ…」

キリト

「…」スツ

ミヤ

「そーれー！」

ザッ！

ミスティア

「ワオ…流石ミヤね…」

コート際スレスレに打ち込む

ミヤ

「へへー！」

キリト

「死んだと思ったわ…」

ミスティア

「じゃあ、今度はこっちなねー

そーりや！」

キリト

「フベラー！」

顔面打ち上げ

ミヤ

「ナイスキリト！いくぞナツ！」

ナツ

「はい！そりや！」

コートど真ん中を打ち込む

ホンネ

「うへえ」

ヒューヒュー

ミヤ

「うわー…ギャラリイ出来てるわー…」

ミスティア

「レイカちゃん、交代頼めない？」

レイカ

「わかりました…」

レイカ

「行きます…」

キリト

「ムッ？殺気！」

レイカ

「ゴルア！」

ボールが変形するレベルの豪速球を放つレイカ

ミヤ

「あ…」

キリト

「ぐわあああ！」

顔面にボールをめり込ませてコート外へと

レイカ

「ふうー…」

ミヤ

「衛生兵！衛生兵！」

ラウラ

「はい！」

簪

「…はい」

ミヤ

「キリトをお願いね」

ラウラ

「了解！」

簪

「…了解」

ナツ

「一人減りましたね…」

東

「私が代わりになろーじゃないか」

ミヤ

「大丈夫か？」

東

「東さんを舐めないでよおくれよー」

ナツ

「いやいやいやいや！国際指名手配級の人が

こんな大勢の人の目の前に出ていいんですか!？」

東

「大丈夫大丈夫」

ミヤ

「ジャミングしてあるし」

東

「セリフ盗らないでエ」

ミヤ

「とうか…そんな装備で大丈夫か？」

東

「大丈夫だ、問題ない…かな？」

かなり面積の少ないビキニ…

試合結果

男子+東チーム10点

女子チーム10点

ミヤ、ナツ貧血による気絶につき試合中断

理由…東さんの水着が（自主規制）

千冬

「全く…このエロガキどもは…」

ミヤ

「…あれは不可抗力だろ…どう考えても…」

海にて…その2…整備士との出会い

ミヤ

「溺れるわ、出血多量で倒れるわ…」

「踏んだり蹴ったりだな…俺…」

ナツ

「ああ、やっと鼻血が止まった…」

ミヤ

「いやあ、にしても肩の傷が開くとは思わなかったわ」

「海水でふやけていたらしい…」

ナツ

「いや、普通にビビりましたからね!？」

ミヤ

「歩くホラー製造機ミヤだ!」

ナツ

「あの時のミヤさん

冗談抜きでそういう状況でしたからね!？」

他愛もない？会話をしている2人

ホンネ

「2人ともーもう大丈夫ー？」

ミヤ

「大丈夫だ、問題ない」

レイカ

「ねえ、ミヤ、清香来てない？」

ミヤ

「来てねえな…」

ナツ

「…!」ピクツ

ミヤ

「どうした？ナツ」

ナツ

「…嫌な予感…いや、何か起きてる…そんな気が…」

ミヤ・レイカ

「!!」

ナツ

「もしかしたらまた、あんな人たちかもしれないです…」

ミヤ

「レイカ! 急げ!」

レイカ

「なんで姉の私より行動が早いのだよ!」

清香

「いや、あの…これから行くところが…」

モブA

「どこ行くの?」

清香

「救護テントです…」

モブ B

「どうしたの、友達が倒れたとか？」

清香

「いや…友達っていうか…なんていうか…」

モブ サツプ

「なになに、彼氏？」

レイカ

「うちの妹に何か用？」

モブ A

「あ！さっきのカワイ子ちゃん！」

モブ サツプ

「さっきのもやしと一緒に居ないのな」

モブ B

「じゃあ、姉妹揃ってお兄さん達と遊ばない？」

ミヤ

「誰かもやしだゴラア！」

ジャンピンググニー

≡つ

モブA

「ガハッ」

モブB

「ツチ…いんのかよ…」

モブサツプ

「もやしの分際で…」

ミヤ

「アア？」

清香

「あわわ…ミヤさんガチギレ寸前…」

モブ A

「やめとけ…お前ら普通の喧嘩じゃ

こいつに勝てないのはよくわかってる…」

ミヤ

「ほう、それなりに賢いようだな…」

モブ A

「ここは海だ、海らしい勝負をしようじゃないか！」

モブ B

「…：…：…：そういうことっスか先輩！」

モブ サツプ

「…：俺達の勝利は確実っスね！」

ミヤ

「なるほど…：そつちの土俵に降りろってことだな？」

モブ A

「話がわかるやつでよかった…」

モブ B

「いや、どちらかと言えば騙されやすいヤツつすよ！」

モブA

「少し移動しよう…」

モブサツプ

「という訳で、勝負はこれだ」

ミヤ

「水上バイクか…」

モブA

「俺達の水上バイクだが…ISと同等速度が出る

水上バイクだ」

ミヤ

「おおすげえ…」

モブA

「ふつ、自作だからこそその馬力さ！」

モブB

「お前は普通の水上バイクだな！」

ミヤ

「なるほど…だから勝てる勝負と…」

モブサツプ

「ISが使えれば勝てるだろうが

お前みたいなもやしじや無理だろうな!

どうする? 棄権するか?」

ミヤ

「いや、しない…ちよつと待つてて…

レイカ通信していいと思う?」

レイカ

「この際仕方ないんじゃない?」

ミヤ

「だよな…」

モブA

「何する気だ?」

ミヤ

「連絡」

モブA

「誰にだ」

ミヤ

「先生」

モブB

「先生に連絡しなきゃなんにも出来ねえのかよ！」

ミヤ

「そりゃ…無断使用したらしごかれるし…」

千冬

「なんだ、篠木」

ミヤ

「ISの使用許可を…」

千冬

「なんのためにだ」

ミヤ

「こういう事です…」

カメラをモブ達に向ける

気付かれないように

千冬

「…はあ…東がジャミングしている…

問題ないらしい」

ミヤ

「東さんに感謝ですね…」

千冬

「お前…今日何か付いてるだろう…」

ミヤ

「自分でもそんな気がします…」

ミヤ

「よし、許可もらえたぜ」

レイカ

「…あら、そんなことあるんだ…」

ミヤ

「東さんのジャミングがあるからいいってさ」

レイカ

「じゃあ、楽しんできなさいよ！ミヤ！」

清香

「圧勝間違いなしなんですから

遊んであげてくださいよ！そっちの方が面白いんで！」

ミヤ

「姉妹揃って鬼やな…」

モブA

「圧勝ってどういう事だ！」

ミヤ

「ああ、自己紹介しなくちゃですね…」

IS学園1年…篠木ミヤだ！」

モブB・モブサップ

「!？」

モブ A

「…そういうことか…面白い…」

ミヤ

「フツ、いい顔してんじゃん…」

モブ A

「こんなところで I S と競えるなんて

夢にも思わなかったからな」

モブ B

「先輩！いくらなんでも勝てないっすよ！」

モブ サツプ

「そうっす！」

モブ A

「…そう思うなら帰れ」

モブ B・モブ サツプ

「!!?」

ミヤ

「金魚の糞みたいな君達には一生わからないだろうね…」

モブB・モブサツプ

「クッ！」

モブA

「俺が勝つたら…そうだな…お前のISをいじらせろ」

ミヤ

「ワオ…強気だね…じゃあ、本気でいかせてもらおうわ…」

来い！疾風・零式！…ゴスペルウィング展開！

銀の福音の翼を展開

…この時点で世界最速のISをはるかに上回る

モブA

「クッ！すげえ早そうじゃねえか」

ミヤ

「すっげえ早いぜ…それじゃレイカ…合図くれ！」

レイカ

「…3！…2！…1！…スタート！」

モブA

「オリアー！」

一気にアクセルを吹かし加速していくモブA

ミヤ

「よし…あれを試してみよう…」

まだスタートラインにいるミヤ

ミヤ

「リミット・イグニッション！」

全スラスターパーツのエネルギーを

同時に限界まで引き上げ急加速する

福音の翼を持ち

元々スラスターやブースターの多かった

疾風・零式にのみ出来る荒業

ミヤ

「グえっ…早すぎ…」

折り返しでギリギリ曲がれるくらい…か？」

折り返し地点を折り返し…終盤

モブA

「もうすぐゴール…俺の勝ちだ！」

ミヤ

「ギユえ」

瞬間何かが横を通り過ぎた

そして砂浜に追突した

ミヤ

「…キユウ」

レイカ

「改良の余地ありね…」

モブA

「早すぎるんだろう…自分で制御出来てない」

ミヤ

「その通り…とんだ暴れ馬でした…」

モブA

「…工具があれば少しいじれるが？」

清香

「な、いきなり怪しすぎます！」

レイカ

「そうね…確かに怪しい…」

ミヤ

「いや、こいつの腕は信用していいと思うぜ

あの水上バイク…最高速までの加速が安定していた」

モブA

「…あの一瞬でよくわかったな」

ミヤ

「1秒も油断できないような世界で生活してきたんでね」

モブA

「大変だったんだな…」

ミヤ

「ん？そっかえば他のモブくん帰ったみたいだが？」

モブA

「モブって…ああ…別に構わない…」

俺はもう帰る宛もないからな…」

その顔は自らを嘲笑うような表情をしていた

ミヤ

「ほう？」

モブ A

「遊びすぎて家から追い出されちまったんだ…笑えるよな」

ミヤ

「ふむ…千冬さんに言ったら大丈夫かな？レイカ？」

レイカ

「何を考えてるか一瞬でわかったわよ…」

とんでもない事考えてるわね…」

ミヤ

「ハハッ」

モブ A

「ん？なんだ？」

ミヤ

「よし…千冬さんにゴリ押しで頼むか！」

あんたの名前教えてくれ！」

モブA

「え？…倉持…涼真…」

ミヤ

「倉持って…ワオ…」

倉持

「倉持技研の元職員です…」

レイカ

「これは…」

ミヤ

「ラッキーな方じゃね？」

レイカ

「…確かに今日のミヤにしてはラッキーな方ね」

倉持

「まさかとは思うが…」

ミヤ

「そのまさかだと思えます、倉持さん！」

倉持

「はい…」

ミヤ

「俺達担当の整備士になつてもらえないでしょうか！」

倉持

「いいのか？こんなちやらんぼらんな奴で？」

ミヤ

「ええ！もちろん！」

倉持

「………わかりました……なりませう……整備士に」

ミヤ

「ヨツシャ！」

レイカ

「これで…」

ミヤ

「ああ、モンド・グロツソ……とまではいかないけど……

少し大きな試合に出られる！ ヤッタネ、タエチャン！」

レイカ

「そうね……やつと……あとそれやめなさい」

海にて…その3…ビーチバレー

旅館の1室

ミヤ、キリト、ナツの部屋

現状ミヤと女将さんのみ

朝食時にて

女将さん

「そういえば今日…明日の花火大会の前座として

ビーチバレー大会があるらしいですよ」

ミヤ

「へー…で、なんで俺にそれを？」

女将さん

「だって、見ましたよ！」

あのサーブ！」

ミヤ

「たはは…見られてましたか」

女将さん

「皆さんで出てみては？」

ミヤ

「確かに面白そうですね…」

東

「面白そーだねー」

ミヤ

「…びつくりするから変なところから

喋らないでくれ…」

押し入れから出てきた東さん

東

「僕、東エモンです」

ミヤ

「皆に言ってくるか…」

東

「無視!？」

ミヤ

「と、いうわけだ」

ナツ

「面白そうですね！」

ホンネ

「また、鼻血出さないでよ？」

ナツ

「あれは…不可抗力で…」

ホンネ

「……」ウルウル

ナツ

「大丈夫…ホンネだけを見とくから…」

ホンネ

「…／／／／／」

ミヤ

「リア充は放っておこう…」

キリト

「んで、チームはどうする？」

ミヤ

「女将さんいわく、女性が1人はいないと」

いけないらしい」

流石…女性優位社会…ん？違う？

ミヤ

「じゃあ、組みたいメンバーとかいるか？」

アスナ

「じゃあ、キリト君、私、シャルロットちゃんで！」

シャル

「ええ！僕ですか!？」

ミヤ

「シャルー僕っ子に戻ってるぞー」

ミヤ

「他に居ない？」

レイカ

「じゃあ、私、ミステリアさん、セシリアで行こうかしら」

セシリア

「あら、面白い組み合わせですわね」

キリト

「…（一人仲間はずれガハッ）」

ミヤ

「（こいつの考えてる事はだいたいわかる…）」

見事なボディーブロー

アスナ

「何してるのミヤ君!？」

ミヤ

「ホンネはー?」

ホンネ

「じゃあ、ナツ君、私、箒ちゃんです!」

箒

「!!?」

ミヤ

「(箒が言葉にならない衝撃を受けてるよ…)」

ミヤ

「じゃあ、残るは…」

鈴

「じゃあ、私、ラウラ、箒ね」

ラウラ

「うむ！」

箒

「…頑張る」

ミヤ

「お、箒がやる気だ」

楯無

「…簪ちゃん…」ウルウルウルウル

ミヤ

「…見なかったことにしよう…」

キリト

「…うーん…あの3人…何か共通点があるような…あ！」

ギユン！

ラウラ

「それ以上言ってみろ…場合によっては

死ぬことになるぞ…」

キリト

「す、すいません！」

ミヤ

「うーん…皆、背が低くてかわいいうってくらいか？」

鈴・ラウラ・簪

「「か、かわいい!? / / / / /」」

ミヤ

「…ごめん、なんでもない…」

ミヤ

「…ん？俺余ってね？」

全

「あ…」

東

「その心配はいらないのだー！」

千冬

「普通に来い…」

ミヤ

「まさか…」

千冬

「ああ、我々も

今日、明日は休みという事になったのでな」

東

「だからバレー大会参加したいのよー」

ミヤ

「…このチーム最強じゃね？」

キリト

「チーターや！チーターや！

ガハツ…」

ミヤ

「馬鹿だろ…自分で自分のトラウマ掘り返して

自爆するとか…」

大会本部受付にて

大会委員

「はい、計15名五チームの団体でよろしいですね？」

千冬

「ああ」

大会委員

「はい！わかりました！」

あ、この大会ですが…準々決勝から

ISの使用が許可されていますのでお持ちの方は…

ご登録をお願いします」

千冬

「お前ら、登録しとけ…」

全

「はい！」

大会委員1

「いや、男性は…」

ミヤ

「ISでしょ？ほら」

大会委員2

「いや、ただのアクセサリ―渡されましても…」

ミヤ

「じゃあ、これなら納得しますか？」

IS学園の生徒手帳を出す

大会委員2

「え…これって…」

ミヤ

「……本物です…」

大会委員1

「うわ、うつそ！本物のミヤさん!？」

「サイン貰ってもいいですか!」

ミヤ

「はあ…いいですよ」

大会委員2

「我らが男性の希望の星…その御三方が…」

キリト

「いやいやいや…言い過ぎですよ…」

大会委員1

「そうですね？」

…あ、試合ではISの展開楽しみにしてます!」

ナツ

「すごく驚きそうだね…相手が…」

大会委員

「だいたい決勝、準決勝はIS持ちで埋まるんで…」

ミヤ

「面白そうだ…」

大会委員 1・2

「ぜひとも勝ってくださいね！」

キリト

「ユイ、機体の方は大丈夫か？」

ユイ

「はい！問題ありません！」

ミヤ

「ハヤテ…はメンテいらさずか…」

ハヤテ

『ですよー』

ナツ

「東さん、どうですか？」

東

「うん！大丈夫！」

千冬

「やるからには全員、全力だ！いいなお前ら！」

全

「はい！」

以後試合風景ダイジェスト

キリト

「アスナ！」

アスナ

「任せて！」

敵男

「ブロックだ！」

アスナ

「あ！」

…なんてね！シャルロットちゃん！

シャル

「いいただきー！」

準々決勝勝者…キリトチーム

箒

「一夏！」

ナツ

「任せろ！」

凄まじい早さのスパイクを打つ！

敵女

「負けられない！」

相手はそれをギリギリで拾う

が、玉は無情にも相手コート…ナツたちの方へ

ホンネ

「ごめんね？」

決まり手…押し出し

準々決勝第2枠出場チーム…ナツチーム

鈴

「ラウラ！」

ラウラ

「任せろ！」

簪

「鈴！ラウラ！相手は次に反対側に打ってくる！」

私が拾うから、最後、お願い！」

敵男

「な!?!読まれた!!これじゃ！」

簪

「予想通り！ラウラ！」

ラウラ

「これで！鈴！」

鈴

「終わりだア！」

準々決勝第3枠出場チーム：鈴チーム

ミスティア

「行くよ！セシリア！」

セシリア

「はい！任せてくださいませ！…レイカさん！」

敵男1

「クッ！あんなに大きなものが付いてるのに

なんて強さだ！」

敵男2

「いや、アタッカーはまな板だ！」

敵女

「あんたら失礼だよ！」

レイカ

「…死ね！」

敵男1・2

「ふがつ！」「フゴツ！」

見事な跳弾で2人も沈めたレイカであった…

準々決勝第4枠出場チーム…レイカチーム

レイカ

「…グスン…」

敵女

「ホントすいません…うちのバカどもが…」

レイカ

「大丈夫です…慣れてますから…」

ミヤ

「レイカ〜お疲れ〜」

レイカ

「ミヤ〜勝ったよ〜！」

敵女

「なんだリア充か…」

ミヤ

「いや、違います」

ミヤ

「東さん！」

東

「これなら！ちーちゃん！」

千冬

「ふふ…お前らと組んだのは正解だな」

角度、スピード、タイミング…

全てがパーフェクトな玉が千冬の手に

千冬

「ふん！」

準々決勝第5枠出場チーム…ミヤチーム

ミヤ

「まあ、順当だよな」

キリト

「次の試合からI S解禁か」

?

「ふん！男には関係ない話ね！」

ナツ

「はあ……この流れは……確定か……」

モブ女1

「男にはI Sは使えない！」

モブ女2

「もし、あんたらが織斑一夏や桐ヶ谷和人

篠木ミヤつてんなら、チャンスはあるけどね！」

モブ女3

「まあ、あなた達はきつと

負けたらキレルんでしょうけどね」

キリト

「その言葉…しつかり覚えとけ？」

ナツ

「(うわー…いつ以来だろう、

あのキリトさんの楽しそうな笑顔…)」

ミヤ

「まあ、せいぜい負け犬の遠吠えの練習でもしてれば？」

どうせ、あんたらの負けは確定なんだし？」

レイカ

「(あっちゃー…ミヤが喧嘩売った…

本気だわ…)」

モブ女2

「は!?!舐めてんの!?!」

ミヤ

「おお、
コワイコワイ」

海にて…その4…決着!ビーチバレー大会!

大会委員1

「さてさて、準々決勝の対戦カードが決まったぞ!」

大会委員2

「第一試合!チームK 対 チームI!」

ナツ

「ん?俺達の写真?あれ?

でもチーム名が…」

ミヤ

「あー、伏字にしてもらったんだよ」

キリト

「なるほどな…」

大会委員2

「第二試合！チーム鈴 対 チーム打鉄！」

鈴

「名前からしてIS使いね」

簪

「一応私達全員：

専用機持ちだから心配ないと思う」

ラウラ

「それもそうだな」

大会委員2

「第3試合！チーム麗華 対 チーム疾風！」

レイカ

「ラファール・リヴァイヴかしら？」

ミスティア

「武器以外ならなんでもいいんでしょ？」

セシリア

「なら、勝ちも確定ですわね」

大会委員2

「そして!第4試合!

おそらくこれが今日一番の見せ場だ!」

モブ女1

「ふん!最強の私達が圧勝する試合ですものね!」

大会委員2

「カードはこれだ!

チームミヤ 対 チーム鉄風!

詳しい話は試合前にするぜ!

それでは第一試合準備してくれ!」

千冬

「お前…対戦カードいじったのか？」

ミヤ

「いや、完全ランダムで

コンピュータ使ってやってたからね」

東

「あ、ちなみに私は何もしてないよ？」

千冬

「…本当か？」

東

「むしろ決勝で泣かせたいくらいだったもの」

割と珍しく真剣な眼差し

千冬

「……わかった…信じよう」

以下試合風景ダイジェスト

第一試合

ナツ

「だア！キリトさん相手じゃ速さで勝てない！」

キリト

「何言ってるんだ！こっちはこっちで

お前の強打に耐えれなくなってるわ！」

試合時間30分

キリト戦闘不能につきナツの勝ち

キリト

「腕が…折れそう…」

ミスティア

「これは…冷やした方が良いかも」

ミヤ

「あ、涼真、氷もらってきて！」

倉持

「おっけー」

第二試合

モブ女A

「嘘…中国とドイツの代表候補生と

日本の代表候補生候補…勝てない！」

相手の開始早々のリザインにつき勝利

ラウラ

「ふむ…物足りないな」

第三試合

モブ女B

「な!BT!」

ミスティア

「流石私の妹ね!」

セシリア

「このくらい朝飯前ですわ!」

BTによる完全防御にて勝利

レイカ

「楽でいいわ…」

ダイジエスト終了

大会委員2

「さてさて！」

ついに準々決勝も次で最後だ！

ミヤ

「さて、本当にいいんですね？東さん」

東

「うん、みーくんなら出来るでしょ？」

ミヤ

「相手…すごく驚きそうだな」

千冬

「相手の気は私が引こう」

ミヤ

「頼みます」

千冬

「ミヤ…今はチームメイトだ、昔みたいに

フレンドリーで構わない」

ミヤ

「いや無理でしょ!?!」

大会委員2

「さあ!最強チームに出てきてもらおう!」

モブ女1

「私たちね」

モブ女2

「そうね、私たち以外最強なんてありえないものね」

モブ女3

「…」

大会委員2

「チームミヤ！」

ミヤ

「うーす」

モブ女1・2

「!?」

大会委員2

「何を隠そうこの少年！

篠木ミヤ本人だあ！」

モブ女1・2

「!!!?」

大会委員2

「そしてチームメイトはなんと!」

千冬

「織斑千冬だ」

東

「篠ノ之東オネーサンだよー」

大会委員2

「そう! 第1回モンド・グロッソ優勝者 織斑千冬と!

世界を混ぜ回した女、篠ノ之東だア!」

モブ女1・2

「なん…だと!?!」

大会委員2

「本人達公認モンスターチームだあ!」

ミヤ

「ハツハツハ」

大会委員2

「ちなみにチームI、チームKの少年達は

織斑一夏と桐ヶ谷和人、本人です」

キリト

「えらくさっぱりした紹介だな、オイ…」

ナツ

「まあ、仕方ないですよ」

大会委員2

「さあ！試合を開始してくれ！」

モブ女3

「お久しぶりです、ミヤさん」

ミヤ

「あれ？まさか」

モブ女3

「ギルドではお世話になりました…」

ミヤ

「あー…あ！思い出した！リュウカ！」

リュウカ

「はい、やっとお会い出来ました」

ミヤ

「つてリュウカ…さん付けした方がいい?」

リュウカ

「いえ…無くて大丈夫です…あの…」

ミヤ

「ん?」

リュウカ

「姉達がすいません!」

ミヤ

「いや、大丈夫よ? 圧勝するつもりだし」

笑顔…逆に怖い…いや、普通に怖い

リュウカ

「ミヤさんのIS…お強いと聞いてます」

ミヤ

「え? 誰から?」

リュウカ

「レイカお姉様から」

ミヤ

「ALLOでかな？」

リュウカ

「はい」

ミヤ

「ふむ…まあ、今度ALLOでゆっくり話そうや」

リュウカ

「はいー！」

以下試合風景Dieジェスト

モブ女1

「おりゃー！」

強力なサーブ

千冬

「ふん」

何食わぬ顔でレシーブ返し

モブ女2

「危な!」

だがラインギリギリに狙い撃ち

リユウカ

「トース」

モブ女1

「今度こそ!」

決まれば強力なスパイク!

…そう、決まればね

カン!

モブ女1

「は?」

ボールはチーム鉄風の方に

ミヤ

「武器じゃなきやいいんでしょ?」

そう…無限武装のセラス・アテナの完全防御

に弾かれたのであった…

モブ女1

「チートよ!」

ミヤ

「は?」

モブ女2

「そうよそうよ!絶対に勝てないじゃないの!」

ミヤ

「え?最強(笑)チームなんでしょ?」

リュウカ

「あら…本気ですね…あれは…」

ミヤ

「あれ?そういえば負けて言い訳するんだっけ?」

モブ女1

「くっ!」

千冬

「さて、私からいかせてもらおう」

殺人サーブがコートの中を打ち抜く

モブ女2

「あわわ…」

結果は見え見え…

チームミヤ…圧勝

リュウカ

「ほんとにすいません…ミヤさん」

ミヤ

「いや、謝らないで…」

リュウカ

「いつか…お詫びいたします…」

ミヤ

「やめて…あなたのお詫び毎度怖いからさ…」

リュウカ

「そ、そうですね…」

千冬

「篠木、こちらの女性は？」

ミヤ

「あ、SAO時代からのギルドメンバーです」

東

「時代からってことは今もメンバーってことかな？」

ミヤ

「はい、ALOでもギルドメンバーです」

リュウカ

「ところで…レイカお姉様は？」

レイカ

「あー…多分次の試合じゃないかな？」

大会委員2

「さあ!いよいよ準決勝だ!」

大会委員1

「準々決勝を勝ち抜いた4組によるてっぺん争いだ!」

大会委員2

「では、出場者たちの意気込みを!」

ナツ

「いやー…レイカさん相手だと…ちよつと…

不利かもしれないですね…」

レイカ

「ねえ!それどういう事よ!」

キリト爆笑

ミヤ

「ライダーキック!」

キリト

「ふべらア!」

大会委員

「えー…では第二チーム…」

唯一試合をせずに準決勝まで上がってききましたが
いかがでしょう」

鈴

「そうね…体が温まってないから少し不安ね」

キリト

「ふむ…鈴の場合温まってもすぐ冷めるだろうな」

レイカ

「…ミヤ」

ミヤ

「学べよ…キリト…」

レイカ・ミヤ

「ダブルラリアット！」

キリト

「……0 (: 3 |)」チーン

アスナ

「キリト君!しっかりして!キリト君!!」

大会委員2

「……えつと…では!試合にまいりましょう!」

尺の都合上cut

大会委員1

「優勝は!ミヤチームだア!」

ミヤ

「そりゃ、IS使用ありなら勝てるよ…」

東

「ふふ…これでみんなの課題がわかったね」

千冬

「だな……」

ミヤ

「oh………」

彼の過去―届かぬ心

ビーチバレー大会後の夕暮れ
水平線の見える崖の上

千冬

「篠木……」

ミヤ

「あ、織斑先生」

千冬

「今は千冬でいい……」

ミヤ

「千冬さん……何か用ですか？」

千冬

「…用と言えば用だな…」

ミヤ

「SAOのことは話せませんよ？」

千冬

「…わかつてる…私は…」

ミヤ

「今なんで寂しそうな顔をしてるのか…ですか？」

千冬

「…ああ…その通りだ」

ミヤ

「簡単に言ってしまうと…」

自分がこんな楽しい生活の中にいていいのかな？

…って考えてしまうんですよ」

千冬

「…それは…どういう…」

ミヤ

「…んーと…これはレイカと

SAO時代からのフレンドの2人しか知らない事ですけど…

千冬さんになら…話してもいいかも知れませんね」

千冬

「…隣…いいか？」

ミヤ

「構いませんよ」

以下回想

そうですね…何から話せばいいんでしょうか…

こうなる理由…と言ったものの…

ふむ…ちよつとした昔…と言っても中学時代ですけど

スクールカーストって知ってます？

そうです…生徒同士の格差社会です

自分は…その一番下だったんですよ

自分の記憶がずれてなければ…

少なくとも1年生の時は無かったんですがね

2年になった途端…露骨なイジメ…まあ

上からの圧力みたいなものですが…

まあ、一番下なので存在すら無いことにされる

一番のターゲットにされてただけの話です

怒らないでくださいよ千冬さん…もう昔の話なんですから

まあ、その頃はまだ千冬さん達にあつてましたけど

千冬さんや東さんには迷惑かけちゃいけないって思つて

相談しませんでした…すいません

まあ…無視されるぐらいだったら耐えれたんですけど…

ある日…うちのクラスにいた学年のマドンナの命令で

今まで無視してた奴らが俺を認識するようになったんですよ

その当時はマドンナがなんでそんなことを言ったのか…

わからなかったんですけどね…

ある日…そのマドンナに体育館裏に呼び出されて

ああ、絞められるんだな…とか思ってたら

案の定、告白されて…

その時の自分は何を思ったか

「何の罰ゲームですか？」

「誰かに言わされたんですか？」

って言うてしまったんですよ…本来なら喜ぶ場面で…

そしたら…マドンナは泣いてしまつて…

それを見守っていた、カースト2位の女子に

すごく怒られました…

その日以降…

俺は家から1歩も出なくなってしまうたんですよ

もう…誰にも迷惑かけないように…そう…願いながらね…

回想終了

千冬

「…」

東

「…」

千冬

「!？」

ミヤ

「まあ、学校は俺を転校したってみんなに言つて

俺の存在がもうこの学校には居ないって

事してくれましたよ

ああ、心配しないでください

ちゃんとその後卒業証書が家に届きましたから」

千冬

「…お前は…今が辛いか？」

ミヤ

「いや…どちらかと言うと…」

人を悲しませて…泣かせて謝ってすらない俺が

幸せでいいのかな…なんて思ってしまうんですよ」

千冬

「…」

ミヤ

「謝れるのなら謝りたいんですけどね…」

あの人…中学三年の時に引越したみたいで…」

千冬

「…すまなかった…」

束

「ごめんなさい…」

ミヤ

「え？」

千冬

「私は近くにいなながら…お前の異変に気付けなかった…」

束

「私達がミヤくんの支えにならなきゃいけないかったのに…」

「ごめんなさい…」

ミヤ

「謝らないでください…」

相談しなかった俺が悪いんですから」

東

「でも…」

千冬

「お前に余計な心配をさせてしまったのは事実だ…」

ミヤ

「いやいや、多分俺の事ですから…両親が生きてても

相談しなかったと思いますよ…それに今は楽しいですし」

千冬

「…すまない…」

東

「…ごめん…」

ミヤ

「そろそろ謝るのやめないと怒りますよ？」

千冬

「…わかった…」

東

「…怒られるのは嫌だしね…ミーくん怒ると怖いし…」

ミヤ

「じゃあ、この話は終わりで！」

千冬

「そうだな…旅館に帰るぞ篠木」

ミヤ

「ういっす」

千冬

「(篠木に…こんなつらい過去が…」

それなのに…あんなに明るく……)」

東

「(私達^がもつとしつかりしなくちや……

そういえば……)」

千冬

「篠木、明日の花火大会……相川姉と行けよ？」

ミヤ

「ういっす……てか、もう約束しましたよ」

東

「ちーちゃん、明日の午前、私少し旅館から離れるね

夜までには帰るから」

千冬

「わかった」

明かされる笑撃の事実

花火大会当日…の朝

レイカ

「こんなことなら私服を持ってくれば良かったわー」

ミヤ

「いや、お前の制服…ほとんど私服みたいなものだろ…」

その着物みたいな袖…」

レイカ

「ミヤに言われたくないなー」

ミヤ

「確かにオラオラ言いそうな学ランになったけど…」

レイカ

「束氏…私達のＩＳスーツを制服に変えるとは…」

そしてついでに制服を改造するとは…恐るべし…」

ミヤ

「これ…すつごく邪魔なんだが…」

レイカ

「そうね…確かに丈が少し長いわね」

ミヤ

「学ランってこういうものなのか？」

レイカ

「そうなのかしらね…」

「そういえば…なんで私を誘ったの？」

「ミステイアさんは？」

ミヤ

「なんか、元々日本に来た理由が」

「許嫁の所に行くためだったらしくてな」

「まあ、行ったら相手は家出中という…」

レイカ

「うわあ…どっかの工場の息子さんみたいだわ」

涼真

「イツキシ！」

ミヤ

「ミステイアに聞いてみたら……」

相手は倉持技研だとさ」

レイカ

「おお!？」

ミヤ

「なんでも……10年と少し前……」

ミステイアが10歳に満たない頃に

倉持技研の息子さんに親切してもらったらしい

まあ、あとは親が勝手に決めちゃって

それについて話をしに日本に来たってことらしい」

レイカ

「涼真さん…いくつなのよ…」

ミヤ

「確か…23とか言ってたな…」

涼真

「イツキシ！」

レイカ

「涼真さん本人は覚えてるのかしらね」

ミヤ

「さあ？聞いてみないとわからないな」

そこんところは」

レイカ

「…にしても許嫁ね…」

ミヤ

「エゲレスの有名な大富豪の娘と

日本の機械産業のトップ争いを走る会社の息子が

繋がりがあつたとは…」

ミスティア

「ミヤ、レイカー制服着たー?」

ミヤ

「着たけど…」

いかにもオラオラ言いながら殴りそうな

風貌になつたぞ…」

ミスティア

「私なんてこれよ!?!」

既存のIS学園の制服をドレスっぽくした

…セシリアより大人らしく改造されている…
特に胸元…

ミヤ

「うーん…今更だけど…これって…」

レイカ

「SAO時代の装備や私服よね…これって」

ミヤ

「んじゃキリトは…血盟騎士団の時みたいな

服装か…フフ」

レイカ

「制服は白が基調だからね…」

キリト

「ナツ…俺はお前が羨ましいぞ…」

さほど変わってない…なぜだ…」

アスナ

「まあまあ、キリトくん…」

ミヤ

「ああ、ミステイア」

ミステイア

「何？」

ミヤ

「さつき言ってた許嫁の話…相手の名前分かるか？」

ミステイア

「えーと…確か…倉持涼真…だったかしら」

レイカ

「オオウ」

涼真

「イツキシ！…風邪でも引いたかな…」

男

「なんだ、坊主、夏風邪か？」

涼真

「いや、多分誰かに噂されてるんすよ」

男

「おや？女の子にでも噂されてるんか？」

涼真

「いやいやいや…そんなことより」

「早く用意しましょう」

ミヤ

「…はは…」

レイカ

「ミヤ…どうする？」

ミヤ

「…どうするって言われてもな…」

レイカ

「…どうしようかね…」

ミスティア

「あ、ミヤが一昨日あたりにスカウトした

メカニック紹介してよ！」

ミヤ・レイカ

「(oh……)」

ミスティア

「？」

ミヤ

「ああ……近いうちにね……」

今、花火大会の準備手伝いに行ってるから」

ミスティア

「そうなの……じゃあ、今度紹介してね」

ミヤ

「うん……(紹介せずとも……近いうちに……)」

叶え…想いという名の花火

涼真

「イツキシ！」

ミヤ

「風邪ひいた？」

涼真

「多分、誰かに噂されてるんだろ…イツキシ！」

ミヤ

「そうなの…」

涼真

「んで、話ってなんだ？」

「そろそろ花火大会の時間だろ？」

ミヤ

「おう…だから手短かに話すわ…」

ミステイア・オルコットって知ってるか？」

涼真

「……」

ミヤ

「…知ってるよな…」

涼真

「俺は…親の駒じゃねえ…」

ミヤ

「…やっぱりか…」

涼真

「…やっぱりってどういうことだ？」

ミヤ

「家出の理由…」

本当は結婚が嫌だから逃げて来たんだろ？」

涼真

「…ああ…ミステイアさん…」

彼女はいい人だつて聞いてるよ…」

ミヤ

「なあ、涼真…10年と少し前のことを

覚えているか？」

涼真

「…夏祭りの話か…」

ミヤ

「あいつ…相手の顔を

しつかり覚えてないんだよ…」

涼真

「はは…まあ、あの頃は彼女は

9歳ぐらいでしたしね」

ミヤ

「…なあ、涼真…」

涼真

「なんだ？」

ミヤ

「涼真…いや、倉持涼真…」

ミステイア・オルコットの事をよろしくお願いします」

涼真

「…!?!」

ミヤ

「…あいつを…幸せにしてやってくれ…」

涼真

「…何があつたかは聞かないでおこう…」

ミヤ

「ありがとう…」

涼真

「親と正面からぶつかってみることにするよ…」

お前に頼まれちまったからな」

ミヤ

「はは…」

ミステイア

「ミヤー！そろそろ来ないと

レイカちゃんが怒っちゃうよー」

ミヤ

「わかったーすぐ行くー」

涼真

「さて…俺は…どうしようかね…」

ミヤ

「ミステイアと見てれば？」

涼真

「はは…」

涼真

「どうしてこうなった…」

ミステイア

「どうかしましたか？」

涼真

「いや、どうもしない…」

ミヤ

「よし…」

レイカ

「計画通り…」

ミヤ

「よし、じゃあ俺達は穴場に行きますか」

レイカ

「IS乗りにしかいけない穴場ね」

ミヤ

「おお…」

レイカ

「案外誰も来てなかったわね」

ミヤ

「キリトとかすぐ気付きそうだけどな」

レイカ

「確かにそうね…」

ミヤ

「ん？どうした？」

「深刻な表情して」

レイカ

「…ねえ…ミヤ…」

ミヤ

「ん？」

レイカ

「私のこと…どう思う？」

ミヤ

「…どうって…そりゃあ…最高のパートナー…」

レイカ

「…ゲームの中じゃなくて…」

ミヤ

「うーん…一番の理解者…かな？」

レイカ

「それは…どうして？」

ミヤ

「うーん…」

レイカには何も隠さずに言えるからかな？」

レイカ

「…そう…ねえ…ミヤ…」

…私の昔話…聞いてくれない？」

ミヤ

「…昔話…か…わかった…聞こう」

私ね…：中学時代…

スクールカーストの上位に居たの

でも…：その理由は知らない…

私はただ…：みんなと…

…仲良く…：過ごしたかった

だけど…：1人…：不登校にさせてしまったの…

私が…自分の想いを告げたら…

私がスクールカーストの上位だからなんですよね…

誰に言わされた？…なんて言われたわ…

私は…その時泣いてしまった…

それが彼の心に鎖をかけてしまった…

結局、彼に謝ることも出来ずに…

私は3年生で転校することになったの

レイカ

「これが…私の昔話…」

ミヤ

「…なあ…レイカ…それって…」

レイカ

「ごめんなさい！」

ミヤ

「!!」

レイカ

「私があの時泣かなければ…」

あなたに辛い思いをさせずにすんだ！」

ミヤ

「…レイカ」

レイカ

「あなたの傍に居たいなんて…」

もう言えない！あなたが許してくれても

私が私を許せない！」

ミヤ

「レイカ……」

レイカ

「私は……私は！」

貴方のそばにいる資格なんて」

ミヤ

「レイカ!!」

レイカ

「!!」

ミヤ

「それ以上……言わないでくれ……」

頼むから……」

レイカ

「……でも！」

ミヤ

「……俺は……お前を恨んでなんか無い

昔から…1度も…

それは知ってるだろ？」

レイカ

「……」

ミヤ

「それに俺は今のお前の方が好きだぜ」

彼はおどけたように笑う

レイカ

「!!」

そして真剣な眼差しでレイカを見つめる

ミヤ

「あん時は…俺も相当滅入ってたし…」

タイミングが悪かったんだよ」

レイカ

「それって…どういう…」

ミヤ

「レイカ…これからも…俺のそばに居てくれ…

いつまでも…どこまでも…ずっと…」

レイカ

「!!」

ミヤ

「この言葉に…偽りは無い…

俺が君を守るから………」

レイカ

「…本当に…私でいいの?」

ミヤ

「ああ」

レイカ

「…こんなことってあるのね…」

ミヤ

「…レイカ」

レイカ

「私は貴方に全てを預ける…

ちゃんと守ってよ？」

ミヤ

「ああ！」

花火の音

レイカ

「ありがとう、ミヤ…」

「こんな私を好きになってくれて…」

ミヤ

「おおく…すげえ…花火…綺麗だな」

レイカ

「そうね」

空を舞う劍士達

福音編

完

デート?...知らない子ですね

ミヤ

「別段前と変わらないのに…」

待ってるだけでも変な気分になるな…」

色々あり、付き合うことになった

ミヤとレイカ…

周りからは

「やっとか」

とか言われたらしい

レイカ

「いやあ、ごめんごめん」

ミヤ

「どうやったら同室なのに遅刻するんだ…」

レイカは極度の方向音痴である

レイカ

「だから一緒に出よつて言ったのよ」

ミヤ

「でも、大丈夫つて言ったのもレイカだろ…」

レイカ

「ウグツ…」

ミヤ

「はあ…ほら、行くぞ」

左手を差し出すミヤ

レイカ

「…うん」

ミスティア

「おおくミヤつてば意外と大胆ね」

涼真

「...何してるんすか？」

ミスティア

「レイカちゃんとミヤの護衛よ」

涼真

「そんなふうには見えないんですけど...

どちらかといえばストーキング...」

ミスティア

「あら、失礼ね」

涼真

「買い物ついでに来て欲しいって言うから

ついてきたら...目的はあの2人の観察ですか...

ミスティア

「えへへ...バレちゃったか

いやね…私みたいな女の子一人じゃ
危ないじゃない？」

涼真

「女の子って…」

ミスティア

「あら？」

許嫁は若くて可愛い女の子が良かった？」

涼真

「ごめんなさい…」

アスナ

「あれー？ミスティアさん？」

ミスティア

「おおアスナ！一人なの？」

アスナ

「いや、直葉ちゃんと買い物よ」

「あれ?ミヤじゃねえか」
キリト

ミスティア

「あ...」

ミヤ

「お、キリトか...アスナとデートか?」

キリト

「いや、俺一人で買い物だよ」

ミヤ

「ゲームカセットか?」

キリト

「ああ…俺達のISSって、銃系の武装無いだろ？」

レイカ

「そうね…ずっと剣の世界だったからね」

キリト

「だからいざって時に銃が使えるように

ゲームの中で練習しようかなって思ってたな」

レイカ

「あーなんか今度大会があるとか言ってた

MMORPG！」

キリト

「そうー！」

ミヤ

「GGO…ガンゲイルオンラインか…」

キリト

「へへ、残り在庫が三つだったから

俺とナツとミヤ分で三つ買っといたぜ！」

ミヤ

「おう...ありがとな」

キリト

「...ってお前らデートか！邪魔して悪かった！」

ミヤ

「いや、別に気を使わなくてもいいぞって...

居なくなるの早!？」

レイカ

「ねえ、ミヤ？」

ミヤ

「GGO...菊岡さん...本当なのか...」

レイカ

「キリトが買ってくれたから

ミヤが行く?」

ミヤ

「ああ...あいつらに知られる前に

終わらせなきゃな...」

レイカ

「…あなたとあの子の為にもね…」

アスナ

「キリト君ー!」

キリトに飛びかかるアスナ

ミスティア

「相変わらずのバカップルぶりね…」

女の子

「あの!」

アスナ

「はい?」

女の子

「結城明日奈さんですよね！」

アスナ

「ええ...はい」

女の子

「さ、サインお願いします！」

アスナ

「え...えええ！」

キリト

「おお、アスナ、有名人だな！」

アスナ

「ちなみに...どこで私のことを？」

女の子

「雑誌に載ってたんですよ！」

閃光の剣

結城明日奈ってタイトルで！」

アスナ

「ええ...」

キリト

「へー、買ってこよっかな」

アスナ

「恥ずかしいからやめてキリト君！」

女の子

「つて、ええ！」

漆黒の剣士

桐ヶ谷和人さんですかア!？」

キリト

「…うん、買うのやめとくわ…」

女の子

「つて事は、そちらの外人の方は

宵闇の歌姫

ミスティア・オルコットさん!？」

ミスティア

「うわあ…なんかかっこいいあだ名ついてるよ…」

そつちに切り替えようかしら…」

ミヤ

「お前から何やってんだ？」

キリト

「おお、ミヤ...えつとな

アスナがサイン求められてるんだよ」

女の子

「ミヤ...ミヤつてえええ!!?

旋風の奇術師

篠木ミヤさん!？」

レイカ

「随分元気がいい子ね...」

ナツ

「あれ? 皆さん?」

ミヤ

「おお、ナツ」

女の子

「うわあ本物の白桜の騎士...」

それに、来継の雷...」

ホンネ

「ナニソレかつこいい」

女の子

「うっふ…蒼龍の聖騎士

目の前に…最強の七剣が…キユウ」

ミヤ

「担架ー！」

GGOーガンゲイルオンライン

キリト

「なんで…」

ミヤ

「仕方ないだろ…基本運任せなんだからよ」

数分前

キリト

「ミヤ！早速やろうぜ！」

ミヤ

「仕方ないな…」

キリト

「ナツには断られちゃったんだがな」

ミヤ

「やれやれ…」

レイカ

「リアルは私達に任せてね」

アスナ

「気をつけてね？」

ミヤ・キリト

「リンクスタート！」

ミヤ

「んで今に至ると…」

キリト

「なんで女の子っぽいアバターなんだよー!」

ミヤ

「…南無…」

キリト

「…うう…」

ミヤ

「とりあえず装備売ってる所探さんと…」

キリト

「だな…」

ミヤ

「あ、丁度いいところに人が…」

すいませーん…」

?

「何かしら?ナンパ?」

ミヤ

「おっふ、女性だった…」

誤解される前に退散しマース…」

?

「ちよつと待ちなさいよ

何か用があつたんでしょ？」

ミヤ

「いやあ…始めたばっかりでして…」

安く装備売ってるところを探してるんですよ」

?

「あら…初心者なのね…ならいいわ

ついてきなさい」

そう言いながら先導して歩いていく女性

?

「後ろのF1300番系アバターの

女の子もツレかしら？」

ミヤ

「あー…こいつのアバター女の子っぽいですけど…」

中身は男の子です」

？

「M9000番系!？」

キリト

「珍しいんですか？」

？

「珍しい…どころの騒ぎじゃない！

レアアバターよ！それ！」

ミヤ

「さすがキリトクオリティ…」

キリト

「それならミヤもじゃないのか？」

？

「つと…こんな時期にインしたってことは

大会に参加でもするつもりかしら？」

ミヤ

「ええ…この世界の強者たちを見てみたいんで…」

?

「そう…なら私に賭けることね」

ミヤ

「へえ…ちなみにお名前は？」

?

「シノン…賭けるなら全額賭けなさい

私の優勝は確定なんだから」

シノン

「さて、ついたわ」

ミヤ

「デカ…」

キリト

「そういえば…俺ら所持金…」

ミヤ

「oh……」

キリト

「あの、シノンさん……」

なんか一獲千金出来るものつてありますか？」

シノン

「そうね……あれなんてどうかしら？」

指さす先には機械のガンマンが鎮座する

ミニゲームオブジェクトだった

シノン

「弾を全部避けてガンマンにタッチできたら

今までの賭けられてきた賭け金を総取り」

キリト

「賭け金ゼロの場合は？」

シノン

「確か…3倍になるんだったかしら？」

ミヤ

「んじや、キリト俺が最初やるから

とつたらお前に全部渡すから」

シノン

「やる気なの!? クリアなんて不可能なのよ!？」

キリト

「…大丈夫ですよシノンさん」

ミヤ

「うし…やるか」

モブ

「おいおい坊主、クリアする気かよ」

ミヤ

「撃つてくる弾を避ければいいんですけどよねー？」

シノン

「そうよ…」

ミヤ

「うし…スタートつと…」

ガンマンが動き出す

ガンマン

『……………! (罵詈雑言)』

ミヤ

「レディ…go」

ガンマン (システム音)

『オーマイ、ガーツ!』

わずか数秒…

シノン

「は?」

キリト

「早いな相変わらず…」

ミヤ

「いやあ…」

ステータス上がればもつと早く出来るな…」

シノン

「あんた…本当に初心者!？」

ミヤ

「ええ…あ、コンバートデータだからかな？」

シノン

「本当だ…何この化け物ステータス…」

ミヤ

「いやいや、単に視線誘導で早く見えるだけですよ」

シノン

「でも相手はシステムよ!？」

ミヤ

「だからこそですよ」

キリト

「俺は…やらないでおこう…」

ミヤ

「予想以上に賭けられてたみたいだよ

俺ら二人分ぐらい揃いそう」

シノン

「とは言っても…」

流石に銃が2丁買える分のお金はないわね…

ハンドガンとそれ以外の何かしらね…」

キリト

「あ、剣とかありますか？」

ミヤ

「おいおい…銃の世界にそんなもの」

シノン

「あるわよ？」

ミヤ

「あるの!?!」

シノン

「こんなのだけれど」

ミヤ

「ワオ、ビームサーベル…」

キリト

「軽いな」

ミヤ

「買ったところ…」

シノン

「ハンドガン一丁とビームサーベル…」

あとは防具系の装備ね」

ミヤ

「ふむ…ビームシールドとな…」

シノン

「ビーム系の銃があるからそれの対策よ」

シノン

「よし…全部揃ったわね…って時間が!？」

ミヤ

「あとどれ位？」

シノン

「10分…もう…間に合わない…」

絶望に打ちひしがれた顔をするシノン

キリト

「何か移動ツールないの？」

シノン

「バイクならあるけど…誰も乗れない物なのよ…」

ミヤ

「ほうほう…旧式…そりや乗れないな

今どきこんなの乗りこなせるの

物好きぐらいだろ」

キリト

「これなら間に合いそうだな」

シノン

「うそ、これってこんなに速いものなのね！

ねえ！ミヤ！もつととばせない？」

ミヤ

「しっかり掴まっててね！」

キリト

「おいてかないでエ！」

シノン

「アハハ！楽しい！」

弾けるような笑顔を初めてした…

シノン

「ふう…間に合った…」

ミヤ

「…」

キリト

「…俺達どこまでいけるかな？」

シノン

「強いやつと当たらなければ

決勝まで行けるんじゃない？」

ミヤ

「はは…そんなわけではない…」

シノン

「さて、予選が始まるわよ」

ミヤ

「ほうほう…俺とシノンさんが同じブロックか」

キリト

「俺は別ブロック…勝てばいいんだよな？」

シノン

「そうね…あと、さん付けしなくていいわ」

ミヤ

「そう？てか…どこまでが決勝出場ライン？」

シノン

「予選1位と2位」

ミヤ

「なるほど：俺とシノンが予選の決勝でぶつかれば

本戦の決勝でもぶつかるわけか」

シノン

「そうなるわね」

?

「シノン」

シノン

「あ、シュピーゲル」

シュピーゲル

「見つからないから出ないのかと思ったよ」

シノン

「さつき出るって言ったでしょ」

シュピーゲル

「ん？所でそちらの男性は？」

シノン

「んー…一言で言うならバケモノね」

ミヤ

「ヒドくない!?!」

シノン

「だって実際そうでしょ!?!」

キリト

「あはは…否定出来ない…」

シュピーゲル

「どうも…シュピーゲルです」

ミヤ

「どうもどうも…ミヤと申します…」

シノンの彼氏さんですか？

シノン

「いやいやいやいや!」

キリト

「全力否定…」

シュピーゲル

「ただの友達です」

ミヤ

「すいませんした…」

シュピーゲル

「あ、謝らないでください！

現実にならなくても

そう思われるだけでも僕は幸せですから」

キリト

「ポジティブなのか？…諦めてるのか…？」

シノン

「さて、そろそろ私達のブロックの予選が始まるわよ

んーとどうやらミヤのところの組と

もう1組が最初らしいわね」

ミヤ

「さて、まいりますか！」
キリト

「やられるなよー」

ミヤ

「お前もな！」

ミヤ

「ふむ…マツプはさほど広くない…

なら……」

目を閉じるミヤ

敵

「へへッ！絶好のチャンスだぜ！」

ミヤ

「そこ！」

敵

「ゲ！」

ビームサーベルを抜き一直線に走るミヤ

敵

「へ！初心者かよ！」

そんなの外す方が難しいわ！

死ねえ！」

マシンガンでミヤを蜂の巣にしようとする

カン！カン！

敵

「は？」

カンカンカンカンカンカンカンカン!

ミヤ

「おしまい？」

敵

「ぜ、全弾撃ち落としやがった!？」

ミヤ

「うーん……細いし……これだね！」

太刀筋にブレのない完璧な細剣ソードスキル

リニアアローを打ち込む

システム音

『勝者ーミヤー!』

シノン

「…もう驚かないわ…」

シュピーゲル

「えええ!!?」

キリト

「ミヤは今終わったのか」

シノン

「キリトも早い!？」

ミヤ

「いやー、切れる物なんだな銃弾って」

シノン

「本当にバケモノね…あ、私の番か」

ミヤ

「フアイトだよ！」

シノン

「なんかむかつくわね…それ…」

キリト

「ちと散歩してこよ」

ミヤ

「こっから出れねえのに？」

キリト

「なんか動いてねえと逆に落ち着かないんだよ」

ミヤ

「そか…行ってらー」

キリト

「五分くらいしたら戻るわー」

ミヤ

「うい」

ミヤ

「そこで俺を見てるやつ…なんか用か？」

？

「お前ら…本物か？」

ミヤ

「主語を言え、主語を」

？

「あの剣技…その名前…」

貴様ら…本物か？」

ミヤ

「ああ…本物だぜ…ラフィン・コフィンの赤眼さんよ」

？

「ほう…俺の正体を見破っていたか…」

ミヤ

「俺を殺す気か？」

赤眼

「お前はべだ」

ミヤ

「そ…言つとくが…」

俺の部屋は一筋縄じゃ入れねえからな？

IS学園だし…」

赤眼

「なん…だと…」

ミヤ

「残念だな」

赤眼

「ならば黒の剣士を…」

ミヤ

「キリトもだぜ…」

赤眼

「Pohの嘘つき…」

ミヤ

「つか…今の発言で今までの事件の犯人

お前らつてことがバレバレだぞ？」

赤眼

「は！」

ミヤ

「決勝…俺が勝つたらお前を捕まえさせてもらう」

赤眼

「お前が負けたら？」

ミヤ

「それは無いから大丈夫」

キリト

「おいミヤー」

赤眼

「！」

ミヤ

「なんやー」

キリト

「そこにいるの知り合いか？」

ミヤ

「いや、さっきの試合のこと聞かれてただけ」

キリト

「へー」

ミヤ

「んじゃ、私はこの辺で！」

赤眼

「あ、ああ」

その後

シノン

「結局あんたとあたる事になったわね」

ミヤ

「キリトは本戦行き確定したし

俺らも確定やし適^t」

シノン

「適当にやったら脳天ブチ抜くからね」

ミヤ

「…ういっす…」

転送後

2階建てバスの2階

シノン

「ここであいつを1発で仕留める！」

照準をミヤの頭に合わせる

シノン

「落ち着け…私…」

引き金に指を這わす

シノン

「確実に…殺す！」

シノンが殺気を放ったその瞬間…

ミヤと目が合う

シノン

「!!？」

落ち着きを失うシノン

シノン

「少なくともこの距離…」

肉眼じゃ見つけられないはずなのに！」

待合室にて

シュピーゲル

「ミヤさん…一点を見つめてますね」

キリト

「多分そっちにシノンが居るんだよ」

シュピーゲル

「でも、シノンの武器はスコープ付きで

かなり遠距離から撃てる

対物ライフルのヘカートIIですよ？」

キリト

「多分…一瞬の殺気を感じたんだと思う…」

再び戦場

カツ

シノン

「落ち着け……」

カツカツ

シノン

「落ち着け……」

ザツザツザツ！

シノン

「落ち着け……」

カサカサカサ！

シノン

「…お、落ち着け…」

ダダン

ダン

ダダン

シノン

「……………」

スコープを覗く

ミヤ

「いえーい…ピースピース」

かなりそばにいるミヤ

シノン

「はあ…焦った私が馬鹿だった…」

あんたって…ほんと…変な奴ね…」

ミヤ

「失礼な」

シノン

「だって、あなたのビームサーベルで

刺せば勝てたのにそうしなかったじゃない」

ミヤ

「不意打ちは性にあわない」

シノン

「そ…どうする？」

ミヤ

「これで決めよう」

ミヤが取り出したのは空の薬莢

ミヤ

「こいつが地面に落ちた瞬間にシノンが俺を撃ち

俺がシノンを切る」

シノン

「なるほどね…お互いの得意分野でやるってことね」

ミヤ

「そ…ただ…制限時間がギリギリだから一回勝負ね？」

シノン

「わかったわ」

シノン

「一回勝負って言っといて私に頭を撃たせるつもりね

馬鹿ね…バレバレよ…じゃあ…あの足を狙って

リザインさせましょう」

ピン！

カン

バン！

シノン

「!?」

ミヤ

「あつぶね…ギリギリセーフ…」

シノン

「嘘でしょ…この距離のヘカートIの弾を切る!？」

ミヤ

「へへ…シノン殺気わかりやすいんよ

…シノンの殺気…痛いからさ…

詳しくは聞かないけど…

その殺気…人を殺した経験のある人の殺気だぜ？」

シノン

「!？」

ミヤ

「ここは俺が降参する…深入りするつもりは無い

安心してくれ…君の心までズケズケ入るつもりは無いから」

シノン

「あなた…一体何者なの!？」

ミヤ

「うーん…ただの…ゲーマーかな…

リザイン！」

待合室にて

シュピーゲル

「シノン…大丈夫？顔色悪いけど？」

シノン

「ごめん…大丈夫だから…今は一人にして…」

ミヤ

「…明日が本戦…か…キリト

先に帰つといてくれ…10分から30分位遅れる」

キリト

「了解」

ミヤ

「何用かな？ シュピーゲル君」

シュピーゲル

「シノンに何をした！」

ミヤ

「シノンの殺気で思ったことを言っただけだ…」

シュピーゲル

「嘘をつくな！」

ミヤ

「嘘は言っていない…」

シノンの殺気は…1度…人をこの手で

殺したことのある奴の殺気なんだよ…

でも…どこか…恐怖心がある殺気だった…」

シュピーゲル

「!?」

ミヤ

「俺と同じ…人を殺めることに

恐怖心を拭いきれない奴の殺気だ…」

シュピーゲル

「………あんたの言う通り…シノン…過去に

正当防衛で人を撃つたことがあるらしい…」

ミヤ

「…やっぱりか」

シノン

「新川君！」

シュピーゲル

「シノン！」

ミヤ

「…」

シノン

「貴方は…今の話を聞いて…怖くなったでしょ」

ミヤ

「…」

シノン

「いいわよ…見下して…人殺しって…」

ミヤ

「…いや…見下さないよ」

シノン

「…なんでよ！変な同情は要らない！」

ミヤ

「同情…か…」

シノン

「見下しなさいよ！私を！」

ミヤ

「じゃ…俺も…見下してもらおうか…」

シノン

「え？」

ミヤ

「俺は…もう…彼此1年前ぐらいに…」

5人の人を殺してる」

シノン

「!？」

ミヤ

「キリトも…3人ほど殺したらしい」

シノン

「ゲ、ゲームの話でしょ！」

ミヤ

「ああ…ゲームの話だ…」

ゲームでの死がリアルでの死になる

最悪のゲームのね」

シノン

「!!？」

ミヤ

「ソードアートオンライン…知ってる？」

シノン

「最悪のデスゲーム…」

ミヤ

「俺は…その世界で人殺しのギルドに

入ってた時期があるんだ」

シノン

「！」

ミヤ

「まあ、本当はそのギルドを壊すために

潜入しただけなんだけどね？」

シノン

「…」

ミヤ

「まあ、そのギルドを壊すために5人殺した…」

シノン

「…」

ミヤ

「さ、見下してもらおうか」

シノン

「…ううん…そんなことしない…」

そんなこと…しちやいけない…」

ミヤ

「…エラいな…シノン…今は無理に話さなくていい

いつか話せるようになったら…そうだな…」

IS学園に電話してくれ」

シノン

「は?」

ミヤ

「篠木ミヤって言えば俺に繋がるから」

シノン

「…ええ!?!」

シュピーゲル

「ええ!?!」

ミヤ

「ハツハツハ！」

シノン

「ハツハツハ…じゃないわよ！」

シュピーゲル

「あ、握手してください」

ミヤ

「ほいほい」

シノン

「とんでもない人…だったのね…」

ミヤ

「まあ、明日、勝ったらお祝いしようぜ

仲間連れてくけれど…いいよね？」

シノン

「い、いいの？」

ミヤ

「ALOで観戦するらしいし結果は見れるからな」

シノン

「そ、そう?」

ミヤ

「んじや決まりな!

シュピーゲル君もね!」

シュピーゲル

「あ、ありがとうございます!」

GGOー決着

GGO 決勝戦

フィールド内のとある洞窟

ミヤ

「…」

キリト

「…どうしてそうなった？」

ミヤ

「俺にもわからない…」

シノン

「ミヤ〜♪」

ミヤ

「……」

キリト

「なんでや！」

遡ること2時間前…

GGO内

ミヤ

「キリト、やるからには全力でやらしてもらおうからな」

キリト

「当たり前だ！手え抜いたら承知しねえからな！」

ミヤ

「わかってら！」

トントン

誰かが肩を叩く

振り向くとシノンがいた

シノン

「…ミヤ…終わったら話がある…———に来て」

ミヤ

「…わかった」

言われたのはリアル住所である

幸いなことに夏休みで帰省中な為、近場であった

キリト

「さて、そろそろ始まるな」

シノン

「ところで、わたしに賭けたかしら？」

ミヤ・キリト

「いや、自分に賭けた」

シノン

「フフ…でしようね！」

そして転送されていく決勝戦出場者達

ミヤ

「うわあ…広い…」

見渡す限り砂漠

ミヤ

「ふむ…早いところ隠れられるところに逃げよ」

少年逃走中

ミヤ

「うーん…今度は森か…！」

飛んできたのは球体

ミヤ

「シノンの言ってたグレネード！」

とっさの判断で飛んで回避するミヤ

敵

「今だ！」

空中で対処できないと踏んで敵がミヤを撃つ

ミヤ

「…ザンネン！」

見事空中ですべて避けるミヤ

敵

「嘘だろ…」

ミヤ

「現実です」

着地と同時にミヤはビームサーベルを出し

敵を真つ二つに切る

敵

「完敗ですわ…」

ミヤ

「ふい…」

その頃ALLO

クライン

「おお！あれ絶対ミヤだろ！」

レイカ

「確かに…ステータス的にはミヤっぽいけど…」

ミステイア

「ミヤってあんな可愛い顔してたっけ？」

シリカ

「もつとカツコよかったですよ！」

リズ

「あんだ達…男子を顔で判断してるんかい…」

クライン

「あんな馬鹿げた動き…確実にミヤだよな？」

リス

「ええ…ただ…キリトの方がもつと判別しにくいわよ」

アスナ

「これ！キリト君だア！可愛い！」

ユイ

「パパ、可愛いです！」

クライン

「いや…大丈夫だろ…あれなら…」

再びGGO

キリトview

シノン

「あの男に撃たれて

現実でも死んでいたとすれば……」

キリト

「被害者には絶対共通点があるはずだ……」

シノン

「……もし……共通点があるとしたら……私も殺される」

キリト

「!?」

シノン

「私もその条件に合う……合ってしまう……!」

キリト

「シノン! 落ち着け! あいつにやられなければいいんだ!」

シノン

「で、でも!」

キリト

「こつちにはミヤがいるんだ、まずはミヤと合流しよう」
シノン

「…そ、そんなにあいつは強いのか？」

キリト

「ああ、あいつには何度も救われた…」

シノン

「…わかったわ、今は貴方達を信じるわ」

キリト

「ありがとな」

数十分後

ミヤview

ミヤ

「とりあえず…街に来たが…」

バタツ

ミヤ

「!」

シノン

「………!」

ミヤ

「あれはシノン!」

そのシノンの正面に立っていたのは

ミヤ

「やっぱりあいつが死銃だったのか!」

前日にミヤに接触してきた

赤い目の骸骨マスクだった

ミヤ

「何か打開策は……!」

スモークグレネードが

シノンと死銃の間に落ちる

ミヤ

「キリトか！」

そのスモークの中に飛び込む

キリトを見つける

キリト

「ミヤ、俺達はここから逃げる」

赤眼

「させるか！」

ミヤ

「足止めは任せろ！」

ビームサーベルの柄で死銃の腕を殴る

赤眼

「!？」

ミヤ

「久しぶりやな…赤眼さんよ」

赤眼

「疾風の騎士…貴様か」

ミヤ

「ああ、追わせねえぜ？」

赤眼

「お前の許可などいらぬ」

ミヤ

「そうはいかないんだな…赤眼のザザ…

いや、新川」

赤眼

「…！」

ミヤ

「俺は仕事で来てるんだよ…

あんたを逃がす訳にはいかないんでな！」

赤眼

「く！政府の犬風情が！」

ミヤ

「ワンワン！」

ふざけながらも柄で死銃を殴るミヤ

赤眼

「くっ！」

ミヤの攻撃にスモークグレネードをぶつけた死銃

ミヤ

「うおお!？」

赤眼

「いずれ貴様らとは決着をつけることになる…」

ミヤ

「くっ…逃げましたか」

フィールド内のある洞窟

シノン

「私がやっぱりターゲット…!」

キリト

「落ち着くんだ！シノン！」

シノン

「はあはあはあ！」

呼吸が激しくなるシノン

キリト

「君がやられない限り問題ない！」

ミヤ

「その通り」

シノン

「！」

ミヤ

「つか…君の家を今は護衛してもらってるからね」

シノン

「え？」

ミヤ

「いやあ…レイカにどう情報を送るか悩んだ挙句

ハヤテ経由でメールしたからな」

シノン

「え？このゲームメール送れるの？」

ミヤ

「シードのネットワークで繋いだだけだから

本来は無理だよ」

シノン

「そ、それより…私の家が護衛されてるって

どういう事？」

ミヤ

「そのまんまの意味さ」

キリト

「ミヤは国から依頼を受けてるんだよ」

ミヤ

「あ、バレてました？」

キリト

「なんとなく察してた」

ミヤ

「さすがキー坊」

キリト

「アルゴの真似やめい…似てるんだから」

ミヤ

「ういっす」

シノン

「…国からの依頼？」

ミヤ

「今、このゲームで…死銃ってプレイヤーによる

殺人行為がおこなわれているのは知ってる？」

シノン

「ええ…」

ミヤ

「昨日の時点で特定の条件を満たしたプレイヤーが

君を抜いて1人しか居なくなっていたんだよ」

シノン

「え…」

ミヤ

「そのプレイヤーも死んでしまったらしいが…」

だから君の家に警護がついてるんだよ」

シノン

「…でも…もし…ゲームで殺された瞬間

現実でも死ぬのなら！」

ミヤ

「その可能性は無い」

シノン

「！」

ミヤ

「この事件には2人以上の人間が関わっている」

シノン

「…」

ミヤ

「それに、俺がいる」

シノン

「…！」

ミヤ

「君を守る、約束する」

シノン

「ミヤ…」

冒頭に戻る

キリト

「とりあえず…既に俺達と死銃以外のプレイヤーが

居なくなつた」

ミヤ

「ふむ…次のマップ衛星の時間までに体制を整えるか」

シノン

「…」

キリト

「死銃…昨日ミヤに接触してきた奴だったよな」

ミヤ

「ああ…赤眼のザザ…あいつだ」

キリト

「!？」

ミヤ

「ある意味俺達の因縁だ…俺達で倒す」

キリト

「ああ…当たり前だ」

シノン

「私は…」

キリト

「なるべく遠くて高いところに逃げてくれ」

ミヤ

「いや、遠く無くていい…」

スコープで俺達のことを見える範囲にいてくれ」

シノン

「わかったわ」

そして決戦の時

ミヤ

「キリト…神経を研ぎ澄ませ…相手は仮にも殺しのプロだ」

キリト

「ああ…」

目を閉じ：：視覚以外の感覚を研ぎ澄ます

ミヤ

「こつちだ！」

2秒後弾丸がミヤの頭をかする

ミヤ

「くっ！行くぞ！キリト！」

キリト

「ああ！」

シノン

「今の射線の先に！」

死銃を見つけるシノン

シノン

「先に銃を壊す！」

が…弾道予測線が死銃にバレる

シノン

「くっ！」

強張る指

シノン

「くっ!!うああ！」

意地で引き金を引いたシノン

死銃

「!!」

死銃の銃を破壊したシノン

シノン

「スコープが！」

その代償に死銃の弾丸がヘカートのスコープに被弾した

ミヤ

「よくやった！シノン！あとは任せろ！」

死銃

「来い！疾風の騎士！黒の剣士！」

そう言い懐から細剣を取り出す死銃

ミヤ

「!!」

キリト

「ミヤ！俺から行くぞ！」

ミヤ

「…ああ！」

死銃

「お前の好みの重さの武器が

無いのは残念だな！」

キリト

「くっ！」

全ての攻撃を防がれるキリト

ミヤ

「キリト！スイッチ！」

キリト

「ああ！」

死銃

「！」

不意打ちをくらい

僅かなスキが死銃に生まれる

ミヤ

「今だ！」

左上から振り下ろされる光剣

死銃

「フフ」

姿が消えていく死銃

ミヤ

「っ！」

とつさの判断で光剣を上へと投げる

左の腰の銃に手を伸ばす

ミヤ

「うおお！」

銃弾が1発肩を掠める

ミヤ

「っ！」

死銃

「フハハ！」

完全に姿が…

バアン！

死銃

「!?」

消えなかった

シノン

「当たった…」

ミヤ

「よしー！」

死銃

「光剣を持ってない貴様の負けだ！」

死銃の細剣がミヤに振り下ろされ：

キリト

「それは…どうかなー！」

その細剣を弾いたのは

光剣を二本持つているキリトだった

ミヤ

「さすが…キリトクオリテイ」

キリト

「これで…終わりだア！」

光剣で放たれた最速の十六連撃

死銃

「グハッ！」

ミヤ

「俺達の勝ちだ…」

死銃

「……」

キリト

「終わった…」

死銃

「フハハ…終わり？」

「これから始まるのさ！」

ミヤ

「うるせえ」

脳天を撃ち抜くミヤ

ミヤ

「また何か始めるってんなら

俺が終わらしてやる…」

シノン

「はあ…終わったわね」

ミヤ

「ああ…」

キリト

「いや、終わってねえだろ…」

ミヤ

「んじゃ俺達がリザインして

シノンの勝ちでいいよな」

シノン

「んー…全員優勝にする方法があるわよ」

ミヤ

「…」

キリト

「へー、そんな方法があるんだ」

シノン

「うん、キリト手、貸して」

キリト

「ん？はい」

シノン

「はいどーぞ」

キリト

「ん？は!？」

そこに置かれたのは

ミヤ

「お土産グレネード…か…」

シノン

「ウフフ！」

キリトを抱きしめるシノン

キリト

「なんで俺え」

ミヤ

「ハツハツハ！」

キリトによっかかって居るミヤ

キリト

「あはは…」

第3回BOB

優勝

シノン

キリト

ミヤ

クライン

「はあー……」

全員（・ロ・）こんな顔をしているとかなんとか

エギル

「ハハ！お前らひどい顔してるぞ！」

シノン

「はあ……終わった……」

ピンポーン

シノン

「はあはあ」

新川

「朝田さん！優勝おめでとう！」

シノン

「随分早いわね、5分もたつてないわよ？」

新川

「いやあ…残り3人になった時点で家を出て来たからね」

シノン

「フフ…そう…暑かったでしょ？」

「入る？」

新川

「そうさせてもらうよ…」

ミヤ

「急がなきゃ！」

電話越し千冬

『今回は国からの特例だからな？』

普段 I S 学園以外での使用は…

それとまだ日中だからな…』

ミヤ

「すいません！疾風・零式…行きます！」

シノン

「新川君…近くない？」

新川

「…朝田さん…僕…君の事が…」

シノン

「ごめん…まだ…」

新川

「……………」

シノン

「そ、そうだ…なんか飲む？」

新川

「……………あいつらか…」

シノン

「…？」

新川

「あいつらが僕の朝田さんを！」

シノン

「ちよつ、新川君！」

シノンを押し倒す新川

新川

「朝田さんは僕のだ！」

シノン

「新川君！落ち着いて！」

新川

「朝田さん…朝田さん！」

シノン

「！」ゾワツ

一瞬の悪寒を感じ腹に膝蹴りを入れるシノン

新川

「グッ！」

シノン

「逃げなきゃ！」

玄関を開け裸足のまま外へ逃げるシノン

新川

「待ってよ朝田さん！」

シノン

「今の彼は普通じゃない！少しでも遠くへ逃げなきゃ！」

新川

「待ってって言ってるんだろ！」

そして捕まる

ミヤ

「あれは…疾風！リミット・バースト！1速！」

新川

「さあ！永遠に一緒になろう！シノン！」

首を抑えられ徐々に

意識が朦朧としていくシノン

シノン

「(殺される！)」

新川

「安心して…僕もすぐ行くからね…」

シノン

「(助けて！)」

ミヤ

「そのセリフ…クツソカツコ悪い」

シノン

「！」

新川

「お前か！」

ミヤ

「…ああー、その感じシユピーゲル君か」

新川

「死ねえ！」

ミヤ

「IS相手にゲンコツかよ」

完全に油断しきっていたミヤ

シノン

「ミヤ！逃げて！」

その手には注射器が握られていた

ミヤ

「ぐはっ!？」

シノン

「ミヤー!」

新川

「ハハ!これで邪魔者は居なくなつた!」

シノン

「ミヤ!死んじゃダメ!」

ミヤ

「…フフ…大丈夫だ…」

俺には主人公補正が付いてる

きつと大丈夫だ…」

シノン

「死ぬ間際に変なこと言わないで!」

新川

「さあ!シノン!僕と一緒にいこうよ!」

シノン

「いや!離して!」

新川

「君のヒーローはもう居ない！」

ハヤテ

『ところがドツコイ』

シノン

「ミヤの声が!？」

ミヤ

「やれやれ…便利だな…霊戦騎心」

新川

「嘘だろ！死んだ筈だ！」

ミヤ

「うん死んだよ？」

新川

「!？」

ミヤ

「死んでも死にきれないから蘇った」

シノン

「リアルでも化け物……」

ファンファン

ミヤ

「おー、パトカー来たか」

新川

「くっ！」

ミヤ

「逃がさないよ！無限武装！捕獲！シールドドーム！」

いくつものシールドで出来た半球状の物体

新川

「くっ！出せ！」

上司警官

「この辺で女性を押し倒した」

という少年の目撃情報があったのですが」

ミヤ

「あー、あつちで熱中症で倒れてるやつです」

部下警官

「は？あなたではない？」

ミヤ

「失敬な！IS学園の生徒ですよ？これでも」

部下警官

「…怪しいな…男の癖に…なら証拠を見せてもらおうか」

ミヤ

「…疾風…」

上司警官

「失礼しました！篠木ミヤさんだと気づかず！」

ミヤ

「慣れてますんで…」

シノン

「慣れていいのかしら？それは…」

現実

エギルの店にて

ミヤ

「とまあ色々あつて新メンバー…シノンさんとシュピーゲル君です！」

シノン

「ミヤにはほんと迷惑かけたわね…」

シュピーゲル

「本当にすいませんでした…」

ミヤ

「そ?」

レイカ

「ミヤはそんな事思わないタイプの奴よ」

アスナ

「さすが彼女」

ライム

「いやあ…ケットシーの女の子が増えるとはいいいねえ」

ミヤ

「お前も女やろ…」

ライム

「今どき男が好きな女の子の方が希少種よ?」

ミヤ

「それは偏見だろ…」

リュウカ

「私はお姉様の事が好きですよ」

ミヤ

「うん、君は例外…てか異常…」

リュウカ

「もちろんお兄様ですよ」

ミヤ

「うんスリスリしてくるのやめてね？」

シュピーゲル

「……」

キリト

「どうした？」

シュピーゲル

「…僕…罪人の筈なのに…」

こんな所に居ていいんでしょうか」

ミヤ

「デージョーブだって言ってるだろ？」

シノン

「そうよ、新川君…」

「1からすべてやり直すんでしょ？」

シユピーゲル

「うん…でも…」

シノンと一緒に居ていいのかなって…」

シノン

「だーかーら！ 何度も言わさないですよ！

あなたの気持ちはわかってるって言ってるでしょ！」

レイカ

「女の子にも色々準備があるのよね？ シノンちゃん！」

シノン

「い、いや、そ、そんなことない！」

ミヤ

「お？ おお？ 怪しいゾ！」

アルゴ

「ぜひと調べた後は情報交換を…」

ミヤ

「へへ、いくらで買いやすかい？」

シノン

「そこで商売するなあ！」

シュピーゲル

「はは…」

ナツ

「やり直せるよ…」

君はお兄さんとは違うんだからね」

シュピーゲル

「…はい！」

クライン

「おいおい！新入り！飲め飲め！」

ミヤ

「一応、ミスティア以外未成年だからな？」

クラインよ…」

ミスティア

「フフ、誰もお酒なんて言っていないじゃない」

リス

「いやあ、クラインが言うと」

お酒つぽく聞こえんのよね」

シリカ

「不思議ですね…」

箒

「エギルさんの料理…すごく美味しい…」

セシリア

「1度…食堂のカフェで食べたきりでしたが…」

鈴

「プロね…」

シャル

「うわああ…ほっぺたが落ちるってこんな感じなんだ」

ラウラ

「おに…ミヤ…これすごく美味しいぞ！」

ホンネ

「今、確実にお兄ちゃんって言おうとしたよね？」

簪

「直葉さんみたいに？」

リーファ

「いや、私は実際兄妹だし…」

楯無

「まあ、ミヤがモテモテって事ね」

ミヤ

「おい、刀奈！変な事言うな！

レイカが怒るだろ！」

楯無

「本名で呼ぶな！」

ウサギクエスト

ミヤ

「ふむー…」

リーファ

「…」

ミヤ

「んー…」

リーファ

「…」

ミヤ

「アツハツハ」

リーファ

「……………」

ミヤ

「アハ……ハハ……ハ……」

リーファ

「…ゴメンなさい！」

ミヤ

「いや、だからいいってば」

リーファ

「新しい素材集めを手伝うって言ったのに…」

ミヤ

「いや、俺も、まだ誰も探索してないマップに行くのは

リスク高いって思ってたからさ…」

リーファ

「うう…夜になるまでに帰れるでしょうか…」

ミヤ

「いやあ…どうだろ…来た道…マップに表示されないし…」

リーファ

「ウウ……」

ミヤ

「ん？なんか開けた場所に出たな……」

リーファ

「……あれ？あれは……」

ミヤ

「アインクラッドの……S級ウサギ？」

2匹のS級ウサギが開けたところの中心で

ぼつんと座っている

リーファ

「ですよね……でもこっちに気付いてるのに逃げない……」

ミヤ

「どころか近づいてきてる……よな……」

リーファ

「可愛い……モフモフ……」

ピコン

ミヤ

「クエスト!？」

リーファ

「うへえ？」モフモフモフモフ

ミヤ

「えー…なになに…うさぎに名前をつける？」

……はー…なるほど…まじかよ…」

リーファ

「どうしたんですか？」

ミヤ

「いや…クエストで1匹のうさぎに名前をつけるんだって

先着2名の特殊クエスト」

リーファ

「へー…じゃあ…君は…ぴよんぴよん！」

ミヤ

「……」

ピコン

リーファ

「へ？…ペット!?」

名前をつけた瞬間うさぎのゲージの上に
ペットという判別名が現れた

ミヤ

「そ…名前をつけてペットに出来る…」

ここに最初に来た2名のみの特権だつて…

本当はカッブル向けのクエストだとさ…」

リーファ

「…／／／／」モフモフモフモフ

ミヤ

「ん…じゃあ君は今日からイナバだ!」

ピコン

ミヤ

「おっけー」

リーファ

「…／／／／」モフモフモフモフモフモフモフモフモフモフ

ミヤ

「おお…確かにモフモフだ…」モフモフ

リーファ

「……」

ミヤ

「さて…クエスト完了つと…報酬は…わあ…」

リーファ

「どうしたんですか？」

ミヤ

「リーファ…このあと暇？」

リーファ

「まあ…」

ミヤ

「こつちで食事してくれたら、リアルでなんか奢るよ…」

リーファ

「えつと？」

ミヤ

「報酬がS級食材2名分…」

リーファ

「ああ…本当にカップル向けなんですネ…」

ミヤ

「最悪みんなで分けるのも一つの手だが…」

ものすごく一人の取り分が少なくなるんよな…」

リーファ

「少なくとも12人ですからね…」

ミヤ

「まあ…他にも沢山食材手に入れてるから

シェフ達の腕次第だけどね…」

リーファ

「ミヤさんもそのシェフの1人ですけどね」

ミヤ

「んじゃ…帰りますか」

リーファ

「え？」

ミヤ

「マップ見てみな」

リーファ

「…あ、道が表示された…」

ミヤ

「あの開けた場所に俺達だけ

入れるようになったらしい」

リーファ

「へ？」

ミヤ

「あと…うさぎを出せるのは街の中とかだけだつて

それ以外はアイテム欄の一番上に

売れないものとして表示されるって」

リーファ

「へー…ところで…なんでそんなに詳しいんですか？」

ミヤ

「…運営からメールが届きました」

リーファ

「はあー…」

ミヤ

「武器作りはまた今度にしますかな」

リーファ

「本当…すいません…」

ミヤ

「今度、なんか作ってやるよ」

リーファ

「…！ありがとうございます！」

その後…みんなでI S学園メンバーも呼んで

立食パーティをしたらしい

あと…うさぎは女子メンバー達に大人気だったそうです…

第特章 s u r p r i s e ・ f e a t u r e

レベルアップ

臨海学校最終日の午前

東

「やっぱり…変だと思ったら…」

「こんな仕掛けが…」

場所はミヤの両親のお墓…

の下である

東

「不自然に離れたところにある理由はこれだったのか…」

そこにあつたのは

今まで見たこともないようなISの設計図だった

東

「私やミヤが気付くのを見越して

こんな物を隠してたのかしら…」

このお墓は、ミヤの父親…篠木嶺二の設計したお墓らしく

いろんな仕掛けがあつたが…どれもアナログ…

東

「少なくとも嶺二さんが設計した頃では

作ることが出来ない代物ばかりね…これ」

いくつかのISの設計図

漆黒…閃陣…白桜…蒼龍…闇歌…来継…旋風…

どれも第四世代級のシステムを搭載していた

東

「嶺二さんは…本当の天才だったのね……!!」

ふと、1枚の設計図に目が止まる

東

「い、これは…」

零式の設計図だった…

だが、今の零式の設計図ではなく

東

「これが真の姿…」

本当の零式の姿を現した設計図だった

東

「…全部作ってやる!」

ミヤ

「夏休みに学校に呼び出しとは…」

キリト

「赤点は無いはずなんだがな…」

レイカ

「うーん…」

ミステイア

「このメンバーが呼ばれるってことは」

アスナ

「大体の予想はつくね」

ホンネ

「アリーナ集合なのはなんでなんだろ」

ナツ

「千冬姉が『東が招集かけろと言っていた』

って言ってたんだけど」

東

「ヤーヤーヤー、集まったかな？」

ミヤ

「一時間ほど前にな」

東

「あー、ごめんね、これでも急いだんだけどね」

レイカ

「んで、東さんなんでこのメンバーを

呼び集めたんですか？」

東

「うん、実は…」

みんなにレベルアップしてもらおうと思ってる」

アスナ・ホンネ

「レベルアップ？」

東

「うん、新しいISの設計図が見つかったから」

ミヤ

「見つかった？」

東

「そう」

ナツ

「え？」

東さんがISの第一人者なのに新しい設計図？」

ミスティア

「…ミヤのお父様の設計図ですわね？」

東

「そう」

キリト

「でもなんで俺ら？」

東

「設計図に書いてあった名前ではっと連想したのが

みんなだったから！」

千冬

「時間に余裕がある訳じゃない、さっさと済ませろ…」

東…」

東

「うん、じゃ、まずキー君！」

キリト

「…」

ミヤ

「お前だよ！」

背中にケリを入れる

キリト

「うおつと！」

東

「いでよ！漆黒！」

キリト

「う…うわあ…完全にSAO時代の装備…」

東

「続いてアーちゃん！」

アスナ

「私…かな？」

東

「いでよ！閃陣！」

アスナ

「…うん…懐かしい…」

東

「どしどし行くよ！いっくん！」

ナツ

「その呼ばれ方懐かしい…」

東

「いでよ！白桜！」

ナツ

「あー…完全に一致…」

東

「次は…ホンホン！」

ホンネ

「私…だよね？」

東

「いでよ！蒼龍！」

ホンネ

「これって!？」

無意識にミヤの方を向くホンネ

ミヤ

「…」

険しい表情のミヤ

ナツ

「あれ？」

ホンネのはS A O時代の装備じゃない？」

ホンネ

「い、いや、しばらく合わなかった間の装備だよー」
ナツ

「そーなのか！」

レイカ

「ナツ君が素直で良かったわね」

ミヤ

「ああ…」

東

「続いてミスチー」

ミスティア

「私よね？」

東

「いでよ！ 闇歌！」

ミヤ

「!!」

レイカ

「!」

ミステイア

「あら…ある意味…一番思い出深い装備ね…」

ミステイアがミヤの前から居なくなる前の最後の装備

東

「続きまして、レーちゃん」

レイカ

「…私ね」

東

「いでよ…来継!」

レイカ

「ン!?!」

ミヤ

「おや？」

レイカ

「まさか…これって…」

ミヤ

「75層攻略時の最高装備だよな？」

レイカ

「…防御型か…」

東

「さてさて…最後はみー君！」

ミヤ

「ん…」

東

「いでよ…旋風！」

ミヤ

「んーふ!?!」

レイカ

「ミヤだけ…あの頃の装備じゃない…」

ミステイア

「ミヤの装備…よくよく考えたら…」

一貫して疾風だものね…」

ミヤ

「ああ…この…旋風の装備部分…」

零式の部分なんだよな…よく見ると」

東

「そう！ミヤの旋風は疾風の本当の換装パーツなのよ」

ミヤ

「え？じゃあ…零式は？」

東

「設計図だと…オートクチュールなのよ」

ミヤ

「専用装備…なるほど…」

東

「と言うことで今日はこれまでだけ…」

千冬

「明日も来てもらう」

全

「えー！」

千冬

「なんだ…文句でもあるのか？」

全

「ありません！」

千冬

「よろしい…なら、解散！」

ミヤ

「帰ったら何しよう…」

レイカ

「ねえ…ミヤ…今日…ミヤの家…行っていい？」

ミヤ

「ん？いいよ？」

レイカ

「わーい」

キリト

「うーん…」

直葉は友達の家泊まってくるって言ってたしな…

一人ALOでレベリングでもしてようかな？」

アスナ

「ねえ、キリト君」

キリト

「ん？」

アスナ

「今日、キリト君の家…行っていい？」

キリト

「別に…構わないけど…いいのか？」

アスナ

「許可なら貰ってきたよ？え？違う？」

あ、お母さんの事？ああ…大丈夫…

ミヤ君のおかげで色々仲直り出来たから

キリト

「あいつ…何者なんだ…本当…」

アスナ

「ミヤ君みたいな子が彼氏だったら…」

つてお母さんたまにつぶやくのよ…」

キリト

「すいません…頼りなくて…」

アスナ

「いや、ちゃんとミヤ君がキリト君の良いところ

お母さんに教えてくれたみたいでね…

彼にも感謝してるって言ってたよ…そうだ！」

キリト

「へー…ん？」

アスナ

「今度、うちに来ない？」

キリト

「うーん…考えとくよ…」

ホンネ

「ナツく今日うちでオールで遊ぼ！」

ナツ

「うん、いいよ！」

千冬

「ちゃんと朝起きて朝ごはん食べろよ？」

ナツ

「はい！」

ミスティア

「さーて…私は涼真さんの所にも行きますか」

全員…夏の熱い夜を過ごしたとか…なんとか…

零式の真価

東

「ヤーヤーヤー…皆揃ったね」

ミヤ

「…何やるんだ？今日は」

キリト

「Z z z」

東

「ぜ、零式を試してみようって事で集まってもらったの」

ミヤ

「零式だけなら俺いればよくね？」

アスナ

「…………」スヤア

東

「う、うん…でも新しい零式はね…」

すごい仕掛けが搭載されてたのよ」

ナツ

「…」Z z

ミヤ

「…………その仕掛けの為に俺らを集めたのか」

ホンネ

「う…………」ウツラウツラ

東

「……………そう」

ミスティア

「……………Z z z z z z z z z z」

ミヤ

「……………」

ミヤ・レイカ

「全員起きろオ！」

アスナ・ナツ・ホンネ

「Σ(owo)！」ビクッ

キリト・ミステイア

「…Zzzz」

ミヤ

「なん…だと…!？」

レイカ

「よく立ちながら寝れるわね…あんた達…」

ミヤ

「どうりゃ！」

両足蹴りをキリトへ

キリト

「ふがつ！敵襲!？」

ミスティア

「ふぁ…寝ちやった？」

レイカ

「…なんで立って寝てたのに寝癖が!？」

東

「そろそろ疾風を…」

ミヤ

「呼び出せばいい？」

東

「うん、とりあえず」

ミヤ

「来い！疾風・旋風！」

東

「うし…じゃあ試しに零式を呼んでみて」

ミヤ

「来い！零式！」

シーン

ミヤ

「おい…東」

東

「あ…えつと…今出来るのは…」

「じゃあ、零式・拳骨って言うてみて」

ミヤ

「…来い、零式・拳骨」

レイカ

「げんこつつて…」

ミヤ

「うおっ！」

ドスン

東

「成功だね」

ミヤ

「お、重い…」

涼真

「1速の時に呼ばせたのかよ…」

ミヤ

「え？」

東

「零式はね、疾風のリミット・バーストの

ギア数で威力や取り扱い難易度が変わるの」

涼真

「別に1速からでも呼べるが…」

ほとんど扱えないって考えた方がいい」

ミヤ

「…おい…束」

束

「じゃあ、2速に上げてみて」

ミヤ

「…疾風…リミット・バースト！2速！」

涼真

「どうだ？」

ミヤ

「軽い…」

束

「そう…零式・拳骨は2速からコントロール出来るのよ」

レイカ

「へー…他にもあるの？」

東

「あー…設計図はインストールしてあるんだけど…」

「どうやら戦闘経験値が必要らしくてね…」

ミヤ

「今はまだ無理って事か」

東

「そうなっちゃう」

ミヤ

「んで…みんなを呼んだ理由は？」

東

「ああ！そうそう、そっちがほとんど本題だった！」

ミヤ

「オーイ…」

東

「昨日みんなに渡したIS…実は…」

レイカ

「特定のパーツがパージしてミヤにくつつくとか？」

束

「……ウグツ……」

ミヤ

「あ……」

束

「正解……でもね……そのパーツがわかんない！」

レイカ

「呼んだ意味エ……」

束

「ごめんね……本当……」

エギル

「まあ……俺が頼んで呼んでもらった

つてのものもあるんだがな」

キリト

「うおっ！エギル！」

ミヤ

「んー？どうしてだ？」

エギル

「いやあ…言い出す機会が無くてな…」

お前ら、今度の週末バーベキューしねえか？」

ミヤ

「…」ジユルリ

レイカ

「ミヤ…落ち着いて…ヨダレ拭いて…」

ミスティア

「いいわね！」

ホンネ

「わーい！バーベキューだー！」

ナツ

「いいつすね！」

キリト

「ちなみに…どこでやるんだ？」

エギル

「IS学園の敷地内を借りたぜ！」

アスナ

「ええ!？」

エギル

「ああ、場所のレンタル代の事は心配しなくていい

織斑先生からの許可だ」

ミヤ

「ンン!？」

千冬

「なんだ、オカシイか？」

ミヤ

「いやいや、とんでもございません」

千冬

「私もたまには羽を伸ばしたくなるものさ」

ミヤ

「(ときたま…羽つつうか

…ハメを外してるような…」

千冬

「ハメを外すつもりは無いぞ？」

ミヤ

「…そうっすか…」

ー特別編その1ー
What the cha

ngingー変わりゆくもの

ミヤ

「いやー買い込んだしまったな」

レイカ

「バーベキューするんだから

それぐらいの量、普通よ」

エギル

「すまないな、手伝ってもらっちゃまって」

ミヤ

「構わんよ、エギル、暇だったから」

レイカ

「そうね、でも、平和っていいわね…」

ミヤ

「頼むから夏休み中は何も起こらないでほしいな」

ドーン！

ミヤ

「…ハア…すまん！エギル！」

レイカ

「ごめんなさい！エギルさん！」

エギル

「ああ、気を付けろよ！」

ミヤ

「わかってら！」

ドーン！

ドーン！

?

「クツ！マズイ…これじゃ！」

??

「我々の邪魔はさせぬ！」

?

「クツ！」

ミヤ

「大丈夫か！」

?

「!!」

レイカ

「まったく…せつかくの休日を！」

ミヤ

「疾風！行くぞ！」

ハヤテ

『はい!』

??

「わざわざそつちから出向いてくれるとはな」

ミヤ

「ん?」

?

「いけない!逃げて!お父さん!」

ミヤ

「うわっぷ!!」

間一髪で相手の攻撃を避けたミヤ

??

「クツクツク…いつまで続くかな!」

?

「お前の相手は私だ!」

??

「フハハ！……ッ!？」

急に動かなくなる敵

??

「チッ、活動限界か……命拾いしたな！」

そんな捨て台詞と共に姿を消す敵

ミヤ

「なんだったんだ？」

レイカ

「……」ムスー

ミヤ

「何事!？」

レイカ

「お父さんってどういう事」

ミヤ

「知らないよ！」

?

「すみません、お父さん、お母さん」

ミヤ・レイカ

「ンン!？」

?

「私は、…その…信じてもらえないと思いますけど…」

「25年後の未来から来たあなた達の娘です…」

ミヤ

「ほう…」

レイカ

「へー…」

………ん？

ミヤ・レイカ

「はあ!？」

空を舞う剣士達ー特別編

空を舞う剣士達

Future to be changedー変えられる未来

ミヤ

「という事らしいんだが…」

東

「うーん…何かお父さんの持ち物とかある？」
？

「あ、何回か改造されてますけど、疾風があります！」

東

「ちよつと見して」

？

「はい！」

東

「ミヤも疾風貸して」

ミヤ

「ほらよ」

東

「少し待ってて〜」

ミヤ

「そういえば名前、聞いてなかったな」

来架

「来架です、未来の来に橋を架けるの架けるで、来架です」

ミヤ

「ほお、して来架、君は本当に未来から来たのか？」

東

「どうやら本当っぽい…」

ミヤ

「まじか…」

東

「確かに改造されていたけど…」

「元が完全に疾風・旋風だったの…」

ミヤ

「そうなのか…」

来架

「東さん！私のIS、直せませんか！」

東

「少し…難しいかもしれない…」

見たことないシステムを積んでたし」

来架

「難しい…ですか…」

東

「出来ないとは言っていないけどね！」

来架

「!!」

東

「1日2日…時間を頂戴…」

完璧とまではいかないけど…

絶対に直すわ！」

来架

「あ、ありがとうございます！」

レイカ

「よかったわね」

来架

「はい！」

ミヤ

「…一つ、聞いていいか？」

来架

「…はい」

ミヤ

「来架の未来はどんな感じなの？」

来架

「……私のいた未来は…ISが世界を牛耳る世界なんです」

ミヤ

「ほお…ISがつて事は…」

来架

「はい…無人機です…が…」

かなり高スペックなAIで制御されているんです」

ミヤ

「…さっきのあれも？」

来架

「はい…でも…あいつだけ有人機なんです…」

ミヤ

「ふむ…じゃあなんで過去に？」

来架

「私のいた未来は…七強が誰一人生きていない未来…

…なんです…」

ミヤ

「!!」

来架

「キリトさんもナツさんも…アスナさんもホンネさんも

…ミステイアさんも…そしてお父さんもお母さんも…

…全員殺された未来…なんです…」

ミヤ

「…それは未来でつて事だよね？」

来架

「はい……」

ミヤ

「……つて事はあれの狙いは現代の俺らの殺害……」

来架

「はい……今の時代の七強を殺せば

反乱分子である私達が生まれないから……」

ミヤ

「……敬語やめよ？時代は違えど俺は父親なんだしさ？」

来架

「……私の物心つく前にお父さん達は殺されてしまったので

どう接すればいいか……」

ミヤ

「……んなの、篠木家の宿命なんだから仕方ないよ」

来架

「篠木家の……宿命……」

ミヤ

「ま、そのうちわかるさ……」

来架

「はあ……」

ミヤ

「……この時代の七強つて事は……」

「1箇所に集まらない方がいいか？」

来架

「はい……耐えきれぬ確率も上がりますが……」

「全員やられたら……危険です……」

「それに、この時代のISじゃあ」

「未来のISには勝てない……未来のISを持つてる」

「私1人で護衛します！」

東

「ところがドツコイ！ミヤは戦えるよ！」

来架

「そ、それはどういう事ですか！」

涼真

「ミヤとISの進化速度は異常だ…それに

リミット・バーストの4速以降なら速さもパワーも

君の持ってた疾風の戦闘データ内のどのフォームよりも

上回る…」

東

「それに、ミヤの信念なら誰も折れないから！」

レイカ

「確かに…ミヤなら無条件で勝てるって信じれるものね」

ミヤ

「そう？照れるなー／／／」

来架

「…これが…お父さん…」

ミヤ

「うし！週末にはバーベキューがあるから

明日までには決着をつける！」

来架

「で、でも！誰の所に現れるか

分からないんですよ！」

キリト

「集まりやいいんだよ」

ナツ

「バラバラで戦うより、やりやすいですしね」

アスナ

「はあ…疲れた…」

ホンネ

「あ…アスナさん今日、立食パーティーでしたっけ？」

ミスティア

「まったく…ふざけた立食パーティーよ…本当…」

アスナ

「ごめんね、ミスティアちゃん」

ミスティア

「アスナは謝らなくていいわ…あの男共…帰ったら

締めてやる…」

涼真

「うわあ…ミスティアさん…なんかキレてる…」

ミヤ

「お前らなあ…」

レイカ

「いいじゃない、私達らしく居るべきでしょ、今は」

来架

「伝説の七強…伝説のメカニック…」

「これなら…勝てるかも…」

「誰に勝てるって？」
？」

ミヤ

「!!」

キリト

「クッ！」

ナツ

「涼真さん逃げて！」

ミヤ

「疾風！」

？」

「遅い！」

来架

「させない！」

？」

「はっ！まだ邪魔をするか…来架！」

来架

「当たり前でしょ！パンドラ！」

唯一、あんな未来にならない

この世界の……未来を変えさせない！

疾風・雷風！リミット・ストライク！」

ミヤのリミット・バーストの様な駆動音を響かせ
相手を押していく来架

パンドラ

「…この黒箱を押し返すとは…」

貴様…こんな力どこに隠していた」

来架

「隠してなんか無い…偶然出来ただけだ！」

ミスティア

「ああ…本当にミヤの子みたいね…」

パンドラ

「なんだ、ハツタリか！」

来架

「その通りよ！　もう一発も撃てない」

修理前の敵襲故に修理をする暇が無かった…
それゆえに…もう…来架の疾風は限界だった

パンドラ

「ハハハ！よかったな来架！両親の前で死ねるぞ！」

来架

「クツ…皆さん…どうか…」

「こんな未来を…迎らないでください…」

来架の首へと振り下ろされる大剣

来架

「さようなら…」

パンドラ

「死ねえ！」

ミヤ

「二人の世界に入るなよ…で…誰が死ぬって？」

レイカ

「そんな事…させるわけないでしょ！」

ミヤとレイカの武器がパンドラの大剣を止める

パンドラ

「クッ！邪魔をするなあ！」

無差別にミサイルを放つパンドラ

簪

「させない！」

ミサイルに向けてミサイルを放つ簪

パンドラ

「なに!？」

箒

「はあ！」

鈴

「はっ！」

両サイドから鈴と箒の斬撃を喰らう

パンドラ

「グツッ！馬鹿な！」

セシリア

「お腹がガラ空きでしてよ！」

ラウラ

「スキを見せたな！」

シャル

「皆！お待たせ！」

セシリアとラウラ、シャルの銃撃を

喰らうパンドラ

楯無

「七強だけが、最強じゃないのよ！」

ミストルテインの槍を放つ楯無

パンドラ

「グハッ！」

ミヤ

「これでしまいだ！」

靈戦騎心を発動しトドメを刺そうとするミヤ

パンドラ

「…う…」

ミヤ

「ん？」

パンドラ

「う…ヴァアアアアアアアア！」

ミヤ

「!？」

とてつもない気迫に気圧され

とつさに距離をとるミヤ

ミヤ

「この気迫…VTシステム並だぞ…」

ラウラ

「…」

ラウラの方を向いて言うミヤ

来架

「お父さん！今のパンドラには

既存の攻撃はどれも効きません！」

ミヤ

「ナン…ダト!?!」

来架

「パンドラのI S…」

黒箱は搭乗者が精神的に追い詰められると

デスパペット…死のあやつり人形…

簡単に言うとは暴走します」

ミヤ

「ふむ…ますますVTシステム…」

ラウラ

「…」

またラウラの方を向いて言うミヤ

来架

「…やれるとしたら…」

七強の中で最強のツーマンセルでの

連携技…もしくは合技…

それも私とパンドラが来た未来にはない技…」

レイカ

「逆にどんな技ならあった？」

来架

「…七剣抜刀」

レイカ

「…大火力が潰されたわね」

ミヤ

「なあ…未来の俺は…箒たちと合わせ技した事ある？」

来架

「…！無いです！」

鈴

「フッフッフ…やつと私達の出番って訊ね！」

ミヤ

「と言つても、鈴とラウラとシャルだけなんだがな…」

ラウラ

「なら、鈴の技で足止めして、

シャルので致命傷を負わせ

私のでトドメだな」

鈴

「ちよつと！それおいしいところ全部持つてくつもりでしょ！」

ミヤ

「仕方ないだろ…実際に鈴のは足止め向きなんだからよ…」

鈴

「グヌヌ…」

パンドラ

「ア…ア…ア…ア…ア…ア…ア…ア…ア…」

来架

「！」

ミヤ

「いやー…雑談する時間をくれるとは…」

鈴

「馬鹿言ってる場合じゃ無いでしょ！」

ミヤ

「へいへい…んじゃ鈴！行くぞ！」

鈴

「疾風とのリンクを開始！」

ハヤテ

『…インストール完了！いつでも行けます！』

ミヤ

「龍砲…複数召喚！」

空を覆い尽くすほどの龍砲

レイカ

「ワオ……」

ミヤ

「シールドユニット！展開！」

紅いシールドユニットが

大きな円柱状に展開される

それを挟むように龍砲が展開されている

鈴

「龍砲全門……圧縮空気砲……照射！」

シールドユニット内部の空気が圧迫されていく

動く事すらままならない程に

ミヤ・鈴

「合技！レッドクリフ！」

パンドラ

「!!?」

ミヤ

「お次は！」

シャル

「既に接続済みだからいつでも行けるよね！」

ミヤ

「なーんか…誤解を生みそうな言い方だが…」

シャル

「気にしな—いい気にしな—い」

ミヤ

「はあ…」

シャル

「パイルバンカー展開！」

ハヤテ

『展開先座標をシールド内部に設定…』

次弾装填速度…発射と同時に設定…完了！
いつでも行けます！』

シャル

「行つけー！合技！地獄連弾！」

ミヤ

「いつ聞いても…怖いな…その名前…」

パンドラ

「…！…！！？」

鈴

「ごめん…もう…限界…」

龍砲が少しづつ消えていく

ラウラ

「急ぐぞー！」

ミヤ

「ああ…酔うなよ？」

ラウラ

「酔わないように回してくれ」

ミヤ

「無理だ」

ラウラ

「oh…:…:…」

ミヤ

「リミット・バースト…:4速！」

ラウラ

「…ミヤのISとのリンクを確認…:

…:ビームサーベルを複数展開」

ミヤの無限武装とのリンクで

少し多めにビームサーベルを展開するラウラ

ミヤ

「あまり出し過ぎるなよ？ 処理落ちするから…」

ラウラ

「心得ている…展開部位を足先に固定…」

覚悟は出来た…ミヤいつでも行ける！」

足にビームサーベルを展開

ミヤ

「…合技！ラビット・バレット！」

ラウラの事を掴み

ぐるぐる回し…ラウラをぶん投げる技

ただし…ラウラの足が必ず先頭になる

俗に言うライダーキック…

ミヤ

「シールドユニット…解除」

鈴

「龍砲…解除！」

シャル

「パイルバンカー収納！」

ラウラ

「うわああああああ！」

鈴

「あ、ありや…今回も盛大に酔ったわね…」

「?!?!」
パンドラ

ミヤ

「ふむ…シールドエネルギー全損…と」

3
時間後

パンドラ

「はっ！」

来架

「パンドラ！」

ミヤ

「お？」

パンドラ

「来架…私は一体…」

来架

「よかった…」

ミヤ

「なるほど…だから黒箱について詳しくあったのか…」

バーベキュー前日

レイカ

「…はあ…今日で帰っちゃうのね」

来架

「はい…今まで…ありがとうございます…」

パンドラ

「未来に帰ってあとは東さんに貰ったこれで

マザーを壊せば…」

来架

「全てが終わる…」

パンドラ

「いつか…未来で会えることを期待してます」

ミヤ

「ハツハツハ！もし会えたとしても君の方が

分らないだろう」

パンドラ

「あ…」

来架

「フフツ…」

束

「準備完了…だけど長く持たないから早く！」

来架

「…お父さん！お母さん！

大好きです！」

ミヤ

「そか…」

レイカ

「私達もよ！」

来架

「！…さようなら！」

パンドラ

「…さようなら」

涼真

「ゲート消失を確認…」

ミヤ

「未来…か…」

レイカ

「なーに、黄昏てんのよ」

ミヤ

「…あんな…悲しい未来にならないように…」

「もっと強くならねえと！」

レイカ

「はあ…そうね…」

ミヤ

「俺達の子供の為にもな」

レイカ

「…ミヤ／／／／／」

東

「あの一…他所でやってもらえる？」

レイカ

「あー！」

ミヤ

「ハツハツハ！」

―特別編その2―

B r e a k t h e f e a

r―恐怖を打ち砕け

千冬

「うまいな…たまにはこういうのもいいな…」

東

「はい、チーちゃん、あーんしてー！」

ミヤ

「んー！美味しい！あ、クライン、そのタレ取って！」

スグ

「私も混ぜてよかったの？」

クライン

「ほらよ…いいんだろ？呼ばれたんだし」

ナツ

「どんどん食べて下さいね！」

エギル

「ナツ、お前も食えよ」

ナツ

「はい！」

キリト

「いやー…今週…結構濃い1週間だったな」

ミヤ

「ほうだな…ん…」ゴクン

レイカ

「飲み込んでから話なさいよ…」

ミヤ

「すまんすまん」

涼真

「…今…ふと思ったんだが」

ミヤ

「ん？」

涼真

「何か変じや無いか？」

アスナ

「うーん……」

ホンネ

「……」モグモグモグモグ

ミスティア

「……ねえ……あの子達は未来から来たんだよね？」

ミヤ

「ああ……」

ミスティア

「私達が何人組だか知ってるはずよね？」

ミヤ

「……！」

ミスティア

「おかしくない？7人相手に1人しか来ないって……」

レイカ

「！」

？

「あらら…気付いちやった？」

ナツ

「！！」

ミヤ

「…ナツ…キリト…なるべくここからあいつを離すぞ」

レイカ

「せつかくの休みを…」

千冬

「全員…ISの使用を許可する…」

ミヤ

「ども…」

テラー

「私はテラー…貴方達を倒す者…いえ…未来で一度
貴方達を殺した者」

ミヤ

「テラー…恐怖…」

キリト

「ん？豆腐？」

アスナ

「恐怖！」

テラー

「安心して良いわ…関係無い人は殺さないから…

ちゃんとアリーナに移動してあげる」

ミヤ

「疾風…念のため…リミット・バースト…3速」

ハヤテ

『了解』

テラー

「さて…はじめましょ」

ミヤ

「…こいつ…なんなんだ…まったく殺気を感じねえ…」

テラー

「…フフツ…だって…私の名前は恐怖だもの！」

キリト

「…何言ってるんだ…こいつ」

テラー

「さあ！恐怖に飲まれて死になさい！」

その言葉と同時に…黒い霧がかかる

テラー

「でも…疾風の騎士…あなたには二つの恐怖をあげるわ」

ミヤ

「どういう意味だ！」

テラー

「そういうこと」

テラーの指さす先は

ナツ

「な！なんだこれ！」

霧に引きずり込まれていくレイカ達

レイカ

「ミヤ！私達のことには気にしなくていいから！」

ミスティア

「…負けたら許さないからね！」

キリト

「…グツ」

テラー

「戲言ね…どうせ、疾風の騎士も飲み込まれるんだから」

ミヤ

「みんな!!!」

テラー

「未来と同じやり方で殺してあげる…貴方に見せてあげる…

あなたにとって最も恐れている恐怖を！」

ミヤ

「零式…展開」

テラー

「あら…せっかく楽にしてあげようと思ったのに…

まあいいわ…恐怖に飲まれなさい！」

ミヤ

「！」

黒い霧に飲み込まれていくミヤ

テラー

「フフツ…あなたには耐えられない…

それはあなたが最も恐れているものだから…」

ミヤ

「ウツ…！」

目の前が暗くなっていく

ナツ

「…ミヤ…あんたを殺せば僕が最強なんだ…」

キリト

「邪魔するなよ…ナツ…俺がこいつを殺すんだからよ…」

ミヤ

「!？」

ミヤの最も恐れるもの…それは

仲間に裏切られること…

ミヤ

「…だが」

ナツ

「俺のために死んでくれ！ミヤ！」

キリト

「死ねえ！」

ミヤ

「……………断る！」

斬撃と共に霧を晴らす

テラー

「!!?」

ミヤ

「……」

テラー

「ウソ!? 未来の貴方はこの恐怖に飲み込まれたのに!」

ミヤ

「…悪いな…」

テラー

「これは何かの間違いよ!」

ミヤ

「悪いな…お前の…完璧な作戦をぶち壊しちまってよ…」

テラー

「い、一体どうして…」

ミヤ

「簡単な話さ…仲間を信じただけだ…」

「本当に俺の知ってるあいつらなら…」

「俺の攻撃は止められるからな」

テラー

「!!?」

ミヤ

「仲間を信じれなかったら

背中なんて預けられねえよ」

テラー

「…あなたのその強さは…一体どこから来てるのよ!」

ミヤ

「…仲間を信じた自分を信じたただけだ!」

テラー

「…戯言を!」

ミヤ

「戯言で結構!」

テラー

「!!」

ミヤ

「少なくともあんたはその戯言に負けたんだからな!」

テラー

「で、でも！あなたのISじゃあ私の乗る未来のISには勝てない！」

ミヤ

「…どうだかな…疾風…リミット・バースト…4速！零式・拳骨！」

テラー

「な、何をする気！」

ミヤ

「見て知りな！」

必殺！ハイスピード…ジェットナックル！」

テラー

「グハッ！」

ミヤ

「単に勝てない理由は火力の違いさ…なら攻撃される前に

搭乗者が耐えきれないほどの痛みを与えればいい」

テラー

「ば、馬鹿なあ！」

ミヤ

「帰ってマザーに言つときな！刺客を送れば送るほど

俺達は強くなるつてな！」

テラー

「クッ！」

悔しそうな顔をしながら姿を消すテラー

キリト

「いやあ…変な夢見たわ…」

アスナ

「…うう…」

レイカ

「…つたく…あんなのが怖いつて…」

未来の私はどんだけ臆病なのよ…」

ミヤ

「いや…多分…わざとだろ？」

レイカ

「…つて事は…」

ミヤ

「未来の俺らじゃ勝てないから

成長途中の俺らにたくしたんだろ」

ミスティア

「なんでそう言いきれるの？」

ミヤ

「俺がはらえたんだからな」

ナツ

「本当…なんでもありですね…」

ミヤ

「ハツハツハ！」

ミヤ

「さて…バーベキューの続きといきますか！」

ナツ

「お腹減ってたから…速く終わらしたのか…」

数時間後

夜

篠木家近所の公園

ホンネ

「……」

ミヤ

「ホンネ……」

ホンネ

「ミヤ……」

ミヤ

「呼び方が昔に戻ってるぞ」

ホンネ

「あ……」

ミヤ

「テラーに見せられたのは…あの過去だったんだろ？」

ホンネ

「うん…」

ミヤ

「怖かっただろ…よく泣かなかったな」

第閑章 鍛冶屋と人生相談所

ケットシー

ミヤ

「つい癖で紅茶とお菓子出しててるけど…」

うち、喫茶店じゃねえぞ？」

シリカ

「わかってますって」

シノン

「あなたの料理スキルが高いのがいけないのよ」

ミヤ

「…つたく…今日はいったい何の用で来たんだ？」

シリカ

「あー、新しい武器が欲しいかな…なんて…」

シノン

「私は新しい弓が欲しい」

ミヤ

「…お前ら…新しい素材を手に入れたって

知っててきただろ…アルゴ…」

アルゴ

「オネーサンの情報網を舐めないほうがいいゾ」

ミヤ

「…はあ…わかったよ…元々作る予定だったから

三人分でいいな？なんか希望ある？」

アルゴ

「ナーイ」

シリカ

「あの…これと合成…みたいなのって出来ます？」

ミヤ

「リズ作の短剣…んー…やれなくは無いが…

最悪…シリカだけ武器無しだぞ？」

シリカ

「うぐ……」

ミヤ

「まあ……リズ作なら心配はしなくても良さそうだがな……」

シリカ

「お願いします！」

ミヤ

「シノンのはよく飛ぶ強い弓でいいんだよな？」

シノン

「ええ」

ミヤ

「了解……1時間はかかるだろうから

エギルの店にでも行つてろ」

エギルの店にて

シリカ

「シノンさんとミヤさんの出会いは

あのGGOが始まりでしたよね」

シノン

「ええそうね…とところで…シリカや

アルゴとミヤの出会いってどんな感じだったの？」

アルゴ

「そーだナア…オネーサンは

ミヤが攻略組と肩並び始めた頃

キリトの紹介で知り合ったナ…今では

リアルでも遊ぶくらい仲いいゾ」

シリカ

「私もSAOからですね…」

シノン

「ふーん…ねえミヤって昔からああいう感じなの？」

アルゴ

「んー…最初はあんなんじゃなかったらしいゾ」

それにある日を境に人が変わったように

攻略に参加しなくなったしナ：そのへんは

古い付き合いのエギルの方が詳しいんじゃないかな？」

エギル

「残念だが、俺が知ってるのはあいつが前線復帰する

キツカケになった事件ぐらいだ」

シリカ

「ああ…あれですね…」

アルゴ

「なるほど…エギルとシリカは復帰の理由を知ってるんだナ」

シノン

「んー、そろそろ1時間…経つわね」

シリカ

「エギルさん、ご馳走様でした！」

エギル

「おう、またのご利用お待ちしておりますぜ」

ミヤ

「ふい…」

アルゴ

「できたカー？」

ミヤ

「お、おかえり…今出来たところ」

シリカ

「お疲れ様です」

ミヤ

「んじやまずシリカのね」

シリカ

「うわあ…綺麗…」

ミヤ

「リズの武器だからこそ出来た作業だな

完全に素材に戻るギリギリのラインまで

熟してそこに織り込むのは

名匠の武器じやなきや出来ないよ」

シリカ

「えと…名前は…」

ミヤ

「んー…鑑定スキルでも引つかからないんだよね…」

シリカ

「…もしかして名前がつけれるとか」

ミヤ

「こいつかよ…」

ピヨコン

アルゴ

「それが噂のウサギ？」

ミヤ

「そう」

アルゴ

「可愛いナ！」

ミヤ

「そういえば、小動物好きだっけ…」

アルゴ

「ウリウリ」

ミヤ

「…じゃあ次はアルゴの」

アルゴ

「うお！なんだこれ！」

ミヤ

「アルゴさん語尾が…」

アルゴ

「すごいナ！」

ミヤ

「あ、直った…」

短剣…アルカンシエル」

アルゴ

「ほう…レアリテイがカンスト…」

ミヤ

「作った本人が1番びびってる」

シノン

「私のは？」

ミヤ

「出来てる出来てる…」

シノン

「フェイルノート…」

ミヤ

「…とんでもねえもんができたよ…本当…」

あの素材…化けるわ…虹の破片…」

アルゴ

「今のところ、その素材を採取に行けるであろう」

プレイヤーはミヤとリーファだけなんだ口？」

ミヤ

「ああ…あそこは最初に行ったプレイヤーしか

行けなくなるマップらしくてな…他プレイヤーが行くと

別場所に転移されるらしい」

アルゴ

「へー、そうか…」

ミヤ

「んー…そうだ、お代はいらんよ」

シリカ

「へ!?!」

ミヤ

「元々みんな分、作るつもりだったし」

シノン

「ありがとね…今度なんか奢るわ…」

リアルかこっちかで」

ミヤ

「ええて、見返り求めてないし」

アルゴ

「流石ミヤ…太っ腹…」

ミヤ

「ふい…まあ、多分…」

次はリズとかが来るだろうな…」

メイスと刀と両手剣

リズ

「こんなメンツ珍しいわね」

ツバキ

「…なんというか…全体的に赤い…」

ミヤ

「いらつしやー…なんだお前らか…」

リン

「そんな露骨にがっかりしないでよ！」

ミヤ

「…新しい武器だろ」

リズ

「話が早くて助かるわー」

ツバキ

「お願いします」

ミヤ

「一応希望はとるが…リズはメイスでいいよな？」

リズ

「ええ」

ミヤ

「ツバキは刀」

ツバキ

「はい」

ミヤ

「リンは…両手剣と…」

リン

「あまり大きくなっていいわ…」

ミヤ

「元々リンのは小さく作ってる」

リン

「…ちよつとそれどういう意味よ！」

ミヤ

「一番持ちやすいサイズにしてるって事だよ」

リズ

「それって結構難しいわよね!? さらっと言ってるけど…」

ミヤ

「そうなの? 意外と簡単だぞ?」

リズ

「そりゃ…あんだだから…」

ミヤ

「そうだ…リズ、シリカの武器頼まれて改造したんだが…

してよかった?」

リズ

「…そういうのはする前に言いなさいよ…

まあ、成功したのならいいわ」

ミヤ

「それがさ…成功はしたんだけど名前が無いんだよ」

ツバキ

「…じゃ…私の武器で試してみますか？」

ミヤ

「…うーん…自作の武器か…どうなんだろう…」

リズ

「やってみなさいよ！」

ミヤ

「…だな、考えるより動くのが一番だよな！」

んじゃ…1時間半位どっかで時間潰しててくれ」

エギル

「二日連続で作業か…ミヤも大変だな…」

リン

「リズってさ、ミヤとSAOで知り合ったのよね？」

リズ

「ええ…そうよ？」

リン

「どうやって知り合ったの？」

リズ

「えーと…確か…そう！…アスナの紹介よ！」

『馬鹿みたいな量の武器の修理を』

頼みに誰かが来るかもしれないけど

その人、私の知り合いだから！』

って、メッセージがきた直後

ミヤがSAOの私の店を訪ねてきたの」

リン

「じゃ、その頃はもう無限武装を使ってたって事？」

リズ

「んー…いや、その頃はまだレベリングしてただけだから

まだ、公にはなってなかったわね」

リン

「へー…」

リズ

「実際…ミヤが無限武装を使うようになったのは…

あの事件以降だし…」

リン

「んー…あと1時間か…」

ツバキ

「やる事がなくなっちゃった…」

リズ

「あ、そうだ！2人とも泳げるよね？」

リン

「まあ、そこそこ？」

ツバキ

「それなりに…」

リズ

「今度の日曜空いてる？」

リン

「んー…あ、空いてる」

ツバキ

「…その日は…夜…というか午後には用事が…」

リズ

「んー…そっか…午前はプール」

午後は篠ノ之神社ってところ

お祭りに行こうと思ってたんだけど…」

リン

「んんん!？」

エギル

「……ああ……なるほど……」

ツバキ

「……言わない方が身のためか……」

リズ

「午前プールも難しい？」

ツバキ

「少し……厳しいですね……」

リズ

「そか……残念……」

エギル

「そういえばお前ら、この店来てから

時間カウントしてるが……だいたいミヤの店から

うちまで30分はかかるぞ？」

リズ

「ええ!？」

エギル

「まあ、それも計算に入れてだろうが…」

リン

「じゃ！エギルさん！今度はリアルで！」

エギル

「あいよ！」

ミヤ

「ふー…出来た…」

カランカラン

ミヤ

「あーいらっしやー…

おかえり」

リズ

「遅かった？」

ミヤ

「いやちようど」

リン

「出来の方は？」

ミヤ

「完璧」

ツバキ

「私の刀もですか？」

ミヤ

「うん…やつぱり名前がつかないんだけどね…

バグか仕様のどちらかだろ…

んじやまずリズの…アースクエイク…？」

リズ

「うわあ…綺麗…」

ミヤ

「新素材と特殊加工金属の強度が高いやつを混ぜてみたら

そうなった」

リズ

「うわあ…」

ミヤ

「次はリンの…ドラゴンスレイヤー!？」

リン

「竜殺しって…なんの因縁よ…」

ミヤ

「リンのISブレイカーってか…フフツ」

リン

「でも、ありがとね」

ミヤ

「ういっす…最後はツバキ」

ツバキ

「刀身が…これは…」

ミヤ

「虹色だけど…透けてるんだよね…」

ツバキ

「強度の方は…大丈夫なんですか？」

ミヤ

「全然問題ない…1年くらいメンテいらなレベル」

ツバキ

「うわあ…」

リズ

「お代は…」

ミヤ

「んー…いいよ」

リン

「ほんと申し訳ないわ…」

ツバキ

「師匠…」

リズ

「ミヤ…今度…色々教えて？」

ミヤ

「んー…別にいいよ」

リズ

「今日はありがとねー！」

ミヤ

「おうよー！」

数時間後

リアル

ミヤ

「さてと…そろそろ…」

シノン

「…」

ミヤ

「よし、到着」

カランカラン

エギル

「いらっしやい…」

シノン

「…」

ミヤ

「…シノン」

インタビュー

遡ること数週間前

ミヤ

「用ってなんだ？楯無」

楯無

「いや、私じゃなくてこつち」

レイカ

「んと…新聞部の…」

黛

「黛薫子です！」

ミヤ

「えと…用って？」

黛

「雑誌のモデルとインタビューをおふたりに

受けてほしいんです」

ミヤ

「あー…アスナ達が新しい二つ名がついた原因か…」

レイカ

「面白そうじゃない！受けましょうよ！」

ミヤ

「…だな、何事も経験が大事だもんな」

黛

「あ、既に桐ヶ谷くんや織斑君たちは

終わってます、あとミステイアさんと倉持さんも」

ミヤ

「俺ら最後か…」

黛

「受けてもらえますか！」

ミヤ

「はい」

数日後

ミヤ

「はあ…なるほど…お姉さんと…」

黛

「はい、薰子から聞いてると思いますが…」

レイカ

「写真撮影とインタビューでしたよね」

黛

「はい」

ミヤ

「どつちからですか？」

黛

「えつと…インタビューからで！」

撮影は準備がまだなんで…」

ミヤ

「…インタビューか…」

黛

「じゃあまず、どうして疾風の騎士や雷槌と呼ばれたか

の理由を！」

ミヤ

「えつと…俺は…移動速度のステータスに全振りしてたから

移動速度が早すぎてそう呼ばれるようになったんだっただったかな？」

レイカ

「私はユニークスキルが雷槌だったから…」

ミヤ

「(水飲も…)」

黛

「ほうほう…では次に

最近気になったニュースは？」

レイカ

「んー…私は…ミヤがGGOで優勝したことかな？」

ミヤ

「んっふ！ゴフゴフ！」

レイカ

「あらあら」

ミヤ

「ゴブツ…なんでそれ!？」

レイカ

「銃のエイム無い人が優勝出来るなんてねえ…」

ミヤ

「ウグツ…」

黛

「えつと…ミヤさんは？」

ミヤ

「んー…イジメに関する事件かな…」

レイカ

「……………」

黛

「…えつと…詳しくは聞きません…」

ミヤ

「すいませんね…」

黛

「えつと…いつか…そういう話題を雑誌で取り扱う時

お話を聞かせてもらってもいいですか？」

ミヤ

「…構いませんよ」

黛

「ありがとうございます！」

…あ！撮影の準備が出来たみたいです！」

スタイリスト

「では、レイカさんはこちらへ」

ミヤ

「俺は…このままでいいのかな？」

黛

「私服がそんなカッコイイとは…」

誰も思ってたませんでしたから…」

ミヤ

「まあ…確かにユニク○装備ですけどね…」

完全なるユニクロ装備（夏仕様）

カメラマン

「じゃまずミヤさんから！」

ミヤ

「あ、はいはい！」

10分後

カメラマン

「では次、レイカさん！」

レイカ

「はーい」

ミヤ

「おお…」

レイカ

「変…かな？」

ミヤ

「全然大丈夫…ただ普段見ない服装だからさ…」

白のワンピース

黛

「ほほう…」

ミヤ

「うわつと!!」

黛

「この構図…どうですか…」

カメラマン

「…最高です!」

黛

「正しく…夏の砂浜デート感を感じる構図…」

カメラマン

「イイよー!イイよー!」

黛

「そう!これは!本当のカップルなのに」

独特の空気感を持つこの2人だからこそ!

カメラマン

「じゃ、お互いに背中を預けて上を見て!」

ミヤ

「こうつすか？」

カメラマン

「そうそうそう！イイよー！」

1時間後…

カメラマン

「ふー…久々にいい仕事したよ、また撮らせてよ」

ミヤ

「あはは…マジすか…」

守ること……戦うこと……

前回の最後の一時間前

現実

とある学校の登校日、昇降口にて

女子生徒1

「ちよつと！朝田さん！あの男の人、誰！」

詩乃

「男……！ちよつとごめん！」

女子生徒2

「やだ！もしかして、IS学園の3人の男子のうちの1人の

篠木ミヤさんじゃない!?それと愛車のワインレッドのN—BOX」

ミヤ

「…変装すれば良かった…」

女子生徒³

「篠木ミヤさんですか!？」

ミヤ

「アハハ…やつぱりバレてました？」

女子生徒³

「本物だア!あ、握手してください！」

女子生徒⁴

「さ、サインください！」

ミヤ

「んー…こんな感じかな？」

男子生徒

「IS見してー！」

ミヤ

「ごめん…織斑先生や国から怒られちゃう…」

男子生徒

「なんだー！偽物なのか！」

ミヤ

「はあ…どうか気づかれませんかように…」

疾風、ステルスシステム起動…

来い！疾風・旋風！」

男子生徒

「うわあ！本物だったア！」

ミヤ

「解除」

シノン

「すごいモテモテね…ミヤ」

ミヤ

「やっと来た…シノン…今日はゴメンな」

シノン

「全く…」

ミヤ

「後ろ乗って」

先生

「あ、あの…篠木ミヤさん…ですよね？」

ミヤ

「え？あ、はい」

先生

「今度…うちの学校でイジメに関する

授業してもらえないでしょうか…」

ミヤ

「ああ…雑誌読んだんすね…」

先生

「はい…お願い出来ませんか？」

ガサゴソ

ミヤ

「えつと…あ、あつた…」

これ、俺の電話番号です

日程決まったら電話して下さい！」

先生

「あ、ありがとうございます！」

ミヤ

「んじゃ、出発！」

前回の最後に戻る

ダイシーカフェにて

シノン

「で、話って何？」

ミヤ

「シノン…つい先日、君の地元に行ってきた」

シノン

「!？」

ミヤ

「仕事半分、私情半分でだが…」

シノン

「何をするために…」

ミヤ

「シノン…君は…聞かなきゃいけない言葉を聞いてない」

シノン

「…何よそれ…」

ミヤ

「君は…罪にしか目を向けてない…それじゃ…いつか潰れる

俺さ…わかつたんだよ…自分が前に進めた理由…」

シノン

「……………」

ミヤ

「奪ったものばつか数えてたら…いつか自分を見失う

だから…守ったものも数えるようにしてたんだよ…」

シノン

「……………」

ミヤ

「君は奪っただけじゃない……………」

ミヤは奥の扉に歩いていく

ミヤ

「どうぞで」

その扉から眠った女の子を抱いた女性が出てくる

?

「朝田詩乃さん…お久しぶりです…大澤祥恵と申します

なんて言ってもわからないですよね…

五年前…とある郵便局に務めました」

シノン

「!!」

大澤

「私は…ずっと…あなたにいち早くあつて

言わなきやいけないことがあつたんです

私はあの事件の時…お腹にこの子がいました…」

シノン

「!」

ミヤ

「君は…自分が何をしたかわかってるよね…」

シノン

「私はあの時…あの男を撃ち殺した…!」

大澤

「でも、同時に私とこの子の命を救ってくれた」

ミヤ

「シノン…人の命を奪うのは意外と簡単だ…でもね？」

人の命を守る以上に難しい事はこの世にはないんだ」

シノン

「私が…救った…」

大澤

「あなたがあの時いなかったら…」

私も…この子もこの世にいなかった…

本当に…ありがとうございます！」

シノン

「わ、私は感謝されるようなことは！」

ミヤ

「命守ってもらって感謝しないのはただの恩知らずだ…」

…シノン…君は優しい…誰よりも他人を考えられる…

優しい人間だ…そして何より…その罪をずっと覚えてる

俺達が忘れていた…人殺しの罪の記憶を君はずっと…」

シノン

「…ミヤ…私は…許されていいの？」

ミヤ

「…五年間…君はずつと我慢してきた…」

何も知らない奴にいじめられようが

君はずつと我慢してきた…もう…

許されていいはずだ…」

大澤

「朝田さん…ごめんなさい…」

シノン

「謝らないでください…大丈夫です…」

こうしてわざわざ会いに来てくれたんですから」

大澤

「いや、でも！」

シノン

「本当に大丈夫ですって」

ミヤ

「探すのは流石に骨が折れたけど…ね？」

あきりなさそうだな…あ！エギル、厨房貸して」

エギル

「当店特製裏（ミヤ特製）オススメメニュー

懐かしの味だ…どうぞ」

どこからどう見てもオムライス…

シノン・大澤

「美味しい…」

シノン

「あ」

大澤

「ウフフ、すっかり篠木さんの策にハマってしまいましたね」

シノン

「ええ、そうですね」

ミヤ

「一件落着つと…」

後日談…

大澤さんにあのオムライスのレシピを教えたり
シノンのトラウマ克服に付き合うことになった

君想う…故に

A L O、ミヤの店にて…

カランカラン

ミヤ

「いらつしやー…」

ホンネ

「ミヤ…私…覚悟できた…」

ミヤ

「……そうか……」

ホンネ

「うん……」

ミヤ

「…俺が話す…いいな？」

ホンネ

「うん…」

翌日

A L O…エギルの店にて

ミヤ

「悪いなエギル…貸し切らせてもらっちゃって」

エギル

「構わねえよ…話題が話題だからな…」

クライン

「俺達は退散しとく…もしもの時は呼び出してくれよ」

ミヤ

「ああ…悪いな…頼らせてもらう」

数分後

キリト

「…」

アスナ

「…」

ナツ

「…」

レイカ

「…」

ミステイア

「…」

ミヤ

「悪いな…皆、集まってもらって」

キリト

「用ってなんだ」

ミヤ

「…俺とホンネの…皆に話してこなかった…」

過去の話をしようと思ってるね…」

アスナ

「…それって…しばらく連絡が取れなかった頃のこと？」

ミヤ

「そう」

ミスティア

「…ホンネちゃんの覚悟が決まったのね…」

ミヤ

「ああ…これから話す話は…ナツにとって

最も我慢出来ない話になるかもしれない…」

ナツ

「……覚悟してる……」

ミヤ

「じゃあ……話をしよう……」

ミヤ

「……ざっと……一年半前……ぐらいかな……」

ホンネからメッセージが飛んできたんだよ……

その内容が、

『ラフコフに捕まった……助けてー』

そんな文面のメッセージがね」

ナツ

「……なんで俺じゃなく、ミヤさんだったんですか

俺が頼りないから？」

ミヤ

「違う……ラフコフの狙いが俺だったからさ」

ナツ

「!!」

ミヤ

「流石にそれには気づいた…でも…」

仲間をほっとけなかったからさ…」

ミスティア

「受けてた依頼全部、私とレイカちゃんに任せて

ホンネちゃんを助けに行つたのよね…」

ミヤ

「ああ…」丁寧に場所まで書かれてたからな

まあ…行つたら行つたで見事に罠だよ…

ホンネは捕まってることには捕まってるけど…

メッセージを送れる状況じゃなかった…

手を鎖で繋がれてて…牢屋の中に押し込められてた」

ナツ

「!」

ミヤ

「まあ…俺も捕まる訳だわ…」

レイカ

「そんな事が…」

ミヤ

「…捕まるだけなら良かったんだがな…」

キリト

「……ストレスの捌け口にされた」

ミヤ

「正解…まあ、その相手は全部俺だったんだがな」

HPギリギリまで殴っては回復させて殴っては回復させて…

あいつらの気が済むまで延々と殴られてた…

それだけならよかった…傷付くのは俺だけだから…

でもある日…その地域の担当？…が変わったんだよ…

クラデイルって言う…ひよる長のヤツに…」

キリト

「ッ!!」

アスナ

「!!」

ミヤ

「キリトやアスナは知ってるだろ…あいつのゲスっぷり…」

キリト

「ああ…」

アスナ

「うん…」

ミヤ

「あいつは…ストレスをホンネで発散しようとしていた…」

ナツ

「…ホンネを殴ったってことか？」

ミヤ

「いや…ホンネを…」

ミスティア

「ミヤ…貴方も無理をしてるのは…わかってる」

ミヤ

「…大丈夫…」

クラデイルは…ホンネを犯そうとした…

倫理コードを解除させて…」

ナツ

「!?」

ミヤ

「…まあ…なんとか止めて逃げ出せたんだが…」

ナツ

「…でも…どうやって…止めたんですか…」

ミヤ

「お前らさ…VRMMORPG作品の中でさ…」

普段以上に動けたりしたことないか？」

キリト

「…74層攻略の時…」

ミヤ

「…その仕掛けを使ったのさ…」

ナツ

「え…」

ミヤ

「SAOは特にそれが出やすかった…」

ただ一つの感情を爆発させた時

普段以上のパワーを出せるようになるのさ…」

ナツ

「…感情の爆発…」

ミヤ

「俺はあの時…純粹に切れた…」

怒りの感情が爆発した

そしたら鎖をぶつちぎることが出来て

クラデイルを蹴飛ばしてホンネと逃げてきた…

クラデイルのその後は知っての通り…

俺が殺した…」

ナツ

「……ホンネは……どうして……」

それを今まで教えてくれなかったんですか？」

ミヤ

「ナツ……お前に嫌われなくなかったからさ……」

白の隣に立つ者が……汚されかけた事があるなんて

言えない……って言ってた……」

キリト

「……ナツ……お前はこの話を聞いて……どう思った……」

ナツ

「……自分が情けないです……」

自分がホンネの心に負担をかけてたなんて……」

ミヤ

「……そうでもない……お前はホンネの支えになってる

ナツ

「……？」

ミヤ

「あいつがこの話をする覚悟できたのも

お前なら…全てを理解してくれるって思えたからさ…」

ナツ

「…俺はまだまだです…もつと強くならなくちゃ…」

ホンネを守るために…」

ミヤ

「…そうか…頑張れよ」

キーン

ミヤ

「ん？」

ナツ

「耳鳴り？」

ミヤ

「お前も？」

ナツ

「はい…」

ミヤ

「一瞬？」

ナツ

「はい」

ミヤ

「…何かりアルの方で起きたのか？」

レイカ

「さて！お通夜みたいな雰囲気もこの辺にして！

パーっと食事にしませよ！」

ミヤ

「その前に…一つやらなきやいけない事がひとつあるぜ」

ガチャ

ホンネ

「…ナツ君」

ミヤ

「ナツ…誓え…ホンネを守るって」

ナツ

「はい……」

ホンネ…俺が一生、君を守る…だから…その…

IS 学園を卒業したら…結婚してくれ！」

ミヤ

「…話が飛躍したな…オイ…」

ミスティア

「予想の斜め上行ったわね…」

レイカ

「流石ナツクオリティ…」

ホンネ

「…」

ナツ

「ダメ…かな？」

ホンネ

「ううん…嬉しい…」

クライン

「よし…準備はいいな？」

？

「ええ！」

ホンネ

「こちらこそ…よろしくおねがいします」

ミヤ

「はあ…クライン！」

クライン

「おう！」 パアーン！

リズ

「ナツが予想の上を行ったけどオメデト！」

シリカ

「流石ナツさんです…予測不能です…」

リーファ

「ホンネさん…困った時は私達も頼ってくださいね！」

シノン

「さすがはミヤの仲間ね…予測を超えてくるなんて…」

アルゴ

「まあ、ナツ坊らしいがナ！」

女性陣全員集合…では無い…

ミヤ

「さー飯にしますか…つても腹は満たされませんがな！」

レイカ

「まあ…お通夜みたいな雰囲気から

結婚式みたいな雰囲気になったんだから
心は少しぐらい満たされるでしょ…」

エギル

「もうすぐ料理が出来上がる、少し待っていてくれ！」

ミヤ

「…ジュル」

クライン

「オイ…見えてないのに涎垂らすなよ…」

第新章

t h e 新学期

新学期

新学期初日

ミヤ

「はあ…新学期そうそう、文化祭か…」

ナツ

「自分がクラス代表ってことを忘れていた…」

ミヤ

「それ、忘れちゃイカンやつでしょ…」

ナツ

「さ、さて！文化祭で何をしましょう！」

ミヤ

「雑や…」

清香

「はーい！織斑&桐ヶ谷とツイスターゲーム！」

ナツ

「ミヤは!?!」

清香

「お姉ちゃんが怖いので…」

キリト

「…あー…」

ミヤ

「あはは…」

レイカ

「どういう意味よそれ！」

ナツ

「んー…なしの方向で！」

他に何か！」

ラウラ

「ふむ…メイド喫茶なんてどうだ？」

ミヤ

「ンン!？」

ナツ

「え？」

キリト

「へ？」

ラウラ

「このクラスには

料理スキルの高い奴が3人も居るだろう？

そのスキルを發揮してもらおう他ないではないか」

ミヤ

「服のアテはあるのか?…」

ラウラ

「ああ…私達で作る…そのために視察に行く」

シヤル

「うええ!？」

ナツ

「…じゃあ、メイド喫茶でいいですね！」

皆

「さんせー！」

キリト

「俺は？」

ミヤ

「ホールスタッフだろうな」

翌日の午後

アスナ

「このメンバーもなんだか懐かしいね」

嬉しそうに話すアスナ

ミヤ

「あー…確かに…」

何を作るか考えてるミヤ

ナツ

「あの頃はミヤさんが

給仕担当手伝ってくれたんですけどっけね」

しっかりと覚えているナツ

アスナ

「何作ろうか…」

ミヤ

「いつそのこと3人の得意料理

二品ずつ位、出せばいいんじゃない？」

ナツ

「あー！なるほど！」

6品もあればメニューらしくもなりますしね！」

ミヤ

「んじやアスナの得意料理は？」

アスナ

「んー…だし巻き玉子とかかな？」

あとは…揚げ出し豆腐かな」

ミヤ

「ワオ…和風やな…」

ナツ

「ミヤさんは？」

ミヤ

「オムライスと親子丼」

ナツ

「卵の消費量…」

ミヤ

「ナツは？」

ナツ

「んー…パウンドケーキとオムライス…」

ミヤ

「…あー…メイド喫茶だったな…」

今出てきた中にデザート全然ないやん…」

アスナ

「あ、なら私、アイス作れる！」

ミヤ

「じゃあ、アスナはアイス担当で」

アスナ

「わかったわ、ミヤ君は？」

ミヤ

「ふむ…クッキーなんてどうだろ」

ナツ

「なるほど、確かに一回の調理でたくさん作れますね」

ミヤ

「オムライスは俺ら男子陣の名前がついてりや売れるだろ」

ナツ

「さすがミヤさん…やり方がエグい…」

ミヤ

「賢いと言ってくれ」

アスナ

「ま、まあ！試しに作ってみましょう！」

2時間後…

アスナ

「みんなー試作だけど出来たよ！」

ミヤ

「ふい…」

ナツ

「ふう……」

レイカ

「あ、このクッキー可愛い！」

ホンネ

「こっちのオムライスは

ケチャップで可愛い絵が書かれてる！」

清香

「ああ……アイスクリーム頭痛が……」

ワイワイガヤガヤ

ミヤ

「好评みたいだな」

鈴

「このクッキー美味しい！」

簪

「うん…」

ミヤ

「んんん!?!」

ナツ

「なんでふたりが居るんだ!?!」

鈴

「偵察よ偵察

つたく…あんた達が料理やるなら勝ち目ないじゃない…」

簪

「これには…勝てない…」

ミヤ

「そうなのか…クッキーなんて初めて作ったんだがな」

鈴

「…なん…だと!?!」

ミヤ

「いや、レシピは知ってたけど作る暇がなかったからさ」

ライム

「モグモグ」

ミヤ

「……」

スパーン！

ライム

「痛ッ!？」

ミヤ

「あんたも何しに来たの……」

ライム

「美味しそうな匂いがしたからね」

ミヤ

「予想の斜め上に行く人気だな……」

冥土喫茶

皆さんどうもこんにちは、篠木ミヤです…
ただ今…強盗に捕まっています

強盗1

「こいつがどうなってもいいのか！」

ミヤ

「どうしてこうなった…」

遡ること三十分前

シャル

「はあ…」

ラウラ

「どうした？」

ミヤ

「…はあ」

ラウラ

「ん？」

シャル

「何でもないよ…ラウラ」

ミヤ

「ん…ここか」

カランカラン

メイド

「お帰りなさいませ！ご主人様！」

ミヤ

「ごめんなさい、お店間違えましたー…」

ラウラ

「いや、あつてるだろう？」

シャル

「…うん…ミヤ、もう諦めよ？」

ミヤ

「…ウイッス…」

ラウラ

「ふむ…このオムライス…おに…ミヤの

オムライスは絶品だが…ここのも美味しいな」

ミヤ

「ケチャップで絵を描くサービスか…

絵は得意だけどなあ…」

？

「はあ…どうしよう…」

ミヤ

「ん？」

シヤル

「ん？」

ラウラ

「いや、お互い見つめ合ってどうした？」

ミヤ

「いや、ため息が聞こえたからさ？」

ラウラ

「それならその席の人だ」

？

「はあ…どうしよう…3人も穴が空いちやうなんて…」

シャル

「どうする？声かける？」

ミヤ

「いや、絶対めんどくさい事になる…」

ラウラ

「さっきからため息をついているが…」

「どうしたのだ？」

ミヤ

「ンンン!？」

シャル

「はあ…」

?

「あ！すいません…お客様…」

私はこの店の店長をさせてもらってる者です」

ミヤ

「…話から察するに今日、いきなり休みが出ちやっただって

感じですよね？」

店長

「はい…今日は、この辺一帯でイベントがあるので…

今日の穴は…結構辛いです…」

シヤル

「ミヤ…」

ラウラ

「…困ってる人はほっとけない…」

ミヤ

「…はあ…何か私達に

お手伝いできることがありますか？」

店長

「え？ええ!!? いいんですか!？」

ミヤ

「…はい、困ってる人はほっとけないタチなんで」

店長

「ありがとうございます！」

…っ?!あ、あの…人違いかもしれませんか…
もしかして…あの篠木ミヤ…さんですか？」

ミヤ

「…はい」

店長

「うっふあ!ほ、ほ、ほ、本物!」

サインください!握手してください!」

ラウラ

「いつもこんな感じなのか?」

ミヤ

「大体ねー」

数分後

ミヤ

「…」

強盗1

「全員動くな！こいつがどうなってもいいのか！」
冒頭に戻る

ミヤ

「…はあ…不幸だ…」

ラウラ

「ミヤ…何を遊んでいる…」

シャル

「忙しいんだから…遊ぶ暇なんて無いよ」

強盗1

「こ、こいつがどうなってもいいのか！」

店長

「はわわわ！」

強盗2

「本当に殺すぞ！」

シャル

「騒がしいので外でやってもらえますか？」

強盗3

「ナメやがって！」

男の指が引き金にかかる…

シャル

「僕達、忙しいんだ…他所でももらえない？」

ナイフが強盗達の首に当てられる

強盗

「!？」

ミヤ

「んー…外行きますよ？」

移動中

強盗1

「…これってテロ行為になるのか？」

強盗2

「知らねえよ！お前の考えだろ！」

ミヤ

「んー…人質が一般人ならテロにはならないんじゃない？

知らないけど…」

強盗3

「ふう…」

ミヤ

「まあ、今回の人質は世界に三人しかいない
男性IS操縦者なんですがね…」

強盗1・2・3

「!？」

ミヤ

「どうも篠木ミヤと申します」

強盗1

「逃げろ！」

ミヤ

「逃がしませんよ！プレスシールド！」

強盗2

「グエツ！」

盾にサンドされ捕まる強盗達

警察

「ご協力感謝します」

ミヤ

「はい」

シャル

「ふう…やつとお昼だ…」

強盗4

「全員動くな！」

客

「きやああ！」

強盗4

「騒ぐんじゃねえ！静かにしろ！」

ミヤ

「…なんて日だ！」

ラウラ

「…水いれてくる」

強盗5

「おい、動くな！」

ラウラ

「水だ」

強盗6

「お、気が利くじゃねえか」

ラウラ

「…誰もやるとは言っていない」

突然トレーをひっくり返し氷水を宙へと飛ばす

そして宙へと飛んだ氷を掴み…弾く！

強盗6

「いつてええ！何しやがる！」

ミヤ

「ほお…氷の指弾か…」

強盗4

「っ！」

強盗5

「ガキひとりに狼狽えるな！」

シャル

「1人じゃないんだなあ……これが……」

気配を消し背後から現れたシャル

強盗5

「!？」

シャル

「まあ……貴方達みたいな素人相手なら

ラウラー一人で大丈夫だろうけど……」

ミヤ

「頭数合わせた方が早く済むしねえ」

強盗4

「グハッ！」

相手の関節を抜き動けなくしているミヤ

ラウラ

「ふん！」

強盗6

「グエッ！」

顎を蹴り上げられ気絶する強盗

シャル

「動かない方が身のためだよ？」

強盗5

「お、お前から一体何者なんだよ！」

ミヤ

「あー…IS学園の生徒です」

強盗5

「!?」

ミヤ
「相手が悪かったね…」

警察

「本当に…すいません…」

ミヤ

「いえいえ…」

そういう事に巻き込まれやすい体質なだけですから」

警察

「…ご協力…感謝します」

ミヤ

「はこ」

夕方

店長

「今日は本当にありがとうございました！」

ミヤ

「いえいえ、とても楽しかったです！」

店長

「ええ!？」

ラウラ

「店長…一つ頼みたいことがある」

店長

「な、なんででしょうか？」

ラウラ

「今度学校でメイド喫茶をやる事になったのだ」

店長

「へえ…」

ラウラ

「メイド服などを貸してもらえないか？」

店長

「…何着ぐらいですか？」

ラウラ

「男物があれば、3セット

後はメイド服を37着ほど…

無理なら無理で構わない」

店長

「うむむ…」

ミヤ

「やっぱり無理だって…」

店長

「…1日だけですか？」

ラウラ

「はい」

店長

「…全力でお手伝いさせていただきます！」

ミヤ

「おお…」

シヤル

「ありがとうございます！」

ラウラ

「ほらな？言ってみるものだろ？」

ミヤ

「…だな…」

少女

「あ！ふうせんが！」

木にひっかかる風船

少女

「わたしのふうせん…」

シヤル

「…ISが使えたら取れるのに…」

ミヤ

「よっ！シールドサーファー！」

盾を寝かせサーフボードの様に乗り飛ぶ技

ミヤ

「これを現実で使う事になるとは…」

ミヤ

「はい、お嬢ちゃんの風船」

少女

「わあ！おじさんありがとう！」

ミヤ

「ハウッ…おじさん…グスン」

少女

「おじさん、アイエスつかえるの？」

ミヤ

「んー？そうだよ」

少女

「わあ！すごい！」

ミヤ

「…IS好き？」

少女

「うん！カッコイイから！」

ミヤ

「そうか…じゃあこれをあげよう」ピラッ

少女

「?」

ミヤ

「今度、ISの学校で色々な事をするんだ

そのチケツト…1年1組に来たら俺が居るから」

少女

「うわあ!もらつていいの?」

ミヤ

「うん、誰かにあげないといけないものだから」

少女

「わーい!」

ミヤ

「あ!風船!」

少女

「あ!…ううん、大丈夫!」

ミヤ

「え?」

少女

「おじさんがこれをくれたから！」

ミヤ

「おお、そうか…それも飛ばさないでよ？」

少女

「大丈夫！」

母親

「……！」

ミヤ

「…？」

少女

「あ！ママだ！」

ミヤ

「そう、なら転ばないようにね？」

少女

「うん！」

ラウラ

「反省文不可避だな……」

ミヤ

「いいよ、別に」

シャル

「帰ろっか」

ミヤ

「だな」

母親

「あれ？風船は？」

少女

「飛んでっちゃった！」

母親

「あらあら……でもなんだか嬉しそうね？」

少女

「うん！風船をつかまえてくれたおじさんが

アイエスの学校のけんをくれたから！」

母親

「ええ!？」

少女

「ほら！」

母親

「あらあら……本当だ……用務員のおじさんかしら？」

少女

「行くー！」

母親

「……そうね、その日は休みだしね」

少女

「おじさん、1年1組にいるっていった！」

母親

「あら？教員なのかしら？」

という事で…文化祭

ミヤ

「いやあ…凄い集客率…」

ナツ

「あ、そう言えば誰にチケットあげました？」

俺は、弾と蘭にあげました」

アスナ

「私は家族に…」

キリト

「俺はスグと母さんにあげた」

ミスティア

「リズとシリカちゃんにあげたわ」

ホンネ

「あー、クラインさんとエギルさんにあげました」

ミヤ

「あー…：I Sが好きっていつてた女の子にあげた」
レイカ

「え？」

放送

『みなさん！文化祭開始五分前になりました！

今日は思いっきり楽しみましょう！』

ミヤ

「楯無か…」

放送（楯無）

『忘れてないですよねー？』

一番票が入ったクラスもしくは部活に

織斑君と桐ヶ谷君が入る事を！』

ナツ

「え？」

キリト

「ナンデヤ！ミヤ入つとらんのや！」

ミヤ

「あー、俺は部活に入ってるから…」

飛んで昼前

ホンネ

「アスナさーん、ミヤさーん、ナツー

お昼休みにしていいよー」

ミヤ

「はいよー」

アスナ

「ふう…なんとかお昼までこれたね…」

ナツ

「…ミヤさんのクッキーだけ」

売れ行きがオカシイ…」

ミヤ

「お持ち帰りOKにしてるからな…」

ナツ

「え!?!衛生面は大丈夫なんですか!?!」

ミヤ

「大丈夫、責任は持ちませんって書いてるから」

ナツ

「(うわあ…)」

楯無

「ミヤ居るー?」

ミヤ

「いませーん」

楯無

「そーなのねー…って騙されるか！」

ミヤ

「ツチ…」

楯無

「まあ、ミヤだけじゃなくて

男子達を含めた7強みんなに

お願いがあつてきたんだだけとね…」

ミヤ

「俺は断る」

ナツ

「アハハ…確かにいい予感はしません…」

キリト

「…ああ…確かに」

楯無

「ええー！」

ミヤ

「はあ…わかったよ…聞くだけ聞いてやる…」

楯無

「ありがとうー！」

えつとね…簪ちゃんの提案なんだけど…」

カクカクシカジカ

ミヤ

「…わかったよ…簪の提案なら仕方ないか…」

ナツ

「(おおお！あのミヤさんが！)」

キリト

「ハツハツハ！」

確かによくよく考えてみたらやった事ねえな！」

シャル

「ミヤー…クッキー売り切れ？」

ミヤ

「ん？ああ、俺が持つてるので最後」

シャル

「……そうだ！ミヤが届けて！」

お客があの子だから！」

ミヤ

「…了解」

少女

「おかーさん、クッキーまだかな！」

母親

「きつともうすぐよ」

ミヤ

「お待たせしましたー！」

お客（モブ）

「う…うわああ!!」

ミヤ

「シェフの気まぐれクッキーです！」

母親

「ほ、ほ、ほ、本物!？」

ミヤ

「え？クッキーですか？」

母親

「いやいやいや、篠木さんの方です！」

ミヤ

「もちろん本物に決まってるじゃないですか」

少女

「あ！おじさん！」

ズルツ

ミヤ

「やっぱりその呼びかたなのね…」

母親

「おじ！おじさんって！」

ミヤ

「ええ、私がこの子にチケットをあげました」

母親

「はわわわ！」

少女

「ヨウコねー！シャルロットさん好きー！」

ミヤ

「だとよー、シャルー」

シャル

「ええ！が、頑張らなきゃ！」

ミヤ

「カツコイイ…ああ…なるほど…」

母親

「本当申し訳ありません！」

ミヤ

「いえいえ、あの子から見れば

俺はおじさんの部類みたいものですよ」

母親

「本当に…申し訳ないです…」

ミヤ

「構いませんよ」

山田先生

「ミヤくん、何か手伝えるところありますか？」

ミヤ

「大丈夫だと思いまーす」

山田先生

「すいません、服がなかなか入らなくて…って楓お姉ちゃん!」

母親

「あれ?真耶ちゃん?」

山田先生

「何でこんな所にいるの!」

母親

「陽子がミヤさんからチケット貰ったから来たのよ」

ミヤ

「ええ…意外と狭い世の中…」

控え室にて

山田先生

「ええと、一応紹介します…」

昔、近所でお世話になった

篠宮楓さんです」

楓

「もう、他人行儀はやめてよ」

ピロン

ミヤ

「ん？メツセージ？」

『マキガミレイコニキヲツケロ…』

ミスターエックス』

ミヤ

「まきがみれいこ?に気を付けろ?

ミスターX?誰だ?」

清香

「みやサーン、なんか、指名です」

ミヤ

「え?指名?」

清香

「はい、巻紙麗子?つて人が」

ミヤ

「ツ!?!」

清香

「…居ないつてことで答えときましようか?」

ミヤ

「お願い」

楯無

「そろそろ移動出来る？」

ミヤ

「うい」

キリト

「ああ！」

ナツ

「はい！」

レイカ

「みゃー、頑張れ！」

アスナ

「キリト君…負けないでね？」

ホンネ

「えと…頑張つて！」

オン・ステージ！

ミヤ

「簪って…こういうのが好きなのか？」

簪

「いや！その！…なんて言うか…

……うん……」

ミヤ

「素直でよろしい」ナデナデ

簪

「…／／／／／／／／／／」

楯無

「…」ジ―

ミヤ

「…ふう…やれやれ…」ナデナデ

楯無

「!?」

ナツ

「…あの鈍いので有名なミヤさんが…」

キリト

「なー、ナツ…黒つて言う後半か追加要員

のイメージなんだが…」

ナツ

「だとしたら僕は白ですから…シルバー枠ですよ?」

キリト

「なのに、ミヤは…」

楯無

「だー! 違う!

ステージの用意できたわよ!」

ミヤ

「おお、そうか」

ナツ

「簪…ほんとにアドリブでいいのか？」

簪

「うん…後はこっちで合わせる…」

ミヤ

「ミヤレット！」

キリト

「カズトブラック！」

ナツ

「イチカホワイト！」

ミヤ

「三人揃って!」

キリト

「なんだ?」

ナツ

「何でしょう?」

ミヤ

「お前らなあ…そこはノリでなんとかしろよ!」

でもポーズから漂う、サンバル感…

鈴

「
∕
∕
∕
∕
」
チラッ

ミヤ

「？」

鈴

「…すんごい恥ずかしいわ…これ…」

ラウラ

「…うむ…」

簪

「やってみたかったけど…やってみると見ると恥ずかしい…」

シャル

「…僕は好きだよ？…こういうの…」

レイカ

「…エロい、あざとい、シャローチカ…」

シャル

「あざとくないよ!？」

ミスティア

「エロいのは認めるのね…」

ナツ

「…えーと…リスが鈴で兔がラウラ…」

犬が簪で猫がシヤル…」

ミヤ

「レイカとミスティアは人やね…」

キリト

「あーリスか…まな板の妖怪かと」

鈴

「…」ブチツ

ミヤ

「…堪忍袋の緒が切れる音がしたよ…今…」

鈴

「楯無さん…武器なら使っていいのよね？」

楯無（放送）

『構いませんよ!』

ミヤ

「…こりや…死んだな…」

キリト

「やべー！逃げろ！」

ナツ

「あの…ミヤさん…鈴、青竜刀投げてきてませんか！」

ミヤ

「うげー！シールドシエル！」

ナツ

「あ…キリトさんが…」

鈴

「安心しなさい…死んではないわ！」

ミヤ

「いや、怖いわ！」

簪

「山嵐…」

ミヤ

「ウエイ!？」

簪

「それは戦隊じゃなくてライダー…」

ミヤ

「シールド・ハードシエル！」

簪

「…逃げないのね」

ミヤ

「うぎやあ！跳ねるなあ！」

ドンガラガツシヤン

ナツ

「ミヤさん!？」

ミヤ

「大丈夫大丈夫…うわっ！」

ナツ

「ミヤさん!？」

楯無

「…みんな！舞台は中止！」

魚が餌にかかったわ！」

簪

「…ミヤから聞いた…ファントム・タスクが

学園祭に乗じて入ってきてるって…」

楯無

「だからミヤが囮になるって…」

そして今、見事にかかったの」

ナツ

「じゃあ助けに行かなきゃ！」

楯無

「いえ…私たちの仕事は網を張ることよ…」

ミヤは勝てる…でも相手は逃げるだろうから

逃げ道を塞ぐの…」

ナツ

「…わかりました！」

ミヤ

「いってえ…」

まきがみ

「大丈夫ですか？篠木ミヤさん」

ミヤ

「…ええ…」

まきがみ

「初めまして…私、巻紙麗子と申します」

ミヤ

「断ったはずですよ？」

まきがみ

「私の目的はあなたのISを頂くことですから」

ミヤ

「うん、察しはついてた」

まきがみ

「なら話が早い…零式をよこしなさい」

ミヤ

「…悪いけど…」

アンタらにあげられるほど安いもんじゃねえんだよ！」

まきがみ

「なら仕方ねえ…力尽くで奪ってやるよ！」

ミヤ

「来い、疾風・旋風！」

まきがみ

「あの時の餓鬼がまさかISに乗ってるとはな！」

ミヤ

「…あんたがオータムか…」

オータム

「そうだよ！お前の両親を殺した犯人さ！」

ミヤ

「…そうか…」

オータム

「おい、もつと怒れよ！」

ミヤ

「…」

オータム

「まあ！自分の正体すら分かっててもねえのに

怒ることなんて出来ねえよな！」

ミヤ

「!?」

オータム

「お前の両親は零式が

どういう代物なのか知っていてお前に渡した！

そしてお前はその力を使った！」

?

「それ以上聞くな！篠木！」

ミヤ

「この声って!?!」

オータム

「おい何しやがる！」

ミヤ

「須郷!?!」

須郷

「篠木ミヤ！事情は後々話す！だから今は共闘しろ！」

ミヤ

「はあ！ふざけんな！」

須郷

「ふざけてなどいない！」

「今だけでいい！私を信じろ！」

オータム

「テメエ!裏切るつもりか!」

須郷

「最初はそんなつもりは無かったが

事情が変わったんだよ!」

ミヤ

「…分かった須郷…お前を信じるぞ!」

須郷

「ああ…頼む!」

妖精王

オータム

「須郷！誰がお前を外に出してやったと思ってやがる！」

須郷

「お前らなのは分かっているが

こつちにも事情がある！」

オータム

「この！恩知らずが！」

ミヤ

「俺の存在も忘れるなよ！」

無限武装！三刃・アイリス！」

オータム

「クッ！」

須郷

「篠木！」

ミヤ

「少しでも変な素振りしてみろ！」

お前ごとやるからな！」

須郷

「ああ！分かってている！」

オータム

「クソ！」

逃げようとするオータム

ミヤ

「逃がすか！」

作戦の都合上、あえて追撃をかける

オータム

「そんなもの当たるか！」

?

「遅いぞ、オータム」

オータム

「チツ！うるせえ！M！」

M

「スコールの命令だ、撤退しろ」

オータム

「うっせえ！わかってるわ！」

楯無

「うっ…」

ミヤ

「マジかよ…外から味方が来るなんて…」

予測してたが…皆が負けるなんて…」

須郷

「仕方ない…相手がMだからな…」

ナツ

「須郷!？」

アスナ

「須郷さん!？」

キリト

「ミヤ! 避ける!」

須郷

「…仕方ない…か…」

須郷の首にキリトの剣が振り下ろされる

ミヤ

「っ!」

キリトの剣がミヤの剣で弾かれる

キリト

「ミヤ! 何でそいつを守るんだ!」

ミヤ

「分かんねえよ! 勝手に体が動いたんだよ!」

須郷

「篠木……どいてくれ……」

私は彼らに1度、殺されなければいけない存在だ」

ミヤ

「ダメだ！お前は理由があつて来たんだろ？」

なら、その目的を果たしてからにしろ！」

キリト

「……ミヤがそう言うなら……1発だけ殴らせろ……」

須郷

「構わない」

ゴスツ

東

「須郷君……今更……何なの？」

須郷

「東……これだ……」

東

「!？」

千冬

「東、どうした」

東

「ちーちゃん……これ」

千冬

「……!？」

おい！須郷！一体いつ！」

須郷

「……篠木の両親はいつ亡くなった？」

東

「十年以上前……」

須郷

「ミヤがS A Oにログインしたのは？」

千冬

「おおよそ2年前だ」

須郷

「この手紙が来たのは…一昨年の12月だ」

千冬

「はあ!?ふざけるな!」

須郷

「ふざけてなどいない!」

束

「ちーちゃん…この手紙…とんでもないこと書いてある…」

千冬

「…なに!?!」

束

「これ…本当の事?」

須郷

「ああ…私も最初は疑った…だが…」

千冬

「…篠木…嘘だろ…」

東

「ミーくん！」

ミヤ

「ん？」

東

「ちよつと来て！」

ミヤ

「わかった」

千冬

「明日から須郷を教員として学校で引き取る」

キリト

「はあ！ふざけないで下さい！」

千冬

「なんだ、文句でもあるのか！」

ナツ

「文句しか無いですよ！」

千冬

「…お前達の言い分も分かる！」

だが、今は堪えてくれ！」

須郷

「いや…やはり私はここにいてはいけない…」

アスナ

「…もし本当に、悪かったって思っているなら…」

「…」で謝ってください」

須郷

「…私がやった事は謝っても許されることではない…

だが…今はお前達の協力も必要不可欠だ…

私の事は許さなくていい…

だが篠木の為に力を貸してくれるのなら

謝ろう…申し訳なかった…」

レイカ

「…ミヤの為ってどういう事よ」

須郷

「…篠木は…もう人間ではない…」

レイカ

「!？」

ホンネ

「えっ!？」

須郷

「篠木は…」

ミヤ

「俺はアンドロイドみたいなもの…だろ？」

レイカ

「!!」

須郷

「ああ…」

ミヤ

「薄々気付いてたさ…おかしかったんだよ…」

俺だけ、ログアウトしたら病院じゃなくて家だったんだ…」

レイカ

「…1度…死んだって事!？」

ミヤ

「ああ…多分…二年ぐらい前のクリスマスだと思う…」

ミスティア

「…確かにあの日…ミヤ…動かなかったものね…」

ミヤ

「ああ…それに…最近になって体の調子が悪くなってきたんだ…

その理由…須郷、お前なら分かるんだろ？」

須郷

「ああ…お前の残り時間が一ヶ月を切った」

ミヤ

「！」

レイカ

「嘘!？」

須郷

「嘘ではない…」

レイカ

「ね、ねえ！解決策はあるんでしょ!？」

須郷

「ああ…ある事にはある…」

レイカ

「…よかった…」

須郷

「だが…もう手遅れだ…」

レイカ

「!？」

須郷

「篠木は零式の力で死なない体になった…」

だが…その代償は…」

ミヤ

「自分の残り時間…だろ？」

須郷

「ああ…この腕時計が篠木の残り時間を示している」

ミヤ

「…もって三週間…」

レイカ

「う…うそ…」

須郷

「代償の時間は…恐らく…一ヶ月から二ヶ月分…」

ミヤ

「もう、復活は出来ないって事か…」

レイカ

「…うそよね…お願いだから…嘘であって…」

須郷

「雷槌…」

ミヤ

「須郷…俺が言うよ…」

須郷

「…そうか」

ミヤ

「レイカ…俺を信じろ！」

レイカ

「…え…?」

ミヤ

「俺は消えねえ…お前が一番知ってるだろ？」

レイカ

「でもー！」

ミヤ

「手段が無いわけじゃない…」

成功するかは分からないけどな！」

レイカ

「…わかった…私は…あなたを信じる…」

ミヤ

「ありがとな」

須郷

「丸く収まったところで申し訳ないんだが…」

ミヤと同じアンドロイドの体を持った者が

フロントムタスクにいる…

そしてそれはミヤの零式を狙いに来る…

今回の作戦が零式の奪還及び篠木ミヤの殺害

という内容だったからな…」

ミヤ

「…そいつにも制限時間があるって事か…」

須郷

「ああ…ただ…篠木の様に充電する方法が無い

だから零式を狙っている…」

ミヤ

「…最初に最後の戦いつて事か…」

ピロン

須郷

「…噂をすれば…そいつからメッセージだ…」

『須郷君…君には失望したよ

せつかく脱獄させてあげたのになあ…

まあいいや、君が篠木ミヤのそばに居るのは分かっている
だから宣戦布告するね！

5日後にIS学園に総攻撃を仕掛けます！

と言つても、オータムやスコール、Mしか居ないけどねw』

ミヤ

「5日……長いようで短い……」

レイカ

「……負けない……絶対……」

須郷

「篠木……奴は自分の事をヴリドラと名乗っていた……」

ミヤ

「闇の竜？」

須郷

「奴の技は……敵を別の空間にしまい込む……」

「そんな技だ……」

ミヤ

「…須郷、5日ならどれだけ充電できるんだ？」

須郷

「…今から急ごしらえで装置を作るのに3日…」

リチャージ出来て合計が一ヶ月分と1日2日分になる位だ…」

ミヤ

「…充分…」

須郷

「…そういうと思ったよ…」

もう完成してるが…篠木…チャージ中の間

お前は零式から離れることが出来ない」

ミヤ

「どれぐらい？」

須郷

「チャージ出来るのは…8時間だけだ…」

ミヤ

「…装置が仮って事か？」

須郷

「ああ…充電の機械はどこかにあるらしいのだが…」

ミヤ

「いいよ！一ヶ月分まで貯まるなら！」

須郷

「ああ…夜の間にはチャージする…そこまで大きくはない…

寝る間近くに置いとくだけでいい」

ミヤ

「了解…ありがとよ」

須郷

「……」

東

「…須郷君…昔みたいな関係には戻れないけど…

それでも…私は君を信じようと思う」

須郷

「そうか…」

束

「だから、これ…」

須郷

「!？」

束

「IS…オベイロン」

須郷

「…ありがとう…」

束

「…ミヤくんをお願い…」

須郷

「ああ…任された…」

限られた時間　：守るべき人々

千冬

「お前ら今日は休みだ、しっかり休め、

次の休みは最終日だからな！」

全員

「はい！」

千冬

「篠木、お前は…」

知り合いたちに顔合わせるぐらいはしとけ」

ミヤ

「はい」

早朝7時半

弾

「いらつしやーい！つて、ミヤじゃねえか！」

ミヤ

「おいつス！」

弾

「お前んところも今日は学校休みか？」

ミヤ

「ああ…5日後に色々あるんだ…」

その関係でここに来た」

弾

「…ALOでもそんな真面目な顔しねえお前が

そんな顔するつてことは…」

俺らにもその色々の被害が来る可能性があるつて事か？」

ミヤ

「…ああ、弾が勘がいい奴で良かったぜ…」

弾

「安心しろ！俺の家族は全員お前を信じてる！」

つか！この辺り一帯の奴らがお前を信じてるから
安心しろ！」

ミヤ

「…ああ！ありがとな！」

弾

「うちで食ってくか？」

ミヤ

「いや、これから行かなきゃいけない所があるから」

弾

「そうか」

ミヤ

「じゃあ！」

弾

「おう！」

弾

「…つたく…ALOみたく無茶すんなよ？」

朝8時

店長

「あら！ミヤさん！」

ミヤ

「どうも、数日ぶりです」

店長

「どうでした？文化祭」

ミヤ

「いやもう、うちのクラス大盛況でしたよ！」

店長

「そうですか！良かったです！」

ミヤ

「あ、これ、商品で出したクッキーと同じものです」

店長

「うわ、ありがとうございます！」

ミヤ

「量が人数分＋10個位になっちゃったんですが」

店長

「…お店で出そうかしら…」

ミヤ

「先着でですか？」

店長

「…面白いかもしれませんね！」

ミヤ

「ですね！」

店長

「ところで、こんな朝早くどうしたんですか？」

ミヤ

「ああ…えつと、学園に宣戦布告がありました…」

5日後に…もしかしたらこつちの方にも被害があるかもしれないって事を伝えに来ました」

店長

「…そうなんですか…でも安心してください！」

このモールのお店の店員さん全員

ミヤさん達信じてますんで！」

ミヤ

「！」

店長

「5日後も働いてます！」

ミヤさん達ならきつとこつちまで被害が広がる前に
終わらしちゃうって思ってます！」

ミヤ

「…はい、そのつもりです！」

店長

「またいつか、お店に来てくださいいね！」

ミヤ

「はい！」

店長

「なんなら今入ります？」

ミヤ

「あ、いや…まだ行くところがあるんで…」

店長

「あら…そうですか…だから朝早く…」

ミヤ

「すみません…」

店長

「いえいえ、大丈夫ですよ！…」

5日後…絶対に勝ってくださいね！

ミヤ

「はい…それでは」

店長

「…あの頃の…SAO時代の貴方を知ってる身として…」

…貴方を心から信じています…」

午後3時

ミヤ

「フウ…お墓参りが最後か…」

須郷

「…篠木」

ミヤ

「…須郷か」

須郷

「…すまない…お前が…先生の息子だと気付かずに…」

ミヤ

「気にすんなって…」

俺は親父達をほとんど覚えてねえんだから…」

須郷

「…私もお前の幼少期に会っている…」

ミヤ

「…だろうね…そう思ったよ」

須郷

「…申し訳なかった…」

ミヤ

「…本当に申し訳ないって思ってたんなら

謝ってないで親父達に信念見せるべきだろ？」

須郷

「…ああ…そうだな…」

ミヤ

「俺是最悪今回の戦いで存在が消える可能性もある…

だけど…俺…諦めてねえから！」

須郷

「…私は何度も道を間違えた…」

それは許されるとは思ってはいない…

…だが…いや…だから！

せめて、先生達のためにも…篠木…ミヤのためにも

これからの道は間違えないことをここに誓う！」

ミヤ

「…5日後…背中預けるぞ？」

須郷

「ああ…任せたまえ」

ラスト・カウント

ミヤ

「特訓するのかと思ったら…」

機体のメンテで2日丸々使い切るか…」

レイカ

「…私達ならきつと大丈夫って思ってるんでしょうね」

ミヤ

「だろうな」

レイカ

「…にしても…今日はちよつと寒いわね…」

ミヤ

「だな…秋なのに…」

レイカ

「…」

ミヤ

「ほら、手…繋ぐか？」

レイカ

「…うん…あつたかい…」

ミヤ

「はは！…そうか」

レイカ

「…」

ミヤ

「…どうした？」

レイカ

「…温かい…温かいよ…」

涙を流しながら何度もつぶやく

ミヤ

「…そうか」

レイカ

「私、信じられない…こんなにも温かいのに…」

ミヤ

「……俺は確かに人じゃないけど……」

あくまで今は、心臓とかそのへんの重要器官だけらしい」

レイカ

「……じゃあ！」

ミヤ

「うん、まだほとんど人間だよ」

レイカ

「……そうなのね……良かった……良かったよ……」

ミヤ

「心配させたな……明日……絶対に勝とうぜ」

レイカ

「うん！」

ナツ

「ミヤさん…」

俺達は街の方を意識すればいいんでしたよね」

ミヤ

「ああ…」

ホンネ

「頑張ろう…ナツ君」

ナツ

「ああ！」

アスナ

「…明日…か…ミヤくん…」

ミヤ

「任せろって、お前ら全員守ってやるから」

キリト

「…ああ…任せたぞ…ミヤ」

須郷

「篠木…そろそろ」

ミヤ

「ん？ああ」

キリト

「…須郷！」

須郷

「なんだ？」

キリト

「…お前に頼みたくないが…ミヤを…」

「ミヤの背中を守ってくれ…」

須郷

「…ああ…責任をもつて守ろう」

アスナ

「…須郷さん…」

千冬

「さて…篠木…須郷宛にまた敵方からメツセージがあった」

須郷

「要約すると…」

シヨツピングモール方面は襲うつもりらしい…

メンバーは…スコール、オータム…M…

そして無人機数機らしい

篠木がもし戦いにくくなら奴は学園で

篠木が帰ってくるのを待つつもりらしい」

ミヤ

「待つてくれるのか…じゃあ…モール行くか…」

須郷

「そうか、なら私は学園で待機しておこう」

千冬

「待て！何故待つと確信できる！」

ミヤ

「簡単だよ？目的は俺なんだから」

俺を待つに決まってるじゃないか」

千冬

「いや、だが！」

ミヤ

「あとは、勘だよ」

千冬

「うっ……わかった……信じよう……」

ミヤ
「ありがとう…」

東

「…充電器…常に発電できて…排熱できる場所…

…あゝ！分からない！」

ミヤ

「ダバダバー？」

東

「うわっ！びっくりした！」

ミヤ

「東…何叫んでんだ？」

束

「いや……ちよつと……」

ミヤ

「……前を通りかかったら叫び声が聞こえたんでな」

束

「あ、ごめんね……」

ミヤ

「それだけだから、じゃあ！」

束

「……ミヤ君……リミット・バースト……五速はきつとミヤ君の

体に負荷をかけてしまうから……残り時間を消費してしまう

だからあまり使わないで……もし……もし相手の技に捕まって

異次元に飛ばされたなら……躊躇せず使つて……」

ミヤ

「……ああ……わかった」

ヴリドラ

「さあ…始めようか…最悪のショーを！」

最終章

絶望と希望

神装!白龍・桜蒼

決戦当日

ミヤ

「…よし…誰一人欠けず帰るぞ!」

全

「おお!」

オータム

「おお…雑魚が集まったか！」

スコール

「あまり怒らせない方がいいわ…」

彼…もう恐れのない瞳をしてる…」

ミヤ

「箒、セシリア、ミステイア、鈴、

シャル、ラウラ、簪、楯無

お前らは無人機を頼む！」

鈴

「任せなさい！」

スコール

「篠木くん…貴方は私が相手しましょう」

オータム

「はん!」

キリト

「俺達の相手はお前か」

ミヤ

「ナツ、ホンネ! Mの方を頼むぞ!」

ナツ

「OK!」

M

「織斑一夏…貴様を殺す!」

ナツ

「白桜剣! 壱ノ太刀!

桜刃！」

M

「チッ！」

ホンネ

「スキあり！竜装！ドラゴンスピーア！」

M

「っ！…ハアッ！」

ホンネ

「うっ……上がれエツ！」

M

「何!？」

槍ごとMを上を持ち上げるホンネ

ナツ

「白桜剣！終ノ太刀……染井吉野！」

そこに飛んできたのはナツの奥義だった

M

「っ!使いたくなかったが!」

ナツ

「うわっ!」

突然目の前が真っ暗になる

M

「お前らの I S はこの煙の中で動けない…

死ね」

ナツ

「クソツツ!動けっ!」

Mの武器がナツの首に振り下ろされる

ガキンツ

ミヤ

「ヌルフフフ、殺させませんよ」

M

「!?!」

スコール

「貴方が雷槌ね」

レイカ

「はじめまして」

M

「き、貴様はこの煙の中で動けるのか!？」

ミヤ

「煙? ああ、風起こして動いてるだけだ」

ナツ

「…ミヤさん」

ミヤ

「ナツ! アレやるぞ!」

ナツ

「え!?! いきなり!?!」

ミヤ

「躊躇すんな!」

ナツ

「ああ!もう!白式!リンク!」

ハヤテ

『リンク認証!行けます!』

ミヤ

「零式!白式・桜扇!」

M

「な!?なんだその武器は!」

白式の?セカンド・シフトにより増えた

羽のパーツがミヤの手元で扇の様な形に変形する

ミヤ

「白式です……うおお!桜龍螺旋!」

ホンネ

「煙が!」

M

「馬鹿な!？」

ミヤ

「今度はホンネ!」

ホンネ

「うん! 蒼龍! リンク!」

ハヤテ

『リンク認証! 行けます!』

ミヤ

「零式! ダブルリンク! 白桜! 蒼龍!

神装! 白龍・桜蒼!」

M

「な!？」

そこに立っていたのは

青と白の巨大なビームライフルを装備した

疾風だった

M

「……け脅!」ピキューン!!

ミヤ

「うお!?!強!?!」

オータム

「うがア!?!」

ミヤ

「おー…ヒット…」

M

「な!?!」

ミヤ

「次は外さない!」

M

「くっ!」

遠くへ逃げようとするM

ミヤ

「逃がさないよ！マドカちゃん！」

M

「!？」

動揺し一瞬動きが止まってしまったM

ミヤ

「shot！」

M

「うああ！」

ミヤ

「フウ…シールドエネルギー全損確認

リンク解除」

ナツ

「うおっと」

ホンネ

「んっ」

ミヤ

「救出つと…束ー！」

東

「呼ばれて飛び出てジャジャジャジャーン！」

ミヤ

「Mを頼む」

東

「頼まれた！」

キリト

「ウグツ！」

アスナ

「キャー！」

ミヤ

「次はキリトかよ！」

神装！黒閃・双剣！

オータム

「オラア！」

キリト

「くっ！重い！」

ミヤ

「零式！4速！ドラゴンダイブ！」

オータム

「オラア！」

ミヤの突進攻撃を弾く

ミヤ

「マジかよ!？」

オータム

「貴様ア…さつきはよくも！」

ミヤ

「ありや事故だ！」

オータム

「うるせえ！死ねえ！」

ミヤ

「うわっ！危ねえ！」

首筋ギリギリに剣が振り下ろされる

オータム

「チッ！ちよこまかと！」

ミヤ

「キリト！アレ！」

キリト

「分かった！リンク！」

ハヤテ

『リンク認証!』

キリトの羽パーツが消える

ミヤ

「後はタイミング次第!」

オータム

「させるかよ!」

ミヤ

「くっ! スキが無い!」

オータム

「死ねえ!」

アスナ

「させない!」

ミヤ

「アスナ!」

オータム

「邪魔しやがって!」

アスナ

「数秒だけ時間を稼ぐ!その隙に!」

ミヤ

「ありがとう!アスナ!」

零式!黒刃・王剣!

呼び出されたのは黒く大きな剣…そう

キリトがALLOにアスナを救いに行った時の剣である

オータム

「大きさだけのコケ脅しかあ!」

ミヤ

「くっ!重い!」

オータム

「オラオラオラオラ!」

ミヤ

「零式!4速!」

キリト

「ミヤ！危ない！」

オータム

「死ねえ！」

もう一度ミヤへと振り下ろされる武器

ミヤ

「あ、ヤベ……」

『相変わらず呑気ね』

ガキンツ！

オータム

「グハッ！」

ミヤ

「おお……ナイスショット、流石、氷のスナイパー様だね」

シノン

『ふん、別にあなたの背中撃ち抜いてもよかったのよ?』

ミヤ

「やめて、その弾、背中で喰らうとヤバイやつだから」

シノン

『そう、じゃあ私達は次のポイントに移ってるわ』

ミヤ

「おう、ありがとな」

シノン

『礼なら全て終わってからにしなさい』

ミヤ

「はいよ」

オータム

「ぐっ…グググ…」

ミヤ

「うおおおお!」

思いつき振り下ろす

オータム

「！」

ミヤ

「ハアツ！」

オータム

「グッ！」

剣の刃の部分ではなく一番面積の大きい部分で叩く

ミヤ

「アスナ！」

アスナ

「うん！リンク！」

ハヤテ

『…これが戦う前だったら楽なのに…』

リンク認証！行けます！』

アスナの羽パーツが消える

ミヤ

「零式!ダブルリンク!漆黒!閃陣!

神装!黒閃・双剣!」

ミヤの手に黒と水色の剣が装備される

ミヤ

「はあ…なるほどね…」

エリユシデータとダークリパルサーか…

ならやる技は!」

オータム

「う、うおお!」

ミヤ

「…スターバースト…ストリーム!」

最速の十六連撃がオータムを襲う

オータム

「ぐああ!」

ミヤ

「シールドエネルギー全損を確認…」

オータム

「く…くそお！」

ミヤ

「おっと、死なせないよ？」

オータム

「!？」

ミヤ

「別に罪を償わせる為に生かすんじゃないから安心して」

オータム

「…じゃあ、何故！」

ミヤ

「…人が死ぬのを見たくないから…かな？」

オータム

「…お前は優しすぎる…アラクネ！起爆！」

ミヤ

「…零式!オータムをアネクラから強制パージ!

…無限武装、エリアシールド!」

オータム

「!？」

ミヤ

「タバネンに零式のアップデート頼んどいてよかったわ」

オータム

「し、死なせろ!」

ミヤ

「やだ、断る」

オータム

「殺せえ!」

ミヤ

「…死ぬのが怖いくせに?」

オータム

「!？」

ミヤ

「アラクネを起動させた時あんなに怖がってた人が

死を望むとは思えないんだよね…」

オータム

「…そうだよ！怖いよ！悪いか！」

ミヤ

「いや、人らしいと思ってね…」

オータム

「!？」

ミヤ

「オータム…ヴリドラに脅されてたんだろ？」

オータム

「ああ…」

ミヤ

「解放してやる、俺たちに任せろ」

オータム

「…これが疾風の騎士の力…か…」

ミヤ

「はは!久々に聞いたな、その言葉」

オータム

「…お前達を信じよう…」

全て終わったら私はお前に忠誠を誓おう…」

ミヤ

「いらねえよ!」

オータム

「…そうか」

風の戦う理由

ミヤ

「ただいま」

レイカ

「アホ！何呑気な事言ってるのよ！」

ミスティア

「レイカちゃんにヘルプ頼まれたから

何事かと思ったらミヤがいないって…

一体何のために割り振り決めたのよ！」

ミヤ

「アハハ…すいません」

スコール

「…フウ…さっきオータムに話していた…」

ヴリドラ様を倒すって本気なのかしら？」

ミヤ

「…ああ、そのつもりだぜ」

スコール

「…すごい自信ね…でも何故か信じれてしまう…」

レイカ

「仕方ないわよ、それがミヤのチカラみたいなものだから」

ミヤ

「まあ、多分無限武装が完全に覚醒した時のアレが

理由なんだろうけどね…」

スコール

「詳しく聞かせてもらいたいわね」

ミヤ

「おや？戦う気は無いと？」

スコール

「ええ…私達は所詮ヴリドラの捨駒よ」

ミヤ

「随分はつきり言ったな…」

ミスティア

「…私は知ってるあの話よね？」

ミヤ

「ああ…」

キリト

『…何だかもう驚かねえわ…敵を信じるお前を…』

ミヤ

「ハッハッハ」

さてさて、ヴリドラ戦が迫ってるから

あまり長くは話せないけど…

昔話をさせてもらおう

千冬や箒達にも聞こえてるよね？これ

さて、お気づきの方もいると思うけど

俺の無限武装は一層目の時点で現れ始めてたんだよ

はい、キリト、ビックリしない：

あの時しどろもどろだったのに

気づかないお前にびっくりしたのは

こっちなんだからな

さて、話を戻そう

あれは20層目だっけ？

ギルドを作ってやっとな人が集まった頃の話だ

俺の無限武装の技が攻撃より

防御の方が多いのは気付いてたかな？

それは無限武装が覚醒した時、

俺がそう願ったからだと思うんだ

あの頃は俺とミステイアと…もう一人で

パーティーを組んでたんだ

キリト達ならこの噂、知ってると思うけど…

うちのギルド…疾風迅雷は誰一人死んでいないギルドだって

頭のいいアスナならもうわかっちゃうか…

そう…一度だけ…守れなかった

一人だけ守れなかった人がいる…

それがさつき言ったもう1人のパーティメンバー…

…その人はレイカと似ててね…

あの時レイカを守ったのは…ほとんど条件反射だったんだよ

話を戻そう…

20層迷宮区攻略中の話だ…

キリトにとっては似たような経験があると思う…

そう、トラップさ…モンスタートラップ

隠し部屋を見つけて宝箱を開けようとしたら

いきなりモンスターがポップしてね…

…今でも思うよ…あの時無限武装が使えてたらって…

あの頃は無限武装モドキだったんだ

単にストレージが人より多い…収納スキルだった…

うまく使えば取り出しの時に攻撃判定が出るスキルだった…

その時はミステイアが夜雀を使えたから使おうとしたら

背後にいたモンスターに攻撃されそうになってね…

それをあいつが…ライカが…代わりに攻撃を受けたんだ…

ほんの一瞬の出来事だった…

俺は背中合わせで戦ってたから

気づくのが一瞬遅かったんだ…

ライカの声で気付いて振り向いたら…もう…

…その時…

また…守れなかったって…言ってたんだよ…

その当時は記憶が無くなってたのに…

心の奥底では覚えてたらしくてね…

心の底から絶望しかけた…

でも…最後の最後にライカが俺に言ってたんだよ…

『今は…今だけはミステリアさんぐらいは守りなさい！

そしてもう…誰も死なせない覚悟で戦いなさい！』

つて言つて…消えたんだ…

その言葉のおかげでなんとか立ち上がれたんだ…

でも…モンスターは非情だね…

ミステイアがまた狙われたんだ

…あと1歩届かない距離で

その時、願ったんだよ…

『守る…仲間を…絶対に…』

もう…誰も死なせない！』

つてね…

その時…偶然なのかな、

無限武装がソードスキルに変わったんだよ

ミステイアがバテて膝ついてたからもうヤケクソで

全武器召喚してめちやくちやに回したんだ…

その時、トラップのスイッチも一緒に壊したらしくて

レベルとトラップ解除系のスキルが上がってたんだ…

まあ…千刃より多く出したせいで

終わったことを確認して倒れたんだけどね…

ミヤ

「これが俺の昔話」

レイカ

「…姉さん…」

ミスティア

「…!!?」

ミヤ

「…だろうね…言ってたもん…」

『妹がいるの…未来の歌が私』

麗しの華が妹』

ってね…」

レイカ

「そうか…姉さん…現実に戻ってきた時のあの笑顔…」

そういう事だったんだね…」

ミヤ

「…ん?」

レイカ

「ん?菊岡さんから聞いてないの?」

ミヤ

「何を？」

レイカ

「半年して意識が戻った人が数人いるって」

ミヤ

「What？」

レイカ

「この間姉さんも意識が戻ったんだ」

ミヤ

「へ？」

レイカ

「あの事件で亡くなった人は本当ごく少数みたいよ」

ミヤ

「きーくーおーかー!!」

スコール

「ふふ…良かったじゃない…」

ミヤ

「…はあ…ああ…」

スコール

「じゃあ…その人たちのためにも…この世界…

未来を守りなさい！」

ミヤ

「言われなくてもそうするよ！

みんな！行くぞ！」

キリト

「おう！」

アスナ

「うん！」

ナツ

「はい！」

ホンネ

「うん！」

レイカ

「ええ！」

ミスティア

「うん！」

オータム

「スコール…あいつらを本当に信じていいのだろうか…」

スコール

「身をもって実感したんじゃないの？」

オータム

「…まあな…」

無限の可能性

ヴリドヲ

「やあ、やっと来たか」

ミヤ

「いや、本当に待ってるとは思わなかったわ…」

ヴリドヲ

「無駄な戦闘はしたくないからね」

ミヤ

「…なあ…須郷」

須郷

「篠木…気をつけろ…」

ミヤ

「分かってる…」

ヴリドヲ

「ねえ、篠木君、零式くれない？」

ミヤ

「あげれない…親の形見だし

コレ無いと俺死ぬし」

ヴリドラ

「じゃあ、交渉決裂だね」

ミヤ

「は？交渉にすらなつてねえよ」

ヴリドラ

「アハハ！そうだね」

ミヤ

「…疾風…念のため、リミット・バースト…三速」

ヴリドラ

「ハハッ！戦う気満々だね」

ミヤ

「…レイカ…もしもの時はお前に指揮を任せるぞ…」

レイカ

「…わかった…」

ヴリドラ

「くれないかー…なら…消えて」

ミヤ

「!?」

黒い歪みに吸い込まれ始めるミヤ

レイカ

「ミヤー！」

ミヤ

「来るな！」

ヴリドラ

「おお…踏ん張るねえ…だけど…無駄だよー」

ミヤ

「やべー！足が！」

足が浮き一気に吸い込まれていく

ミヤ

「レイカ！俺に構うな！」

そう言い残し吸い込ませていく

レイカ

「…ミヤ……」

ナツ

「つく！間に合わなかった！」

キリト

「…ふざけんなあ！」

アスナ

「ハアア！」

ホンネ

「神蒼！グラン・ブルー！」

ヴリドラ

「おっと、そのまま攻撃すると

篠木君に攻撃が当たっちゃうよ」

ホンネ

「!?」

ヴリドラ

「篠木君がここを出るには

彼にとつての無茶をしなきゃいけない」

レイカ

「!」

ヴリドラ

「でも、それでも成功率は半分を切る…可哀想に…

篠木君はここから出ることは出来ないんだよ!」

レイカ

「…何でそう言いきれなの…」

ヴリドラ

「ん?」

レイカ

「何で…そう言い切れるのよ!」

ヴリドラ

「簡単なことさ！僕が完璧だからさ！」

レイカ

「……ホンネ……あれ、貸して……」

ホンネ

「!？」

レイカ

「……早く！」

ホンネ

「わ、分かった！はい！」

レイカ

「……雷槍……龍鱗」

ヴリドラ

「おっと？それをどうするつもりかな？」

レイカ

「……来継……今出来る全ての電気をこいつに……」

電気を纏い見た目、大きくなる雷槍

レイカ

「…こいつで…っ！…いや…こいつを！」

なにか確信したように少し口角を上げるレイカ

ホンネ

「!?」

ヴリドラ

「ハハッ！君にそれを投げることは出来ない!!」

レイカ

「ぶん投げる！」

ヴリドラ

「何!?篠木君がどうなってもいいのか！」

レイカ

「…フフツ…ミヤなら大丈夫よ…」

ヴリドラ

「ハハッ！ならお望み通りにしてあげるよ！」

同時刻

異空間内

ミヤ

「アビヤアア…吸われちまった…」

ハヤテ

『呑気なこと言ってる場合ですか!?!』

ミヤ

「…んー…だつてこー…」

五速や無茶をしても簡単には出れないぞ?」

ハヤテ

『…うーん…』

空間を歪ませれるだけの火力とかが無いと…

やっぱり…』

ミヤ

「あ!?!あるよ!」

ハヤテ

『ああ!福音!』

ミヤ

「…ただ…どこに撃つか…ん!?!」

背中にキリトやアスナの気配を感じ振り向く

ミヤ

「あれ?もしかしてここだけ薄い?」

ハヤテ

『…それを逆手に取れば!』

ミヤ

「うお消えた」

ハヤテ

『…もしかしたらみんなが攻撃すると

ミヤにダメージが行くって脅されてるんじゃない？』

ミヤ

「…なるほど…じゃあ…用意しようぜ！福音！

ゴスペル・ウイング展開！

シルバーベル最大出力で発射準備！」

福音

『La!』

ミヤの頭上で空間が歪み始める

ミヤ

「おそらく…次に開くのは俺の死角だろう…」

そして開けるのはレイカだ」

その通りにレイカの気配を感じる

ミヤ

「多分吸い込む時…一瞬穴が開く…そこを一気に狙う！」

ハヤテ

『照準固定完了です！』

ミヤ

「後はレイカが…放ってくれれば…」

ハヤテ

『ゲス笑顔なら通じるんじゃない！』

ミヤ

「んなアホな…」

試しにやってみる

某少女のように歪んだ笑顔

ハヤテ

『レイカさん雷槍放ちました!』

ミヤ

「……行くぜ!福音!ハヤテ!」

福音

『La!』

ハヤテ

『エネルギー弾装填完了!発射出来ます!』

ミヤ

「行つけえ!シルバー・ベル!」

ミシッ

ミシミシッ

ピキッ

ミヤ

「くっ！足りない！」

ハヤテ

『ミヤ！雷槍！』

ミヤ

「そうか！ありがとよ！レイカ！

雷槍・龍鱗！力を貸してくれ！」

ピキピキピキツ！

ミヤ

「ドツセイ!!」

ヴリドラ

「なんだと!？」

レイカ

「フツ…やつと帰ってきたわね…」

ミヤ

「いや、あの笑顔で通じるとは思ってたわ」

レイカ

「ミヤがあんな笑顔する時は

大体相手の策を打ち破る手段を

思いついた時だもの…あの怖い笑顔…」

ミヤ

「え…マジ…」

ナツ

「ミヤさん！レイカさん！」

ミヤ

「なんだ？」

ナツ

「雑談してる場合ですか！」

ヴリドラ

「許さない…許さない…許さない

許さない許さない許さない

許さない許さない許さない!!!」

ミヤ

「おー…壊れたか」

レイカ

「なに物騒なこと言ってるの!？」

須郷

「端からミヤはこうするのが目的だったのさ」

レイカ

「え!？」

ミヤ

「自我が崩壊すれば勝てる…」

体の一部が情報の塊になって分かったことなただけど…

この体…人の感情を吸収することが出来るみたいだな」

レイカ

「…つまりどういふこと？」

ミヤ

「…自分の名前を闇の龍の名前にするくらいだから

絶望とかそういう負の感情を糧にしてきたんだと思つてね

だから自分自身で実行した作戦が失敗すれば自ずと

ドツボにハマると思つたんだ

糧にすればいいからちよつとのあればいいのさ

後は永久機関の如く、自分の力に飲み込まれてくわけだ」

キリト

「(☒ ω ☒) スヤア…」

アスナ

「!？」

レイカ

「なるほど…自分の感情に飲み込まれたってことね」

ミヤ

「ま、そういう事やね」

ヴリドヲ

「つはあ！」

ミヤ

「およ!？」

ヴリドヲ

「それ、が、狙い…か！」

ミヤ

「ああ」

ヴリドヲ

「ならなぜ！」

ミヤ

「俺が絶望の感情に飲まれないか…だろ？」

お前やっぱり馬鹿だろ…

俺が自分の力の源に負の感情を選んでなかっただけだ」

ヴリドヲ

「！」

ミヤ

「さて！ホンネ、ナツ！

ついでにセシリア、鈴！」

鈴

『いや、メンテしてもらってから

1度も試してもないのにいきなり!?

しかもついでって！ 안타！』

セシリア

『…いつもの事ですわ…』

ミヤ

「クワトロ・リンク！」

神装！白龍・桜蒼！ツイン！」

銃口が二つに増えた白龍・桜蒼

ヴリドラ

「そんなもの！いと容易くよけられる！」

ミヤ

「誰が完成って言ったよ」

鈴

『甲龍・改…リンク！』

セシリア

『ディープ・ブルーティアーズ…リンクですわ！』

ミヤ

「装填！ティア・バレット！ドラゴン・バレット！」

銃口に集まっていく

赤い光と青い光

ヴリドラ

「何!?!」

ミヤ

「穿てえ！」

放たれたのは光弾でもなく実弾でもない
結晶弾

ヴリドラ

「たつた2発！当たるわけないだろう！」

ミヤ

「…誰が2発って言ったんだ？」

ヴリドラ

「なんだと!？」

カン

ヴリドラ

「は、ハハッ！」

お互いにぶつかって壊れたじゃないか！
ミヤ

「お前さあ…学べよ…」

誰もそんな事言っただろ？」

セシリア

『本当に頭が良すぎると

結果ばかり求めるようになるのですわね…』

鈴

『ほんと、ミヤぐらい馬鹿が残ってると

割と接しやすいわよね』

ミヤ

「バカとは何さ！」

ヴリドヲ

「き、貴様ら！私を侮辱しているのか！」

ミヤ

「アンタ…こっちに視線をずらしてる暇ある？」

上見てみ」

ヴリドヲ

「な…何!？」

頭上には無数の青と赤の光

ミヤ

「青龍星群…避ける隙間なんて無いぜ？」

ヴリドラ

「まだ！逃げられる！」

ミスティア

「させない！」

パラライズナイフ！

ヴリドラ

「う、動けない！」

ミスティア

「あの世界の痺れナイフよん」

ミヤ

「なぜ今茶目っ気出した」

ヴリドラ

「ぐアア！」

ミヤ

「うわしぶとい…耐えやがった。」

ヴリドラ

「なぜだ！なぜ！」

ただの電脳世界で無駄な時間を過ごしたただけの
お前らに！なぜ私が苦戦する！」

ミヤ

「…簡単なことさ、あの世界で無駄なことなんて

何一つ無かったってことさ」

キリト

「仲間と戦い、技を磨き、己を鍛えた…」

アスナ

「あの世界が無かったら…私達は出会いもしなかった！」

ナツ

「時には喧嘩して、離れたりもしたけど…」

ホンネ

「でもだからこそ！今もみんなで戦える！」

ミスティア

「アンタにとっては無駄かもしれないけどね…」

レイカ

「あたし達にとっては…かけがえのない…」

大切なものなのよ！」

全

『テメエに何が分かるって言うんだ!』

ヴリドラ

「うっ!」

全

『覚悟は出来てんだろぅなあ!』

ヴリドラ

「くっ!……この手は使いたくなかったが……仕方ない……

行け! 無人機ども!」

空を覆い尽くすほどの無人機

ミヤ

「どけ……そこは……俺達の空だア!」

?

『強くなったな…篠木…』

アスナ

「この声って!」

キリト

「ヒースクリフ!?!」

ハヤテ

『ソード・シフト…システム…構築されました!』

ミヤ

「ハヤテ!ソード・シフト!」

ハヤテ

『システム起動!』

東

「うそ…あれって…」

千冬

「ああ…私も知っている…」

あれはミヤが昔描いていた

自分のなりたい正義の味方の姿そのものだ…」

ヴリドラ

「な、なんだその姿は！」

ミヤ

「強いて言うなら…疾風・旋風

モード・インフィニティ…って所かな？」

その姿、白き衣に身を包み

その瞳、聖なる光を灯していた

ミヤ

「さあ！ショータイムだ！」

東

「ミヤー！その姿なら楯無ちゃんや

箒ちゃんとのアレも行けるよ！」

ミヤ

「ああ！やるぞ！楯無！箒！」

楯無

「まっかせなさい！」

箒

「わかった！」

楯無

『リンク！』

ミヤ

「はあ！ミストトライデント！」

空を覆う無人機を目指し一直線に突き進む
ヴリドドラ

「は！ついに狂ったか！」

箒

「リンク！」

ミヤ

「ナイスタイミング！箒！」

紅装麗衣！」

ミヤのISが白から紅へと変わる

ミヤ

「行くぜ！」

霧紅神槍！ウラヌス！」

赤い霧が無人機を包み…そして壊す

ヴリドドラ

「な!!？」

ミヤ

「霧紅魔槍！ロンギヌス！」

ヴリドドラ

「がはっ!？」

ミヤの放った槍がヴリドドラを貫く

ヴリドドラ

「君は人を殺さないはず!…なのに何故!」

ミヤ

「…お前…人じゃないだろ?」

ヴリドドラ

「フツ…フハハハハ！」

確かにそうだな!

ミヤ

「ツ!？」

ヴリドラ

「私も残り時間が無い…」

だから零式が欲しかったんだけど…

零式は君を選んでる…

奪ったところで私は生き延びれなかったな」

ミヤ

「ふん…」

ヴリドラ

「君に最後のヒントをあげようか…」

ミヤ

「何のだよ…」

ヴリドラ

「充電器の」

ミヤ

「！」

ヴリドラ

「何の策もなく奪うわけないでしょ…」

と言つてもまあ…目安だけで確証は無いけど…」

ミヤ

「…オイオイ…」

ヴリドドラ

「ヒント

既に君の仲間の誰かが入ったことのある場所…」

ミヤ

「……」

ヴリドドラ

「君ならもう分かるよね？」

ミヤ

「…大体な…」

ヴリドドラ

「君の残り時間は

非常時充電器を作つて使つたから一ヶ月はあるんでしょ？」

ミヤ

「ああ……」

ヴリドラ

「一つだけ教えておくよ……」

僕と君の違いは記録媒体が有るか無いかだ

わかりやすく言うなら

セーブが出来るゲームか、出来ないゲームか……だね

どっちが電池切れした時痛い目を見るかな？」

ミヤ

「……束……あれ……投げろ」

束

「どっせえいー！」

パシッ

ミヤ

「つてことはお前も記録媒体があればいいんだろ？」

ヴリドラ

「まさか……」

ミヤ

「黒箱…IS 兼記録媒体だ」

ヴリドヲ

「最初ツからこれを渡すつもりだったの？」

ミヤ

「いや、もし奪われた時のために

保険で作ってもらってた奴だ」

ヴリドヲ

「…僕に恩を売るつもり？」

ミヤ

「そんなつもりは無い」

ヴリドヲ

「じゃあ、何故？」

ミヤ

「誰かが死ぬのを見るのは嫌だからな」

ヴリドヲ

「そうか…そういう人だったね…君は…」

でも、もしかしたら僕、裏切るかもよ？」

ミヤ

「そうなたったらまた貫いてやる」

ヴリドラ

「ハハツ！そうか…じゃあ、貫おうか」

ミヤ

「それと、これからお前はヴリドラじゃなくて

パンドラって呼ぶから」

レイカ

「…やっぱり…」

ホンネ

「…ああ…確かにそっくり…」

パンドラ

「…そうか…じゃあ、篠木くん…君は僕の主ね」

ミヤ

「…そう来たかあ…」

数時間後

IS学園地下…東ラボ

東

「…発電機…充電器…はあ!!わかったアア！」

ミヤ

「うるせえ！」

東

「分かったよ！充電器の場所が！」

ミヤ

「…お墓…だろ？」

東

「そう！地熱発電ならあの場所で作れるから！」

ミヤ

「…そうなる…俺は暫くあそこにいなきゃいけないのか？」

東

「ふっふっふー…安心したまえ！」

既にワイヤレス充電器を作っている！

欠点はあるけど…」

ミヤ

「…俺達のやれないことを平然とやってのける！」

そこに痺れる！憧れるウ！」

東

「フハハハハ！」

数ヶ月

冬休み

現実、エギルの店

ミヤ

「いやあ…案外生きてるわ」

レイカ

「本当に怖かったわよ…」

ホンネ

「うん…」

ミヤ

「あ、そうだ、もうすぐ三学期始まるから言うけど…」

俺、1年で卒業するから」

キリト

「…は？」

ナツ

「ハア!？」

ミヤ

「あの1件で国から高校の卒業資格貰ったし

旅に出るわ…あ、千冬や東には言ってるから」

ミスティア

「いやいやいやいや、ちよつと待て」

アスナ

「唐突過ぎて頭が追いつかない…」

第新章

マザーズ・ロザリオ

絶剣

A L O 内、ミヤの家にて

レイカ

「ねえミヤ」

ミヤ

「ん?」

レイカ

「絶剣って知ってる?」

ミヤ

「着るヤツ?」

レイカ

「それはゼツケン」

ミヤ

「洗うやつ？」

レイカ

「それは石鹸……」

ミヤ

「じゃあ……」

レイカ

「無理に絞り出さなくていいから！」

ミヤ

「ウイツス……」

ナツ

「俺達これから絶剣さんに会いに

行こうと思ってるんですよ」

ミヤ

「はー……面白そう！」

キリト

「そう言うと思ったぜ」

ホンネ

「そう言えば、アスナさんとミステイアさんは？」

ミヤ

「アスナとミステイア、ついでに涼真は

京都だよ、アスナの家の本家…だっけ？」

のパーティーらしい…」

キリト

「ああ…実を言うと…俺…アスナのお母さんに

来ないか？…って聞かれてたんだよ…」

ミヤ

「…変わったなあ…あの人も…」

キリト

「アスナって美人でしょ？」

彼氏を連れていたら男も寄ってこないし

君も安心出来るだろう？

って言われたんだ…

まあ、アスナに止められたケドね」

ミヤ

「仮にも俺達って世界を救った7人って言う

謎の扱い受けてるしな…別にそんなことしてねえのにな」

キリト

「行ったらサイン求められるヤツだよな…」

ミヤ

「ハッ！そういう事か…」

娘とその彼氏が世界を救った

ヒーローだって事を知らしめるためか！」

キリト

「さて、そろそろ行こうぜ」

ミヤ

「おうよ」

ナツ

「行きますよ！

転移！」

ミヤ

「ほー…アインクラッド23層か…」

キリト

「そう言えばミヤ、今回のアップデート…」

ミヤ

「ああ…物凄く驚いてる」

ナツ

「よし、じゃあ俺から行きます」

?

「あ、君も僕と戦う?」

ナツ

「はい！ナツって言います」

？

「僕、ユウキ！よろしくね！ナツ！」

ミヤ

「あの自己紹介いるか？」

キリト

「いらぬいかもな…」

ユウキ

「お兄さんも、今回のアップデートで強くなったなタイプの人？」

ナツ

「…あー…強くなったっていうか…戻った？」

キリト

「だな」

ミヤ

「…そうなるな」

ユウキ

「へー…じ、じゃあ！お兄さん達は元S A Oプレイヤー！！？」

ミヤ

「…うん…まあ…」

ユウキ

「1度でいいから戦ってみたかったんだよね！」

ナツ

「なら…俺よりミヤさんの方がいいんじゃない？」

ミヤ

「余計なこと言うなよ…ナツ」

ユウキ

「え！お兄さんが一番強いのか？」

ミヤ

「強いつていうか…手数が多い？」

ユウキ

「フムフム…じゃあ、お兄さん！」

ミヤ

「ミヤです」

ユウキ

「じゃあミヤ！僕と勝負して！」

ミヤ

「…まあ…こうなるよな…」

キリト

「ミヤ…ドンマイ…」

ユウキ

「僕…噂で聞いたんだけど…」

旧アインクラッドの攻略組の中で強い7人のプレイヤーが

いるって話…ほんと？」

ミヤ

「本当…の事だな」

ユウキ

「じゃ、じゃあ！その人達って今どこにいるかわかる!？」

ミヤ

「…」

キリト

「目の前に…」

ユウキ

「え?」

ミヤ

「どうも…疾風の騎士…ミヤです…」

ユウキ

「え?」

ミヤ

「言つたろ?戻つたつて…」

ユウキ

「ま、まさか」

ガヤ

「嘘だろ…あれって伝説の…」

ギャ2

「本物の7強だ！2人ほど居ないけど！」

ミヤ

「ほらこうなった…」

ホンネ

「キリト君…気をつけてって何度も言ってるよね？」

キリト

「すまん…本当にすまん…」

ユウキ

「はわわわ！ね、ねえ！ミヤ！僕と無限武装で戦つてよ！」

ミヤ

「…いいぜ？負けねえよ？」

ミヤ

「花の型！三刃！アイリス！」

ユウキ

「うわっと！」

ミヤ

「華ノ型！千刃！ソメイヨシノ！」

ユウキ

「うわわ！」

ミヤ

「速いな……」

ユウキ

「えへへー、じゃあ今度は僕が！ハアツ！」

ミヤ

「防御！陽炎！」

ユウキ

「うわっ！」

ミヤ

「っ！」

ホンネ

「ミヤの陽炎が消えた!？」

ナツ

「ユウキが速いんだ、だからその速さで消したんだ

無意識に」

ミヤ

「次に千刃が使えるまで…あと二十秒…」

ユウキ

「ハアツ！」

ミヤ

「持たない奴だわコレ…」

ユウキ

「行くよ！僕のOSS！マザーズ・ロザリオ！」

ミヤ

「なら！こつちも！シルバリオ・ゴスペル！」

レイカ

「うっそーん……」

ミヤ

「ビームは出ませんがね！」

レイカ

「出たら困るわ！」

ミヤ

「てか、ハツタリだし」

レイカ

「いや、おい！」

ユウキ

「ハアツ！」

ミヤ

「防御！セラス・アテナ！」

ユウキ

「負けないよ！」

ミヤ

「こつちだつて！」

ミヤ・ユウキ

「ハアアアアア！」

ユウキの放った高速の十一連撃

その攻撃はミヤの盾に着実にダメージを刻んでいく

ピキッ

ミヤ

「うげっ…」

ユウキ

「これで！」

ミヤ

「…フフツ」

ユウキ

「！」ゾクツ

ユウキが十一連撃目を放った瞬間ミヤが盾を消す

その視線の先には剣の高さより遥かに低く屈んでいるミヤが居た

ミヤ

「終ノ型！千刃！黄泉！」

ユウキ

「うわあ！」

勝者、ミヤ

ミヤ

「ライム…居るんだろ？」

ライム

「さすが団長」

ミヤ

「頼むわ」

ライム

「蘇生だね、待っててねえ」

ミヤ

「最後のはすまなかった…大人気ないことしたわ…」

ユウキ

「いや！凄く楽しかった！」

僕…7強の皆にお願いしたいことがあるんだ！」

スリーピング・ナイツ

アスナ

「えーと？」

ミステイア

「これは…」

リヨウマ

「どゆこと？」

ユウキ

「はじめまして！」

ミヤ

「えつと…まず…」

こちら新生7強のアスナとミステイア

アスナ

「どうも?」

ミステイア

「はじめまして?」

ミヤ

「んでこの人は、リアルでもお世話になってる

専属鍛冶屋のリヨウマ

リヨウマ

「ちわつす」

ユウキ

「これが7強…凄いや!」

戦わなくてもわかる…強いつて!」

アスナ

「ねえ…どういう状況なの?これ」

ホンネ

「キリトさんがやらかしました」

キリト

「おい!そこだけ切り抜くな!」

ミヤ

「間違えでは無いだろ？」

キリト

「クソツ！否定出来ない！」

アスナ

「キリートーくーん…：どういう事かなあ？」

キリト

「イヤ！その！」

ユウキ

「ねえねえ、ミヤ…」

「本当にキリトさんって強いのか？」

ミヤ

「普段はあんな感じだけだな…」

昔は強かったぜ？

今はもう、命かけなくてよくなったから

昔に比べたら全員弱くなってる方だぜ？」

ユウキ

「ええ…こんなに強者のオーラを放ってて？」

ミヤ

「さて、アスナ、この人たちは

スリーピングナイツの皆さんだ」

アスナ

「話が入ってこないんだけど…」

ミヤ

「んー…簡単に言ったら依頼主的な？」

アスナ

「…なんとなく分かったわ…」

ミヤ

「ちなみに最近話題の絶剣さんはこの子だ」

ユウキ

「どうも！ユウキです！」

アスナ

「ああ…なんとなく分かった…」

ユウキさんと戦ってる時にキリト君が7強って
事を言っちゃったのね？」

キリト

「そ、そうですね…」

アスナ

「さて、お仕置きが必要みたいね」

キリト

「ヒイツ！」

ミヤ

「隣の部屋、防音設備整ってるから使っていいぞ」

アスナ

「レイカちゃん、ミヤ君ちよつと部屋借りるね」

ユイ

「たまにお母さん…怖いです…」

ミヤ

「今回はキリトが悪い…」

この後30分ほど説教されたらしい…正座で…

ミヤ

「へー…正座しすぎるとスタンのデバフ付くのか…

凝ってんなあ…」

キリト

「うう…」

アスナ

「さて、ミヤくん詳しく説明して」

ミヤ

「えつとな…」

ユウキ

「僕達、新生アインクラッドのボス攻略をしたいんだ！」

ミヤ

「ほら、今回のアップデートでギルドじゃなくパーティーなら

2パーティーまでなら名前が石碑に載るじゃないか？」

アスナ

「あー、そうなんだ」

ミスティア

「つてことは…一緒に攻略をすればいいのね？」

ミヤ

「そゆこと」

アスナ

「でも…7人までよね？パーティー組めるのつて…」

ミヤ

「だから誰か1人スリーピングナイトに

派遣するつて話をするために

集まってもらいました」

ホンネ

「まあ…ほとんど決まってるんですけどね…」

アスナ

「…もしかして…私？」

ミヤ

「そうです」

アスナ

「ヒーラーを派遣するって危くない？」

ミヤ

「3枚壁が2枚になるだけだから多分大丈夫……」

それに一緒に攻略するんだからむしろ増える方だろ」

アスナ

「あー……そうだったね……」

ユウキ

「ええ！ほんとに閃光のアスナさんがチームに入ってくれるの！」

アスナ

「うん……まあ……よろしくね？」

ユウキ

「よろしく！アスナ！」

アスナ

「(うわっ！この子眩しすぎる！)」

？

「ユウキ、アスナさんが困ってますよ！」

ユウキ

「ああ、ごめんごめん」

ミヤ

「シウネーさん…」

うちのバーサクヒーラーを頼みます」

アスナ

「その呼び方はヤメテ！」

the・脳筋パーティー攻略会議

ユウキ

「いやあ！強いね」

ミヤ

「いや、まあ…普通だった二つのパーティーで

挑むもんじゃねえしな…」

ユウキ・キリト

「だから面白いんじゃないか！」

ミヤ

「脳筋って怖いです…」

シウネー

「皆さんが早すぎて回復が間に合わないんですよね…」

レイカ

「流石に蘇生魔法は覚えてないし…

ライムさんを呼ぶか…」

リヨウマ

「完全に足引つ張ってしまつて申し訳ない！」

ミヤ

「初心者なんだから仕方ないよ」

リヨウマ

「リズさんの所に行つて修行してきます…」

ミスティア

「…あんなこと言うとき大体無茶するのよね…

ごめんミヤ」

ミヤ

「行つてやつてくれ」

ミスティア

「うん」

ミヤ

「いや…二人抜けか…手痛いな…」

ライム

「…」チラツ

ミヤ

「…ライム…」

ライム

「へい！団長！」

ミヤ

「…一旦パーティーに入ってくれ」

ライム

「…な…7強と同じパーティー…」

「ありがたき幸せ！」

レイカ

「この人…こんなキャラだっけ？」

ミヤ

「…テンションが天元突破でもしたんだろ…」

ユウキ

「うーん…7強の力を借りても難しいのか…」

ミヤ

「今回は…全員サポートにまわってたから…」

ユウキ

「え!?!」

ミヤ

「俺達が前に出るより、ユウキ達を前に出してたんだよ…」

ユウキ

「つまり?」

ミヤ

「俺達は一步後ろにいたって事…」

だから次は俺らも前に出る」

ライム

「と言ってもヒーラーは後ろですけどね」

ミヤ

「いきなり素に戻るな」

ミヤ

「いや、あと一人足りひんねん！」

キリト

「スグはログインしてはいるけど…」

リズやシリカと一緒に仲良くなったプレイヤーと

なんかアイテムを取りに行ってるみたいだしな…」

ホンネ

「クラインさんはお仕事だし…」

アスナ

「エギルさんも…」

ナツ

「織斑先生や東さんも忙しいみたいだし…」

レイカ

「…一人…いるよ」

ミヤ

「シノン？アイツ学校だぞ」

レイカ

「姉さん」

ミヤ

「…」

？

「へーい！提督ー！」

ミヤ

「金剛さん!？」

？

「どうやらその反応は本物みたいだね…ミヤ！」

ミヤ

「…久しぶりだな、ライカ」

ライカ

「アツハツハツハツハツ！私も死んだもんだと思ってたんだけどね！

なんか生きてた！」

ミヤ

「…あー…このあつけらかなとした感じ…本物だな…」

ライカ

「いやーでも世間って狭いねえ！」

あの時の泣き虫ミヤくんが今や妹の彼氏だものね！」

ミヤ

「うっせー、お前ん家が三姉妹なのはお前の話で分かってたが

全員と関わるとは思ってもなかったからな！」

ライカ

「んでミヤはお困りの様だね」

ミヤ

「ああ…」

ライカ

「なるほど…お困りミヤ君か…」

レイカ

「もしかして…ミスティアが言ってた泣き虫ミヤくんって」

ミヤ

「こいつが始まり」

レイカ

「ごめん…」

ミヤ

「おそらく俺達、7強が失敗したって噂が広まってるだろう

そのせいで我先に攻略しようとする奴らが現れるだろう…

もし、ズルして攻略班が待機班を待たしている場合…

待機班を全力で蹴散らす！いいな！」

全員

「おう！」

レイカ

「それ…PKなんじゃ…」

ミヤ

「ハハ…」

ブラッキー・アンド・ウィンディ

ユウキ

「転移してもボスのところまでがながいよー」

アスナ

「まあ、転移座標固定する前に入っちゃったからね…」

ナツ

「あれ？ミヤさんとキリトさんは？」

レイカ

「姉さんも居ない!？」

ホンネ

「あー、さつき、レイカさんに2人とも呼び止められてたよ」

ナツ

「なんと!」

ホンネ

「でもミヤさんがすぐ追いつくって言ってたから大丈夫だよ」

レイカ

「そう、なら大丈夫ね」

ちよつと脇道にて

ライカ

「ねえミヤ坊」

ミヤ

「誰じゃい!？」

ライカ

「ホンネちゃんとナツ君が

結婚を前提にお付き合いしてるってほんと?」

ミヤ

「ああ」

キリト

「なんでそんなこと知ってたんだ？」

ライカ

「私、今、ブライダル関係の仕事をしててね…」

有名な人達のそういう話をよく聞くのよ」

ミヤ

「はー…んじや、ナツたちに教えた方がいいか？」

ライカ

「出来ればぜひ！」

ミヤ

「そうだ、俺も聞きたい事が！」

ドタドタドタドタ

キリト

「大人数の足音…」

ミヤ

「やっぱり今度聞いわ！」

「追うぞ！」

キリト

「ああ！」

ライカ

「うん！」

ボス部屋前にて

アスナ

「クッ！」

ユウキ

「キリがないよー！」

ホンネ

「ミヤさんが居れば…」

ナツ

「うわっ！いつの間にか後ろからも応援部隊が」

ライム

「離れすぎないで！回復できなくなるから！」

レイカ

「全員ヒーラーを囲むように並んで！」

テツチ

「はい！」

アスナ

「お願いキリト君！」

応援部隊モブー

「おお、やっぱり耐えるか…さすが7強」

キリト

「ミヤー！」

ミヤ

「え、マジでやんの？」

ライカ

「はい！速度上昇のバフかけたから！」

キリト

「ありがと！」

ミヤ

「はあ…行くぞ！」

まるで壁に重力が働いてるかのように壁を走る二人

ミヤ

「やれるもんだな…！」

そして応援部隊達の前へ

ミヤ

「助っ人登場！」

キリト

「悪いが、ここから先は通行止めだ！」

応援部隊モブー

「おうおう、流石の黒の剣士と疾風の騎士でも

この人数相手は難しいんじゃないか？」

？

「2人だけならね」

ユニークスキル 夜雀

？

「流石に師匠がこの程度の人数……」

苦戦するとは思えないのですが」

ユニークスキル 剣舞

？

「リズさん直伝！」

鬼殺しハンマー！」

マスターメイサー

クライン

「俺も実はいるぜ！」

ライカ

「あ、お久しぶりです」

ミヤ

「おー、ミステイア、間に合ったか」

ミステイア

「言われた通り箒…ツバキちゃんも連れてきたよ！」

ツバキ

「私もユニークスキル持ちだったとは…」

ミヤ

「はっはっは！ユニークスキルでもなきや

始めたばかりの人が高レベルランカーを

吹っ飛ばせないからね」

クライン

「絶剣と一緒に攻略してる事を

なんで教えてくれなかったんだよ！」

ミヤ

「オメエ、口軽いし声デケエんだよ！」

クライン

「いや、あれは本当にすまんかったって！」

応援部隊モブー

「何人集まろうが同じだ！」

メイジ隊！」

ミヤ

「キリト、任せるぞ！」

キリト

「ああ！」

キリトは要望通り飛んでくる高速魔法を全て切り落とす

モブー

「うっそー…！」

ユウキ

「うわあ！すつごーい！」

アスナ

「アハハ…やっぱりキリト君は凄いや

私達も負けてられないよ！」

ユウキ

「うん！行こう！」

ミヤ

「アスナ！ユウキ達と中に入れ！」

アスナ

「え！でも！」

ミヤ

「冷静に燃えろ！お前なら出来る！」

アスナ

「…うん！分かった！」

シウネーさん！ちよつとだけお願い！」

シウネー

「分かりました！」

待機部隊モブ2

「…あ、あれは…閃光のアスナ…」

総員退避！バーサクヒーラーだ！

ミヤ

「逃がしませんよ！鳥籠！」

モブ2

「うわあああああああ！」

ミヤ

「お前らの敗因は呼んではいけない名前を

呼んだからだ…」

モブ1

「うっそー…」

アスナ

「キリト君！お願い！」

キリト

「おう！任せろ！」

ナツ

「俺達も残ります！」

ホンネ

「流石にこの人数じゃあ分が悪いですし」

レイカ

「吉報待ってるわよ！」

ユウキ

「うん！任せて！」

そして閉じていくボス部屋の扉

ミヤ

「さて…お前ら…7強の実力…見ていくか？」

モブ1

「の、望むところだア！」

5分後

モブズ

「うああ…」ガタガタ

ミヤ

「流石にさ……ここにいる7強+αはさ……」

命かけた戦いをしたことない人に

負けるほど弱くないんだよねえ……」

モブー

「こ、これが……最強の実力……無理だ……勝てない……」

ミヤ

「賢い選択だ」

モブ

「て、転移！」

キリト

「いやあ……弱くね？」

ナツ

「いや、俺達が強すぎるんですよ」

ミヤ

「はい、自惚れなーい」

ナツ

「ういつす…」

ホンネ

「後は…アスナさん達の帰りを待つだけ」

10分後

開いていく扉

その先に…

ユウキ

「イエーイ！」

アスナ

「勝てたよ！キリト君！」

ミヤ

「はーい、子供が見てる前でそんなことしなーい」

キリト

「後でな？」

アスナ

「うん！」

ミヤ

「やれやれ……」

祝杯……そして明かされるヒミツ

ミヤ

「ええ……色々ありましたが、攻略おめでどう！」

乾杯！」

ユウキ

「乾杯！」

ユージーン

「なんで私達も呼ばれてるんだ？」

サクヤ

「今回の攻略に関わった種族の長が呼ばれているんだよ」

アリシヤ

「ユージーンの所は7強と仲のいいクライン君や

スリーピングナイトのジユン君が頑張ったからね」

ユージーン

「…つまり…」

「7強と関わったことのある人間が呼ばれているって事だな？」

ミヤ

「まあ、そうだね」

ユウキ

「うわ、美味しい！」

キリト

「7強のうち、3人は調理スキルカンストしてるからな」

アスナ

「流石にS級食材をこんなに沢山使ったことは無いけどね…」

キリト

「ちなみに全員リアルでも料理が上手いぞ」

シウネー

「ぜひ、教えてもらいたい…」

ユウキ

「シウネー！」

シウネー

「あー！」

ミヤ

「……お前ら……なんか隠してる？」

ユウキ

「……えーと……うん……」

ミヤ

「そか、まあいいや、んな事より食え食え！」

ユウキ

「ええ!!そこ、気になって聞くとところじゃないの!?!」

ミヤ

「んー……なんとなくしんみりしそうだからさ

とりあえず今は楽しもうぜ？」

ユウキ

「……それもそうだね!……シウネー……」

シウネー

「うん…確かに…」

ミヤさん達になら話せるかも知れませんね…」

シリカ

「なんか美味しそうな匂いがしますね！」

ミヤ

「おー、シリカにリズにリーファ…とどちら様？」

？

「…えっと…お久しぶりです？」

ミヤ

「…あー…えっと…」

リズ

「元SAOプレイヤーで

こっちでもアンタに会った事あるらしいわよ」

ミヤ

「…あークロ！…じゃなくて…ルクス！」

ルクス

「お久しぶりです」

ミヤ

「あれはやめたんだね」

ルクス

「はい…逆でしたしね…」

ライム

「やあやあルツちゃん」

ルクス

「ライムさん!?!どこから!」

ライム

「いやあ…君の知り合いの」

シルフの女の子は胸が大きいねえ…ミヤ」

ミヤ

「あのなあ…お前は俺が」

追いかけて回されるのを見たいだけだろ?」

ライム

「イグザクトリー!」

レイカ

「……」モグモグモグ

ライム

「あれ？」

レイカ

「後でね」

ミヤ

「結局かよ……」

ライム

「ちえ……つまんないな」

ミヤ

「俺で楽しむな！」

リーファ

「じゃあ先に帰って晩御飯作っとくね？」

キリト

「ごめん、頼む」

ユージーン

「では、また」

ミヤ

「おう！」

サクヤ

「是非とも今度は攻略に参加させてくれ」

ミヤ

「そりゃ頼もしいな」

アリシヤ

「じゃあねー！」

ミヤ

「おー」

ユウキ

「…ミヤって何者？サラマンダーにケツトシー、

それにシルフの領主達と仲がいいなんて…」

ミヤ

「ん？俺が単に全領主を仲良くさせたただけだけだぜ？」

ユウキ

「うえ!？」

ジユン

「…とんでもねえ…」

ミヤ

「さて…残ったって事は何かしら話すんだろ？」

ユウキ

「うん…僕達の秘密…」

ミヤ

「…」

キリト

「…俺達はいない方がいいか？」

ユウキ

「いや、7強のみんなに聞いてほしい」

シウネー

「まず…私達、スリーピングナイツは…

再来月で解散します…」

ミヤ

「再来月って事は…三月か…」

シウネー

「はい…その理由ですが…」

ユウキ

「…シウネー…僕が言うよ…」

シウネー

「…すいません…」

ユウキ

「僕達はね…みんな…病気…なんだ…」

ミヤ

「…」

ユウキ

「それで…僕がもう居なくなる…」

アスナ

「!?」

ユウキ

「だから解散するんだ…」

だから…その前に記念になるものを残したかったの」

ミヤ

「…そうか…他にやりたい事なんて無いか?」

ユウキ

「…出来れば現実でみんなに会ってみたいけど…」

学校に行ってみたいかな?」

ミヤ

「よし…ちよつと待ってろ?」

いでよ! 束!」

束

「はーい! 久しぶりの登場、束さんだよ!」

ミヤ

「聞いてたな?」

東

「任せて、もう、どこからログインしてるかも検索済みだから
後はその病院の先生に許可を取りに行くだけだよ！」

ミヤ

「流石、東さん」

ユウキ

「えっと…もしかして…束って…」

ミヤ

「篠ノ之束」

ユウキ

「うわあ…本当に何者なの…」

眠る騎士達

ミヤ

「東の情報通りだとここの病院ですか…」
?

「あ…もしかして紺野さんに会いにきた方ですか？」

アスナ

「え？」

倉橋

「あ、申し遅れました、倉橋と言います…」

えつと…ユウキに会いにきた方ですか

と言い直した方がいいですね」

ミヤ

「あ、はい」

倉橋

「こちらです」

ナツ

「何で俺らが来ることを知ってたんですか？」

倉橋

「ユウキ君に

『7人ぐらいの大所帯が僕に会いに来るかもしれない』

と、言われまして…」

ホンネ

「大雑把だけど…正確な伝え方…」

倉橋

「…(´▽｀)です」

ミヤ

「…やっぱりか…」

アスナ

「!」

ミヤ

「病气つてことは

アミユスファイアではログインしてないってことだ…

だとしたら後はメデイキュボイド位しかない…」

東

「うん…茅場君が作ってた

設計図を元に作った代物だからね」

ナツ

「うわっ!？」

ユウキ

「アハハ、本当に来てくれたんだね!」

アスナ

「ユウキは…苦しくないの?」

ユウキ

「んー…苦しいっていえば苦しいけど…」

でも、みんなに会えたから元気だよ！」

ミヤ

「倉橋さん、ちよつと」

倉橋

「あ、はい」

ミヤ

「一つ、お願いしたい事が」

束

「ごめん、ちよつとその前に聞きたいことがある…」

あの子の病気って」

倉橋

「……エイズです……」

ミヤ

「…それって確か、今…この病院で

特効薬の開発が進んでるんだよね？」

倉橋

「はい…でも…」

あと1歩のところまでは来てるそうなんですが…」

ミヤ

「何かが足りない…」

倉橋

「はい…」

束

「案内して」

倉橋

「え？」

束

「案内してください」

倉橋

「えっと…どうして？」

ミヤ

「この人は……篠ノ之東、本人だよ」

倉橋

「!?」

東

「分かった? だから案内してください」

倉橋

「……お願いします!」

ミヤ

「東……俺にとつても最後の賭けだ……お前に託すぞ」

東

「任して、3日で作ってやる」

ミヤ

「ユウキ」

ユウキ

「ん？」

ミヤ

「お前…紺野って苗字だよな？」

ユウキ

「うん」

ミヤ

「ユウキ…お前…姉いたか？」

ユウキ

「!!…うん、いたよ…一年前に亡くなったけど…」

ミヤ

「…ラン…いや…藍子…だよな」

ユウキ

「何で、それを？」

ミヤ

「四年前…とあるゲームで知り合ってるはずだ…」

ユウキ

「四年前…あ…ああ！」

穿龍棍使いのミキヤ!？」

ミヤ

「…やっぱり…あの時の子か…」

ナツ

「えっと?」

ミヤ

「あー…えっと、四年前

VRになった某竜を狩るゲームをやった頃に

既に前のスリーピンググナイツと知り合ってたって事」

ユウキ

「ああ…言われてみたら…戦況の運び方、昔のままだ」

ミヤ

「使う武器の量は変わったがな!」

ユウキ

「アハハ!確かに!」

キリト

「へー…ってそのゲーム、今じゃプレミア付きだろ！」

ミヤ

「あー、らしいね…4年でプレミアって何でだ？」

キリト

「データの更新だけして

プレイヤーは増やさないからだよ！」

ミヤ

「んー…新しいカセット販売はしてないってことか」

キリト

「今じゃ、ネットオークションでも

六、七桁行くもんだぞ…」

ミヤ

「カセットで買ったのは正解だったのかな？」

ユウキ

「僕達はダウンロード版だからなあ…」

鐘の音

倉橋

「うわ、もうそんな時間ですか…」

ミヤ

「ここに来た本当の理由を忘れてた…」

束

「そうそう、倉橋さん」

倉橋

「はい？」

束

「ユウキちゃんを学校に行かせたい」

倉橋

「それは…退院してからでも遅くないのでは？」

ミヤ

「もしもの場合の保険だ…」

別にあの部屋から出てきてもらおう訳じゃない」

倉橋

「と、言いますと？」

束

「VR技術の応用だよ…」

みんなのISのコアにナーヴギアが使われてるからね

アレを使えばここに居ながら学校の風景が見える」

倉橋

「……そうですね…やってみましょう！」

ミヤ

「理解がある人で良かった…」

倉橋

「それが、ユウキ君の生きる希望になるかもしれないですし！」

束

「システムはもう出来てるから…ミヤくん出来るよね？」

ミヤ

「もしもの場合は須郷に協力してもらおうよ」

束

「ミヤくんなら失敗しないと思うけど…」

ミヤ

「ハハツ、じゃあ、4日後な」

東

「うん！」

倉橋

「すいません、お願いします！」

東

「任せんしやい！」

マザーズ・ロザリオ

病院突撃より、一週間後

ALOにて

ユウキ

「あ、そうだ、アスナ！」

アスナ

「何？」

ユウキ

「アスナに渡さなきゃいけないものが！」

アスナ

「え？」

ユウキ

「はい！僕のOSS！」

ミヤ

「おお…マザーズ・ロザリオか…」

ユウキ

「うん！あ、そうそう！」

東博士の作った薬がかなり効いてね！

信じられないくらい病原体が減っていつてるんだって！」

ミヤ

「ほう…東に任せたのは正解だったか」

ホンネ

「それより、ユウキちゃん、明日乗る機体決めた？」

ユウキ

「あ…忘れてた…まだ間に合うよね？」

チフユ

「間に合うと思うか？」

ユウキ

「ヒエー！織斑先生!？」

チフユ

「今はチフユだ」

ミヤ

「まあ、許してやってくださいよ

チフユさん」

チフユ

「…まあ、決めてこなかった場合

ミヤの疾風に乗ってもらうつもりだったかな…

それどころではなくなったが…」

ユウキ

「ヒイツ！」

チフユ

「ミヤ、お前の卒業資格…」

取り消しになった」

ミヤ

「あー…既に聞いている」

チフユ

「そうか…」

ミヤ

「別に大人になってからでも遅くは無いしな」

チフユ

「…何かやらかした訳では無いんだろな？」

ミヤ

「俺が理由を知りたいぐらいです…」

チフユ

「…一つ…非常に申しにくい事なんだがお前達には

1ヶ月後イギリスに飛んでもらう」

ミヤ

「へ？」

キリト

「また？」

アスナ

「イギリス…」

ナツ

「何で？」

チフユ

「…フアントム・タスクが返却した兵器…

エクスカリバーが暴走した」

ミヤ

「…あの大型宇宙兵器!？」

チフユ

「ああ…だからお前らには代表候補生達を含めた

最大戦力で挑んでもらう」

ミヤ

「キリト、アスナ、ナツ、ホンネ、ミステイア、レイカ、俺

箒、鈴、セシリア、シャル、ラウラ、簪、楯無の14人か」

チフユ

「全員リミッターの解除及び改修を行う為

開発国へ既に向かっている者達がいる…

篠木、お前は、ラウラ、シャルロットと共に行動しろ

奴らはまだ向かってない、

お前のISはデュノア社の協力も得て完成している
だからお前はシャルロット達と行動しろ

7強のほかのメンバーは国内開発だ

倉持技研で解除並びに改修作業だ：

全員揃うのは1ヶ月後、イギリスでだ：いいな！」

ミヤ

「へー！」

ユウキ

「…みんな！頑張つて！」

ミヤ

「あたぼーよ！」

ユウキ

「それにしても…宇宙か…じゃあ、写真お願い！」

アスナ

「地球の写真？」

ユウキ

「うん！」

アスナ

「分かった！」

ミヤ

「あれ？」一応疾風も元は国内開発機…」

チフユ

「既にミステイア・オルコットと倉持涼真

東が同行する事になっている」

ミヤ

「なるほど…」

真終章

約束の剣

リイン・カーネーション

ミヤ

「デュノア社来るの久々だな…」

シャル

「…完成してからは一切来なくなったもんね」

ミヤ

「いや、悪かったって」

シャル

「それはそうとラウラ…良かったの？」

僕が先で」

ラウラ

「うむ、元より私の機体は最新だ

母国からも篠ノ之博士に

メンテしてもらえと言われたしな」

ミステイア

「じゃあ、1ヶ月、丸々シャルロットちゃんに使えるわね」

東

「うっぷ…」

ミヤ

「涼真、ゲロ袋貸して」

涼真

「ほい」

ミヤ

「東、ほら」

東

「うっぷ」

自主規制

東

「あー、スツキリした！」

ミヤ

「それは自分で処理しろよ？」

東

「分かってるよ!？」

ミヤ

「…にしても…東が船酔いするとはな…」

東

「自分で運転する分には大丈夫なんだけどね…」

如何せん人の運転だと…うつぶ…」

ミヤ

「あー、思い出すな！思い出すな！」

デュノア父

「よく来てくれた」

ミヤ

「ども」

デュノア父

「相変わらず軽いな…君は…」

シャル

「お父さん、なんで僕を呼んだんですか？」

別にパッチ位なら僕だけでも…」

デュノア父

「お前に渡したい物があつてな…」

ミヤ

「ああ…完成したんでしたね…アレ…」

東

「フッフッフ…この私が手を貸したのだから

絶対完成するに決まってるじゃないか！」

ラウラ

「ちなみに何ができたんだ？」

デュノア父

「第三世代機だ…今回はちゃんと国に

娘が乗ると申請してある」

シャル

「え!?!」

ミヤ

「ただ…問題があるんだよな…アレ…」

シャルの過去の戦闘データを代入してあるせいか…

全く動かねえの…」

シャル

「え…」

デュノア父

「まあ…見ればわかる…こつちだ」

デュノア父

「…これだ」

シャル

「…コスモス…」

ミヤ

「…ただ問題は…シャル…今のI Sから乗り換えになる…」

シャル

「え!?!」

デュノア父

「…危険なのは分かっている…」

シャル

「…やだ…僕はこの子がいい!」

デュノア父

「お前の為なんだ!シャルロット!」

シャル

「いつもいつもそう言って僕に…母さんに！」

「どれだけの事をしてきたと思ってるの！」

デュノア父

「ツ…」

ミヤ

「…じゃあ…シャル…俺がその I S に乗る…」

「お前はリヴァイブだ…オツサン、アリーナ借りますよ」

デュノア父

「…あ…ああ…」

ミヤ

「ハツキング！」

ミヤ

「んー…シャルが近くにいますから起動したけど…動きにくく…」

シャル

「…何を考えてるの?」

ミヤ

「…ふふ、そのうち分かるよ」

東

「それでは…ウツプ…始め!」

シャル

「先手必勝!」

ラビットスイッチで高速で弾を補充しながら

ミヤに向かって連射するが…

ミヤ

「ふーん…連射力はこっちの方が高いのね…」

ミヤはほとんどの弾を撃ち落とし残りは避けていく

シャル

「グツ…」

一方シャルはリヴァイブより早い弾速で放たれた弾を

避けきれずほとんど被弾する

シャル

「……うなつたらー！」

ラビット・スイッチで銃から盾へと高速で切り替え

ミヤへと突進する

シャル

「うおおー！」

ミヤ

「仕方ない……ハヤテ……一本出して！」

手に握られたのは片手直剣

ミヤ

「そらアー！」

剣で盾を弾く

ミヤ

「なっ!?」

その先にはシャルはいなかった

ミヤ

「後ろか！」

剣を1周自分の周りを回す…が当たらない

シャル

「残念！上だよ！」

握りこぶしをミヤの肩へ振り下ろす

ミヤ

「ナンノ！」

その拳を掌で受け止める

シャル

「ハアアアアア！」

ミヤ

「…フツ」

キイイン

シャル

「なっ!?!」

その瞬間シャルが光に包まれる

ミヤ

「ぶぎやー！」

その光からミヤが吐き出される

ミヤ

「イテテ…この出され方はざつと一年ぶり…」

ラウラ

「ど、どういう状況なのだ…これは…」

ミヤ

「んー…俺が福音の翼を貰った時と似てるのかな？束」

束

「うん…でも今回は…」

机上の空論だったデュアル・コアシステムだから…ね…」

デュノア父

「大丈夫…なのか…シャルロットは…」

ミスティア

「あんたが自分の娘を信じなくてどうすんのよ…」

自分の子供のこことぐらい信じなさい」

同時刻…光の中

シャル

「うう…」

？

『目が覚めましたね…マスター』

そこには一人の女性が立っていた

シャル

「えつと…」

リヴァイブ

『私はリヴァイブ…あなたのISです』

シャル

「な…」

あまりの衝撃に硬直していると…

リヴァイブ

『あなたは…あの子をどうしたい』

リヴァイブは指を差す

シャル

「えっ？」

その方角を見る…そこには

泣いている女性が…

リヴァイブ

『あなたはあの子を…コスモスをどうしたい』

シャル

「!!」

泣いてる女性の正体は…

シャルロットの新たな機体…コスモスだった

リヴァイブ

『確かに私の方が長いのは確かです…』

でも…彼女の方が私より遥かに強い…』

シャル

「うん…それは…分かってるよ…でも…」

あの子が私のことを知っていても…

私はあの子のことを知らない…」

リヴァイブ

『…ええ…そうですね…』

物悲しい顔をするリヴァイブ

そこで私は提案する

シャル

「ねえ、リヴァイブ…ミヤさんの福音みたいに

二つをひとつに出来ないの？」

リヴァイブ

『きっとその答えを出してくると思ってましたよ…』

　　出来ませ…が、彼女が泣き止まなくてはダメです』

シャル

「分かった、話してくるよ」

シャル

「えつと…コスモス？」

コスモス

『…グスツ…何？シャルロットさん？』

シャル

「私…酷いことしちゃったよね…ごめんね…」

　　お父さんに強くなったところを見せたくて…」

コスモス

『うん…分かってるよ…』

　　私に乗ってた人が教えてくれたから…

　　それに…私の名前の由来も…』

シャル

「えっ……」

コスモス

『私の名前は……』

貴女のお母様が好きだった花の名前だつて』

シャル

「!!」

そうだ……コスモスは……母さんの……

1番好きな花だつた……じゃあ……この子は……!

コスモス

『私に乗つてた人が伝えてくれつて……』

『シャル……これで分かつたら?』

君のお父さんは……今も君のお母さんを愛しているつて

そして君は……誰よりも……両親に愛されている……つてね』

……シャルロツトさん……私も……あなたの力になりたい……』

シャル

「……お父さん……お母さん……」

うん…力を貸して…コスモス！リヴァイブ！
リヴァイブ

『話はまとまったみたいですね…』

光が薄らいでいく…

ミヤ

「…成功したみたいだな…」

そこに立っていたのは

二つのISのコアを持ったシャルだった

一つはコスモスの花の様な形のコア

そしてもう一つは

リヴァイブの待機形態の形をしたコア

シャル

「行こう…リイン・カーネーション！」

二つのコアから眩い光が発せられる

二つの光は大きくなり…一つになる

シャル

「ふう…」

そこに立っていたのはまるで花のような姿のISだった

東

「おお…これが…デュアル・コアシステムのIS」

ミヤ

「リイン…カーネーション」

シャル

「ねえ、ミヤ…疾風で戦ってくれない？」

ミヤ

「ふふ、ああ、いいぜ！」

こつちも戦ってみたくてゾクゾクしてたところだ！」

シャル

「いくよ！リイン・カーネーション！」

ミヤ

「来い！疾風！」

セカンドシフトの形態で呼び出される疾風

ミヤ

「ありや…」

あれは映画版最強フォームと言った所か…」

ガクン

シャル

「アレ？」

東

「んー…エネルギー切れだね…」

ミヤ

「ハハッ！お預けか！」

集いし騎士

イギリス某所

キリト

「んー…意外と短く感じたな…」

アスナ

「そうだね…やっぱりミヤ君が居ないと

静かね…」

ナツ

「それにしても…遅いですね…」

ホンネ

「何かあったのかな？」

レイカ

「…まさか忘れてるなんて…無いわよね…」

ミヤ

「それは無いから大丈夫」

東

「ウツプ…」

千冬

「そう言えば…お前は…乗り物に弱かったな…」

東

「ウツプ…オロ」

自主規制

ミヤ

「…間に合わんかったか…」

東

「ごべん…ウツプ…」

セシリア

「チエルシー…介抱をお願いできますか？」

チエルシー

「かしこまりました…お嬢様」

束

「すいません…」

箒

「ミヤさん…姉さんの介錯お願いできますか？」

ミヤ

「承知つかまつった」

束

「箒ちゃん!？」

ミスティア

「いやあ…篠ノ之博士を吐かせないようにするのが

やっとだったから…遅れちゃった」

簪

「博士を吐かせない…フフツ」

簪

「!?」

鈴

「言いたいことは分かるわ…簪」

シャル

「織斑先生、デュノア社から戻りました」

千冬

「よし…全員揃ったな…」

早速だが今回は、セシリア・オルコット

篠木、お前達が要になる」

ミヤ

「ん…無限武装で広範囲制圧して

セシリアが狙撃って流れかな？」

千冬

「その通りだ、束の話だと、エクスカリバーには

ほとんど弱点がない…と言うより

既存のISの武器は効かなくなっているらしい…」

ミヤ

「…どつかでそんな事があつた気が…どこだっけ…」

パンドラ

「…私の黒箱でも、ハッキングが出来ませんでしたし…」

ミヤ

「ああ！パンドラ！」

レイカ

「あ！未来から来たパンドラの暴走！」

ミヤ

「…まあ、あの場合は技だったけど…」

レイカ

「じゃあ…そつちの可能性が大いにあるってことよね…」

ミヤ

「まあ…何とかなるでしょ！」

千冬

「エクスカリバーは大型レーザー兵器だ…

故に弱点がある」

ミヤ

「照射機構か」

千冬

「そうだ、エクスカリバーがレーザーを

照射した後の5分間は熱により脆くなっているらしい」

セシリア

「そこを私が撃ち抜くわけですね！」

千冬

「ああ、だが…問題がある…」

ミヤ

「ん…俺が重要って事は…」

護衛的な意味で無人機が沢山居るってことか？」

千冬

「ああ、今のところ、確認できたのは千体ほどだ…」

ミヤ

「うわあ…」

千冬

「ちなみに…作戦開始は明日の夜明けと同時だ」

ミヤ

「ちなみに…失敗したら…」

千冬

「第三次…世界大戦…それぐらいは覚悟しとけ…」

キリト

「大惨事…世界大戦…」

ミヤ

「シリアスを壊すな！」アツパー

キリト

「グハッ」ピクッ…ピクピクッ

アスナ

「キリトくん！」

涼真

「えつと…今、みなさんのISに新しくつけられた

装備は、OVERS　　と言う装備です

簡単に言うと、紅椿の絢爛舞踏です」

ミヤ

「ふむ…わかりやすい…」

涼真

「まだ、安定しないので…壊れてしまった場合…

エネルギー切れを起こす前に帰投してください

一応全員分、予備は作ってあるので！」

ミヤ

「了解」

限界の果てのソラ

夜明け前

束

「じゃあ…みんな…そろそろ準備して！」

ミヤ

「おう！」

千冬

「誰一人欠けることなく…」

全員で帰って来い！絶対だ！」

ミヤ

「あたぼーよ！」

キリト

「はい！」

須郷

「…危なくなったら

地球に戻ってきても構わないからな…」

アスナ

「須郷さん…本当に変わりましたね…」

千冬

「一夏…」

ナツ

「任せてくれよ！千冬姉！」

千冬

「…織斑先生だ！

つと言いたいところだが…今は許してやる」

ホンネ

「…（あ、これ…後々怒られるヤツだ…）」

涼真

「ミステイア…君が帰ってきたら…

伝えたいことがある…」

ミステイア

「奇遇ね、私もよ」

ライカ

「じゃあ、絶対帰ってこなきゃだね」

レイカ

「なんで姉さんがいるの!？」

ライカ

「そりゃ、妹の晴れ舞台だもの！」

レイカ

「はあ…調子狂うわ…」

東

「みんな…準備はいいね？」

全

「はい！」

14人全員の声が揃う

東

「くーちゃん！カウントダウン！」

クロエ

「3…2…1！」

ミヤ

「行くぞ！お前ら！」

全

「おう！」

クロエ

「ゼロ！」

ミヤ

「…Go！」

13の光が空の果てへと翔んでいく

東

「まさか…こんな形で夢が叶うなんてね…」

千冬

「ISを宇宙に行かすというアレか…」

セシリア

「私は陸上待機なのですわね…」

千冬

「ああ、一撃必殺の弾丸は宇宙で撃つと

果てしなく飛ばされてしまう…らしいからな…」

セシリア

「なるほど…」

宇宙にて

ミヤ

「宇宙く！キタアー!!」

レイカ

「何やってんのよ！」

ミヤ

「いやあ…宇宙に来たらこれをやらなきゃかな

って思ってたさ…」

レイカ

「はあ…」

キリト

「おー…地球…綺麗だな…」

アスナ

「あ、写真撮らなきゃ」

千冬

『貴様ら！何を遊んでる！』

ナツ

「何で俺にプライベートチャネル!？」

千冬

『あ、すまない…』

ミヤ

「敵機集団確認！ 簪！ 山嵐で牽制！

ミスティア！ パラライズナイフで先頭を足止め！」

簪

「わかった！」

ミスティア

「了解！」

ミヤの指示通り、

簪が牽制し、ミスティアが足止めをする

ミヤ

「よし、全部無人機なのを確認！

行くぜ！ 無限武装・風の型！ 千刃！

龍戦乱舞！」

剣がまるで龍のように連なり敵を薙ぎ倒していく

？

「ふふ、流石に無人機では意味が無かったですか」

ミヤ

「やっぱり人が居たか」

？

「私達は銀翼の福音」

ミヤ

「…あれ？」

自分の機体の羽を見るミヤ

ミヤ

「(…これだよな…)」

？

「私はその攻撃部隊隊長、リュウ」

ミヤ

「いや、名前聞いてないから…」

リュウ

「篠木ミヤ…貴様さえ居なければ！」

レイカ

「ミヤ…何やったのよ…」

ミヤ

「いや、全然思い当たる節がないんだが？」

リュウ

「我々が支配する世界が実現できたというのに！」

レイカ

「あ、逆恨みね…これ…」

再び輝く希望の光

リユウ

「死ねえ！」

ミヤの喉めがけて斬撃を飛ばすリユウ

ミヤ

「いきなりかよ！」

ああもう！みんな！先にエクスカリバーに！

簪！俺の代わりはお前に任せる！」

簪

「ええ!?無理だよ！」

楯無

「簪ちゃん！簪ちゃんなら出来るわ!!」

簪

「!!」

ホンネ

「いざとなれば私達だっているから！」

簪

「…分かった！私…やるよ！」

ミヤ

「頼んだぞ！」

リュウ

「ふん…男共を通すとも思ってたか、来い！」

Poh

「…」

ザザ

「…」

宇宙を漂うゴミ…

デブリの影から現れたのは

ラフィン・コフィンの赤目のザザとPohだった

ナツ

「なっ!?!」

キリト

「!」

リユウ

「さあ…やれ!」

アスナ

「キリトくん!」

キリト

「アスナ! 行け!」

アスナ

「キリトくん…うん…私、行くよ!」

キリト

「ああ…すぐ追いつく!」

ザザ

「…」

ザザは無気力にキリトに切りかかる

キリト

「ん？」

ナツ

「ホンネ！任せたよ！」

ホンネ

「うん！待ってる！」

P o h

「…」

P o hはフラフラしながらナツに切りかかる

ナツ

「…なにかおかしい…？」

ミヤ

「ふたりともどうした？」

ナツ

「なんかおかしい気がするんですが」

キリト

「俺もだ…」

リユウ

「あら？ 気付かれました？」

ザザ

「…」

P o h

「…」

リュウ

「この2人は既に死んでますもの！」

ナツ

「な!?!」

キリト

「嘘だろ…」

ミヤ

「…」

リュウ

「彼らは死ぬ間際まで貴方達と戦って

死にたいと言っていましたわ

だから死んでから戦わせてあげますの！

まあ、私達って優しい！」

歪んだ顔で笑顔を作るリュウ

ミヤ

「あいつらが生に執着…おかしい…」

リュウ

「こんな素晴らしい私達が素晴らしい世界を作るのを

邪魔する貴方達は死ななきゃいけない存在なのです！」

ナツ

「それは違う…」

リュウ

「へ？」

キリト

「人殺しの作る世界が素晴らしいわけないだろ…」

リュウ

「いいじゃないですか！殺人鬼を殺しただけですわよ！

私達は正しい事をしたのですわ！」

ミヤ

「正しい事…ね…」

そんなのでめえらの価値観だろうか」

リュウ

「…」ピクツ

ミヤ

「せっかくあいつらを裁く法が出来たつていうのに…

捕まえる前にこれかよ…」

リュウ

「ええ！法での結果なんて見えてますわ！

だから先に刑を執行したのですわ！」

ミヤ

「…確かにそうかもな…」

あいつらは死刑だったかもしれないな…」

リュウ

「そうですわ！私達は全てを知っているのですから！」

ミヤ

「だけでも、お前らが殺していい理由にはならないよな？」

リュウ

「!?」

ミヤ

「同情するつもりは無いよ」

だが…くだらねえ理論ぶつけてくる奴は俺が潰す！」

リュウ

「世界をかき回した罪人の分際でえ！」

ミヤ

「着れちまったんだから仕方ないだろ…」

だが…こいつに乗れたおかげで色んなものを守れた…

だから…てめえが罪人って言うなら

その罪いくらでも背負ってやるよ！」

リュウ

「怯まないだど?!？」

ミヤ

「何があっても、もう！」

俺の光は消えやしない！」

その言葉と共に光を放つ疾風

リュウ

「何?!？」

光の中

ミヤ

「ええ？何ここ…」

？

『それがお前の答えか…』

ミヤ

「ヒースクリフ!？」

？

『まあ、篠木らしいな…』

ミヤ

「須郷!？」

？

『その答え…ずっと待ってたよ』

ミヤ

「束!」

ヒースクリフ

『さあ、もう一度…』

須郷

『お前が夢見た姿を…』

東

『奇跡の力を…希望の姿に！』

ミヤ

「はあ！」

リュウ

「そんな姿情報には無いぞ！」

ミヤ

「その情報って…そいつらから聞いたんだろ？」

リュウ

「!!」

ミヤ

「凶星か…悪いがそいつらが知ってるのは一年前の俺達だ

今の俺達のことはそいつらは知らないぜ？」

リユウ

「な!？」

ミヤ

「さて…今度こそ完全覚醒した

サードシフト…疾風改めて…

…光風の実力をとくと味わえ！」

共闘

ミヤ

「キリト！ ナツ！ 先に行け！」

ナツ

「は、はい！」

キリト

「了解！」

ミヤの何かを確信した顔を見て動き出す2人

リユウ

「させるか！ 行け！」

その二人を追うように

ザザとP o hに指示を出すリユウ

ザザ

「…」

P o h

「…」

リュウ

「行けって言うてんだろ！」

だが2人は指示を聞かない

ミヤ

「無駄だぜ？」

ザザ

「ふん…流石に貴様は騙せんか…」

ミヤ

「分かってて、メッセージを残したんだろ？」

ザザ

「ふん…」

ミヤ

「まあいい、とりあえず今だけ手え貸せ」

Poh

「…今だけだ…」

リュウ

「ふざけやがつけえ！」

ミヤ

「おう、本性現したぜ！ザザ！」

ザザ

「こんな隙だらけなのを外す方が難しい！」

リュウのISの関節のパーツのみを正確に撃ち抜くザザ

ザザ

「Poh！疾風の騎士！」

P o h

「I t , s a s h o w t i m e ! 」

ミヤ

「楽しい時間の幕開けですよ！」

P o hの重く強くそして素早い剣戟と

ミヤの超高速移動から繰り出される

連続攻撃にリュウは圧倒される

リュウ

「何故だ！お前らは敵同士のはず！」

なのに何故！そんなに息が合うんだ！」

ミヤ

「敵同士だからさ！」

P o h

「疾風の騎士の次の動きが分かるから

自分の次の動きを変えられる…ただそれだけだ」

リュウのI Sのエネルギーをみるみる削っていく2人

リュウ

「お前らのI S…いずれエネルギー切れを起こす…

それまで耐えてやる！」

ミヤ

「あ、それは無いよ」

リュウ

「!？」

ザザ

「俺達は疾風の騎士からエネルギーを貰っている…」

ミヤ

「それにO・V・E・R・S取り込んだりやったから…

ほぼムゲンなんだよね…」

リュウ

「な！そんな馬鹿な！」

ミヤ

「…だがこれが現実」

遂にリュウのISのエネルギーがゼロになる

リュウ

「馬鹿な…この私が…私が男に負けるなど…

ありえないありえないありえない

ありえないありえないアリエナイ」

ミヤ

「あ、壊れた…」

リュウ

「ゼンブ…マトメテ…キエロオ!!」

ミヤ

「つて言う割に俺に近付いてくんなやあ!」

高速でミヤに迫ってくるリュウ

P o h

「…チツ…ザザ…」

ザザ

「!?…分かった…」

ミヤの目の前でリュウ止めるP o hとザザ

P o h

「こいつは自爆する気だ…」

ミヤ

「だとしたらお前らなにやってんだよ！」

ザザ

「お前らを殺すのは俺らだ…。」

だからそれ以外のやつには殺らせない」

ミヤ

「なっ!？」

P o h

「とつとと行け…絶対に死ぬなよ…俺達が殺すまで」

ミヤ

「…だつたらお前らも死ぬんじゃねえぞ！」

絶対お前らを捕まえてやるからな！」

そう言つて戦闘区域から離脱するミヤ

リュウ

「ジャマダ！」

ザザ

「はあ…死ぬ気か…P o h」

P o h

「ああ…俺はな！」

ザザを思いつきり蹴り飛ばし地球の重力圏に押し込む
ザザ

「な!?!」

P o h

「敵を騙すなら味方からだ…」

ザザ

「ふざけるな! P o h!」

P o h

「…goodbye」

その瞬間辺りは白く染まる

絶対の宝剣

簪

「これで…最後！」

山嵐で無人機を倒していく簪
だが全てを倒せない

簪

「うっ…」

情報処理が追いつかず、頭に負荷がかかり始める

箒

「簪！下がれ！」

唸れ雨月！はあ！」

無人機に斬撃を飛ばす箒

鈴

「簪、あんたは先に降りてなさい！」

あんたが一番身体が弱いんだから！」

厳しい言葉を投げながらも簪を心配する鈴

簪

「うっ……ごめんみんな……」

ラウラ

「謝るな、お前がいなければこうは

いかなかっただろう……感謝する！」

レールガンを放ちながら簪を励ますラウラ

シャル

「戦闘区域ギリギリまで僕が守るから！」

エネルギーシールドを展開し簪を護衛するシャル

セシリア

『簪さん、私の照準の誤差修正お願いできますか？』

鈴

「あんた、疲れてる簪をもっと疲れさす気!？」

シノン

『誤差なら私が修正するわ』

ホンネ

「わあ!シノのん!」

シノン

『まあ、地上も大変な事になってるんだけどね…』

アスナ

「えっ!？」

シノン

『まあ、心配しないで、私達も戦うから!』

レイカ

「でも、シノン1人じゃ！」

シノン

『私……達よ？』

クライン

「俺達がいるぜ！」

リーファ

「えへへ……」

アスナ

「クラインさん！リーファちゃん！」

リズ

『うるあ！』

涼真

『セイハ！』

ミステイア

「リズ！涼真!？」

エギル

「オラア！」

シリカ

「ええい！」

ホンネ

「みんな居るよ！何で？」

シノン

「ミヤに呼び集められたのよ、全員ね」

ラウラ

「だが、一体どうやって戦っているんだ？」

束

『あーはっはっはっは！』

私が開発したパワードスーツ：

その名も『record・of・soldier』

戦士の記憶の力だ！ブエハハハハ！』

箒

「姉さん疲れてるな…」

ライカ

『まあ、心配しなさんな！』

地上は私達でどうにかするから！』

レイカ

「任せたよ！姉ちゃん！」

ライカ

『アタボーよ！』

エクスカリバー

「どうやら、小細工は効かないようですわね…」

箒

「!!」

レイカ

「あんたがエクスカリバーを…」

エクスカリバー

「ええ…吸収しました」

レイカ

「急にエクスカリバーの反応が動き出したから

びっくりしたわよ…」

エクスカリバー

「あらあら、それは失礼しましたね…」

ラウラ

「さて、まあ、無理だとは思いますが…」

エクスカリバーを返してもらおうか」

エクスカリバー

「嫌だと言ったら？」

鈴

「力尽くで取り返すまでよ！」

エクスカリバー

「そう…じゃあ…」

死んでください！」

全員が視界の隅に

黄金の壁が迫るのを確認した…

箒

「マズイー！穿千！」

腕の展開装甲を展開し

弓の形を模したパーツを展開する

箒

「えつと…」

オーバーアロー・レイシユトROOM！」

レイカ

「(ああ…名付けはミヤか…また、懐かしいネタを…)」

エクスカリバー

「無駄です！」

壁にあたり壁の進行を少しでも遅らせる…が

箒

「クッ！ たった数秒遅らせるのがやつとか！」

ラウラ

「諦めるな！ 箒！ ハアッ！」

鈴

「オラア！ 一人でダメなら皆で…」

それがアンタの師匠の言葉でしょ！！

楯無

「ミストルテインの槍！ 発動！

いつでも行けるわ！」

エクスカリバー

「貴女たちも学びませんねえ…無駄な事を…」

全員を弾き飛ばすエクスカリバー

その時大きな爆音が通信から聞こえる…

エクスカリバー

「おやおや…リュウは自爆の道を選びましたか…

だがこれで…」

ミヤの戦闘区域で爆発が起こる

レイカ

「…無駄だった…の…この戦いは…」

遠のく意識の中…そう呟くレイカ

エクスカリバー

「ええ、最初から無理だったのです、

無茶だったのです…

無駄だったのです！」

レイカ

「…無理だった…無茶だった…

無駄だった…」

エクスカリバー

「さあ…今度こそ！地球ごと消えなさい！」

レイカ

「…まだ…諦めない…私は…戦う！」

来継が光り出す…

エクスカリバー

「おや…ソードシフトですか…

厄介ですねえ…止めさせてもらいますよ」

エネルギーの刃をレイカに向けて放つエクスカリバー

だがその斬撃は

ナツ

「んな事させつかよ！」

ナツの零落白夜でかき消される

キリト

「初使用だけど…上手くいってくれよ！」

黒戦嶺牙！」

キリトは黒い光を剣に纏わせエクスカリバーの

装甲に剣を刺す

エクスカリバー

「ほう…このエクスカリバーに傷を…

なかなか厄介ですねえ…」

レイカ

「ありがとう…ナツ、キリト…

もう…大丈夫…

行くよ…雷装・麟花！」

今までの装甲とは全く違う…

シャープな装甲に変わったレイカのIS

全身に電気が迸り…装甲はまるで花のようでそれでいて、

何かの麟のよう…

レイカ

「全員…起きろお！」

味方全員に電撃を飛ばすレイカ

ホンネ

「アビヤアア！」

ミスティア

「死ぬわ！」

箒

「うう…」

レイカ

「…よし」

鈴

「いや、良しじゃないわよ！」

シャル

「…良かったあ…離れてて…」

ラウラ

「…」

シャル

「あはは…」

罪と罰…背負う覚悟

エクスカリバー

「疾風の騎士は死んだのに…まだ戦うんですか…」

レイカ

「ミヤは…生きてる…」

戦っていたら絶対に助けに来る…

そういうやつだから」

長年の付き合いから言える言葉だった…

エクスカリバー

「ほう…彼も大悪党なら…その彼女も悪党ですか…」

レイカ

「は？」

エクスカリバー

『あなた達は罪を犯してる』

キリト

「どういう事だ…」

エクスカリバー

『私はただ、罪人に刑を執行するだけ』

あなた達はそれを邪魔している』

アスナ

「だからって、関係ない人たちを

巻き込むのはおかしいでしょ！」

エクスカリバー

『ほう、罪人の分際でそんな事がよく言えましたね』

レイカ

「!？」

エクスカリバー

『何かを守る事…それはつまり

何かを犠牲にすることと同じ…

あなた達は戦うことで、罪を犯しているのです！』

ミステイア

「！」

東

『…!!ちーちゃん！』

みんなとエクスカリバーの通信を強制切断して！』

千冬

『すでに試している！だが弾かれた！』

不味いぞ…この状況は…』

東

『うん…みんなが安否のわからない』

ミヤとの唯一の繋がりを否定されたら…

みんな戦闘不能になっちゃう！』

エクスカリバー

『さあ…』

収束していく光…

ホンネ

「…もう…何が正しいのか…分からない…」

ミスティア

「…戦うことが罪…」

エクスカリバー

『罰を受けるのです！』

レイカ

「っ！

お願い…

助けて！ミヤ！」

エクスカリバー

『無駄ですよ!』

レイカ達へと放たれるビーム

だがそれは

『行け! シールドファンネル!』

エクスカリバー

『は、弾かれた!?!』

レイカ達に届く前にまるで壁に当たったように消えた

「お望み通り助けに来たぜ、レイカ」

レイカ

「ミヤ！」

エクスカリバー

『馬鹿な！お前は死んだはず！』

ミヤ

「勝手に殺すな…」

エクスカリバー

『ま、まあ、あなたも生きてるのなら罪人です！

さあ！罰を受けよ！』

ミヤ

「罪…ねえ…」

戦うことが罪だって言うなら…

その罪…俺が背負ってやる！」

エクスカリバー

『!?!』

ミヤ

「例え罪人と罵られようと

例えこの世に嫌われようと

俺は…仲間のために…大切な人のために戦う！

それが俺の…折れない信念だ！」

エクスカリバー

『そ、そんなの！ハッターだ！』

ミヤ

「なら…見せてやるよ…そのハッターの力をなア！」

行くぜ！零式！福音！旋風！特殊システム起動！

トリニティコア！」

その声と同時に疾風が光に包まれる

エクスカリバー

『何なんだ…そのISは…』

ミヤと疾風の前に1機のISが鎮座する

その姿はミヤの覚醒サードシフト…光風の姿だった

ミヤ

「これだけじゃないぜ…なあ！疾風！」

疾風

『デュアルシンクロ！』

ミヤ

「さあ！限界を越えて舞え！！

疾風・星霜」

シャル

「デュアルコア…ミヤならやれるとは思ってたけど…

本当にやるなんて」

ミヤ

「テメエが…どんだけ俺達の戦いを否定しようと

どんだけ俺達の力を否定しようと…

それは俺たちの軌跡が否定する！

俺達の過去が否定する！

俺達の道は！明日は！未来は！

俺達で創るもんだ！」

エクスカリバー

「グッ…正義の味方気取りの罪人の分際でエ！」

ミヤ

「正義の味方になったつもりはねえよ…

俺はただ…誰かの笑顔の為に戦うだけだ…

お前…さっき言ってたよな…

守る事は何かを犠牲にするって…

なら俺は…大切な人の笑顔を守る為に…

その涙を犠牲にする！」

エクスカリバー

「!?」

ミヤ

「リミットバースト…オーバードライブ!!」

エクスカリバー同じように黄金に光り出すミヤ

ミヤ

「蒼白流星！」

ミヤのまわりに剣と槍のような光が浮かびだす

ミヤ

「閃黒彗星！」

白と黒の太刀のような光が浮かび上がる

ミヤ

「雷歌風陣！」

電撃と風を纏った無数のナイフが宙を舞う…

ミヤ

「完成！七剣抜刀！」

エクスカリバー

「ぐっ…この物量は…流石に…」

ミヤ

「俺の頭が焼ききれるか

お前がやられるかのどちらかだア！」

幾千もの光がエクスカリバーにダメージを与える

そして

エクスカリバー

「ぐはあ！」

ミヤ

「うっ！…ハアハア…」

フラツと落ちていきそうになるミヤ

レイカ

「危ない！」

エクスカリバー

「本当…そうですね」

ミヤ

「がはっ！」

レイカ

「!!」

エクスカリバーの剣がミヤのお腹を貫く

エクスカリバー

「人間は…勝利を確信した瞬間が…一番油断する…」

それは、英雄とて変わらない事…」

レイカ

「みやー！お願い！目を覚まして！」

ミヤ

「……」

エクスカリバー

「は、ははは、ハハハハハ！」

英雄が死んだあ！

これでもう…私の天下だア！

まず手始めに…

邪魔な貴女には消えてもらいましょう！」

D.
C.

まどろみの中

ミヤ

『…ああ…もうほとんど目が見えねえ…』

音も聞こえねえ…死んだんかな…俺…』

？

『…ミ……ヤ！お…い……を……して！』

ミヤ

「この声…レイカか…」

？

『…もう…諦めていいだろう…お前は頑張った…』

もう、誰も責めねえよ…』

「…それはだめだ…」

?

『なぜだ?』

「俺には…帰るべきところが…ある」

?

『お前自身の重りになってるのにか』

「…重りになっていようと…」

「そこが俺の帰る場所なのには変わらない…」

?

『愚か者め…その思いはいずれ己の身を壊す事になるぞ』

「そうかもな…だけど…例え…」

レイカ

「お願い！目を覚まして！ミヤ！」

エクスカリバー

「無駄な事を！」

レイカの首に振り下ろされる大剣

その剣はある男の斬撃によってはじかれる

ミヤ

「例え…この身が朽ちようと…」

たとえこの心が枯れようと…

この剣^{信念}だけは決して折れない！

この一撃に…俺の持てる全てをかける！」

エクスカリバー

「!!?…何故…あなたは抗うのです！」

ミヤ

「…いくら頑張ったって…どんなに足掻いたって

過去は変えられない…変わらない…だから…

未来の為に…明日の為に！今日を…今を生きるために！

俺は…戦うんだア！」

再びミヤのISが変形していく

ミヤ

「俺が…俺でいる限り…俺がオレである限り！」

俺が…人である限り！俺は…諦めない！」

ISが光を放ちその姿を再び変える

ミヤ

「サードシフトが奇跡なら

デュアルコアは最強…

ならこいつは…究極だア！」

光が消え…ミヤとISが姿を現す

ミヤ

「疾風…改め…

エクスカリバー!!」

金色に光る翼を広げ、

虹色に輝くボディを持つミヤのIS

エクスカリバー

「私のコピーか!!」

ミヤ

「いや…上位互換さ!」

エクスカリバー

「なにイ!?!」

ミヤ

「エクスカリバーは…選ばれし者の剣…」

無理やり振ってるお前とは違うんだよ…」

エクスカリバー

「何を言ってる!」

ミヤ

「俺がエクスカリバーに選ばれたってことだよオ!」

エクスカリバー

「な!?!」

ミヤ

「行くぜえ!…」

希望よ！我に味方し 絶望を打ち砕け！
約束された勝利の剣
エクス…カリバアア!!」

持ち主の力によって変わる攻撃…

ミヤはそれを斬撃として飛ばした…

七色に輝くヒカリをのせて

エクスカリバー

「グッ！何故だ！何故…本物の私が負ける！」

ミヤ

「俺の方がお前より強いってことだよ！」

エクスカリバー

「バケモノの癖に！偉そうなことを！」

ミヤ

「好きにだけ罵ってろ！」

「だかもう、俺の剣は折れやしねえ！」

エクスカリバー

「クッ……クッがアア！」

その言葉と共に斬撃に飲み込まれていくエクスカリバー

ミヤ

「……エクスカリバーの分離完了！セシリア！」

セシリア

「お任せ下さい！」

地球から延びる一筋の蒼い光

その光がエクスカリバーを貫く

エクスカリバー

「私の野望がア！何故だ！何故！」

ミヤ

「自分の私利私欲の為に戦う人間と

何かを守るために戦う人間は……

そう、大差はないさ…

だがな？…絶望しか生まない力と

希望を生み出す力…どっちが強い？」

エクスカリバー

「……」

ミヤ

「はあ…エクスカリバー…」

エクスカリバー

「…なんだ…この私に情けをかけるつもりか…」

ミヤ

「呼びにくいから今度からエクスって呼ぶわ！」

エクス

「はあ!?!」

ミヤ

「俺について来いよ！エクス！」

エクス

「馬鹿なのか！貴様は！」

レイカ

「まあ……」

ミスティア

「そうよねえ……」

キリト

「馬鹿だよナハツ」

アスナ

「キリト君！」

ナツ

「……キリトさんの方が……」

ホンネ

「お馬鹿さんだよねえー」

エクス

「何故……そこまで……裏切るかもしれないんだぞ！」

ミヤ

「そう言つて裏切つたヤツ知り合いには居ねえな…」

エクス

「…本当にお人好し…なんだな…」

私を仲間にしても…私の部下は仲間にはならないぞ？

部下達がお前の首を取りに来るかもしれない」

ミヤ

「返り討ちにしてやるよ！」

エクス

「……はあ……じゃあ…」

よろしく頼むよ…マスター」

ミヤ

「呼び方が増えちまつたゾイ…」

そして…4月…

第魔章 魔法と剣と

交わした約束

ミヤ

「…ほむら…君の力なら…過去に戻れるんだろ」

ズタボロな体で何かを睨みつけ話しかけるミヤ

ほむら

「…ええ…貴方と会ったあの日より少し前に…」

ミヤ

「…じゃあ、頼むわ…少なくとも今の俺達には無理だ…」

戦力も、経験値も足りねえ…」

ほむら

「…でも…貴方は…」

ミヤ

「…何とか逃げるわ…ちゃんとまどかちゃんの魔法少女化
阻止してからな」

フラフラと立ち上がるミヤ

ほむら

「……」

ミヤ

「…つとその前に…これ」

ほむら

「…これは…」

ミヤ

「もし、次の時間軸で俺に会えたら…それを渡してくれ」

まるで宝石のような物を託された少女

ほむら

「…分かった…」

ミヤ

「ほむら!」

ほむら

「…なに?」

ミヤ

「じゃあな!」

ほむら

「…ええ…また会いましょう…」

3月某日

寮部屋内

ミヤ

「…3月もそろそろ折り返し…」

レイカ

「そうね…」

『……………て…』

ミヤ

「…来月から忙しくなるんだよなあ…」

レイカ

「ミヤが持ってきた案件でしょうが…」

『……………けて!』

ミヤ

「んえ？」

?

『助けて!』

ミヤ

「頭の中に直接声がア!？」

レイカ

「何!?!どうしたの!」

ミヤ

「誰が助けを求めてる…」

レイカ

「え、なに、ホラー?」

ミヤ

「俺が知りたい…」

レイカ

「……まだ聞こえる？」

ミヤ

「まだ聞こえる……」

レイカ

「発信元はわかるの？」

ミヤ

「……虫の知らせかな……何となく……」

レイカ

「……織斑先生に話に行きましようか……」

職員室

千冬

「……で、ISの使用許可を取りに来たと……」

ミヤ

「いや、まあ、何も無かったなら

それはそれでいいんですけど…」

千冬

「…特殊なお前にそんなことが起きてるんだ…

今回だけ許可する…とつとと片付けて来い！」

ミヤ

「はい！」

数分後

上空

ミヤ

「見滝原…この辺か…ん？」

病院の壁面に謎の物体を見つける

ミヤ

「…つと…なんだこれ？」

近くに着陸し触れようとした途端

ミヤ

「…あ…」

指先が中に吸い込まれていく

ミヤ

「やらかした！」

なぞのばしょ

ミヤ

「イテテテテ……なんだココ……」

異空間に飲み込まれたミヤ

ミヤ

「……声も聞こえなくな……うわっ……」

?

「……」

リボンと思しき物に四肢を縛られてる少女がいた

ミヤ

「…えつと…」

?

「…助けてもらえるかしら」

ミヤ

「ああ…来い虎徹！」

………

ミヤ

「ええ…IS使えない感じ？」

?

「…なら…この先にいる金髪の人に

解いてもらうよう言ってくれるかしら？」

ミヤ

「…分かった…」

?

「ありがとう…」

ミヤ

「……………この先……………長くね？」

一足踏み出した途端

世界が収縮した

ミヤ

「…あ…またやらかした？」

先に見えた扉が開き押し込まれる

ミヤ

「つて…ピンチじゃねえか！」

金髪の少女が蛇のような怪物に

飲み込まれようとしている瞬間だった

ミヤ

「間に合えー！」

駆け出した

が、どう見ても1歩分足りない

ミヤ

「頼む！イグニッション・ブースト瞬時加速」

僅かに体が押される感覚を感じ

少女を押し飛ばす

ミヤ

「間に合っ」

目の前が真っ暗になった

食べられると思った次の瞬間、私は誰かに押し飛ばされた
さつきまで私が立っていた方を見ると男の人がいた

そして頭から食べられた：

「マニヤさん！」

後輩の声で私は気づく
その魔女が宙を舞っていた

ミヤ

「痛つてえなコノヤロウ！」

その人の頭はそこにあつた

ミヤ

「押し飛ばしてごめんね」

？

「いえ、助けてくれてありがとうございます」

ミヤ

「…あ、入口の黒髪の子解放してあげてくれない？」

?

「え……」

ミヤ

「なんか可哀想だし……」

??

「マミさん！あんな奴解放しなくていいですよ！」

マミ

「……でも、彼女……こうなる事を知ってた……だから」

?

「ええ……私なら勝てる方法を知ってる」

マミ

「暁美さん……お願い」

?

「ええ」

ミヤ

「……瞬間移動？……いや、扉が閉まっているから……」

時間停止による移動？」

暁美

「ミヤ、これを」

何かを投げ渡される

ミヤ

「おわっつとっつと！」

掴んだ瞬間、視界が白くなる

ミヤ

「あ…今だと困るやつ！」

投げ返した

暁美

「…そう…なら、後で渡すわ」

そこからは一瞬だった

怪物の体の複数箇所と同時に爆発が起こった

ミヤ

「…すっげ…」

そして怪物は消えた

視界が白くなる

ミヤ

「…外…」

外、謎の物体があつた場所にいた

ママ

「暁美さん、ありがとう」

暁美

「…私も言葉を間違えたわ…ごめんなさい」

??

「…」ムスツ

?

「さやかちゃん…」

ミヤ

「…えつと…誰か、今の説明してくれる人…」

?

『なら、一旦ママミの家に行こう』

ミヤ

「…ん?」

ピンク髪の子の方から声が聞こえる

?

『きゅっぷい』

声の主はその子が抱いていた猫のような白い生き物だった

目を閉じ確かめる

バママミ宅

ミヤ

「なるほど？ 暁美さんと巴さんは魔法少女で

戦ってたデカブツが魔女と……」

ママ

「はい」

ミヤ

「……んー……語感的にほぼ同じモノに感じるのは俺だけ？」

ほむら

「……」

さやか

「魔女は人を食ってるんだから悪でしょ？」

魔法少女はそれを倒してるんだし違うでしょ」

ミヤ

「…なるほど？」

ほむら

「…あの」

マミ

「そういえば！」

なんで見滝原にいらしたんですか？」

ミヤ

「ん？ああ…なんか助けを求める声が聞こえてね…」

今は聞こえないけど…」

ミヤ

「なるほど…」

ほむら

「あの」

さやか

「そういえば、なんで結界内でIS使わなかったんですか？」

ミヤ

「んー…使えなかったんだよね…何故か」

ほむら

「……」

ミヤ

「…知りたかった情報は知れたし、帰るか！」

ほむら

「…なら私も帰らせてもらおうわ」

マミ

「え、帰られるんですか？」

ミヤ

「そりゃ…どういふ訳か疾風が戦える状態じゃないし」

マミ

「…なるほど…メンテナンスの為に帰られるんですね」

ミヤ

「それに、声も聞こえなくなっただしね」

マミ

「また、いつでも見滝原にいらしてください！」

ミヤ

「おう、近くよつたらな」

帰路

ミヤ

「…財布忘れた…」

ポケットを漁る

ミヤ

「…最悪だ…すぐ終わると思って油断した…」

ほむら

「なら、一旦ウチに寄るといいわ…渡したい物もあるから」

ミヤ

「…あれ、何処で手に入れた？」

ほむら

「話すと長くなるから…」

ほむら宅

ミヤ

「…なるほど…時間干渉ね…」

ほむら

「…信じてくれるの？」

ミヤ

「まあ、こんな代物が有る以上信じる他無いよね」

膨大なデータを内包した結晶を受け渡される

ほむら

「…ある程度…それで理解出来るはずよ…」

ミヤ

「……………ウツプ……………」

情報が頭に流れ込む

ほむら

「……………」

ミヤ

「フウ……………やっぱり魔法少女と魔女は同質のものだったか…」

ほむら

「…これからどうする?」

ミヤ

「…ん?あのラスボス来るまでは居るよ

まあ…泊まる場所ねえけど…はは…」

ほむら

「うちに泊まります?」

ミヤ

「それは色々問題になるからね?」

ほむら

「…そうですか…」

ミヤ

「…ずっと気になってたんだけど…なんか態度おかしくない?」

ほむら

「信用しているからです…私は」

ミヤ

「…誰も信じてくれないから、って事ね」

ほむら

「…はい」

ミヤ

「…はあ……おい、白いのそこに居んだろ？」
?

「…まさか、僕が見えるなんてね」

ミヤ

「…キュウベえ…いや、インキュベーター」

キュウベえ

「…おや、僕の名前を知ってるのかい？」

ほむら

「…ミヤさん…」

キュウベえ

「…君達は知り合いなのかい？」

ミヤ

「…並行世界の縁つて奴だ」

キュウベえ

「…なるほど、暁美ほむら…君の魔法の効果か」

ほむら

「近からず遠からずね…」

キュウベえ

「きゅ?」

ミヤ

「さてと……」

ISの通信を起動するミヤ

千冬

『…遅い』

ミヤ

「すいません、1ヶ月は帰れそうに無いです」

千冬

『…誰か送るか?』

ミヤ

「いや、俺だけで何とかします」

千冬

『わかった…ただ、無理を感じたら誰でもいいから呼べ』

ミヤ

「了解」

ほむら

「…」

キュウベえ

「1ヶ月…随分具体的な時間だね」

ミヤ

「…直感だよ」

キュウベえ

「…きゅっぷい」